## 情報リテラシー論

教養
1年生　2年生
2単位　前期
木曜 3限
実務経験なし
講義

宗利 淳一

〔履修条件〕
特になし。（Adobe Creative Cloud 学生版（月額2,180円1年間契約）をインストールしたノート型PCを準備できればお願いします。）
〔授業の概要〕
演劇・音楽公演における制作実務の中でも専門技術を要する宣伝美術について、実際の制作実習を通して学び、また情報を享受することから遠く離れ、その情報を発信する立場から公開する技術を習得する。
従来のポスター・フライヤーに加え、SNS抜きでは考えられなくなった時代にどのようなプロモーションが可能なのか？どこに注意を払うべきなのか？新しい宣伝美術を考えていきましょう。
〔授業の到達目標〕
• 公演フライヤーの制作から、企画・宣伝力を習得できる。
• 「メディア情報リテラシー」を身につけることができる。
• インターネット、情報機器の正しい知識と使い方、ソーシャルメディアを活用するコミュニケーション、企画・宣伝の基本を学ぶことができる。
• メディアと宣伝美術（＝公開する技術）を学び、これからの時代に即応する知識と技術を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　宣伝美術とメディアリテラシー=文字の不安をめぐって
第 2 回　フライヤー制作に使用するアプリケーションの概要とタイポ グラフィに関して
第 3 回　Photoshop＃１　画像の切り抜きと合成
第 4 回　Photoshop＃２　画像の制作とレタッチ
第 5 回　Photoshop＃３　印刷を前提とした画像のレタッチとその編集
第 6 回　Photoshop＃４　＃1−3を応用した画像の作成
第 7 回　Illustrator＃１　基本操作と図形作成
第 8 回　Illustrator＃２　画像を統合し、文字にフレームを与える
第 9 回　Illustrator＃３　印刷という定点を考える
第 10 回　Illustrator＃４　SNS空間への転用とその可能性
第 11 回　1.〜10.の項目が複合的にレイヤードし、経過指導を経て、最終的には劇団（楽団）による架空の公演の宣伝美術を作成（12.〜 15.）
第 12 回　宣伝美術とその実践Ⅰ
第 13 回　宣伝美術とその実践Ⅱ
第 14 回　宣伝美術とその実践Ⅲ
第 15 回　宣伝美術とその実践Ⅳ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
疑問点があれば、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
公演フライヤー、特設サイト等を数多く見てみること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。個人のPCを用意できる場合は持参すること。
〔成績評価〕
授業への取り組み70％、作成された宣伝美術の成果30％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
CAE1000B
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

## 情報処理論

教養
1年生　2年生
2単位　前期
金曜 1限
実務経験なし
講義
選択必修
教職課程受講者必修

清水 郁子

〔履修条件〕
教職課程受講者は必修。
教室の定員（18名）の都合上、受講希望者多数の場合には、履修制限を行うこともある。
〔授業の概要〕
この授業の目的は「PCの機能を使いこなそう」である。
近年、オンライン化に拍車がかかり、日常の生活にも情報機器の利用が必須となり、芸術分野の魅力を社会に発信の強力なツールとなるであろう。これを実現するために、普段使わない機能も使い、その上で主張したいことが確実に相手に伝わるように、表現力を身につけてもらう。
技術的には、課題作成に欠かせない文章作成ソフト（文字入力のみでなく、画像・表・イラストを扱えるようにする）、表計算ソフト（計算式の使用方法をマスターし、報告書の形態で作成）、スライド作成（画像・イラスト・サウンド等のコンテンツを扱えるようにする）のスキル向上を目指す。
また、音楽専攻生には楽譜作成、演劇専攻生には画像処理を予定している。

〔授業の到達目標〕
• 自分自身のPC環境を整え、今後の授業に積極的に利用できるようになる。
• 文章作成、プレゼンテーションの実践的な使い方と表計算の基本をマスターできる。
• 元々のPCスキルは個人差が大きいが、それぞれの学生に応じて上達できる。
〔授業計画〕
第 1 回　PC環境の確認（文字入力とタイピング、文字の強調、ファイル管理、 Webドライブ利用の注意）
第 2 回　文章作成①
レイアウト整えその１、表作成
第 3 回　文章作成②
複雑な表の作成、画像の扱い方
第 4 回　文章作成③
図形の使い方と復習
第 5 回　文章作成④
「ちらし」の作成
第 6 回　文章作成⑤
レイアウト整えその２、レポート作成に必要なスキル
第 7 回　表計算①
基本的な操作（計算式、関数、オート入力）
第 8 回　表計算②
グラフを活用した資料作り
第 9 回　表計算③
第 10 回　プレゼンテーション①
基本操作と画像での表現
第 11 回　プレゼンテーション②
アニメ風に作成
第 12 回　音楽専攻：プレゼン作品作りその１　演劇専攻：画像処理①（基本操作）
第 13 回　音楽専攻：プレゼン作品作りその２　演劇専攻：画像処理②（画像の合成等）
第 14 回　音楽専攻：楽譜作成①（基本操作）　演劇専攻：プレゼン作品作りその１
第 15 回　音楽専攻:楽譜作成②（楽器を追加して編曲等）
演劇専攻：プレゼン作品作りその２
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 提出された課題は、Classroomを通じて個々に講評する。
• 全体に関わることは、次回の授業時に説明する。
〔授業時間外の学習〕
• 準備しておくべき事柄があればClassroomに連絡するので、各自調べておくこと。
• 授業中に終わらなかった分や、必要に応じて課す宿題をこなすこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
• プリントを使って授業を進める。また、授業中に参考サイト等を紹介する。
• 個人のPCを持ち込める場合には、持参してもらう。
〔成績評価〕
成績評価は、授業への取り組み60％、作成された課題の成果40％の配分で総合的に評価する。
S：総合点が90点以上の者（授業の取り組みが大変良く、課題作成に独自の工夫が随所になされている）
A：総合点が80点以上の者（授業の取り組みが良く、作成された課題がおおよそ満足できる）
B：総合点が60点以上の者（授業の取り組みがおおよそ満足でき、作成された課題の６割ほどは満足できる）
C：総合点が50点以上の者（授業の取り組みが消極的で、作成された課題の半分ほどは満足できる）
D：総合点が50点未満の者（授業の取り組みが消極的で、ほとんど課題が作成されていない）
〔科目ナンバリング〕
CAE1001B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽環境論

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
金曜 2限
実務経験なし
講義

久保田 慶一

〔履修条件〕
「音楽環境論」という授業科目だが、音楽専攻以外の学生も履修可。
〔授業の概要〕
芸術を取り巻く様々な環境を考察し、芸術との関係を明らかにする。授業の内容は、週によって前後する場合がある。
〔授業の到達目標〕
芸術について広く深く考察することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　コロナ前に考えてきたこと
・1989年以降の世界
・インターネットとドッグイヤー
・医療の発達と平均寿命の長期
・リカレントとリスキリング
・新自由主義の社会
・大衆から個衆へ
・戦争と自然災害
第 2 回　「芸術とキャリア」何が問題なのか
・キャリアの呪縛
・芸術系大学の存亡危機
・クラシック文化のポピュラー化
・すぐに役に立つ芸術と役に立たない芸術
第 3 回　「芸術と社会」何が問題なのか
・プラクシスとしての芸術
・芸術と社会

・芸術と倫理
・エッセンシャル・アーティスト
・クラファンと助成金
・文化芸術の助成が必要である理由（外部性）
第 4 回 「芸術と人生」何が問題なのか
・職業とは何か、就職とは何か
・人生、仕事、社会
・芸術「で・と・に」生きる
・芸術と「折り合い」をつける

第 5 回 芸術「で」生きる
・交換と贈与
・新自由主義と芸術
・本質は競争
・今すぐに役に立つことが重宝される
第 6 回 芸術「と」生きる
・趣味としての芸術
・芸術とボランティア
第 7 回 芸術「に」生きる
・ポートフォリオ・キャリア
・アマチュアとは
・セミ・プロとは
・プロとは
第 8 回 芸術で世界は変えられるか
・アーティトリとは何か
・アートの力とは
・芸術と人類の進化
第 9 回 芸術の鑑賞とは
・芸術の鑑賞とは
・音楽を聴く時間
・演劇を観る時間
・成長と芸術鑑賞
第 10 回 芸術を学ぶとは
・学校で学び
・幼児期に学ぶ
・生涯学習
第 11 回 芸術を教えるとは
・何を、どのようにして教えるのか
・カリキュラム
・芸術教育の諸相
・成人教育、社会教育
第 12 回 芸術を語るとは
・専門用語
・芸術についての文章を書く難しさ
・心に響く語り（文章）とは
第 13 回 芸術の創作とは
・音や身振りをつむぐ
・聴衆との経験の共有
・芸術と身体性
第 14 回 演奏・上演とは
・表演の力とは
・自分らしい表演とは
・なぜ表演で心がひとつになるのか
第 15 回 コロナ後に考えるべきこと
・芸術と人生
・芸術と社会
・芸術の教え学び

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 授業終了直前に質問タイムをとる。
• メールによる質問に対応する。
〔授業時間外の学習〕
授業内で指示した本・雑誌の記事やインターネット・サイト等を読んでおく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業内でその都度指示する。
〔成績評価〕
授業時の発表や取り組み状況20％、レポート課題80％によって、総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
CAE1010B
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 社会福祉学

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
水曜 1限
実務経験なし
講義
選択必修
教職課程受講者必修

**藤森 雄介**

〔履修条件〕
教職課程受講者は必修。
〔授業の概要〕
21世紀の日本における社会福祉は、「社会福祉基礎構造改革」以降、その制度施策も含めて大きな変革の渦中にある。本講義においては、上記のような現状を踏まえつつ、現代に至る戦後日本社会における社会福祉の歴史的背景や思想等を学んでいきたい。
〔授業の到達目標〕
• 社会福祉全般に対して基本的理解ができる。
•「対人援助」の現場における、援助者の基本的な心構えを理解できる。
• 社会福祉の学びを通じた、新たな視点を獲得できる。

〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　授業の確認及び説明、初回アンケート実施
第 2 回　現代日本における社会福祉の定義①
　　「社会福祉」という専門用語について、漢字本来の意味から、また、近代以降使用されてきた訳語の観点から考えてみる。
第 3 回　現代日本における社会福祉の定義②
　　日本国憲法の観点から、制度としての「社会福祉」を理解する。
第 4 回　現代日本における社会福祉の定義③
　　「ソーシャルワーク」という専門用語の理解と、2014年に改訂された「グローバル定義」からその意味と諸課題を理解する。
第 5 回　「ノーマライゼイション」の思想
　　社会福祉を語る上で必要不可欠な、「ノーマライゼイション」の思想について、その概要を理解する。
第 6 回　社会保障制度の基本的理解①
　　社会保障制度における「社会福祉」の位置付けを理解する。
第 7 回　社会保障制度の基本的理解②
　　世界に先駆けて社会問題に向き合った近代イギリス社会と救貧法について、理解する。
第 8 回　社会保障制度の基本的理解③
　　20世紀のイギリスと福祉国家について、その背景を理解する。
第 9 回　日本の社会福祉制度の成立過程①
　　近代日本の社会福祉の成立過程について、まず、昭和20年代の敗戦直後の社会から考える。
第 10 回　日本の社会福祉制度の成立過程②
　　高度成長期の昭和30年代と、社会福祉六法成立の背景を考える。
第 11 回　日本の社会福祉制度の成立過程③
　　経済低成長期の昭和40年代と、福祉見直しの議論を考える。
第 12 回　日本の社会福祉制度の成立過程④
　　低成長からバブル期の昭和50年代における「社会福祉」の動向について考える。
第 13 回　日本の社会福祉制度の成立過程⑤
　　平成年代、バブル崩壊後の社会と、社会福祉基礎構造改革について考える。
第 14 回　日本の社会福祉制度の成立過程⑥
　　21世紀の社会福祉の動向及びこれからの方向性について考える。
第 15 回　まとめ、全講義の理解度を個々で確認の上、全体を振り返る。
　　まとめとして、確認テストの実施。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
適時、講義の始まりに５～10分程度質疑応答の時間を設け、学生からの質問や補足の説明等を行う。
〔授業時間外の学習〕
本科目は、予習よりは復習を重視している。
第2講以降の受講日前日には前回の講義内容の振り返り（90分程度）を行った上で、翌日の講義に臨んでほしい。また、いわゆる「社会福祉」は実学であり現代社会の動向とは不可分な学問である。日頃から、政治や経済の動向にも関心を持っておくことが必要である。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に定めない。必要に応じて、プリントを配布する。また、講義中に参考文献を適時紹介していく。
〔成績評価〕
原則として、期末に行う確認テストの得点をもとに評価を行う。ただし、授業内でレポート等を課した場合には、その評価も適時、加点する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、関連付けて説明できる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、説明できる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明できる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
CAE1020B
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
〔キャップ対象外〕
―

## 表現コミュニケーション論

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
金曜 4限
実務経験なし
講義

〔履修条件〕
- 語学のレベルは問わないが、積極的に取り組むこと。
- ３週目までに、以下２つの戯曲に目を通しておくこと。
　① テネシー・ウィリアムズ作、小田島雄志訳「ガラスの動物園」（新潮文庫）
　② ウィリアム・シェイクスピア作「ロミオとジュリエット」（翻訳者は問わない）

〔授業の概要〕
海外戯曲・ミュージカルについて、戯曲や歌詞の一部を翻訳し、互いの翻訳や既存の翻訳を読み比べたりパフォーマンスを行うことを通して、上演について考える。海外戯曲の作家や翻訳者への上演許可の取り方等、上演のために必要な事項についても学習する。
また、学内外で行われる演劇公演についてディスカッションを行うことも考えている。また、国際的なコラボレーシ

ョンや演劇フェスティバル等についても考える機会を設ける。海外の作品を国内で上演することはもとより、国外で、日本の作品をはじめとする演劇を上演することについても考える機会としたい。
〔授業の到達目標〕
海外戯曲の翻訳文化や上演方法について知ると共に、自身の関わる作品を客観的に捉え、プレゼンテーションをする力を身につける。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション・自己紹介
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　自己紹介の続きと課題図書についてのディスカッション
第 3 回　課題図書についてのディスカッション（続き）
第 4 回　課題図書についてのディスカッション（続き）
第 5 回　課題図書についてのディスカッション（続き）
第 6 回　翻訳課題についての学習（１）
第 7 回　翻訳課題についての学習（２）
第 8 回　翻訳課題についての学習（３）
第 9 回　翻訳ワークショップ（１）
第 10 回　翻訳ワークショップ（２）
第 11 回　翻訳ワークショップ（３）
第 12 回　発表準備
第 13 回　発表準備
第 14 回　発表
第 15 回　発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表や課題提出の後にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
戯曲や歌詞の翻訳等、授業準備。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
翻訳課題等は、授業中に適宜プリントを配布する。
〔成績評価〕
発表および課題30%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）70％で100点に換算する。
Ｓ 総合点が90点以上の者（大幅な遅刻欠席がなく、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持って質問や意見を述べることができる）
Ａ 総合点が80点以上の者（欠席が3回未満で、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持つことができる）
Ｂ 総合点が60点以上の者（欠席が5回未満で、遅滞なく課題を提出する）
Ｃ 総合点が50点以上の者（欠席が5回未満で、課題を提出する）
Ｄ 総合点が50点未満の者（欠席が5回以上または課題が提出されない場合）
※外部出演等、特別の事情によりやむをえず遅刻・欠席が多い場合は、個別にレポート等の課題を課し、その内容によって評価を行う。
〔科目ナンバリング〕
CAE2030B
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 芸術環境論

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
金曜 3限
実務経験なし
講義

中山 夏織

〔履修条件〕
指定された課題を予習できる者。
〔授業の概要〕
大きく変化する社会の中で、主に、舞台芸術が直面する課題を検証し、創造者・表現者、アートマネジャーとして、いかなる役割を担い、対処していくのかを探っていく。文化政策、アートマネジメント、アーティストサバイバルにまつわる様々な議論や事例を紹介し、その統合と相克を考察すると共に、あわせて、契約や著作権等、関連する重要な課題にも触れていく。舞台芸術に従事する創造者・表現者、アートマネジャーらが変化する社会と共に生き、生かされる存在となるための試みである。
〔授業の到達目標〕
• 創造者・表現者、アートマネジャーが直面する現実・課題を理解できる。
• 創造者・表現者、アートマネジャーが担う役割を理解できる。
• 固定概念を批判的に検証し、様々な分野の知識を分析、統合し、整理できる。
〔授業計画〕
第 1 回　文化政策、アートマネジメント＆アーティストサバイバル
私たちの直面する現実とその周辺－私たち自身のことと法律、政策、施策。
第 2 回　芸術家の地位をめぐって
なぜ芸術家の地位は低く抑えつけられてきたのか？　歴史的な展開と未来。
第 3 回　芸術という労働の特殊性
芸術家の社会的保護、労災、年少者の労働
第 4 回　著作権と契約の相関①
著作権・契約の基礎。
第 5 回　著作権と契約の相関②
著作隣接権と契約。
第 6 回　著作権と契約の相関③
新たなメディア、プラットフォーム、そしてＡＩ
第 7 回　著作権と契約の相関④
契約書を読む。

第 8 回　観客論①
　　観客は何を求め、何を観ているのか。
第 9 回　観客論②
　　観客の変化と新しい芸術の形
第 10 回　障がいと芸術①
　　インクルーシブって何？
第 11 回　障がいと芸術②
　　インクルーシブな芸術の理念と実践
第 12 回　組織の形とリーダーシップ①
　　新しい組織の形。
第 13 回　組織の形とリーダーシップ②
　　クリエイティブでハラスメントのない組織とは？
第 14 回　芸術を測る「評価」
　　様々な評価の考え方と課題。
第 15 回　振り返りと総括

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業の中で論点をシェアし、議論・整理を行う。
〔授業時間外の学習〕
指定された課題をリサーチする予習を行う。新聞等を読み、アンテナを常に張っておく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリント配布。授業で活用するパワーポイントを事前に送付する。
〔成績評価〕
成績評価は授業態度30％、授業への貢献度40％、課題の成果30％を総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
CAE1011B
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## アートプロデュース論

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
金曜 5限
実務経験あり
講義

寺田 航

〔履修条件〕
特になし。

〔授業の概要〕
チケットが売れない俳優・演出家・脚本家をキャスティングすることは難しい。
素晴らしい作品もチケットを買ってくださるお客様がいなければ赤字になり、興行を続けることができなくなる。

なので、どんなに演技が素晴らしく、才幹溢れる脚本・演出だとしても、キャスティング権を持つプロデューサーやスポンサーに評価され**「選ばれなければ」**配役に繋がらない。

そして**「選ばれなければ」**、プロの表現者として**「稼ぐことができない」**ので、副業収入で生計を立て、納税していくしかないが、もはや副業が本業であり、表現者としてのプロフェッショナルではない。

**「選ばれなければ稼げない」**
表現の世界だけでなく、どの道に進んでも、直面し乗り越えなければいけない人生のハードルである。

この講座では**「選ぶ権限を有してる者」**の目線に立って、**「選ばれる力」**と**「稼ぐ力」**、二つの力を支える基礎となる**「メンタルコントロール力」**の、３つの力の獲得を目指す。

そのための具体的な学習内容として以下の３本柱で構成する。
**• メンタルコントロール力：マインドセット教育、個別カウンセリング**
**• 選ばれる力：セルフプロデュース教育（ブランドマーケティング）**
**• 稼ぐ力：公演予算書作成と経営基礎教育**
〔授業の到達目標〕
• マインドセット教育を通じて、思考を変え、行動を変える。補講時に個別カウンセリングを行い、学生の個別性に寄り添った思考・行動変容を促し、結果を変えることができる。
• セルフプロデュース教育を通じて、他者から選ばれる為の思考・戦略・戦術についての知識を得ることができる。
• 公演予算書作成と団体経営基礎教育を通じて、プロフェッショナルの予算と、アマチュアの予算の違い、稼ぐことの厳しさ、継続することの難しさ、を理解し、夢物語の劇団等団体運営から脱却する知識を得ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　講義ガイダンス
　　※各講義、脳の準備運動的な感覚でマインドセット教育を行ってから本編に入る。
　　※授業内容については、進行状況等により多少の前後が出ることを承知しておくこと。
第 2 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 3 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 4 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 5 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 6 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 7 回　マインドセット、セルフプロデュース
第 8 回　マインドセット、セルフプロデュース

第 9 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 10 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 11 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 12 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 13 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 14 回　公演予算書作成と団体経営基礎教育
第 15 回　講義総括・補強

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
この講座ではパワーポイント資料を使用した知識教育と、講師とディスカッションしながら諸課題を都度こなしていく実践教育を合わせたアクティブラーニングを行う。講義と個別カウンセリングを通じて、受講生の思考や願望を講師が把握し、ありたい姿に近づくためのアドバイス・改善点を伝えていく。

〔授業時間外の学習〕
• 選ばれる為の何かを見つける。
• 自分のセールスコピーを考え続ける。
• 変わっても良いから、講義の時点で卒業してなりたいこと・やりたいことを見つけておく。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
• 本・音楽・映画・イベント等、講義内で様々紹介していくので、その中で自分が興味を持ったものをチェックする。
• 講義での使用資料は、基本プロジェクターで投影する。
• 紙資料は必要に応じて講師が印刷して配布する。

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み60％、諸課題への取り組み40％の配分で総合的に判断する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、諸課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、諸課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・諸課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・諸課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解せず、諸課題への取り組み・授業態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
CAE2040B

〔学位授与方針との関係〕
②、③

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## メディア論

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
火曜 4限
実務経験なし
講義

細谷 修平

〔履修条件〕
遅刻、居眠りをしないよう、積極的に授業に参加すること。

〔授業の概要〕
本講義ではメディアの発達史と表現の変容を軸に、現代におけるメディアのグローバル化およびメディアによるグローバル化について考えていく。経済のグローバル化やデジタル・メディアの発達・普及により、社会における消費行動は大きく変化している。世界的なメディアの動向から、生活の身近にあるメディアまで広く視野に入れることで、現代社会におけるメディアの作用を深く考察していく。
担当教員は、メディアと表現をめぐる研究と共に、様々なメディア活動の現場に立ち会ってきた。日本の戦後前衛芸術から現代美術、メディア・アート、映画における表現についてもグローバルな視野で紹介していく。今日に至るメディアの変容を深く捉え、メディアリテラシーを身につけられるよう講義を進める。

〔授業の到達目標〕
• メディアと表現についての基本的知識を身につける。
• 今日のメディアのありようについて批判的に考察できる。
• グローバル化とメディアの関係について理解する。

〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　メディアとそのグローバル化
第 2 回　メディアとは何か　世界的転換とメディア
　　※授業内容に関しては、進行具合により多少の前後があることを承知しておくこと。
第 3 回　戦後転形期のメディア①
　　書物と大衆
第 4 回　戦後転形期のメディア②
　　映画・テレビと大衆
第 5 回　1960年代　戦後前衛芸術の展開①
　　美術の展開
第 6 回　1960年代　戦後前衛芸術の展開②
　　演劇・舞踏・デザインの展開
第 7 回　1960年代　独立する映画と写真、そしてドキュメンタリー
第 8 回　1970年　大阪万博とメディア表現
第 9 回　ディスカバー・ジャパン　移動する大衆とメディア
第 10 回　ビデオの登場 「即再生」がもたらしたもの
第 11 回　オルタナティヴ・メディアの可能性①
第 12 回　オルタナティヴ・メディアの可能性②
第 13 回　現代消費社会①
　　オリンピックとメディア

第 14 回　現代消費社会②
　　ディズニーランドとメディア
第 15 回　メディアをうらむな、メディアをつくれ—実践的メディア論

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーへのフィードバックを、次の授業中に行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業内で話題にした内容について、図書館やインターネットを利用して理解を深めること。
• 映画館や美術館へ行き、様々な表現に触れること。感想に止まらず、なぜ自分が関心を持ったのか、どのようなメディアの作用があるのか等、意識的に考察すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
粉川哲夫「もしインターネットが世界を変えるとしたら」（晶文社）
中平卓馬「なぜ、植物図鑑か—中平卓馬映像論集」（ちくま学芸文庫）
赤瀬川原平「反芸術アンパン」（ちくま文庫）
その他、授業内に適宜紹介する。

〔成績評価〕
レポート50％、授業への取組み50％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明があまりできない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）

〔科目ナンバリング〕
LIA2000B

〔学位授与方針との関係〕
②、③

〔他専攻〕
—

〔キャップ対象外〕
—

## 現代思想論

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
火曜 1限
実務経験なし
講義

福山 圭介

〔履修条件〕
特になし。

〔授業の概要〕
この授業では、多様性、他者、国家、グローバリゼーション、ジェンダーなど、現代社会における重要な思想的テーマについて概観する。前半（第 7 回まで）は比較的平易な文献や映像を用いて、「近代」と対比される「現代」のイメージを掴む。後半は主にフランス現代思想（哲学・人類学・社会学など）を参照しながらテーマごとに理解を深めていく。

〔授業の到達目標〕
・現代思想の諸概念について入門レベルの理解を得て、これらの概念を用いて現代の政治・経済・文化・芸術に対する考察を行うことができる。
・現代社会のアクチュアルな問題について自らの考えを深め、借り物のことばではなく自分のことばで意見を述べることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　授業の進め方と評価方法、この授業のポイント
第 2 回　「近代と現代」基本イメージ
　　森川嘉一郎『技術と文化』を読む／飛行機と映画とパソコンの関係
第 3 回　多様性とポリティカル・コレクトネス①
　　映画『最強のふたり』に見る「多様性」（前編）／障害者と向き合うには
第 4 回　多様性とポリティカル・コレクトネス②
　　映画『最強のふたり』に見る「多様性」（後編）／フランスの移民問題
第 5 回　資本主義とグローバリゼーション①
　　NHKスペシャル「マネーワールド ～資本主義の未来 第1回」／超格差社会／「結局お金」なのか
第 6 回　資本主義とグローバリゼーション②
　　NHKスペシャル「マネーワールド ～資本主義の未来 第2回」／国民国家と植民地主義の歴史／国家vs.企業
第 7 回　中間まとめ
　　「近代／現代」の対比を概念として掴む
第 8 回　レヴィ=ストロース
　　構造人類学：「未開社会＝遅れた社会」なのか／神話と構造
第 9 回　アルチュセール
　　構造主義マルクス主義：アンチ・ヒューマニズム／社会の再生産とイデオロギー

第 10 回　フーコー
　　パノプティコン／性の歴史
第 11 回　バトラー
　　現代のフェミニズム／LGBTなど性的マイノリティについて
第 12 回　ドゥルーズ
　　差異の思想：「ちがい」と向き合うために／アンチ・オイディプス
第 13 回　ブルデュー
　　趣味の社会性／文化と階級
第 14 回　デリダ
　　脱構築／エクリチュール：「主体」のゆくえ／唯物論について考える
第 15 回　到達度確認と授業の総括
　　期末レポートに向けた復習解説／受講者によるディスカッションなど

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で積極的に発言を促し、それに対してコメントする。また、授業についての感想・質問・意見をGoogle Formsに書いてもらい、次の回にいくつかを取り上げて回答する。

〔授業時間外の学習〕
毎回の授業で予習用にネットの動画資料を案内する。復習はプリントで指示した文献を積極的に読むこと。これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
参考書（以下いずれも購入は必須ではない）：
・千葉雅也『現代思想入門』（講談社現代新書）
・橋爪大三郎『はじめての構造主義』（講談社現代新書）
・森川嘉一郎『趣都の誕生 萌える都市アキハバラ』（幻冬舎文庫）

〔成績評価〕
期末レポート60%、授業への貢献度40%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
LIA1010B

〔学位授与方針との関係〕
①、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 日本国憲法

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
金曜 5限
実務経験なし
講義
選択必修
教職課程受講者必修

西山 智之

〔履修条件〕
教職課程受講者は必修。

〔授業の概要〕
本講座では、日本国憲法の歴史をはじめ、国民に保障される自由や権利の他、統治機構（国会・内閣・裁判所）についての解説を講義形式で行う。
憲法は私たちの日常生活では、馴染みの薄い存在なのかもしれない。しかし近年、憲法第9条（戦争放棄）に関する議論や過激な表現活動に関する問題等、憲法上の諸問題が活発に議論されており、これらの問題は高等教育を受けた者として当然に知っておくべきものである。また憲法は、刑事法や民事法の基礎となる法であり、今後私たちが生活をする際に法律を学んでいく上で、理解しておくことが望ましいと考えられる。
そのため講義の中では、憲法の基本的知識の他、上記にあげた現代の憲法上の諸問題や憲法改正議論について等、タイムリーな話題についても解説を行いたいと考えている。また、社会問題を考える力を育成するため、授業中にディベートやディスカッション等を行うなど発言する機会を多く設ける予定である。積極的に議論に参加してほしい。

〔授業の到達目標〕
日本国憲法を通じて、現代の法で治められた国家の仕組みに関する知識・理解を深め、社会に対する関心・意欲を高めることができる。具体的には、受講者が日本国憲法の基本的知識を習得し、人権の意義や国会・内閣・裁判所の役割を理解した上で説明することができる、ということを到達目標とする。

〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス、憲法とは何か、法とは何か
　　授業の進め方や成績評価の方法等について説明する。
　　「憲法」「法」とは何かについて簡単に解説を行う。
第 2 回　天皇の地位と権能、平和主義
　　天皇制及び日本国憲法第9条の戦争放棄（平和主義）について解説を行う。
第 3 回　基本的人権の原理、基本的人権の保障と限界
　　「人権」の基本事項について解説を行う。
第 4 回　包括的基本権、法の下の平等
　　日本国憲法第13条の幸福追求権について解説を行う。
　　法の下の「平等」とは何かについて解説を行う。

第 5 回　精神的自由①
精神的自由権のうち「思想・良心の自由」「信教の自由」について解説を行う。
第 6 回　精神的自由②
精神的自由権のうち「表現の自由」「学問の自由」について解説を行う。
第 7 回　経済的自由
経済的自由権である「職業選択の自由」「居住・移転の自由」「財産権」について解説を行う。
第 8 回　人身の自由
人身の自由である「適正手続の保障」「被疑者・被告人の権利」について解説を行う。
第 9 回　社会権
社会権である「生存権」「労働基本権」「教育を受ける権利」について解説を行う。
第 10 回　国務請求権、参政権、統治の基本原理
請願権、選挙権などについて解説を行う。
三権分立などの統治機構の基本原理について解説を行う。
第 11 回　統治機構①国会
国会（立法権）の仕組みと役割について解説を行う。
第 12 回　統治機構②内閣
内閣（行政権）の仕組みと役割について解説を行う。
第 13 回　統治機構③裁判所
裁判所（司法権）の仕組みと役割について解説を行う。
第 14 回　違憲審査制、地方自治、憲法改正
違憲審査制、地方自治の解説の他、憲法改正の議論について解説を行う。
第 15 回　授業の総括
本講座の総復習を行い、まとめをする。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回授業の最後にリアクションペーパーを提出してもらい、その次の授業の冒頭でリアクションペーパーで出た質問等に回答する。また、その際にリアクションペーパーに書かれていた授業の感想等に対するコメントも行う。

〔授業時間外の学習〕
事前学習： ニュース・新聞等を通じて社会問題に対して常に関心を持ち、現在の日本でどういった問題が起きているのかについて調査を行い、ノートに列記しておく。
事後学習： 各回の授業内容を自分なりに整理し、わかりやすくノートに記述しておく。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：東裕＝杉山幸一 編著「Next教科書シリーズ 日本国憲法」（弘文堂、2022年）
その他、授業で資料を配付する。

〔成績評価〕
成績評価は、提出物（課題）50％、平常点50％の配分で総合的に評価する。
平常点では、教員の問いに対する発言回数や議論の際の態度等、授業に積極的に参加しているかを見る。ここでの授業への参加とは、単に授業時間に教室へ来て座っているのではなく、授業への意欲的な態度を持って参加していることを意味する。
Ｓ： 総合点が90点以上の者（授業に積極的に参加し、憲法について優れた理解をしている）
Ａ： 総合点が80点以上の者（授業に積極的に参加し、憲法について十分に理解している）
Ｂ： 総合点が60点以上の者（授業に参加し、憲法についてある程度理解している）
Ｃ： 総合点が50点以上の者（授業に参加し、憲法について最低限度理解している）
Ｄ： 総合点が50点未満の者（授業に参加せず、憲法についての理解度が低い）

〔科目ナンバリング〕
LIA2020B

〔学位授与方針との関係〕
①、③

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 文化政策論Ａ

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
水曜 3限
実務経験なし
講義

広瀬 彩

〔履修条件〕
演劇専攻・音楽専攻共に歓迎する。
テキストとして戯曲を用いることがある。戯曲を読み慣れていない音楽専攻の学生には都度サポートを行う。課題は期限までに必ず終えて、授業に臨むこと。実習及びグループディスカッションを多用するため、積極的に参加すること。

〔授業の概要〕
文化政策を考えるために、論理的に思考したり、文章を書いたり、他者と必要なコミュニケーションを取ってアウトプットを発表したりできるよう、基礎力の向上を図る。授業前半では戯曲をテキストに論理的に考え、グループで一つのアウトプットを行う練習をする。中盤以降は、演習や実習を交えながら、ロジカルライティングの基礎を習得して、他者に伝わる説明とはどのようなものかを理解する。終盤は、専攻を問わず文化政策を学ぶうえで一度は触れておきたい作品について取り上げ、討議を行う。

〔授業の到達目標〕
文化政策を考えるために必要となる、ロジカルシンキング・ライティング・コミュニケーション・プレゼンテーションの基礎力を身につける。

〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション・自己紹介
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　クラスのメンバーを知る / ロジカルに考える基礎（１）戯曲をテキストに
第 3 回　ロジカルに考える基礎（２） グループディスカッション・発表
第 4 回　ロジカルに考える基礎（３）グループディスカッション・発表
第 5 回　ロジカルに考える基礎（４）グループ発表
第 6 回　文化政策を考えるためのロジカルシンキング（１）
第 7 回　文化政策を考えるためのロジカルシンキング（２）
第 8 回　文化政策 : 企画書執筆のためのロジカルライティング（１）
第 9 回　文化政策 : 企画書執筆のためのロジカルライティング（２）
第 10 回　文化政策 : 企画書執筆のためのロジカルコミュニケーション（１）
第 11 回　文化政策 : 企画書執筆のためのロジカルコミュニケーション（２）
第 12 回　文化政策：プレゼンテーション
第 13 回　シェイクスピア作品と映像化（１）
第 14 回　シェイクスピア作品と映像化（２）
第 15 回　まとめ・振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の発言や発表、提出レポートについて、適宜フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業内で提示された課題（ワークシートへの記入、文章執筆等）
• 予習・復習
• プレゼンテーション準備
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考資料やワークシート等は、都度配布する。
※そのほかの資料については、授業中やClassroom等を用いて適宜共有・指示する。
〔成績評価〕
課題30%、発表20%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）が50％で100点に換算する。
Ｓ 総合点が90点以上の者（大幅な遅刻欠席がなく、遅滞なく課題を提出し、その内容が極めて優秀である、発表内容に意欲が感じられる）
Ａ 総合点が80点以上の者（欠席が3回未満で、遅滞なく課題を提出し、その内容が優秀である。さらに発表内容に意欲が感じられる）
Ｂ 総合点が60点以上の者（欠席が5回未満で、遅滞なく課題を提出する）
Ｃ 総合点が50点以上の者（欠席が5回未満で、課題を提出する）
Ｄ 総合点が50点未満の者（欠席が5回以上または課題が１つでも提出されない場合）
※外部出演等、特別の事情によりやむをえず遅刻・欠席が多い場合は、個別にレポート等の課題を課し、その内容によって評価を行う。
〔科目ナンバリング〕
LIA1030B
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 文化政策論Ｂ

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
水曜 2限
実務経験なし
講義

広瀬 彩

〔履修条件〕
なし。
〔授業の概要〕
日本にはどのような劇場があり、どのように企画・運営が行われてきたのか。どのような変遷を経て現行の仕組みや考え方が成立したのかを概観・考察する。また、折に触れて国内外における文化をめぐる課題・問題についてケーススタディ等を行い・討議を行う。
〔授業の到達目標〕
• 作品が作り手から観客に届くまでの基礎的な過程を理解し、その課題や問題点について考察することができる。
• 過去のケースを学ぶことで、現在、日本の劇場が抱えている課題について考え、自分なりの意見を示して他者と討議することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　自己紹介・作品が観客に届くまで
第 3 回　制作現場の課題（１）
第 4 回　制作現場の課題（２）
第 5 回　制作現場の課題（３）
第 6 回　著作権
第 7 回　文化政策とは
第 8 回　劇場の仕組みと地域による特色（１）
第 9 回　劇場の仕組みと地域による特色（２）
第 10 回　劇場の仕組み
第 11 回　劇場の取り組み
第 12 回　発表準備・資料作成
第 13 回　調査発表（１）
第 14 回　調査発表（２）
第 15 回　まとめ・振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の発言や発表、提出レポートについて、適宜フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを、図書館の資料やインターネット等でチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
公益社団法人全国公立文化施設協会編「アートマネジメントの基礎用語ハンドブック（平成26年度」（オンライン教材）を予定
URL　：　https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/afca/art_hb2015.pdf（2025年2月15日現在）
「劇団四季株式会社」（慶應ビジネス・スクール）を予定（ケース購入代金737円がかかります。初回授業で説明します。）
福井健策「18歳の著作権入門」（ちくまプリマー新書）
〔成績評価〕
課題20%、発表20%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）が60％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（大幅な遅刻欠席がなく、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持って質問や意見を述べることができる。さらに、課題の内容が優秀である）
Ａ　総合点が80点以上の者（欠席が3回未満で、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持つことができる。さらに、課題の内容が優秀である）
Ｂ　総合点が60点以上の者（欠席が5回未満で、遅滞なく課題を行う）
Ｃ　総合点が50点以上の者（欠席が5回未満で、課題を提出する）
Ｄ　総合点が50点未満の者（欠席が5回以上または課題が１つでも提出されない場合）
※外部出演等、特別の事情によりやむをえず遅刻・欠席が多い場合は、個別にレポート等の課題を課し、その内容によって評価を行う。
〔科目ナンバリング〕
LIA2030B
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 青少年教育論

教養
１年生　２年生
2単位　前期
月曜 4限
実務経験あり
講義

大谷 賢治郎

〔履修条件〕
子どもならびに若者のための舞台芸術に深い関心があること。
児童青少年教育における演劇の可能性への探求意欲があること。
〔授業の概要〕
世界の児童青少年の演劇事情を学ぶ。
舞台芸術が児童青少年の発達にどのような影響を及ぼすのか学習・研究する。
児童青少年のための舞台芸術作品の創作に挑戦する。
〔授業の到達目標〕
• 世界の児童青少年演劇を学習し、その現状について説明できる。
• 発達心理学の分野等で研究されている、舞台芸術が児童青少年に及ぼす影響を学習し、自らリサーチできる。
• これらの学習を経て、児童青少年のための演劇作品を創作することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
授業内容の説明と目標設定
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　Theatre for Young Audiences（ TYA）とは何か
第 3 回　乳児のための演劇
第 4 回　幼児のための演劇
第 5 回　青少年のための演劇
第 6 回　世界のTYA
第 7 回　児童青少年のための演劇ワークショップの可能性
第 8 回　児童青少年のための演劇ワークショップを考案・発表
第 9 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について①
基礎
第 10 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性について②
世界の研究成果
第 11 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性についてリサーチの発表①前半（２回に分けて行う）
第 12 回　発達心理学等における舞台芸術の重要性についてリサーチの発表②後半
第 13 回　作品創造①
前半（２回に分けて行う）
第 14 回　作品創造②
後半

第 15 回　総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出された課題に対し講評を行い、場合によってはフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題発表のためのリサーチを行う。作品の執筆に取り組む。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：必要に応じて授業時に配布。
参考書：必要に応じて授業時に配布。
〔成績評価〕
授業への取組み・創造過程への関わり方80％、発表の内容20％の総合的評価。
S　総合点が90点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が大変高く評価できる）
A　総合点が80点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が高く評価できる）
B　総合点が60点以上の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、発表の内容が評価できる）
C　総合点が50点以上の者（授業への取組み、創造過程への関り方が不十分だが、各課題の発表まで達している）
D　総合点が50点未満の者（授業への取組み、創造過程への関わり方、各課題の発表が評価できない）
〔科目ナンバリング〕
LIA1040B
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 倫理学

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 2限
実務経験なし
講義

吉川 浩満

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
倫理とは、人と人とが関わり合う際のふさわしい振る舞いを指す。
倫理学は、その倫理を理性的に検討する学問である。私たちは、日常生活においてはもちろん、芸術活動においても、様々なかたちで倫理と関わりを持つ。
この授業では、日常生活や芸術活動において直面しうる倫理的諸問題について、倫理学の助けを借りて考える。
〔授業の到達目標〕
以下の２点を到達目標とする。
• 自己と他者の倫理的判断の根拠を、ある程度まで理解・説明できる。
• 特定の状況における倫理的問題の所在を、ある程度まで把握できる。
〔授業計画〕
第 1 回　倫理／倫理学とは
第 2 回　倫理学はなぜ「実は必修科目」なのか①
第 3 回　倫理学の三部門
　　規範倫理学、記述倫理学、メタ倫理学
第 4 回　倫理学の三領域
　　個人、社会、身近な関係
第 5 回　社会の倫理
　　正義
第 6 回　個人の倫理
　　自由
第 7 回　身近な関係の倫理
　　愛
第 8 回　ケアの倫理
第 9 回　倫理学の各領域の関係
第 10 回　倫理学の三学説
　　徳倫理、義務論、功利主義
第 11 回　ポリティカル・コンパス
　　政治思想と倫理
第 12 回　芸術と倫理①
第 13 回　芸術と倫理②
第 14 回　倫理学はなぜ「実は必修科目」なのか②
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーやミニレポートへのフィードバックを、授業内において適宜行う。
〔授業時間外の学習〕
配布資料を読むこと、ミニレポートを書くこと。
これらの学修には60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
授業にて配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、レポートや発表50％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
LIA2010B

〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ジェンダー論

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 4限
実務経験なし
講義

岡 俊一郎

〔履修条件〕
受講にあたって、ジェンダー論やセクシュアリティ論に関わる特別な知識は求めない。
授業で扱う内容や事例の説明について、受講者からの疑問や異なる見解の提示を歓迎する。
〔授業の概要〕
性のあり方は私たちの日常に深く関わっており、文化的・社会的な事象にも影響を与えている。性のあり方が私たちの生活に与える影響は、様々な手法で分析されている。
この講義では、受講者が自らの関心とジェンダーやセクシュアリティと密接に関わる問題を結び付けて考察できるようになることを目標にする。この講義では、ジェンダースタディーズの入門的事項を人文学的視点に主眼を置いて概観する。ジェンダーやセクシュアリティが重要視されるに至った背景や、ジェンダースタディーズにおける基礎的な概念だけでなく、パフォーマンス・視覚芸術・映画といった表現との関係を解説する。
前半の講義では、ジェンダースタディーズの基礎的な概念である、社会的に構築された性を示すジェンダーや多様な性のあり方を示すセクシュアリティ等の概念と、これらの概念が重要視されるようになった歴史的経緯を説明する。性感染症や性的合意等、身近で重要な題材についても学ぶ。
後半では、1945年以降、多様な表現手段の中で、ジェンダーを巡る問題系がいかに探求されてきたのかを学ぶ。英語圏での議論の展開を中心としながら、日本における展開や、時事的な問題との接続も合わせて説明する。
受講者の関心領域に合わせて、講義内容を若干変更することがある。
〔授業の到達目標〕
• ジェンダースタディーズの基礎的な概念や内容を理解し、説明することができる。
• ジェンダーやセクシュアリティに関わる表現の歴史的展開について、説明することができる。
• 自らの表現活動や他者の表現活動について、ジェンダースタディーズとの関わりで表現することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
ジェンダー論の授業が対象とする領域について説明する。授業の中で、性について語ることについての注意点も併せて解説する。
第 2 回　フェミニズムとジェンダースタディーズ
ジェンダー論を学ぶ上で、フェミニズムについて学ぶことは欠かせない。フェミニズムとは何かを入門的な記事を使いながら解説する。
第 3 回　フェミニズムの歴史的展開 1
フェミニズムは「波」の比喩によって説明されることが多い。ここでは、フェミニズムの歴史的展開の中でも、第一波フェミニズムと第二波フェミニズムに注目して解説する。
第 4 回　フェミニズムの歴史的展開 2
フェミニズムの歴史的展開の中でも、第三波フェミニズム以降の展開について解説する。
第 5 回　ジェンダースタディーズの基礎的概念
ジェンダースタディーズの中では、生物学的な性（セックス）と社会的に構築された性（ジェンダー）を区別する。この区別についてふれながら、セックスとジェンダーの関係について解説する。
第 6 回　ジェンダースタディーズの基礎的概念
多様な性のあり方を示す言葉であるセクシュアリティと性の多様性について扱う。
第 7 回　ジェンダースタディーズの基礎的概念
ブラックフェミニズムの中では、差別的な経験が重複する要素を持つことを示す概念であるインターセクショナリティなどの概念が重要視されていた。この概念についての理解を深める。
第 8 回　リプロダクティブ・ヘルス／ライツとフェミニズムの展開
性と生殖にかかわる健康と権利を指すリプロダクティブ・ヘルス／ライツについて学ぶ。現代の私たちの性のあり方とも深いかかわりを持った概念であることを理解する。
第 9 回　HIV/AIDSを中心とした性感染症
性感染症に関する概説的な知識を解説する。とりわけ、クィア理論などの展開にも大きな影響を与えたHIV/AIDSについて解説する。
第 10 回　ACT UPの活動の歴史的意義
HIV/AIDS危機の中で大きな影響力を持って活動を行ったACT UPについて解説する。
第 11 回　フェミニズムと視覚芸術の関わり
フェミニズムやジェンダー・セクシュアリティにかかわる作品を紹介する。
第 12 回　フェミニズムと視覚芸術の関わり
フェミニズムやジェンダー・セクシュアリティにかかわる作品を紹介する。
第 13 回　フェミニズム批評の展開
フェミニズムは具体的な作品制作だけでなく、いかに作品を鑑賞するのかにも影響を与えた。フェミニズム批評と呼ばれる批評動向について解説する。
第 14 回　ジェンダー・セクシュアリティと映画の歴史

映画とジェンダー・セクシュアリティは密接な関係を持っている。ドキュメンタリーの鑑賞などを通して、映画（とりわけ、ハリウッド映画）とジェンダー・セクシュアリティの関わりに関する理解を深める。

第 15 回　授業の振り返り
授業の振り返りを行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーへのフィードバックを、次回の授業時に行う。具体的には、リアクションペーパーの内容に基づき、補足的な説明や応用的な事例の解説を行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業で説明する概念や事例について復習すること。
• 授業で説明する概念や事例に関わる身近な話題に関して、関心を持ち調査すること。
• 授業で説明する概念や事例と時事的な問題との関わり、芸術表現との関わりについて考えること。
• 授業で説明するジェンダーやセクシュアリティに関わる芸術表現に関心を持ち、各自で鑑賞等を行うこと。
これらの学修には60時間以上を要する

〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず、スライドを用いて授業を行う。
参考書：
清水晶子『フェミニズムって何ですか』（文藝春秋）
※授業でも扱う様々な話題について基本的な知識を解説した入門書
ハンナ・マッケン他著、最所篤子・福井久美子訳「フェミニズム大図鑑」（三省堂）
※ グローバルな視点からフェミニズムの歴史的展開について概観した参考書

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取組み30%、基礎的な概念の理解・自分や他者による表現活動のジェンダーやセクシュアリティの視点からの分析70%とする。
S　総合点が90点以上の者（基礎的な内容を十分に理解した上で、自らの表現や他者による表現に対して高度な説明・分析を行うことができる）
A　総合点が80点以上の者（基礎的な内容を理解した上で、自らの表現や他者による表現を説明･分析することができる）
B　総合点が60点以上の者（内容をほぼ理解した上で、自らの表現や他者による表現を説明・分析することができる）
C　総合点が50点以上の者（内容の説明が不十分で、表現の説明・分析が曖昧である）
D　総合点が50点未満の者（授業への取り組みが不十分で、内容の説明および表現の分析ができない）

〔科目ナンバリング〕
LIA2011B

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## ダンス史

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 3限
実務経験なし
講義

〔履修条件〕
特になし。
ダンスに関心を持つ学生の履修を歓迎する。

〔授業の概要〕
劇場でダンスを鑑賞する文化はいつ、どのようにして誕生し、現代まで続いてきたのだろうか。
本講義では、舞台芸術としてのダンスがどのように発展し、変容したのか講義する。バレエの誕生から20世紀に多様な展開を見せたモダンダンス、舞踏、コンテンポラリーダンスまでを概観し、それぞれのダンスに見られる特徴・時代背景・政治や社会とのつながりを考察する。

〔授業の到達目標〕
ダンス史を語る上で基礎となる知識を習得する。また、各作品やダンサー・振付家の持つ美学や革新的な要素を、時代や社会・政治との関わりを念頭に置きながら検討し、ダンスをより深く理解できるようになることを目指す。
具体的には以下の3点を到達目標とする。
• 舞台芸術としてのダンスの歴史を語ることができる。
• 一つの作品を、多角的に分析することができる。
• ダンス史の流れの中で、現在のダンスの状況を位置付けられる。

〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
授業で扱う「舞台芸術としてのダンス」が示す範囲やその定義について
第 2 回　バレエの歴史①
バレエの誕生からクラシック・バレエまで
第 3 回　バレエの歴史②
バレエ・リュスとニジンスキーについて
第 4 回　モダンバレエの歴史①
20世紀初頭に活躍したダンサーたち
第 5 回　モダンバレエの歴史②
ドイツ表現主義舞踊とその周辺
第 6 回　モダンバレエの歴史③
アメリカのモダンダンスの発展
第 7 回　ポストモダンダンスについて
第 8 回　ピナ・バウシュのタンツ・テアーター
第 9 回　日本における洋舞の発展
第 10 回　舞踏について①
土方巽と大野一雄の美学
第 11 回　舞踏について②
舞踏の国際的展開
第 12 回　ヌーヴェルダンス
第 13 回　コンテンポラリーダンス①
ノンダンスとその周辺

第 14 回　コンテンポラリーダンス②
　　日本のコンテンポラリーダンスの現状
第 15 回　授業の総括および学習到達度の確認
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーへのフィードバックを、次の授業時に行う。
〔授業時間外の学習〕
履修者は各自で講義をノートにまとめ、予習と復習に努めること。
授業内で紹介する参考文献に目を通し、ダンスに関する知を積極的に得ようとすること。
また、できる限り現在上演されているダンスの公演に足を運び、自分の目で舞台を見ること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じてレジュメや資料を配布する。また、参考書は適宜授業内で紹介する。
〔成績評価〕
授業内試験の結果60%、授業への取り組み・コメント40%を総合して評価する。
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、諸事項を関連付けて自分の言葉で説明できる。毎回の授業への取り組みも特に秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、自分の言葉で説明できる。授業への取り組みもほぼ的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容をほぼ理解しているが、説明しようとすると曖昧な部分もある。授業への取り組みは十分だと認められた者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容をあまり理解できていない。授業への取り組みも不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を全く理解せず、授業への取り組みにも問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
LIA2050B
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 映画史

教養
1 年生　2 年生
2単位　前期
月曜 3限
実務経験なし
講義

細谷 修平

〔履修条件〕
遅刻、居眠りをしないよう、積極的に授業に参加すること。
〔授業の概要〕
本講義では戦後の日本映画の流れを中心に、社会との関わりの中で映画作品がどのような人々によってどのように制作・上映され、どのような影響をもたらしたのかを考える。並行して、世界の映画状況も概観するが、西洋を中心とした既存の「映画史」にとどまらず、アジア各地の映画や小規模で制作された実験映画、映画と関連する他の芸術領域等についても考察していく。また、インターネットを介したグローバルな映像表現の展開も視野に入れ、ファインアートを含めた現在進行形の映画、映像表現の動向を捉えていく。
※ 授業内容に関しては、進行具合により多少の前後があることを承知しておくこと。
〔授業の到達目標〕
• 映画、映像作品と社会の関わりについて理解を深めることができる。
• 映像表現と人間の関わり、カメラの前で表現することについて考える力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　今日の映画状況
第 2 回　映画の誕生と日本における生成
第 3 回　戦争と映画
　　満映の時代
第 4 回　1950年代
　　記録の時代
第 5 回　1960年代①
　　スターと映画
第 6 回　世界情勢と映画の交差
第 7 回　1960年代②
　　新たなる映画の冒険
第 8 回　映画の実験と前衛芸術
第 9 回　ビデオの登場と映像表現
第 10 回　ドキュメンタリーとフィクション
第 11 回　アジア映画
　　もうひとつの映画史
第 12 回　80年代、90年代の映画、映像表現
第 13 回　インターネット社会における映画、映像表現
第 14 回　映画の保存活動
第 15 回　わたし／たちと映画、映像のこれから
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーのフィードバックを、次の授業中に行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業内で話題にした内容について、図書館やインターネットを利用して理解を深めること。
• 映画館や美術館等に出かけ、積極的に映画や芸術作品に触れること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
四方田犬彦「映画史への招待」（岩波書店）
平沢剛「アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス」（河出書房新社）
その他、授業内に適宜紹介する。

〔成績評価〕
レポート50％、授業への取組み50％の配分で総合的に評価する。
S 総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、説明ができる）
A 総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B 総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C 総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明があまりできない）
D 総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
LIA1000B
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 芸術空間論

教養
1 年生　2 年生
2単位　後期
金曜 2限
実務経験あり
講義

鈴木 健介

〔履修条件〕
芸能空間の歴史に興味があること。
〔授業の概要〕
芸能空間の歴史を舞台美術家の視点で解説する。ギリシア悲劇、聖史劇、ルネサンス演劇など歴史的なものから2.5次元、VRなど現代そして未来の芸能空間へとつなげる。
前半では西洋と日本の空間の歴史を説明していく。
後半では各テーマに沿いながら、過去から未来の芸能空間の考察を行う。
最終的に個人が理想の芸能空間を定義できる所までを目指す。
〔授業の到達目標〕
・芸能空間（主に劇場）の歴史の流れが理解できる。
・それぞれの芸能空間のカタチの意味を説明できる。
・歴史を踏まえ自分の理想の芸能空間を考え出す。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　授業全体の流れを説明する
第 2 回　芸能空間の流れを掴む①
　　劇場のカタチを考える
第 3 回　芸能空間の流れを掴む②
　　劇場の大きさを考える
第 4 回　芸能空間の流れを掴む③
　　日本編1_能楽と方角から考える
第 5 回　舞台空間の流れを掴む④
　　日本編2_歌舞伎と画面比率から考える
第 6 回　舞台空間の流れを掴む⑤
　　20世紀の舞台空間から考える
第 7 回　新劇の空間
　　新劇の空間から考える
第 8 回　シェイクスピアの空間
　　シェイクスピアの空間から考える
第 9 回　オペラの空間
　　オペラの空間から考える
第 10 回　ミュージカルと2.5次元の空間
　　ミュージカルと2.5次元の空間から考える
第 11 回　21世紀の理想の空間
　　21世紀の理想の空間から考える
第 12 回　テクノロジーと舞台空間
　　テクノロジーと舞台空間から考える
第 13 回　SDGsとSite specific theaterの空間
　　SDGsとSite specific theaterの空間から考える
第 14 回　まとめ
　　第1回目～13回目までの総まとめ
第 15 回　フィードバック
　　個人発表。それぞれの理想の空間を1人ずつ発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート・課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
中学程度の日本史・世界史をおさらいしておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に毎回プリントを配布。
〔成績評価〕
出席と授業への取り組み50%、レポート50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
LIA2012B
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 国際文化論

教養
1年生　2年生
2単位　前期
木曜2限
実務経験なし
講義

広田 敦郎

〔履修条件〕
異文化間交流や国際的な共同作業、世界の歴史、ストーリーテリングに興味のある学生。語学のスキルは問わない。
〔授業の概要〕
異なる場所や遠い過去の作家によって描かれた物語に、翻訳を通じ、文化的な隔たりを超えてアプローチし、「いま」「ここ」に生きる「わたしたち」を再発見するプロセスを学ぶ。講師が上演に関わった作品を取り上げて読み解き、実際の翻訳作業、リハーサルでのクリエーション、国内外アーティストとの共同作業による経験から得た知見を共有する。
〔授業の到達目標〕
・授業で取り上げた作品を足がかりとして、さらに多くの作品に興味を広げ、そこに描かれた人々の物語を「自分ごと」として捉えられるようになること。
・国外の作家の劇作やアーティストの創作プロセスに触れることで国際的な視野を広げ、同時に国内の舞台芸術や伝統芸能に対する見識を深める素地をつくること。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介とオリエンテーション
※授業の進行具合により、内容が多少前後したり変更になったりすることもある。
第 2 回　イントロダクション
翻訳を通じて異なる文化や時代にアプローチする
第 3 回　アーサー・ミラー作『セールスマンの死』（1）
20世紀のアメリカから日本へ
第 4 回　アーサー・ミラー作『セールスマンの死』（2）
20世紀のアメリカから日本へ
第 5 回　アーサー・ミラー作『セールスマンの死』（3）
20世紀のアメリカから日本へ
第 6 回　チェーホフ作『桜の園』（1）
変革期のロシアから現代の日本へ
第 7 回　チェーホフ作『桜の園』（2）
変革期のロシアから現代の日本へ
第 8 回　カレル・チャペック作『母』（1）
男たちの歴史と母の抵抗
第 9 回　カレル・チャペック作『母』（2）
男たちの歴史と母の抵抗
第 10 回　トム・ストッパード作『レオポルトシュタット』（1）
ある民族の運命が映し出すいま
第 11 回　トム・ストッパード作『レオポルトシュタット』（2）
ある民族の運命が映し出すいま
第 12 回　トム・ストッパード作『レオポルトシュタット』（3）
ある民族の運命が映し出すいま
第 13 回　ローレン・ガンダーソン作『サイレント・スカイ』（1）
天文学に革命をもたらした女性
第 14 回　ローレン・ガンダーソン作『サイレント・スカイ』（2）
天文学に革命をもたらした女性
第 15 回　まとめ
これからの翻訳とドラマツルギー
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後、個別または書面でフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる作品を事前に読んでおくこと。
予習やリサーチ、レポート作成に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
台本や資料をClassroomで共有、または配布。
〔成績評価〕
レポート（2回分）60%、授業への取り組みや受講姿勢（出席含む）40%で100点に換算する。
S 総合点が90点以上の者（自分の疑問や視点、解釈を明快に表現し、深く掘り下げられる。遅刻や欠席がほぼない。）
A 総合点が80点以上の者（自分の疑問や視点、解釈を明快に表現し、ある程度掘り下げられる。欠席が2回以下。）
B 総合点が60点以上の者（自分の疑問や視点、解釈を表現し、最低限掘り下げられる。欠席が4回以下。）
C 総合点が50点以上の者（自分の疑問や視点、解釈を最低限表現できる。欠席が4回以下。）
D 総合点が50点未満の者（欠席が5回以上、または提出されていないレポートがある）
〔科目ナンバリング〕
LIS1031B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 文学論

教養
1年生　2年生
2単位　後期集中
実務経験なし
講義

高橋 宏幸

〔履修条件〕
後期の集中講義。12月後半と2月前半の補講・集中講義期間に行う予定。
GPA（成績）、CAP制度（履修登録上限制度）、修了公演や卒

業公演等のスケジュールとの兼ね合いもあるので、履修希望者はよく考えてから、履修登録すること。
〔授業の概要〕
文学の中でも小説というジャンルは、それを原作として、多様な形態に姿を変えることがある。映画や演劇等、台本としてシナリオや戯曲になる例はもちろん、美術であれば、絵画等のモチーフになる場合もある。また、小説家が、小説を書くことはもちろんだが、戯曲を書くこともある。
この授業では、それらの作家の小説を中心的に論じつつ、同時に彼らが書いた戯曲も文学として見る。短い小説を読みつつ、原作が他のメディアとなること、もしくは他のメディアから小説への影響等も考える。
〔授業の到達目標〕
文学というものの幅の広さを知ると同時に、それがどのように別のジャンルへと転化するのか。小説・詩・戯曲・映画・映像・美術等芸術全般を、文学を通して考える。ひいては社会全体を芸術を通して考えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション：小説とは何か
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があること
を承知しておくこと。
第 2 回　作家の小説について：安部公房
第 3 回　作家の戯曲について：安部公房
第 4 回　作家の小説について：三島由紀夫
第 5 回　作家の戯曲について：三島由紀夫
第 6 回　現代の作家の小説について：岡田利規
第 7 回　現代の作家の戯曲について：岡田利規
第 8 回　現代の作家の小説について：本谷有希子
第 9 回　現代の作家の戯曲について：本谷有希子
第 10 回　作家の小説について：ワイルド
第 11 回　作家の戯曲について：ワイルド
第 12 回　作家の小説について：ベケット
第 13 回　作家の戯曲について：ベケット
第 14 回　古典から現代へのアダプテーションについて
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業でのフィードバックシートに対して、さらにコメントをする。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。
〔成績評価〕
レポート50％、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
LIA2001B
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
共通科目なので自由に履修してください。
〔キャップ対象外〕
○

## 英語 A

教養
1 年生
1単位　前期
木曜 3限
実務経験なし
演習（理論）

James Barry Ferner

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
様々なシチュエーションをドラマのシーンにするアプローチを使います。タスク・場面シラバス等に基づき、ロールプレイやグループワークを用いて、日常的でリアリティの高い状況を想定し、毎回、受講者でグループを作り発表します。そこで使われる英会話の文法・表現・慣用句を自然に覚えられます。テキストによらない、生き生きとしたテーマと構成で、受講者の想像力を生かしながら、演じることも観ることも楽しめる授業です。
〔授業の到達目標〕
異文化を学ぶことを楽しみながら、新しい単語・文法を自然に覚える。
中・高校で学んだ英語を再確認できる。
自信を持って色々なシチュエーションで英語を使えるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス・自己紹介（スピーチ）
第 2 回　電話の出方・軽い話（ロールプレイ）
第 3 回　天気予報 「今日何しましょう」（ロールプレイ）
好きな季節 （スピーチ）
第 4 回　ホテルのチェックイン・トラブル （ロールプレイ）
第 5 回　旅行の切符を買う・乗り物の間違い（ロールプレイ）

第 6 回　レストランで注文・ウェイターとのコミュニケーション（ロールプレイ）
第 7 回　「すみません、ここは禁煙です」 人に注意する（ロールプレイ）
第 8 回　「ブラウンさんはどういう見た目？」（ロールプレイとゲーム）
第 9 回　旅行の切符を買う・乗り物の間違い（ロールプレイ）
第 10 回　具合の悪い話・薬をおすすめするテレビCM（ロールプレイ）
第 11 回　映画の話（ロールプレイ・ディスカッション）
第 12 回　メロドラマ・テレビCM（ロールプレイ）
第 13 回　料理テレビ番組・レシピ（ロールプレイ・スピーチ）
第 14 回　パーティの招待・行けなかった理由・謝り
第 15 回　道案内 （RPG）

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
宿題を提出後に、classroomのメッセージで個別のフィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
予習は必要ないが、毎週、各自復習することで上達が早くなる。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
各回に必要なプリントを配布。

〔成績評価〕
100点満点として、グループワーク60点・授業への参加意欲等の平常点35点・課題5点
S「評価」が90～100点、A「評価」が80～89点、B「評価」が60～79点、C「評価」が50～59点、D「評価」が50点未満。

〔科目ナンバリング〕
FLS1100B

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 英語Ｂ

教養
1 年生
1単位　後期
木曜 3限
実務経験なし
演習（理論）

James Barry Ferner

〔履修条件〕
特になし。

〔授業の概要〕
様々なシチュエーションをドラマのシーンにするアプローチを使います。タスク・場面シラバス等に基づき、ロールプレイやグループワークを用いて、日常的でリアリティの高い状況を想定し、毎回、受講者でグループを作り発表します。そこで使われる英会話の文法・表現・慣用句を自然に覚えられます。テキストによらない、生き生きとしたテーマと構成で、受講者の想像力を生かしながら、演じることも観ることも楽しめる授業です。

〔授業の到達目標〕
異文化を学ぶことを楽しみながら、新しい単語・文法を自然に覚える。
中・高校で学んだ英語を再確認できる。
自信を持って色々なシチュエーションで英語を使えるようになる。

〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス 「お久しぶり」（ロールプレイ）
第 2 回　食事の招待・レストランを決める（ロールプレイ）
第 3 回　電化製品のおすすめ・テレビCM（ロールプレイ）
第 4 回　買い物の返品・交換・返金（ロールプレイ）
第 5 回　オーディション・アルバイトの面接（ロールプレイ）
第 6 回　注意・緊急（ロールプレイ）
第 7 回　病院に行く（ロールプレイ）
第 8 回　映画・演劇・コンサートの切符を買う（ロールプレイ・ディスカッション）
第 9 回　友達にニュースを知らせる・アナウンス（ロールプレイ）
第 10 回　OJT（オンザジョブトレーニング）・やり方の説明（ロールプレイ）
第 11 回　忘れ物・落とし物の報告（ロールプレイ）
第 12 回　スポーツクラブのプロモーション・テレビCM（ロールプレイ）
第 13 回　旅行の計画・旅行会社 （ロールプレイ）
第 14 回　道を聞く（RPGゲーム）
第 15 回　「コークVSペプシ」パネルディスカッション・テレビ番組（ロールプレイ）

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
宿題を提出後に、classroomのメッセージで個別のフィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
予習は必要ないが、毎週、各自復習することで上達が早くなる。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
各回に必要なプリントを配布。

〔成績評価〕
100点満点として、グループワーク60点・授業への参加意欲等の平常点35点・課題5点
S「評価」が90～100点、A「評価」が80～89点、B「評価」が60～79点； C「評価」が50～59点、 D「評価」が50点未満。

〔科目ナンバリング〕
FLS2100B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 英語Ｃ

教養
1 年生　2 年生
1単位　前期
木曜 4限
実務経験なし
演習（理論）

田村 奈穂子

〔履修条件〕
2年生前期におかれる選択科目。
英語に興味・関心を持ち、学習意欲のある学生。
〔授業の概要〕
本授業では、イギリスの劇作家ピーター・シェファー（PeterShaffer 1926 –2016）作の戯曲「アマデウス」（Amadeus 1989）第一幕を読む。本作は1979年にロンドンで初演を迎えた後、1981年にニューヨークでも上演され、1984年には映画化された。「アマデウス」は、実在した作曲家モーツァルトとサリエリを中心人物とし、「モーツァルトの死にサリエリは関与したのか」というテーマで構成されたフィクションである。
授業では担当を決め、輪番でテキスト訳を発表し理解度を確認する。また、学習内容を踏まえながら、テキストを使った発話練習を行う。担当者以外も自発的に意見を発表する等、積極的な授業への参加を期待する。
〔授業の到達目標〕
• 英語の基礎文法を習得し、英語で書かれた戯曲を正確に読み取ることができる。
• 日本語を介さず登場人物の行動およびセリフを理解し、感情が伴った発話を行うことができる。
• 戯曲の精読を通し、歴史的・文化的知識を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　作者・作品の概要、背景等の説明
　　※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後が生じることを承知しておくこと。
第 2 回　舞台装置等、冒頭のト書き
第 3 回　ウィーン市民の噂話①
第 4 回　ウィーン市民の噂話②
第 5 回　サリエリの罪の告白
第 6 回　サリエリの回想（子供時代）
第 7 回　サリエリの全盛期
第 8 回　モーツァルトの噂①
第 9 回　モーツァルトの噂②
第 10 回　モーツァルトとコンスタンツェの会話①
第 11 回　モーツァルトとコンスタンツェの会話②
第 12 回　サリエリの衝撃
第 13 回　サリエリの祈り
第 14 回　モーツァルトを迎える宮廷
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の都度、個々にフィードバックを行いながら授業に反映させる。
〔授業時間外の学習〕
履修者には、単語・文法を踏まえた和訳準備のみならず、登場人物像・音楽的要素の把握、音読練習等、入念な予習が求められる。担当外の履修者も積極的な授業参加のためには十分な予習が必要である。
授業後は、各自テキストを繰り返し音読し、単語・文法構造等の記憶定着に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教材は授業時にプリントを配布する。
授業には辞書を必ず持参すること。
〔成績評価〕
期末試験60％、授業への参加態度40％を総合的に評価する。
S 総合点が90点以上の者（文法および作品を十分に理解できている）
A 総合点が80点以上の者（文法および作品を概ね理解できている）
B 総合点が60点以上の者（文法および作品をある程度理解できている）
C 総合点が50点以上の者（文法および作品の理解度が半分程度である）
D 総合点が50点未満の者（文法および作品を理解できていない部分が多い）
〔科目ナンバリング〕
FLS1101B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 英語Ｄ

教養
１年生　２年生
1単位　後期
木曜 4限
実務経験なし
演習（理論）

田村 奈穂子

〔履修条件〕
2年生後期におかれる選択科目。
英語に興味・関心を持ち、学習意欲のある学生。
〔授業の概要〕
基礎的英文法を確認しながらアメリカの劇作家バーナード・スレイド（Bernard Slade 1930-2019）の戯曲「セイム・タイム,ネクスト・イヤー」（Same Time, Next Year 1975）第一幕（第一場・第二場）を読む。この戯曲は1975年にニューヨークでの初演後、1978年までに1453回のロングランを達成し、映画化された。本作はそれぞれ家庭のある男女が、年に一度、同じ場所で密会をするという二人芝居である。設定は単純ではあるが、その背景は1951年から1975年までの25年間に及ぶ。ロマンティック・コメディでありながら、セリフには時代の影響を受けた登場人物の心と葛藤を読むことができる。
授業では担当を決め、輪番でテキスト訳を発表し理解度を確認する。また、学習内容を踏まえながら、テキストを使った発話練習を行う。担当者以外も自発的に意見を発表する等、積極的な授業への参加を期待する。
〔授業の到達目標〕
• 英語の基礎文法を習得し、英語で書かれた戯曲を正確に読み取ることができる。
• 日本語を介さず登場人物の行動およびセリフを理解し、感情が伴った発話を行うことができる。
• 戯曲の精読を通し、歴史的・文化的知識を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　作品の概要、背景等の説明
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後が生じることを承知しておくこと。
第 2 回　舞台装置等、冒頭の ト書き
第 3 回　ドリスとジョージのぎこちない会話
第 4 回　1951年のベストセラーとヒット曲
第 5 回　ドリスとジョージの罪悪感
第 6 回　1951年の世界情勢
第 7 回　お互いの家族について
第 8 回　ドリスとジョージの出会い
第 9 回　配偶者の良いところを悪いところを１つずつ①
第 10 回　配偶者の良いところを悪いところを１つずつ②
第 11 回　子供の写真
第 12 回　５年後の近況報告①
第 13 回　５年後の近況報告②
第 14 回　子供からの電話
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の都度、個々にフィードバックを行いながら授業に反映させる。
〔授業時間外の学習〕
履修者には、単語・文法を踏まえた和訳準備のみならず、登場人物の心理・時代背景等を説明できるよう十分に準備すること。また、和訳準備の他、音読練習等、入念な予習が求められる。担当外の履修者も積極的な授業参加のためには十分な予習が必要である。
授業後は、各自テキストを繰り返し音読し、単語・文法構造等の記憶定着に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教材は授業時にプリントを配布する。
授業には辞書を必ず持参すること。
〔成績評価〕
期末試験60％、授業への参加態度40％を総合的に評価する。
S 総合点が90点以上の者（文法および作品を十分に理解できている）
A 総合点が80点以上の者（文法および作品を概ね理解できている）
B 総合点が60点以上の者（文法および作品をある程度理解できている）
C 総合点が50点以上の者（文法および作品の理解度が半分程度である）
D 総合点が50点未満の者（文法および作品を理解できていない部分が多い）
〔科目ナンバリング〕
FLS2101B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 演劇英語①②

教養
1 年生
1単位　前期
月曜 1限 月曜 2限
実務経験なし
演習（理論）

James Sutherland

〔履修条件〕
Welcome to the English Theatre course. Here we look at techniques and approaches to theatre making used in contemporary Europe and increase our knowledge English language ability. Punctuality is important, please arrive before class starts, black loose-fitting clothing is recommended, we will also be working with no shoes and socks.

〔授業の概要〕
Students work in groups and creatively explore a variety of storytelling and narrative theatre techniques. Their challenge will be to collectively think of ways to apply all these to short performances. Students are asked to apply all the skills they have learned to make a most original and compelling mini presentations possible. Students build up confidence performing in English. The course is designed to stimulate curiosity and pose questions. It aims to show how to achieve the progression from small improvisations, games and exercises to tackling larger themes and improvisations. The emphasis is towards devising - stimulating the reflex to create, compose and devise.

Commedia and the Street: Story Telling:
Students explore the internal dynamics of Commedia dell Arte and then to use those physical dynamics to tell a short story while keeping the audience engaged. Here the students learn the art of stillness and audience awareness and the push pull dynamic of Comedy.

Choreography and Song Lip Synced:
Students work in groups to choose, study, and recreate the choreography and lyrics of a popular song in English as it unfolds.

Stage Combat and Film Scene Choreography:
Students learn combat choreography and a modern feature film script to create a fight scene from a film using their bodies involving mime, acting skills and bare hand combat technique.

Text Theatre:
Students explore the 4 basic elements of Fire, Water, Air, Earth and recreate epic stories like the storm scene in King Lear using their bodies and voice only. Students learn techniques to read a traditional Shakespeare monologue to tell a story.
〔授業の到達目標〕
1. Learning theatre vocabulary and improving communication in English
2. Learning how to use the voice and body to increase expressivity and understanding dialogue written in English.
3. Learning more about history and context of actor training in Europe in English and improve pronunciation and fluency in speaking in English.
〔授業計画〕
第 1 回 Games Intro to course exercises. Commedia and the Street: Story Telling:
第 2 回 Games Commedia and the Street: Story Telling:
第 3 回 Games Commedia and the Street: Story Telling:
第 4 回 Games. Commedia Presentation: Lip Sync Practice:
第 5 回 Games. Stage Combat and Modern Text: Lip Sync Practice:
第 6 回 Games. Stage Combat and Modern Text: Lip Sync Practice:
第 7 回 Games. Stage Combat and Modern Text: Lip Sync Competition:
第 8 回 Games. Stage Combat and Modern Text:
第 9 回 Games. Stage Combat and Modern Text:
第 10 回 Stage Combat Presentation Elements and Text Theatre/ Shakespearean Text 1
第 11 回 Games. Elements and Text Theatre/ Shakespearean Text 2
第 12 回 Games. Elements and Text Theatre/ Shakespearean Text 3
第 13 回 Games. Elements and Text Theatre Rehearsals/ Shakespearean Text 4
第 14 回 Games. Elements and Text Theatre Rehearsals
第 15 回 Games. Final Performances/ Evaluate course/ Conclusion/feedback
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
Method of feedback to students will be in regular class verbal feedback both individually and in groups.
〔授業時間外の学習〕
Students practice in groups outside of class and memorize own work individually.
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
The teacher will provide all the material.
〔成績評価〕
S +90 A+80 B+65 C+50 D below 49
Commedia and the Street: Story Telling and Comedy: 20%
Ensemble Lip Sync and Choreography: 20%
Stage Combat and Text: 20%
Elements and Text Theatre: 25%
Participation 15%
〔科目ナンバリング〕
FLS1101B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ドイツ語 I

教養
1 年生
1単位　前期
火曜 4限
実務経験なし
演習（理論）

Daniel Gross

〔履修条件〕
特になし。

〔授業の概要〕
このコースは、ドイツ語の基礎や知識のない学生を対象に、ドイツ語圏の人々と基礎的な日常会話ができるようになり、ドイツ文化や習慣、地域の見解を深めてもらうことを目標としている。
授業で使用するテキストは、卒業・修了時（２年間）には、ドイツ語の公式テスト（Zertifikat Deutsch）を受ける能力を修得することができるものを使用する。また、授業では、テキストだけを使用するのではなく、他のアイテムを使用し、受け身の授業ではなく、学生に自主的に参加して話をするスタイルで進め、学んだことを実用的に使えるよう、授業を進めていく。
〔授業の到達目標〕
• ドイツ語の文法の基本を学び理解することができる。
• 基本的なドイツ語のボキャブラリーを構築することができる。
• 発音を修得することができる。
• 異文化に触れ、日本との違いを感じ取ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　あいさつ、自己紹介（アルファベット）
第 2 回　カウンティング（１～ 100まで）
第 3 回　Weekdays、Months（月）、day（日）
第 4 回　動詞の現在人称変化
第 5 回　定冠詞と名詞の格変化
第 6 回　不定冠詞と名詞の格変化
第 7 回　名詞と形容詞の使い方（一格）
第 8 回　名詞（男性名詞、女性名詞、中性名詞）ex. 食べ物、飲み物
第 9 回　４格
第 10 回　名詞と形容詞の使い方（４格）
第 11 回　ein ／ kein（１格）
第 12 回　einen ／ keinen（４格）
第 13 回　時計
第 14 回　復習
第 15 回　ファイナルテスト、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
ペーパーテスト評価および授業内での理解度を判断し評価する。
〔授業時間外の学習〕
授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
小野寿美子・中川明博・西巻丈児「クロイツング・ネオ」（朝日出版社）
〔成績評価〕
受講態度65%、筆記試験35%にて総合的に評価する。
S 筆記試験の結果が100～ 90%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。筆記試験の結果が89%～ 80%の者。
B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。筆記試験の結果が79%～ 60%の者。
C 授業中、積極的に参加し、授業内容をある程度理解している。筆記試験の結果が59%～ 50%の者。
D 授業に参加せず、筆記試験の結果が50%未満の者。
〔科目ナンバリング〕
FLS1110B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ドイツ語 II

教養
1 年生
1単位　後期
火曜 4限
実務経験なし
演習（理論）

Daniel Gross

〔履修条件〕
「ドイツ語Ｉ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
ボキャブラリーが少なく、基本的な文法の習得でも十分に様々なことを表現し伝えることができることを理解し、能動的にドイツ語を学んでいってもらいたい。
授業では「ドイツ語Ｉ」で使用したテキストを使用し、更にボキャブラリーや文法の幅を広げていく。
〔授業の到達目標〕
• ドイツ語の文法の基本を学び理解することができる。
• 基本的なドイツ語のボキャブラリーを構築することができる。
• 発音を修得することができる。
• 基本的なコミュニケーションスキルとリスニングスキルを修得できる。
• 授業を通し、ドイツの文化の魅力を学び広い学識を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　復習
第 2 回　単語（洋服）
第 3 回　色
第 4 回　２～３のプラクティス（４格の使い方）
第 5 回　ロールプレイ
第 6 回　現在完了形
第 7 回　現在完了形のプラクティス
第 8 回　コミュニケーションプラクティス
第 9 回　ロールプレイ
第 10 回　３格と結びつく前置詞
第 11 回　単語（３格の使い方）
第 12 回　３格のプラクティス
第 13 回　３格と４格
第 14 回　復習
第 15 回　テスト、まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
ペーパーテスト評価および授業内での理解度を判断し評価する。
〔授業時間外の学習〕
授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
小野寿美子・中川明博・西巻丈児「クロイツング・ネオ」（朝日出版社）
〔成績評価〕
受講態度65%、筆記試験35%にて総合的に評価する。
S 筆記試験の結果が100 ～ 90%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。筆記試験の結果が89%～ 80%の者。
B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。筆記試験の結果が79%～ 60%の者。
C 授業中、積極的に参加し、授業内容をある程度理解している。筆記試験の結果が59%～ 50%の者。
D 授業に参加せず、筆記試験の結果が50%未満の者。
〔科目ナンバリング〕
FLS2110B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ドイツ語III

教養
2年生
1単位　前期
火曜3限
実務経験なし
演習（理論）

Daniel Gross

〔履修条件〕
「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
コース修了時にはドイツ語ボキャブラリーと文法の知識の幅を広げ、ドイツ語を自信を持って話せることを目標としている。 授業では、発音や読解力の訓練をロールプレイ形式で進め、またテキストやCDを使用しながらリスニングトレーニングを行っていく。その他ピクチャーワークシート等も使用していく。
〔授業の到達目標〕
• 1年目で身につけた基礎から、さらに流暢な発音ができる。
• 小文章を作成することができる。
• リスニング能力やコミュニケーションの能力を向上させることができる。
• 文法だけにとどまらず、ドイツの音楽の理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　復習
第 2 回　３格、４格（だれに／何を～）
第 3 回　どこで（３格）どこへ（４格）地図を使用①前半
第 4 回　どこで（３格）どこへ（４格）地図を使用①後半
第 5 回　主文と副文（何故～ warum ／～なので weil）
第 6 回　ロールプレイ（内容５回目のレッスン）
第 7 回　接続詞と副文（～にもかかわらず obwohl ／～なので weil）
第 8 回　接続詞と副文（～するとき wenn）
第 9 回　esの使い方
第 10 回　dassの使い方
第 11 回　ロールプレイ
第 12 回　コミュニケーションプラクティス
第 13 回　従属の接続詞と副文
第 14 回　復習
第 15 回　ファイナル、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
ペーパーテスト評価および授業内での理解度にて評価を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
小野寿美子・中川明博・西巻丈児「クロイツング・ネオ」（朝日出版社）
※1年目と同じ
〔成績評価〕
受講態度65%、筆記試験35%にて総合的に評価する。
S 筆記試験の結果が100 ～ 90%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
A 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。筆記試験の結果が89%～ 80%の者。
B 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。筆記試験の結果が79%～ 60%の者。
C 授業中、積極的に参加し、授業内容をある程度理解している。筆記試験の結果が59%～ 50%の者。
D 授業に参加せず、筆記試験の結果が50%未満の者。
〔科目ナンバリング〕
FLS3110B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ドイツ語Ⅳ

教養
2 年生
1単位　後期
火曜 3限
実務経験なし
演習（理論）

Daniel Gross

〔履修条件〕
「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
前期同様のスタイルで進めていく。また、これらの身につけた能力をベースに、ドイツ語の文化やドイツ社会の習慣等を学生と共に話し合い、ディスカッションしながら授業を進め、更に実用的なドイツ語に近づけていく。
この授業を通してドイツ語に関心を深め、その後も一過性で終わるのではなく、ドイツ語を身近な物として捉え、学び続けていってほしい。
〔授業の到達目標〕
• 自信を持って自己表現をし、実用的に使うことができる。
• ドイツの文化・習慣を理解し、広い視野を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　復習
第 2 回　話法の助動詞①前半
第 3 回　話法の助動詞①後半
第 4 回　分離助詞
第 5 回　zu不定詞
第 6 回　現在完了形
第 7 回　現在完了形のプラクティス
第 8 回　再帰代名詞と再帰動詞
第 9 回　楽器、音楽関係
第 10 回　比較級、最上級
第 11 回　関係文の作り方
第 12 回　過去形①前半
第 13 回　過去形①後半
第 14 回　復習
第 15 回　ファイナルテスト、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
ペーパーテストと授業内での生徒の理解度と能動的参加の評価にて行う。
〔授業時間外の学習〕
授業冒頭で前授業の復習を兼ねたロールプレイや質疑応答を行うので、前授業内容をしっかりと理解し授業に臨むこと。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
小野寿美子・中川明博・西巻丈児「クロイツング・ネオ」（朝日出版社）
※ 1 年目と同じ
〔成績評価〕
受講態度65％、筆記試験35％にて総合的に評価する。
Ｓ 筆記試験の結果が100 ～ 90%の者で授業中に非常に活発で、積極性があり授業参加に大変熱心な者。
Ａ 授業中に非常に活発であり、強い熱意が見られ、授業内容を十分理解している。筆記試験の結果が89％～ 80％の者。
Ｂ 授業中に活発であり、授業内容をほぼ理解している。筆記試験の結果が79％～ 60％の者。
Ｃ 授業中、積極的に参加し、授業内容をある程度理解している。筆記試験の結果が59％～ 50％の者。
Ｄ 授業に参加せず、筆記試験の結果が50％未満の者。
〔科目ナンバリング〕
FLS4110B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## イタリア語Ⅰ

教養
1 年生
1単位　前期
火曜 3限
実務経験なし
演習（理論）
選択必修
芸術科音楽専攻声楽専修必修

Marco Sbaragli

〔履修条件〕
声楽専修は必修。
〔授業の概要〕
・文法： できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
・コミュニケーション内容： 簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。
〔授業の到達目標〕
イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身につける。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、イタリア語へのアプローチ
第 2 回　イタリア語の発音、挨拶や簡単な自己紹介、数え方
第 3 回　性と数、定冠詞等を中心としたイタリア語の特徴
第 4 回　指示代名詞、形容詞の性と数の一致
第 5 回　動詞essereを用いた文章の構造
第 6 回　疑問詞cheおよびchiを用いた疑問文の作り方、その答え方
第 7 回　c'èとci sonoを用いた文章
第 8 回　主語人称代名詞と動詞essereの直説法現在の活用
第 9 回　動詞avereの活用変化とその使い方
第 10 回　avere、essereを用いた文章
第 11 回　定冠詞と不定冠詞、前置詞等を中心とした文章の構造

第 12 回　規則動詞の現在形とその使い方①
第 13 回　規則動詞の現在形とその使い方②
第 14 回　規則動詞を使った文章、疑問文＆答えを中心に
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中に気付いた点をアドバイスする。
疑問点に答える。
〔授業時間外の学習〕
予習・復習をしっかり行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「デイリー日伊英・伊日英辞典」（三省堂）
遠藤礼子「イタリア語のひとさら（un piatto d'italiano）」（白水社）
〔成績評価〕
授業態度30％、授業への取組み30％、イタリア語の理解度（試験の成績や、授業中の受け答え等で総合的に判断）40％で100点換算。
Ｓ 総合点90点以上の者（他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者）
Ａ 総合点80点以上の者
Ｂ 総合点60点以上の者
Ｃ 総合点50点以上の者
Ｄ 総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS1120B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## イタリア語 II

教養
1 年生
1単位　後期
火曜 3限
実務経験なし
演習（理論）
選択必修
芸術科音楽専攻声楽専修必修

Marco Sbaragli

〔履修条件〕
声楽専修は必修。
「イタリア語Ｉ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
・文法： できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
・コミュニケーション内容： 簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。
〔授業の到達目標〕
イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身につける。
〔授業計画〕
第 1 回　時間、曜日の表現
第 2 回　動詞andareとvenire
第 3 回　動詞andareとvenireの前置詞の使い方
第 4 回　助動詞dovereを使った文章
第 5 回　助動詞potereを使った文章
第 6 回　助動詞volereを使った文章
第 7 回　その他の不規則動詞
第 8 回　動詞piacereの使い方
第 9 回　所有形容詞
第 10 回　現在形のまとめ①
第 11 回　現在形のまとめ②
第 12 回　近過去の仕組み①
第 13 回　近過去の仕組み②
第 14 回　近過去を使った文章の作り方
第 15 回　１年間の総復習
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中に気付いた点をアドバイスする。
疑問点に答える。
〔授業時間外の学習〕
授業時に適宜指示する。予習・復習をしっかり行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「デイリー日伊英・伊日英辞典」（三省堂）
遠藤礼子「イタリア語のひとさら（un piatto d'italiano）」（白水社）
〔成績評価〕
授業態度30％、授業への取組み30％、イタリア語の理解度（試験の成績や、授業中の受け答え等で総合的に判断）40％で100点換算。
Ｓ　総合点90点以上の者（他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者）
Ａ　総合点80点以上の者
Ｂ　総合点60点以上の者
Ｃ　総合点50点以上の者
Ｄ　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS2120B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## イタリア語III

教養
2年生
1単位　前期
火曜4限
実務経験なし
演習（理論）

Marco Sbaragli

〔履修条件〕
「イタリア語Ⅰ・Ⅱ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
・文法： できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
・コミュニケーション内容： 簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。
〔授業の到達目標〕
イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身につける。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、既習事項の確認
第 2 回　現在形を用いての基本的な作文＆会話練習①
第 3 回　現在形を用いての基本的な作文＆会話練習②
第 4 回　近過去形を用いての基本的な作文＆会話練習①
第 5 回　近過去形を用いての基本的な作文＆会話練習②
第 6 回　再帰動詞の用法（現在形）
第 7 回　再帰動詞の相互的用法（現在形）
第 8 回　再帰動詞（近過去形）
第 9 回　avereを用いた文章
第 10 回　esseを用いた文章
第 11 回　直接目的語代名詞の使い方
第 12 回　近過去の文章における直接目的語代名詞の使い方
第 13 回　半過去形の用法①
第 14 回　半過去形の用法②
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中に気付いた点をアドバイスする。
疑問点に答える。
〔授業時間外の学習〕
授業時に適宜指示する。予習・復習をしっかり行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「デイリー日伊英・伊日英辞典」（三省堂）
遠藤礼子「イタリア語のひとさら（un piatto d'italiano）」（白水社）
〔成績評価〕
授業態度30％、授業への取組み30％、イタリア語の理解度（試験の成績や、授業中の受け答え等で総合的に判断）40％で100点換算。
Ｓ 総合点90点以上の者（他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者）
Ａ 総合点80点以上の者
Ｂ 総合点60点以上の者
Ｃ 総合点50点以上の者
Ｄ 総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS3120B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## イタリア語IV

教養
2年生
1単位　後期
火曜4限
実務経験なし
演習（理論）

Marco Sbaragli

〔履修条件〕
「イタリア語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
・文法： できるだけダイレクトメソッドを用いて授業を進めながら、簡単なメッセージや依頼等の文章を作ったり、それに相当するレベルの会話が聞き取れるようにする。
・コミュニケーション内容： 簡単な自己紹介・短い会話・身の回りの物の描写等。
〔授業の到達目標〕
イタリア語の構成・文法・発音と書き方に触れ、イタリア語を話したり理解したりするための基礎を身につける。
〔授業計画〕
第 1 回　近過去形と半過去形を用いた基本的な作文＆会話練習①
第 2 回　近過去形と半過去形を用いた基本的な作文＆会話練習②
第 3 回　近過去形と半過去形を用いた基本的な作文＆会話練習③
第 4 回　現在→近過去→半過去　総復習
第 5 回　未来形の用法①
第 6 回　未来形の用法②
第 7 回　未来形と現在形を用いた基本的な作文＆会話練習
第 8 回　動詞piacere　他
第 9 回　直接目的語代名詞
第 10 回　間接目的語代名詞
第 11 回　間接目的語代名詞の用法①
第 12 回　間接目的語代名詞の用法②
第 13 回　間接目的語代名詞と直接目的語代名詞の複合形
第 14 回　総まとめ①
第 15 回　総まとめ②

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中に気付いた点をアドバイスする。
疑問点に答える。
〔授業時間外の学習〕
授業時に適宜指示する。予習・復習をしっかり行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「デイリー日伊英・伊日英辞典」（三省堂）
遠藤礼子「イタリア語のひとさら（un piatto d'italiano）」（白水社）
〔成績評価〕
授業態度30％、授業への取組み30％、イタリア語の理解度（試験の成績や、授業中の受け答え等で総合的に判断）40％で100点換算。
Ｓ 総合点90点以上の者（他の学生に抜きん出てイタリア語の習得度が高く、積極的に授業に参加した者）
Ａ 総合点80点以上の者
Ｂ 総合点60点以上の者
Ｃ 総合点50点以上の者
Ｄ 総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS4120B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## フランス語 I

教養
1 年生
1単位　前期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）

佐藤 ローラ

〔履修条件〕
特になし。全専攻学生が履修可。
〔授業の概要〕
ゼロから、ゆっくりと楽しみながらフランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。
〔授業の到達目標〕
「聞けて、読めて、書けて、話せて」の能力を身につけることを目的とする。
各レッスンでは、発音の練習、聞き取り書き取りの練習、自己表現の練習も行う。
様々なテーマを通じて、前に勉強したことを復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　Leçon 1a
挨拶をする。
自己紹介をする。
名前を聞く。
第 2 回　Leçon 1b
名前、職業、国籍を言う。
数字（1 ～ 10）
第 3 回　Leçon 2a
人について描写する。
住んでいる所を詳しく言う。
第 4 回　Leçon 2b
年齢を言う。
数字（11 ～ 20）
第 5 回　Leçon 3a
自分のことを話す。
他の人について話す。
職業を聞く。
第 6 回　Leçon 3b
否定する。
質問する。
数字（20 ～ 30）
第 7 回　Leçon 4a
自分の好みについて話す。
他の人の好みについて聞く。
第 8 回　Leçon 4b
意見を言う。
数字（30 ～ 69）
第 9 回　Leçon 5a
家族について話す。
理由を言う、尋ねる。
第 10 回　Leçon 5b
何かについて肯定的、否定的に話す。
第 11 回　Leçon 5c
数字（69 ～ 99）
第 12 回　Leçon 6a
物の位置を言う。（dans/ sur）
第 13 回　Leçon 6b
物の位置を聞く
第 14 回　Leçon 6c
質問に答える（単数形）
第 15 回　Évaluation
試験
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
適宜授業内でのコメントやレポート返却により、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
宿題・課題がある場合は、授業前にその準備を必ずすること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
Vincent Durrenberger「フランス語の方法　ーコミュニケーションと文法の基礎ー（改訂版）」（駿河台出版社）

〔成績評価〕
出席、実習への取り組みと受講態度50％、実技試験50％を100点に換算する。
Ｓ：総合点が90点以上の者
Ａ：総合点が80点以上の者
Ｂ：総合点が60点以上の者
Ｃ：総合点が50点以上の者
Ｄ：総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS1130B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## フランス語 II

教養
1 年生
1単位　後期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）

佐藤 ローラ

〔履修条件〕
「フランス語Ｉ」の単位を修得していること。
全専攻学生が履修可。
〔授業の概要〕
楽しみながら、フランス語の基本会話と日常会話での便利な表現を覚えていく。正しい発音の勉強もする。
〔授業の到達目標〕
「聞けて、読めて、書けて、話せて」の能力を身につけることを目的とする。
各レッスンでは、発音の練習、聞き取り書き取りの練習、自己表現の練習も行う。
様々なテーマを通じて、前に勉強したことを復習しながらもっと深く勉強することで、楽に知識を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　Leçon 1a
物を描写する
物の位置聞く、質問に答える（複数形）
第 2 回　Leçon 1b
物の色を聞く
第 3 回　Leçon 2a
物の位置関係を言う①
第 4 回　Leçon 2b
物の位置関係を言う②
第 5 回　Leçon 3a
カフェで注文する
第 6 回　Leçon 3b
市場、パン屋等で買い物をする
数字（100 ～ 1000）
第 7 回　Leçon 4a
食生活について話す
第 8 回　Leçon 4b
統計について話す
第 9 回　Leçon 5a
国について話す
第 10 回　Leçon 5b
天気を言う
第 11 回　Leçon 6a
誰が、どこへ、いつ、何故、どうやって行くか言う
第 12 回　Leçon 6b
数字（10万まで）
道を尋ねる
第 13 回　Leçon 7
時刻を言う
電車の切符を買う
第 14 回　Leçon 8
１日にしたことを話す
（現在形）何か提案する、誘いを受ける、断る
第 15 回　Évaluation
試験
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
適宜授業内でのコメントやレポート返却により、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
宿題･課題がある場合は、授業前にその準備を必ずすること。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
Vincent Durrenberger「フランス語の方法　ーコミュニケーションと文法の基礎ー（改訂版）」（駿河台出版社）
〔成績評価〕
出席、実習への取り組みと受講態度50％、実技試験50％を100点に換算する。
Ｓ：総合点が90点以上の者
Ａ：総合点が80点以上の者
Ｂ：総合点が60点以上の者
Ｃ：総合点が50点以上の者
Ｄ：総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
FLS2130B
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽基礎演習ーバロック・ダンス

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
水曜 3限 水曜 4限
実務経験あり
演習（技術）
必修

浜中 康子

〔履修条件〕
音 1 必修。
〔授業の概要〕
17世紀初めの頃から18世紀半ばにかけてフランス宮廷を中心に栄え、ヨーロッパ中に広まっていったダンスをバロック・ダンスと称する。
メヌエットやガヴォット等がその代表的なものであり、日頃演奏や鑑賞を通して関わっているこれらのバロック舞曲を、実際のダンス・ステップを通して体験する。バロック・ダンスのステップや踊り方は、現存する舞踏譜やダンス教本によって300年以上経た今、再現することができる。これらの読み方についても触れ、音楽とダンスの歴史的及び運動的関連性を明らかにする。
ダンスの実習と共に、器楽で舞曲を演奏し、実際にダンスの伴奏を試みたい。
〔授業の到達目標〕
様々な舞曲の中でブレ、メヌエット、カヴォットを発表できるように仕上げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　バロックダンスについての概説／テクニックの基礎（ポジション他）
※順序や内容は、履修者の能力や進度に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　歴史的背景／テクニックの基礎
第 3 回　ブレの基本的ステップ（音楽と動きのアクセントの関係）
第 4 回　ブレとメヌエットの基本ステップ①
舞踏譜の読み方
第 5 回　ブレとメヌエットの基本ステップ②
舞踏譜の読み方
第 6 回　ブレ①
舞踏譜に記述された振付を踊る
第 7 回　ブレ②
舞踏譜に記述された振付を踊る
第 8 回　発表／ブレのダンスと共に舞踏上の音楽を演奏する
第 9 回　メヌエット①
基本ステップの練習～舞踏の振付を踊る
第 10 回　メヌエット②
基本ステップの練習～舞踏の振付を踊る
第 11 回　メヌエット③
宮廷舞踏のマナーを踏まえて踊る（お辞儀／エスコートの方法）
第 12 回　メヌエットのまとめ①
ガヴォットのステップと練習
第 13 回　メヌエットのまとめ②
ガヴォットのステップを舞踏譜の振付で踊る
第 14 回　メヌエット、ガヴォットの仕上げ／サラバンドやジグについて
第 15 回　メヌエット、ガヴォットの発表／サラバンドやジグについて
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実技発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中は知的な理解に留まることも身体表現としてスムーズに行えるように、ステップ名と動きを結びつけながらリピート練習すること。
• 下記教科書「舞曲は踊る...」に記載されているQRコードを通して視聴できる動画を模範にして復習すること。
• 様々な作曲家・時代の舞曲を数多く演奏・鑑賞すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
書籍 ： 浜中康子「舞曲は踊る―バッハを弾くためのバロック・ダンス入門」（音楽之友社）
DVD ： 浜中康子監修「フランス宮廷の華『バロック・ダンスへの招待』Ⅰ・Ⅱ」（音楽之友社）
服装 ： 膝の曲げ伸ばしが行いやすいパンツまたはスカート（タイトスカート不可）、ダンスシューズ使用
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、実技発表30％、レポート20％を総合的に評価する
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1200M
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論基礎［楽典］

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
演習（理論）

塩﨑 美幸

〔履修条件〕
1年生前期に置かれる科目。
出された課題は着実に行うこと。
〔授業の概要〕
音楽を学ぶにあたり理解しておくべき「楽典」を初歩から講義する。
専門実技にはもちろん、和声・楽式・対位法・SHM他、音楽理論に関する科目等の習得に、必要不可欠な基礎となる科目である。
〔授業の到達目標〕
楽典の習得により、音程・音階・和音・調等を有機的に関連付けて理解し、楽曲をより深く読み込めるようになることを目標とする。
〔授業計画〕
第 1 回　本講座の概要説明、習得度確認テスト
第 2 回　音の不思議、楽譜の常識
第 3 回　音程とは
第 4 回　名曲における様々な音程の使われかた
第 5 回　到達度確認テスト、音階について
第 6 回　音階の続き、調号
第 7 回　調号の確認
第 8 回　到達度確認テスト、和音の種類、和音の位置について
第 9 回　調における和音の役割
第 10 回　Dominantの和音①属七の和音について
第 11 回　Dominantの和音②減七の和音について
第 12 回　終止形、借用和音について
第 13 回　調の判定
第 14 回　和声外音とは
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題終了後、その都度フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
与えられた課題の実践。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書：「楽典　理論と実習」（音楽之友社）
その他、適宜授業内で紹介する。
〔成績評価〕
レポート、小テスト等40％、期末試験成績50％、受講態度10％の配分で、
総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者(授業内容を十分に理解し課題への取り組みが的確かつ秀でた者)
A　総合点が80点以上の者(授業内容を十分に理解し課題への取り組みが的確だった者)
B　総合点が60点以上の者(授業内容の理解、課題への取り組みが良好だった者)
C　総合点が50点以上の者(授業内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者)
D　総合点が50点未満の者(授業内容を理解しなかった者、レポート等未提出、受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1110M
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声と分析］Ⅰ①②

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

関戸 正清、池田 哲美

〔履修条件〕
音 1（日本音楽専修以外）必修。
〔授業の概要〕
古典的な音楽作品における和声（ハーモニー）を読み解くための基礎知識を習得する。
授業内容は「分析」（主に読むこと）と「実施」（主に書くこと）の二つに分かれ、それぞれ異なる進度で交互に実習を進めていく。
「分析」では、各種の和音や連結用法など、分析に必要な知識を幅広く学び、それらを楽譜上で的確に認識できることを目指す。
「実施」では、課題の和声を自らの手で書き上げる経験を通じて、分析力の土台となる音楽書法の技術的詳細の一端に触れる。
なお、状況に応じて進度や項目を変更することがある。
〔授業の到達目標〕
基礎的な和声を分析・実施することができる。
〔授業計画〕
第1-2回
概説・予備知識、（実施）基本位置三和音の配置
第3-4回
（分析）三和音①、（実施）基本位置三和音の連結①
第5-6回
（分析）三和音②、（実施）基本位置三和音の連結②
第7-8回
（分析）属七和音①、（実施）和音設定の原理①

第9-10回
（分析）属七和音②、（実施）和音設定の原理②
第11-12回
（分析）属九和音①、（実施）各種の調①
第13-14回
（分析）属九和音②、（実施）各種の調②
第15回
総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題の分析・実施について確認・添削を授業内で行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる課題を読譜・演奏により確認すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：島岡譲／他『和声　理論と実習Ⅰ』（音楽之友社）
参考書：島岡譲『和声と楽式のアナリーゼ』（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業への取り組み・受講態度等40％、定期試験60％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

Ｓ 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
Ａ 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
Ｂ 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
Ｃ 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）
Ｄ 総合点が50点未満の者（受講態度等に問題があった者、授業内容を理解しなかった者、試験を受けなかった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［和声と分析］Ⅱ①②

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

関戸 正清、池田 哲美

〔履修条件〕
音１（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声と分析］Ⅰ」の単位を修得していること。

〔授業の概要〕
古典的な音楽作品における和声（ハーモニー）を読み解くための基礎知識を習得する。
授業内容は「分析」（主に読むこと）と「実施」（主に書くこと）の二つに分かれ、それぞれ異なる進度で交互に実習を進めていく。
「分析」では、各種の和音や連結用法など、分析に必要な知識を幅広く学び、それらを楽譜上で的確に認識できることを目指す。
「実施」では、課題の和声を自らの手で書き上げる経験を通じて、分析力の土台となる音楽書法の技術的詳細の一端に触れる。
なお、状況に応じて進度や項目を変更することがある。
〔授業の到達目標〕
基礎的な和声を分析・実施することができる。
〔授業計画〕
第1-2回
（分析）Ⅱ度七和音、（実施）三和音の第一転回形①
第3-4回
（分析）準固有和音、（実施）三和音の第一転回形②
第5-6回
（分析）重属和音①、（実施）三和音の第一転回形③
第7-8回
（分析）重属和音②、（実施）三和音の第一転回形④
第9-10回
（分析）S諸和音①、（実施）三和音の第二転回形①
第11-12回
（分析）S諸和音②、（実施）三和音の第二転回形②
第13-14回
（分析）確認等、（実施）確認等
第15 回
総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題の分析・実施について確認・添削を授業内で行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる課題を読譜・演奏により確認すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：島岡譲／他『和声　理論と実習Ⅰ』（音楽之友社）
参考書：島岡譲『和声と楽式のアナリーゼ』（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業への取り組み・受講態度等40％、定期試験60％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

Ｓ 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
Ａ 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
Ｂ 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
Ｃ 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）
Ｄ 総合点が50点未満の者（受講態度等に問題があった者、授業内容を理解しなかった者、試験を受けなかった者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声と分析］Ⅰ②

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

〔履修条件〕
音 1（日本音楽専修以外）必修。
和声法は、継続した学習の積み上げが大切とされるので、欠席・遅刻は厳禁とする。
〔授業の概要〕
音楽作品を理解する上で和声の知識は必須である。
論理的に楽曲を把握することは、演奏表現をする際に、より鮮明なイメージを作る手助けともなりえる。その論理的理解に必要な基礎知識のひとつとして、和声の学習が挙げられる。和声課題の実施と共に、具体的な作品の分析を行い、音楽における和声構造の仕組みを捉え、音楽のより深い理解を目指す。
なお、学習の進度については、理解度に応じて、若干の前後が生じる場合がある。
〔授業の到達目標〕
具体的な楽曲の音楽のより深い理解・把握と、課題実施による、基礎的な和声進行の定型の学習とその応用ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　和声学習に必要な予備知識の確認と、三和音の組み立て（密集と開離）①
第 2 回　和声学習に必要な予備知識の確認と、三和音の組み立て（密集と開離）②
第 3 回　音域と配置①
第 4 回　音域と配置②
第 5 回　調性①
第 6 回　調性②
第 7 回　基本形の実習①
第 8 回　基本形の実習②
第 9 回　基本形の実習③
第 10 回　基本形の実習と応用①
第 11 回　基本形の実習と応用②
第 12 回　基本形の実習と応用③
第 13 回　基本形　他の調での実習①
第 14 回　基本形　他の調での実習②
第 15 回　基本形　他の調での実習③
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
授業で学習したことの確認と課題の宿題。
これらの学修に60時間以上を要す。
〔教科書・参考書等〕
池内友次郎他「和声　理論と実習Ⅰ」（音楽之友社）
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、学期末課題60％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声と分析］Ⅱ②

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

〔履修条件〕
音 1（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声］Ⅰ」の単位を修得していること。
和声法は、継続した学習の積み上げが大切とされるので、欠席・遅刻は厳禁とする。
〔授業の概要〕
音楽作品を理解する上で和声の知識は必須である。
論理的に楽曲を把握することは、演奏表現をする際に、より鮮明なイメージを作る手助けともなりえる。その論理的理解に必要な基礎知識のひとつとして、和声の学習が挙げられる。和声課題の実施と共に、具体的な作品の分析を行い、音楽における和声構造の仕組みを捉え、音楽のより深い理解を目指す。

なお、学習の進度については、理解度に応じて、若干の前後が生じる場合がある。
〔授業の到達目標〕
具体的な楽曲の音楽のより深い理解・把握と、課題実施による、基礎的な和声進行の定型の学習とその応用ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　基本形の復習①
第 2 回　基本形の復習②
第 3 回　第一転回形の配置①
第 4 回　第一転回形の配置②
第 5 回　第一転回形の配置③
第 6 回　第一転回形の課題の実習①
第 7 回　第一転回形の課題の実習②
第 8 回　第一転回形の課題の実習③
第 9 回　第一転回形の課題の実習④
第 10 回　第二転回形の配置①
第 11 回　第二転回形の配置②
第 12 回　第二転回形の配置③
第 13 回　楽曲の和声分析と実施①
第 14 回　楽曲の和声分析と実施②
第 15 回　年度末のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
授業で学習したことの確認と課題の宿題。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
池内友次郎他「和声　理論と実習Ⅰ」（音楽之友社）
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、学期末課題60％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 音楽史概説Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
金曜 4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

成田 麗奈

〔履修条件〕
音 1（日本音楽専修以外）必修。
〔授業の概要〕
西洋芸術音楽の歴史について学びます。音楽史を学ぶことで、普段学んでいる音楽作品のとらえ方や歴史的な位置づけを理解することを目指 します。
履修者の理解度や授業の進捗状況により、各回の講義内容は変更する場合があります。
〔授業の到達目標〕
（1）西洋芸術音楽の歴史について説明することができる
（2）西洋芸術音楽の音楽作品の特徴について説明することができる
（3）西洋芸術音楽の社会的背景について説明することができる
（4）（1）～（3）をふまえて論点を一つに定め、参考文献を適切に関連づけて論じることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
「音楽史」とは何か、時代区分の概要、西洋音楽史を学ぶことの意味
第 2 回　古代の音楽
「音楽史のはじまり」としての古代ギリシア
第 3 回　中世の音楽①
中世の音楽思想・音楽理論、グレゴリオ聖歌の成立と展開
第 4 回　中世の音楽②
単旋律世俗歌曲、器楽のための楽曲、多声音楽黎明と展開
第 5 回　中世の音楽③
記譜法の展開、14世紀フランスの音楽
第 6 回　ルネサンスの音楽①
ブルゴーニュ楽派、フランドル楽派を中心に
第 7 回　ルネサンスの音楽②
器楽の発展、記譜法の発展、印刷技術の開発
第 8 回　ルネサンスの音楽③
宗教改革と対抗宗教改革
第 9 回　バロックの音楽①
オペラの誕生、イタリア・オペラの発展
第 10 回　バロックの音楽②
フランス、ドイツ、イギリスにおけるオペラの展開
第 11 回　バロックの音楽③

オラトリオ、アンセム、カンタータ
第 12 回　バロックの音楽④
ソナタとコンチェルト、鍵盤音楽
第 13 回　18世紀の器楽①
バロック末期から「前古典派」を中心に
第 14 回　18世紀の器楽②
F.J.ハイドン、W.A.モーツァルトの交響曲を中心に
第 15 回　総括と議論
講義全体の振り返りと議論

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回のコメント課題に関しては、次回以降の講義において、回答の一部を取り上げて全体向けのフィードバックを行います（取り上げられる回答の顕名・匿名・ペンネーム・掲載を希望しない等選択可）。
小レポート課題は個別フィードバック予定。
課題の管理はGoogle Classroomを利用しますので、基本的な操作方法は確認しておいてください。

〔授業時間外の学習〕
・音楽鑑賞の授業ではないため、授業内では作品の一部しか視聴できません。予習・復習として、授業外の時間に視聴覚資料を参照してください
・期末レポート作成に備えて、各回に紹介した参考文献は積極的に参照してください。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時参考資料をGoogle Driveにアップロードする。
授業の配布資料に参考文献一覧を掲載する。期末レポート執筆にあたっては、図書・論文は必ず複数参照してよく読み込むこと。

〔成績評価〕
評価は平常点（50%）、期末レポート（50%）による。
90点以上かつ上位10%の者をS評価
80点以上をA評価、60点以上をB評価
50点以上をC評価
50点未満はD評価
とする。
ただし、出席率が３分の２に満たない場合、成績評価の対象としない。

〔科目ナンバリング〕
MUS1020M

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## 音楽史概説 II

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
金曜 4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

成田 麗奈

〔履修条件〕
音 1（日本音楽専修以外）必修。
「音楽史概説 I 」の単位を修得していること。

〔授業の概要〕
西洋芸術音楽の歴史について学びます。音楽史を学ぶことで、普段学んでいる音楽作品のとらえ方や歴史的な位置づけを理解することを目指 します。
履修者の理解度や授業の進捗状況により、各回の講義内容は変更する場合があります。

〔授業の到達目標〕
（1）西洋芸術音楽の歴史について説明することができる
（2）西洋芸術音楽の音楽作品の特徴について説明することができる
（3）西洋芸術音楽の社会的背景について説明することができる
（4）（1）～（3）をふまえて論点を一つに定め、参考文献を適切に関連づけて論じることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　18世紀のオペラ
オペラ・セリアおよび諸ジャンルの傾向
第 2 回　19世紀の器楽①
交響曲と協奏曲とコンサート文化
第 3 回　19世紀の器楽②
ベートーヴェンの交響曲
第 4 回　19世紀の器楽③
ベートーヴェン以降の交響曲
第 5 回　19世紀の器楽④・声楽
室内楽、独奏曲、芸術家曲
第 6 回　19世紀のオペラ①
イタリアとフランスのオペラ
第 7 回　19世紀のオペラ②
ドイツのオペラ、他の西欧諸国におけるオペラ
第 8 回　19世紀末～20世紀の音楽①
ナショナリズムと音楽
第 9 回　19世紀末～20世紀の音楽②
新たな音楽システムの探究
第 10 回　19世紀末～20世紀の音楽③
日本における西洋芸術音楽
第 11 回　20世紀～21世紀の音楽①
「前衛音楽」を中心に
第 12 回　20世紀～21世紀の音楽②
「オペラ」のさまざまなかたち

第 13 回　「西洋芸術音楽史」外伝①
　　ジャズ、吹奏楽・ブラスバンド
第 14 回　「西洋芸術音楽史」外伝②
　　ミュージカル
第 15 回　総括と議論
　　講義全体の振り返りと議論

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回のコメント課題に関しては、次回以降の講義において、回答の一部を取り上げて全体向けのフィードバックを行います（取り上げられる回答の顕名・匿名・ペンネーム・掲載を希望しない等選択可）。
小レポート課題は個別フィードバック予定。
課題の管理はGoogle Classroomを利用しますので、基本的な操作方法は確認しておいてください。

〔授業時間外の学習〕
・音楽鑑賞の授業ではないため、授業内では作品の一部しか視聴できません。予習・復習として、授業外の時間に視聴覚資料を参照してください
・期末レポート作成に備えて、各回に紹介した参考文献は積極的に参照してください。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時参考資料をGoogle Driveにアップロードする。
授業の配布資料に参考文献一覧を掲載する。期末レポート執筆にあたっては、図書・論文は必ず複数参照してよく読み込むこと。

〔成績評価〕
評価は平常点（50%）、期末レポート（50%）による。
90点以上かつ上位10%の者をS評価
80点以上をA評価、60点以上をB評価
50点以上をC評価
50点未満はD評価
とする。
ただし、出席率が３分の２に満たない場合、成績評価の対象としない。

〔科目ナンバリング〕
MUS1020M

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽理論ＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
月曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

森重 行敏

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
他専攻の学生も歓迎する。ただし、日本音楽について関心を持つ者とする。
授業への取り組みを重視する。

〔授業の概要〕
日本音楽では伝統的に、理論より実践が重視されてきたため、理論的用語や概念が統一されておらず、流派や研究者においてもまちまちであることが多い。
この授業は音楽にとって理論とは何かと言う根本的な観点に立ち返って、日本音楽の様々な側面を観察すると共に、洋楽やアジア諸民族の音楽とも比較しながら、その理論的基礎を見つけ出していくこととしたい。

〔授業の到達目標〕
日本の楽器や音楽についての基礎知識を身につけると共に、その音楽的特性、理論的構造等を指摘できる。

〔授業計画〕
第 1 回　この授業の目的と注意事項
　　日本の伝統音楽では楽器ごとに異なる楽譜を使っている。それらの仕組みと五線譜との関係、それぞれの長所と短所を考察する。
第 2 回　日本音楽の概観
　　日本音楽は時代ごとにかなり性格が違うため、それぞれの特徴を概観する。
第 3 回　日本の楽器と楽譜①
　　音高譜と奏法譜の違い、使い分けの意義を考察する。
第 4 回　日本の楽器と楽譜②
　　箏の縦書き譜の仕組みと利点、欠点を考察する。
第 5 回　日本の楽器と楽譜③
　　箏の横書き譜の仕組みを考察する。
第 6 回　日本の楽器と楽譜④
　　三味線の数字譜について幾つかの種類があることを比較する。
第 7 回　日本の楽器と楽譜⑤
　　三味線の奏法譜についていくつかの種類があることを比較対照する。
第 8 回　日本の楽器と楽譜⑥
　　尺八の記譜法について考察する。
第 9 回　日本の楽器と楽譜⑦
　　様々な笛の特徴と記譜法について考察する。
第 10 回　日本の楽器と楽譜⑧

笙、篳篥による雅楽の管楽器の特徴と記譜法を学ぶ。
第 11 回　日本の楽器と楽譜⑨
雅楽の弦楽器、打楽器の特徴と記譜法を学ぶ。
第 12 回　日本の楽器と楽譜⑩
琵琶のいろいろについて、その特徴と記譜法を学ぶ。
第 13 回　日本の楽器と楽譜⑪
様々な日本の打楽器について、その特徴と記譜法を学ぶ。
第 14 回　日本の楽器と楽譜⑫
新しく考案された楽器その他について、特徴と記譜法を学ぶ。
第 15 回　前期まとめ
日本の記譜法を概観した結果として、五線譜との対比、それぞれの特徴を振り返る。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー提出後、次回に回答する。

〔授業時間外の学習〕
積極的に伝統芸能の鑑賞をすることを奨める。詳細については随時紹介する。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必要なプリントは随時配布する。
参考書としては月渓恒子著「日本音楽との出会い」（東京堂出版）等。

〔成績評価〕
授業への取組み・態度50%、課題50%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
MUS1011M/MUS3014M

〔学位授与方針との関係〕
①、③

〔他専攻〕
○
※ただし、ＢⅠは芸術科２年生以上のみ履修可。

〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽理論ＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

森重 行敏

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
「日本音楽理論ＡⅠ」または「日本音楽理論ＢⅠ」の単位を修得していること。
他専攻の学生も歓迎する。ただし、日本音楽について関心を持つ者とする。
授業への取り組みを重視する。

〔授業の概要〕
日本音楽では伝統的に、理論より実践が重視されてきたため、理論的用語や概念が統一されておらず、流派や研究者においてもまちまちであることが多い。
この授業は音楽にとって理論とは何かと言う根本的な観点に立ち返って、日本音楽の様々な側面を観察すると共に、洋楽やアジア諸民族の音楽とも比較しながら、その理論的基礎を見つけ出していくこととしたい。

〔授業の到達目標〕
日本の楽器や音楽についての基礎知識を身につけると共に、その音楽的特性、理論的構造等を指摘できる。

〔授業計画〕
第 1 回　日本の音律①
三分損益による古代中国の音律と、ピタゴラス音階との関係を考察する。
第 2 回　日本の音律②
自然倍音列の確認と、純正律の関係を考察する。
第 3 回　日本の音律③
平均律とは何か、日本の楽器との融和性、問題点を考察する。
第 4 回　移動ドと固定ド①
洋楽におけるソルフェージュの意義と移動ド、固定ドの比較対照や、長所短所を考察する。
第 5 回　移動ドと固定ド②
日本音楽のソルフェージュの問題点と必要性を考察する。
第 6 回　日本のリズム①
拍と拍子とは何か、日本音楽のリズム構造を考察する。
第 7 回　日本のリズム②
間とずれなど、日本音楽における独自の美意識を考察する。
第 8 回　日本のリズム③
追分節や尺八本曲に代表される自由リズムについて考察する。

第 9 回　日本音楽の構造①
日本の古典芸能に見られる序破急の原理を考察する。
第 10 回　日本音楽の構造②
雅楽の構造を知ることにより、古代音楽の合理性と日本的な変化について考察する。
第 11 回　日本音楽の構造③
語り物音楽の構造を考察する。
第 12 回　日本音楽の構造④
箏曲段物の歴史と構造を知ることにより、器楽曲としての箏曲の楽しみ方を学ぶ。
第 13 回　世界の中の日本音楽①
東アジア諸民族の音楽と日本音楽の関連を学ぶ。
第 14 回　世界の中の日本音楽②
東南アジア諸民族の音楽と日本音楽の関連を学ぶ。
第 15 回　後期まとめ
日本音楽の構造や近隣諸民族の音楽との対比を通じて、伝統音楽の将来性や問題点について考察する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー提出後、次回に回答を行う。
〔授業時間外の学習〕
積極的に伝統芸能の鑑賞をすることを奨める。詳細については随時紹介する。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要なプリントは随時配布する。
参考書としては月渓恒子著「日本音楽との出会い」（東京堂出版）等。
〔成績評価〕
授業への取組み・態度50%、課題50%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2011M/MUS4013M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※ただし、ＢⅡは芸術科２年生以上のみ履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽史概説Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
月曜 3限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

野川 美穂子

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
縄文・弥生時代から現在に至るまで、日本人はさまざまな音楽に親しんできた。しかし、現在の生活では、日本の伝統的な音楽を聴く機会が少なくなっている。
この授業では、日本音楽の変遷を辿りながら、楽器や音楽様式の特徴、文学・演劇・舞踊との関連等について概説する。知識としてではなく音としての理解を深めるために、毎回、視聴覚教材を活用する。
〔授業の到達目標〕
時代や種目による違いを辿りながら、日本音楽の魅力を感じることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　日本音楽の枠組みと特徴
時代区分、日本の音楽と楽器の特徴、楽器分類
第 2 回　日本古来の音楽①
縄文・弥生時代の出土楽器
第 3 回　日本古来の音楽②
古墳時代の出土楽器、正倉院の楽器
第 4 回　雅楽の歴史と音楽①
雅楽器の種類、舞楽
第 5 回　雅楽の歴史と音楽②
管弦《越天楽》とその影響
第 6 回　雅楽の歴史と音楽③
国風歌舞と平安時代の歌曲
第 7 回　声明の歴史と音楽①
声の技法、鳴物
第 8 回　声明の歴史と音楽②
法要のさまざま
第 9 回　琵琶楽の歴史と音楽①
琵琶の種類、平家
第 10 回　琵琶楽の歴史と音楽②
盲僧琵琶、近代琵琶
第 11 回　能楽の歴史と音楽①
能舞台と音楽
第 12 回　能楽の歴史と音楽②
能の作品の種類
第 13 回　能楽の歴史と音楽③
能の名作
第 14 回　能楽の歴史と音楽④
式三番、狂言

第 15 回　古代、中世の日本音楽のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー等に対するフィードバックを授業時に行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業で取り上げた種目の特徴を図書館の文献やインターネット等も参照して整理する。
• 授業時に視聴した作品の特徴を整理し、感想をまとめる。
これらの学習に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にプリントを配布する。
参考書については、その都度指示する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、前期末の筆記試験の成績50％の配分で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS1021M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽史概説 II

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
月曜 3限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

野川 美穂子

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
「日本音楽史概説Ⅰ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
縄文・弥生時代から現在に至るまで、日本人はさまざまな音楽に親しんできた。しかし、現在の生活では、日本の伝統的な音楽を聴く機会が少なくなっている。
この授業では、日本音楽の変遷を辿りながら、楽器や音楽様式の特徴、文学・演劇・舞踊との関連等について概説する。知識としてではなく音としての理解を深めるために、毎回、視聴覚教材を活用する。
〔授業の到達目標〕
時代や種目による違いを辿りながら、日本音楽の魅力を感じることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　三味線の伝来、三曲の楽器
第 2 回　地歌の歴史と音楽
第 3 回　箏曲の歴史と音楽
第 4 回　尺八楽、胡弓楽の歴史と音楽
第 5 回　文楽の歴史と音楽①
　　三業一体について
第 6 回　文楽の歴史と音楽②
　　文楽の名作
第 7 回　歌舞伎の歴史と音楽①
　　歌舞伎の歴史と特徴
第 8 回　歌舞伎の歴史と音楽②
　　歌舞伎の名作
第 9 回　長唄の歴史と音楽①
　　長唄の特徴
第 10 回　長唄の歴史と音楽②
　　長唄の多様化
第 11 回　豊後系浄瑠璃の歴史と音楽
第 12 回　近代の日本音楽①
　　明治時代の日本音楽
第 13 回　近代の日本音楽②
　　大正時代・昭和前期の日本音楽
第 14 回　現代の日本音楽
　　戦後の日本音楽
第 15 回　近世、近代、現代の日本音楽のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー等に対するフィードバックを授業時に行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業で取り上げた種目の特徴を図書館の文献やインターネット等も参照して整理する。
• 授業時に視聴した作品の特徴を整理し、感想をまとめる。
これらの学習に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にプリントを配布する。
参考書については、その都度指示する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、後期末の筆記試験の成績50％の配分で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2021M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽特講

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
講義
必修
教職課程受講者（日本音楽専修以外）必修

杵屋 巳織

〔履修条件〕
基本的には教職受講者対象。
次に音楽専攻対象。専攻科演劇専攻の履修も認める。
〔授業の概要〕
日本音楽が学校教育に取り入れられるようになり、学校教育の現場に立つ教員にとっても、日本音楽に対する知識や経験が必要となってきた。具体的に教育者としての立場になった時に使える知識と三味線を弾く技術を学び、三味線を弾くことにより日本音楽の音としての個性を知り、日本人として音の美しさも感じていく。日本音楽の年月を重ねた深さについても考えていく。
〔授業の到達目標〕
• カリキュラムマップに対応し音楽的教養を広げる。
• 三味線を中心に日本の楽器についての正しい知識を持つことができる。
• 西洋音楽とは違った音階を用いている日本の音を知ることができる。
• 三味線について正しい扱い方・正しい姿勢を習得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　日本音楽の簡単な説明と話。三味線の部位の名称を学ぶ。楽器に触 る。
第 2 回　三味線の扱い方。構え方。音の出し方。
第 3 回　長唄の説明。譜面の説明。
第 4 回　譜面を読みつつ三味線を弾く。
第 5 回　楽器の特性を理解しつつ弾く。その折に合わせた日本音楽の説明。
第 6 回　長唄①
松の緑の前弾を弾いてみる。
第 7 回　長唄②
松の緑の前弾を指の使い方を考えながら弾いてみる。
第 8 回　舞台における演奏の説明、楽器の演奏。
第 9 回　唄の簡単な説明と発声。楽器の演奏。
第 10 回　長唄を唄ってみる。
第 11 回　合奏の準備
第 12 回　合奏のコツと実践
第 13 回　合奏の試演
第 14 回　合奏
第 15 回　課題発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に振り返りとして総評を行う。
楽器の扱い方について毎回気づいたところを細かく説明・指導する。
〔授業時間外の学習〕
歌舞伎の鑑賞。邦楽器を使用した演奏会の鑑賞。
〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず授業時にプリント配布。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度50％、レポート20％、試験30％を総合的に判断して行う。
S 総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、取り組みが的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（講義内容の理解・取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（講義内容の理解・取り組みが不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、試験未受験者、授業への取り組み、受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2001M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
△
※専攻科演劇専攻のみ履修可。
〔キャップ対象外〕
—

## 演奏会制作法

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期
水曜 2限
実務経験あり
演習（理論）

花田 和加子

〔履修条件〕
1 年生後期の選択科目。
演奏会等の企画・制作に興味があり、自らの音楽活動に役立てたい学生。
〔授業の概要〕
文化ホール等で行う演奏会は、企画から実施まで細やかな行程のもとに実施されている。
本授業では、演奏会実施の目的や意図を明確にした上で、企画から予算作成、公演実施に至るまでの基礎知識を学び、各々が企画書・予算書を作成し、発表・考察を行う。

〔授業の到達目標〕
演奏会を企画・実施するまでの内容や行程を理解し、演奏会の企画ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　授業内容・目的の説明、目標設定
第 2 回　演奏会の必要性について
　　演奏会とは何か？なぜ演奏会は必要なのかをグループ・ディスカッションを交えて考える
第 3 回　企画書について
　　演奏会を実施するためにまず必要となる企画書の書き方について学ぶ
第 4 回　予算書について
　　演奏会を実施するために必要となる予算の組み方と予算書の書き方について学ぶ
第 5 回　著作権使用料について
　　著作権使用料とは何か？そして、その申請方法について学ぶ
第 6 回　助成金・クラウドファンディングについて
　　演奏会を実施するにあたり必要となり得る助成金やクラウドファンディングの仕組みと申請方法について学ぶ
第 7 回　広報について
　　演奏会を実施するにあたり必要な広報の目的と手段を学ぶ
第 8 回　制作スケジュールについて
　　企画から公演実施まで、全体の制作スケジュールについて考える
第 9 回　公演進行表・舞台図面の作成について
　　公演当日に必要となる進行表や舞台図面の作成目的と作成方法を学ぶ
第 10 回　ホールの選び方について
　　企画に相応しいホールの選び方、ホールの設備について学ぶ
第 11 回　企画書・予算書の作成①
　　これまで学んだことを基に、自分で実施してみたい公演の企画書と予算書を作成。
第 12 回　企画書・予算書の予備発表と考察
　　作成した企画書・予算書を発表。グループ・ディスカッションで改善点を見付ける
第 13 回　企画書・予算書の作成②
　　予備発表で出た改善点を基に企画書・予算書を完成させる
第 14 回　企画書・予算書の発表
　　完成させた企画書・予算書の発表を行い、発表された企画についてディスカッションを行う
第 15 回　授業の振り返り・まとめ
　　授業内容を振り返り、改めて「演奏会とは何か？」、「なぜ演奏会は必要なのか？」を考える
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
企画書・予算書の提出後、講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
• 身近にどのようなホールがあり、それぞれどのような特徴・違いがあるか調査すること。
• 公演チラシを収集し、デザインや掲載内容から公演の趣旨がどの程度伝わってくるかを調整すること。
• 自身が出演する、もしくは聴きに行く公演について、その公演の開催目的は何か、聴衆の層や反応はどうかを調査すること。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料を授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価について、授業への取り組み姿勢50％、企画書等の提出物50％で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容をある程度理解し、課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解せず、課題への取り組みが不十分、企画書未提出の者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2100M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## アウトリーチ概説

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 1限
実務経験なし
講義

永井 由比

〔履修条件〕
1 年生前期におかれる選択科目。
音楽アウトリーチに関心のある学生。
〔授業の概要〕
アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉等の分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービス等の意味で多用される。音楽でのアウトリーチというものは、演奏家が学校や施設等に出向いて、普段の生活空間（教室や音楽室）で演奏会やワークショップを行うことである。
ここでは、その音楽におけるアウトリーチ活動について、学んだ音楽の知識、技術をどのよ
うに社会に還元していくか、また、聴衆と演奏を通して感動を共有できる舞台（プログラム）や手法を模索していく。

〔授業の到達目標〕
以下の３点をこの授業の到達目標とする。
• 学年や対象に適したプログラム作りができる。
• 公演で何を伝えたいか、また何を伝えるべきかを考え、それを活かした企画を作ることができる。
• 聴くプログラムだけではなく、参加型のアクティビティを作ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチとは
第 2 回　公共ホールや自治体によるアウトリーチの評価と課題
第 3 回　施設や場所によるそれぞれのアウトリーチの手法
第 4 回　楽器紹介について①
　　それぞれの楽器の分類
第 5 回　楽器紹介について②
　　楽器の仕組み、歴史を知る
第 6 回　楽器紹介　発表
第 7 回　学校訪問アウトリーチについて①
　　小学校
第 8 回　学校訪問アウトリーチについて②
　　特別支援学校
第 9 回　学校訪問アウトリーチについて③
　　学童
第 10 回　養護施設におけるアウトリーチについて
第 11 回　福祉施設におけるアウトリーチについて
第 12 回　アウトリーチの社会的要請、意義について
第 13 回　アウトリーチにおけるワークショップの手法①
第 14 回　アウトリーチにおけるワークショップの手法②
第 15 回　総括・振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• プログラミングするにあたり、色々と曲を調べておくこと。
• 専修楽器について歴史・構造等を勉強しておくこと。
• 復習・予習をして授業に臨むこと。
これらの学修に60時間を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、レポート20%、課題発表30%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1000M
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## アウトリーチ演習

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
演習（技術）

永井 由比

〔履修条件〕
１年後期におかれる選択科目。
音楽アウトリーチ活動に関心のある学生。
前期の「アウトリーチ概説」を履修していることが望ましい。
〔授業の概要〕
現在、自治体や各文化会館での自主事業において、学校や施設に演奏家を派遣するアウトリーチ事業が盛んに行われている。普段の生活（勉強）の場で、少人数で行われるこのコンサートは、演奏者と聴衆の垣根のないバリアフリーなコンサートとして大変喜ばれる。
この講座では、前期に学んだアウトリーチの手法を生かして実際にプログラミングをし、演奏発表する。
〔授業の到達目標〕
以下の３点をこの授業の到達目標とする。
• 聴衆と感動が共有できるコンサート作りができる。
• １時間のコンサートで何を伝えたいか、また何を伝えるべきか考えることができる。
• 聴き手に伝わる演奏、表現技術の習得。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチ概説
第 2 回　企画作り①
　　コンサート
第 3 回　企画作り②
　　ワークショップ
第 4 回　プログラム構成について
第 5 回　プログラム制作
第 6 回　楽器演奏体験について
第 7 回　楽器体験ワークショップ
第 8 回　楽器体験ワークショップ（実践）
第 9 回　演奏発表①
第 10 回　演奏発表②
第 11 回　演奏発表③
第 12 回　演奏発表④

第 13 回　演奏発表⑤
第 14 回　演奏発表⑥
第 15 回　総括・振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
演奏発表に向けて、個々またはグループで練習をしっかりとしてくること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、演習発表50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2200M
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音響学

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期集中
実務経験なし
講義

中原 楽

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
まずは皆さんが無意識で聴いている「音」に意識を持つことから。「音」が自分や人、作品や空間に与える影響を一緒に考察していく。
〔授業の到達目標〕
今後、コンサートや舞台等に関わりを持つ場面で、どのように「音」と向き合うのか、その感覚をつかむ。
〔授業計画〕
第 1 回 「音」を意識して聴く①
第 2 回 「音」を意識して聴く②
第 3 回　自分にとっての「良い音」「悪い音」
第 4 回　頭の中に描く「音」を共有する。音の言語化。
第 5 回　スピーカーや機材の種類を知る
第 6 回　空間と音の関係性を探る実習
第 7 回　空間と音の関係性を探る実習
第 8 回　具体的な音響空間を思い描く実習
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習中やレポート発表時に、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 自分が好きだと思う、または好きだと思ったことのある「音」を探し、それはなぜなのかを考えておくこと。
• 自分が嫌いだと思う、または嫌いだと思ったことのある「音」を探し、それはなぜなのかを考えておくこと。
• 復習・予習をして、授業に臨むこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、実習への取り組み30％、課題またはレポート30％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・授業態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2002M
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## ディクション（イタリア語）

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
声楽専修必修

井上 由紀

〔履修条件〕
音 1 前期におかれる声楽科生の必修科目。（他専修の履修も可）
〔授業の概要〕
　－言葉と音楽の密接な関係－
歌を学ぶ者にとって、この研究は大変重要なことである。ただ、難しく考えるのはよそう。まずは、明るく美しいイタリア語に親しみ、詩を読み表現する。そして楽譜を眺めてみる。そうすると、色々なことが発見できる。その発見をもとに皆さんと歌唱表現がさらに豊かになることを願いつつ、イタリア歌曲を中心としたディクションの学習を行う。声楽専修の方々だけでなく、楽器や伴奏の勉強をしている方も一緒に学ばれることを期待する。
〔授業の到達目標〕
作品にふさわしいイタリア語の歌詞の朗読ができ、実際に音楽の中でそれを理解し表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　イタリア語の音に慣れ、親しむ
　※講義内容に関しては、受講生の理解度を見て、計画が前後することがある。
　※取り上げる曲については、受講生の声種を考慮し、その都度選ぶ（イタリア古典歌曲が中心）。
第 2 回　正しく明確な発音をする
第 3 回　単語の意味を考え表現する
第 4 回　繰り返しの表現を学ぶ
第 5 回　音節の数、押韻を考える
第 6 回　強調すべき音節、単語を考え表現する
第 7 回　表現の速さや間を考える
第 8 回　レチタティーヴォの学習①
第 9 回　レチタティーヴォの学習②
第 10 回　レチタティーヴォの発表
第 11 回　歌詞と音のつながりを考える
第 12 回　伴奏者とのコミュニケーションをはかる①
第 13 回　伴奏者とのコミュニケーションをはかる②
第 14 回　鑑賞
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学期末試験で発表を行った後に、個別に講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に配布される楽譜・詩によく目を通し、どのような内容の曲なのかを考えること。また、授業で学習したことの復習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にその都度指示、プリントを配布する。
〔成績評価〕
授業に取り組む姿勢30％、中間発表20％、学期末朗読試験50％にて総合的に評価する。
S　総合評価90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、優れた発表ができる）
A　総合評価80点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、発表ができる）
B　総合評価60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、発表ができる）
C　総合評価50点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、適切な表現ができない）
D　総合評価50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、適切な表現ができない）
〔科目ナンバリング〕
MUS1201M
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## S．H．M．Ⅰ・Ⅱ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期・後期
木曜 1限
実務経験なし
演習（理論）
必修

塩﨑 美幸、三瀬 俊吾、加藤 千春

〔履修条件〕
音 1 必修。
各自、能力を向上させる努力を、常に実践すること。
〔授業の概要〕
S.H.M.はSolfège、Harmony、Melody の頭文字をとったもの。音楽に携わる者にとって重要な基礎力となる。学ぶ内容は多彩。弛まぬ訓練を必要とするが、大切なのは遊びの要素も内包するので楽しんで練習すること。身につけたソルフェージュ力は、必ずや音楽活動に大きく役立つこと必定。
レベル別３クラスに分けて授業を行う。
〔授業の到達目標〕
音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につけることができる。
〔授業計画〕
初回授業日にてクラス分け試験を行う。
授業は、クラスごとに、学生それぞれの能力・状況に対応した内容および進度をとる。
通年の授業計画については、漠然とした内容を記すが、前

述のとおり各クラスで異なる。
• 正しい楽譜の書き方
• リズム（音価）の正しい理解
• 多様な拍子の理解
• 正しい音程を身につける
• 初見視唱の練習
• 音楽的なフレーズを身につける
• 長調と短調の理解
• メロディーの書き取り
• 二声、三声等同時に鳴る音の認識
• 和音の種類の聴き分け
• 四声体の書き取り、その重唱
• 多様な調への挑戦
• 旋法や様々な音階による音楽に触れる
• 移調奏

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる課題の添削を行い、今後の学習の目安とする。

〔授業時間外の学習〕
各々苦手とする分野を積極的に自習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
クラスの担当教員から指示される場合もある。

〔成績評価〕
授業への取り組み40％、学期末課題60％の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取組が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取組が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業態度や課題への取組に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS1130M/MUS2130M

〔学位授与方針との関係〕
①、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 合唱Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
木曜 4限
実務経験なし
演習（技術）
必修
女子必修（日本音楽専修以外）

福永 一博

〔履修条件〕
本授業は女子の必修科目（日本音楽専修除く）である。
音楽大学で、なぜ合唱が必修であるかを考え、熱意・意欲を持って受講すること。

〔授業の概要〕
この授業では、合唱の「基本」を学ぶ。
合唱とは、声楽の技術に立脚した芸術であるので、楽器となる身体の使い方を知ることから始め、呼吸・発声の基礎的な訓練を行う。また、合唱とはアンサンブルの芸術でもあるので、「声を磨く」ことと同じかそれ以上に「耳を育てる」ことが大切である。ハーモニーやアンサンブルを磨くための基礎的な訓練も行っていく。
課題は簡易な曲から始め、アカペラの作品・ピアノ付きの作品・外国語の作品等も扱う。

〔授業の到達目標〕
• 声楽の基礎（呼吸法・発声法）を身につけることができる。
• ハーモニーとアンサンブルの基本を身につけることができる。
• 耳を開いて、心を開いて、良く聴きながら自発的に歌うことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス、パート分け
以下第２～15回はウォームアップエクササイズ・ブレストレーニング・発声練習・ハーモニーとアンサンブルトレーニング等を通じて合唱の基本を身につけながら、簡易な作品を用いて演習を行う。
第 2 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（アカペラ）を用いた演習
第 3 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（アカペラ）を用いた演習
第 4 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（アカペラ）を用いた演習
第 5 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（アカペラ）を用いた演習
第 6 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 7 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習

第 8 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 9 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 10 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 11 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 12 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 13 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 14 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習
第 15 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、日本の合唱曲（ピアノ付き）、外国語の合唱曲を用いた演習

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏の後に指導を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で配られた曲を事前に譜読みしておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
その都度指示する。
〔成績評価〕
成績評価は、授業への取り組み40％、受講態度30％、発表30％を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組みに問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1240M
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 合唱 II

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期
木曜 4限
実務経験なし
演習（技術）
必修
女子必修（日本音楽専修以外）

福永 一博

〔履修条件〕
本授業は女子の必修科目（日本音楽専修除く）である。
「合唱Ｉ」の単位を修得していること。
音楽大学で、なぜ合唱が必修であるかを考え、熱意・意欲を持って受講すること。
〔授業の概要〕
この授業では、合唱の「基本」を学ぶ。
合唱とは、声楽の技術に立脚した芸術であるので、楽器となる身体の使い方を知ることから始め、呼吸・発声の基礎的な訓練を行う。また、合唱とはアンサンブルの芸術でもあるので、「声を磨く」ことと同じかそれ以上に「耳を育てる」ことが大切である。ハーモニーやアンサンブルを磨くための基礎的な訓練も行っていく。
課題は簡易な曲から始め、アカペラの作品・ピアノ付きの作品・外国語の作品等も扱う。
後期は桐朋祭に向けた作品のリハーサルを行う。
〔授業の到達目標〕
• 声楽の基礎（呼吸法・発声法）を身につけることができる。
• ハーモニーとアンサンブルの基本を身につけることができる。
• 耳を開いて、心を開いて、良く聴きながら自発的に歌うことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
ウォームアップエクササイズ・ブレストレーニング・発声練習・ハーモニーとアンサンブルトレーニング等を通じて合唱の基本を身につけながら、簡易な作品を用いて演習を行う。
第 2 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 3 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 4 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 5 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 6 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 7 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習

第 8 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 9 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 10 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 11 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 12 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 13 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 14 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習
第 15 回　合唱の基本を身につけるための各種トレーニング、桐朋祭で演奏する作品を用いた演習

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏の後に指導を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で配られた曲を事前に譜読みしておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
その都度指示する。
〔成績評価〕
成績評価は、授業への取り組み40％、受講態度30％、発表30％を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組みに問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2240M
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## オーケストラ・スタディA/B

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）
必修
弦楽器専修必修

野口 千代光

〔履修条件〕
弦楽器専修者必修。
〔授業の概要〕
後期「合奏」授業への準備段階とする。
• オーケストラプレイヤーとしての心がまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、音源等も聴き、作品を理解して臨む。
• 演奏するためのテクニックやアンサンブル能力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えられるようにする。
〔授業の到達目標〕
• オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。
• 全員で 1 つの作品を作り上げる喜びを知ることができる。
〔授業計画〕
曲目は４月に発表する。
11月定期演奏会（オーケストラ）の演奏曲目を課題とする。
毎回の練習スケジュールを作り、進める。
しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内演奏時、アンサンブル全体への指導、必要に応じてパート指導、個別指導を丁寧に行う。
〔授業時間外の学習〕
課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。
授業を受ける前に個々がしっかり個人練習をし、スコアを準備して楽曲の成り立ちを勉強することを必須とする。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、音源を準備すること。
〔成績評価〕
成績の評価については、曲の事前準備、受講態度、演奏成果、出席状況の結果を総合的に評価する。
S　授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかり把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者
A　自らのパートは把握できているものの、他のパートを把握することにおいて一層の努力が求められ、その能力向上が見込まれる者
B　ところどころに技術向上、改善努力が必要に思われる

が、後期「合奏」においてアンサンブル能力と技術向上が見込まれる者
C　後期「合奏」授業において何とかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者
D　後期「合奏」授業についていける能力が見込まれない者
〔科目ナンバリング〕
MUS1241M/MUS3241M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 合奏A/B

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）
必修
弦楽器専修必修

野口 千代光、永井 由比

〔履修条件〕
弦楽器専修者必修。
前期授業「オーケストラ・スタディ」の単位を修得した者。弦楽器専修者以外についてはオーディション等で選出された者。
〔授業の概要〕
清水醍輝氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。個々の役割、楽器セクションの一体感を認識しながら、オーケストラとしての大きな表現の可能性を体得する。授業内の演奏のみならず、オーケストラ授業、演奏会へ向けた準備を、協力体制を持って行うことも重要とする。
〔授業の到達目標〕
オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オーケストラガイダンス／リハーサル①
　　オーケストラ授業に対する心がまえ、様々な準備等についての確認
第 2 回　リハーサル②
　　毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。
第 3 回　リハーサル③
第 4 回　リハーサル④
第 5 回　リハーサル⑤
第 6 回　リハーサル⑥
第 7 回　ゲネプロ・本番
　　定期演奏会当日：ゲネプロ・本番
第 8 回　反省会
　　演奏会録画を鑑賞しながら演奏について振り返りをしながら演奏の検証、意見交換を行う。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内演奏時、アンサンブル全体への指導、必要に応じてパート指導、個別指導を丁寧に行う。
〔授業時間外の学習〕
課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。
授業を受ける前に個々がしっかり個人練習をし、スコアを準備して楽曲の成り立ちを勉強することを必須とする。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、音源を準備すること。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度、演奏成果の結果を総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2246MA/MUS4246MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 管楽器基礎（呼吸法）

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生
1単位　前期
木曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
管楽器専修必修

三塚 至

〔履修条件〕
管楽器専修必修。
他専修学生の履修も可。声楽専修学生は履修が望ましい。
〔授業の概要〕
私達人間が生まれたばかりの時は、小鳥達のようにその小さな体からは想像もできないほど、よく響く、大きな声で泣いていたはずである。それは、私達が成長するに従いい

つしか忘れてしまった「自然な呼吸」を、生まれて間もない頃は「無意識」に営んでいたからではないだろうか。
この授業では、こうした「自然な呼吸」、つまり、のどを開けて（オープンスロート）、腹筋、背筋、胸筋および腰筋を、バランス良く使った呼吸（主に腹式呼吸）をストレッチ体操等を取り入れ、体を動かすことによって正しく理解していきたい。またこれと併行して、実際に声を出して歌うことで、より響きのある、美しい音を目指したい。楽器を用いて演奏する人は特に、歌声が変わると、音色も変わることを実感してほしいところである。

〔授業の到達目標〕
演奏家として必要な体作りができる。体の使い方を体得できる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入
※呼吸及び呼吸筋の働きについて解説する。
授業の流れの説明
本授業では毎回「 ストレッチ・呼吸筋トレーニング・発声・歌唱」を行う。
第 2 回　正しい姿勢と呼吸と呼吸筋の働きについて　喉を「あける」練習
正しい姿勢
呼吸筋群の自覚
第 3 回　呼吸筋強化①（上半身）
２段階呼吸
息を「吐ききる」ことの徹底
第 4 回　呼吸筋強化②（下半身）
ベルカントモードを使って
第 5 回　呼吸筋強化③（深層筋）、15段階呼吸①（10段階まで）
呼吸の細分化による呼吸筋意識の効果 1
第 6 回　15段階呼吸②（15段階まで）
呼吸の細分化による呼吸筋意識の効果 2
第 7 回　共鳴について
躰全体を楽器として考える
第 8 回　横隔膜、呼吸筋を意識した発声トレーニング
腹筋、背筋、臀筋、腸腰筋（大腰筋 、腸骨筋）を使っての横隔膜コントロールトレーニング
第 9 回　頭声、胸声、地声、ファルセットについての考察
声区（レジスター）の考え方と意識
第 10 回　浅呼吸、深呼吸と歌唱への応用
横隔膜の働きと「支え」の位置
第 11 回　表情筋、舌と呼吸筋の関係
音色の変化のもたらす表現効果
第 12 回　呼吸を意識した子音、母音の発音
口腔の使い方及び舌根の意識
第 13 回　これまでの復習、まとめ
横隔膜をコントロールする為の体の使い方、イメージの仕方などを考察する
第 14 回　歌唱テスト準備
全員が一人ずつ歌い、改善すべき点をチェックする
第 15 回　復習確認と総括
総括的に演奏中の実際的な呼吸法を考察する

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実技課題、および歌唱指導の際、適宜フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
正しい呼吸は音楽家としての体づくりの基本である。毎日必ずトレーニングする癖をつけること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必要な時は、こちらで用意する。
マットを使うので、動きやすい服装と内履きを用意すること。

〔成績評価〕
平常点60％： 授業に能動的参加をしているか。努力は見られるか。成果はあったか。
実技テスト（個人歌唱）30％： 姿勢、呼吸が正しく行われているか。呼吸筋が正しく動いているか。正しい発声を目指しているか。
その他、授業への取り組み方・音楽家としての表現力・集中力10％を見る。
以上を総合的に見て評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（上記の条件を全てにおいて十分に満たし、かつ優秀と認められる者）
Ａ　総合点が80点以上の者（上記の条件を全てにおいて十分に満たしていると認められる者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（上記の条件を一定のレベルにおいて満たしていると認められる者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（上記の条件にばらつきがあり、全体にやや不足していると認められる者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（上記の条件で満たしている項目が半分以下と判断される者）

〔科目ナンバリング〕
MUS1202M

〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 声楽アンサンブルＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
金曜 3限
実務経験なし
演習（技術）
必修
Ａは男子のみ（日本音楽専修以外）必修、Ｂは男子（日本音楽専修以外）および声楽専修女子必修

松井 康司

〔履修条件〕
Ａは男子のみ必修（日本音楽以外）。
Ｂは男子（日本音楽以外）および声楽専修の女子は必修。

他専修の学生（特に男性）の積極的な履修を希望する。定期演奏会等のコンサート、オペラ実習試演会に参加する意欲を求める。
〔授業の概要〕
この授業では、日本人作曲家による混声合唱曲を取り上げ、関心を深めていく。曲は未定だが、日本語の美しさとハーモニーの関係を深く探り演奏していく。曲目は、履修人数を考慮し決める。
なお、定期演奏会等での発表があるため、それに向け、演奏技術、表現力を高めていく。
〔授業の到達目標〕
声によるハーモニー感覚を身につけ、アンサンブル能力の技能を高めることができる。また、日本語による歌唱に関心を持ち、表現能力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　今年度の履修人数の確認とレベルチェック
演奏会に向けて授業を進めていく。本番前には臨時練習を組むことがある。
第 2 回　簡単な混声合唱曲に取り組む
第 3 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 4 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 5 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 6 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 7 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 8 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 9 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 10 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 11 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 12 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 13 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 14 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
第 15 回　定期演奏会演奏曲の音取り練習
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内での演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で言われたことを確認・復習をすると共に、次回授業で取り上げる曲の音取りをしておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度80％、課題20％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、歌唱能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1242M/MUS3242M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 声楽アンサンブルＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
金曜 3限
実務経験なし
演習（技術）
必修
Ａは男子のみ（日本音楽専修以外）必修、Ｂは男子（日本音楽専修以外）および声楽専修女子必修

**松井 康司**

〔履修条件〕
Ａは男子のみ必修（日本音楽以外）。
Ｂは男子（日本音楽以外）および声楽専修の女子は必修。
他専修の学生（特に男性）の積極的な履修を希望する。定期演奏会等のコンサートに出演する。
〔授業の概要〕
この授業では、日本人作曲家による混声合唱曲を取り上げ、関心を深めていく。曲は未定だが、日本語の美しさとハーモニーの関係を深く探り演奏していく。曲目は、履修人数を考慮し決める。
なお、定期演奏会での発表があるため、それに向け、演奏技術、表現力を高めていく。
〔授業の到達目標〕
声によるハーモニー感覚を身につけ、アンサンブル能力の技能を高めることができる。また、日本語による歌唱に関心を持ち、表現能力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
演奏会に向けて授業を進めていく。本番前には臨時練習を組むことがある。
第 2 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 3 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 4 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。

第 5 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 6 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 7 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 8 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 9 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 10 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 11 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 12 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 13 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 14 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。
第 15 回　前期の内容を踏まえ、演奏会で演奏する曲を音楽的に深めていく。後半では作曲家をお招きし、アドバイスをもらう場も設ける。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内での演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で言われたことを確認・復習をすると共に、次回授業で取り上げる曲の音取りをしておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度80％、課題20％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、歌唱能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2242M/MUS4242M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 管楽アンサンブルＡⅠａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
管楽器（Ｆ１）必修

〔履修条件〕
１年前期における管楽器専修（フルート）必修。
〔授業の概要〕
この授業はフルートアンサンブルを主体に授業を展開していくが、他の専修の学生や演奏員の協力を得て、フルートと様々な楽器とのアンサンブルも展開していく。
学年末に受講生全員でフルートアンサンブルを中心とした演奏会を行う。
〔授業の到達目標〕
以下の３点をこの授業の到達目標とする。
• アンサンブルの基礎を身につけることができる。
• バロック時代から近現代までの各時代の様式、形式を学ぶことができる。
• 楽器やピアノとのアンサンブルも体験し、自分たちの力でアンサンブルを作り上げていく力を向上させることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　学習曲目の検討と選択
第 2 回　テレマン①
　　六つのソナタop.2よりG-dur
第 3 回　テレマン②
　　六つのソナタop.2よりG-dur
第 4 回　テレマン③
　　六つのソナタop.2よりE-moll
第 5 回　テレマン④
　　六つのソナタop.2よりE-moll
第 6 回　テレマン⑤
　　六つのソナタop.2よりD-moll
第 7 回　テレマン⑥
　　六つのソナタop.2よりD-moll
第 8 回　ハイドン①
　　ロンドントリオより第１番
第 9 回　ハイドン②
　　ロンドントリオより第１番
第 10 回　ハイドン③

ロンドントリオより第２番
第 11 回　ハイドン④
ロンドントリオより第２番
第 12 回　ハイドン⑤
ロンドントリオより第３番
第 13 回　ハイドン⑥
ロンドントリオより第３番
第 14 回　ハイドン⑦
ロンドントリオより第４番
第 15 回　課題発表、総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
自分の担当パートはもちろんのこと、他のパートのスコアリーディングも予習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、レポート20%、発表演奏会30%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1243M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 管楽アンサンブルＡⅡａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生
1単位　後期
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
管楽器（Ｆｌ）必修

〔履修条件〕
１年後期における管楽器専修（フルート）必修。
前期のⅠの単位を修得していること。
〔授業の概要〕
この授業はフルートアンサンブルを主体に授業を展開していくが、他の専修の学生や演奏員の協力を得て、フルートと様々な楽器とのアンサンブルも展開していく。
学年末に受講生全員でフルートアンサンブルを中心とした演奏会を行う。
〔授業の到達目標〕
以下の３点をこの授業の到達目標とする。
• アンサンブルの基礎を身につけることができる。
• バロック時代から近現代までの各時代の様式、形式を学ぶことができる。
• 楽器やピアノとのアンサンブルも体験し、自分たちの力でアンサンブルを作り上げていく力を向上させることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　学習曲目の検討と選択
第 2 回　コンサートプログラム制作
第 3 回　ドップラー作品について
第 4 回　ドップラー作品について
第 5 回　クーラウ①
フルートデュオ
第 6 回　クーラウ②
フルートデュオ
第 7 回　クーラウ③
フルートデュオ
第 8 回　クーラウ④
フルートデュオ
第 9 回　クーラウ⑤
フルートデュオ
第 10 回　クーラウ⑥
フルートデュオ
第 11 回　クーラウ⑦
フルートデュオ
第 12 回　日本人作曲家について
第 13 回　バッハ①
トリオソナタ
第 14 回　バッハ②
トリオソナタ
第 15 回　コンサート形式にて演奏発表会
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
自分の担当パートはもちろんのこと、他のパートのスコアリーディングも予習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、レポート20%、発表演奏会30%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）

Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2243M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 管楽アンサンブルＡⅠｂ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　前期
火曜 5限
実務経験あり
演習（技術）
必修
管楽器（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修

津川 美佐子

〔履修条件〕
管楽器専修（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修。
〔授業の概要〕
木管五重奏を中心に学習していく。各々パート譜をよく読み、５種類の楽器の音色を聞き合い、それぞれの楽器の特徴や奏法を学び合奏の基礎を身につけていく。自身が演奏しない曲目についても各自楽譜を用意して楽曲の理解を深め合奏の基礎や心構えを身につけていく。
〔授業の到達目標〕
作曲家、曲目の背景を自身で調べ、スコアも読みこんで勉強し、メンバーが楽器を通してコミュニケーションをとり音楽を作っていく事ができるようにする。また、他の楽器の特徴や奏法を学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業内容説明と曲目の選択（前期は古典を中心とする）
※学生の状況により、曲目を考え、学生の希望も取り入れていく。
第 2 回　演奏実習①
第 3 回　演奏実習②
第 4 回　演奏実習③
第 5 回　演奏実習④
第 6 回　演奏実習⑤
第 7 回　演奏実習⑥
第 8 回　演奏実習⑦
第 9 回　演奏実習⑧
第 10 回　演奏実習⑨
第 11 回　演奏実習⑩
第 12 回　演奏実習⑪
第 13 回　演奏実習⑫
第 14 回　演奏実習⑬
第 15 回　前期の曲の通し演奏
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時、その場で行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に各々がパートの譜読み、練習をしておくこと。可能であれば、分奏をしておくことが望ましい。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
授業への取り組み姿勢、授業中の演奏を重視。
実習に対する姿勢50％、実技試験50％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS1243M/MUS3243M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 管楽アンサンブルＡⅡｂ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　後期
火曜 5限
実務経験あり
演習（技術）
必修
管楽器（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修

津川 美佐子

〔履修条件〕
管楽器専修（Tp・Tb・Tub・Sx専修以外）必修。
１年生はFl専修以外の学生を対象とする。（永井先生に確認をお願いいたします）
前期のＩの単位を修得していること。
〔授業の概要〕
後期は、近現代の木管五重奏を中心に学習していく。各々パート譜をよく読み、５種類の楽器の役割、音色、特徴、奏法を聞き合い、合奏の基礎を学ぶ。自身が演奏しない曲目についても各自楽譜を用意し、共に楽曲の理解を深め合奏の基礎や心構えを学ぶ。

〔授業の到達目標〕
作曲家、曲目の背景を自身で調べ、スコアも読んで勉強し、メンバー全員で楽器を通してコミュニケーションをとれるようし、音楽を作っていく事を目標とする。また、他の楽器の特徴や奏法を学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　後期曲目説明と選択（近代作曲家の曲も取り入奏法れる）
※学生の状況により、曲目を考え、学生の希望も取り入れていく。
第 2 回　演奏実習①
第 3 回　演奏実習②
第 4 回　演奏実習③
第 5 回　演奏実習④
第 6 回　演奏実習⑤
第 7 回　演奏実習⑥
第 8 回　演奏実習⑦
第 9 回　演奏実習⑧
第 10 回　演奏実習⑨
第 11 回　演奏実習⑩
第 12 回　演奏実習⑪
第 13 回　演奏実習⑫
第 14 回　演奏実習⑬
第 15 回　一組ずつ曲の通しをして試験の代わりとする
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時、その場で行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に各々がスコアを読みパート譜を練習をしておくこと。また、可能であれば分奏しておくことが望ましい。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
授業への取り組み姿勢、授業中の演奏を重視。
実習に対する姿勢50％、実技試験50％にて総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2243M/MUS4243M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 金管アンサンブルＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
土曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
金管専修（Tp・Tb・Tub）必修

長谷川 潤

〔履修条件〕
金管専修（Tp、Tb、Tub）のみ必修。
〔授業の概要〕
管・打・ハープを含む中・大編成アンサンブル能力の育成を目指す。
〔授業の到達目標〕
様々な編成の合奏を体験し、基礎から徐々に難易度の高い曲へと進みながら、アンサンブル能力を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける①
第 3 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける②
第 4 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける③
第 5 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける④
第 6 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく①
第 7 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく②
第 8 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく③
第 9 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく④
第 10 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく⑤
第 11 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす①
第 12 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす②
第 13 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす③
第 14 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす④
第 15 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始①
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習時に問題があれば、その都度その点をすぐに指摘し、対処法や練習の方法を指示する。
〔授業時間外の学習〕
自分の担当パートを正確に演奏できるよう練習しておくことはもちろん、演奏曲のアナリーゼ、作曲家や時代の背景

を知っておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
出席状況・授業への取り組み50％、演奏会出演成果50％の結果を総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1224M/MUS3244M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 金管アンサンブルＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
土曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
金管専修（Tp・Tb・Tub）必修

長谷川 潤

〔履修条件〕
金管専修（Tp、Tb、Tub）のみ必修。
〔授業の概要〕
管・打・ハープを含む中・大編成アンサンブル能力の育成を目指す。
〔授業の到達目標〕
様々な編成の合奏を体験し、基礎から徐々に難易度の高い曲へと進みながら、アンサンブル能力を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始②
第 2 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始③
第 3 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始④
第 4 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始⑤
第 5 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく①
第 6 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく②
第 7 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく③
第 8 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく④
第 9 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく⑤
第 10 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく⑥
第 11 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う①
第 12 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う②
第 13 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う③
第 14 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う④
第 15 回　学外ホールにて演奏会を行う
2025年度は12月16日(火)杉並公会堂大ホールにて演奏会を行う。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習時に問題があれば、その都度その点をすぐに指摘し、対処法や練習の方法を指示する。
〔授業時間外の学習〕
自分の担当パートを正確に演奏できるよう練習しておくことはもちろん、演奏曲のアナリーゼ、作曲家や時代の背景を知っておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
出席状況・授業への取り組み50％、演奏会出演成果50％の結果を総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2244M/MUS4244M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## サクソフォン・アンサンブルＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
Sx専修必修

野原 孝

〔履修条件〕
サクソフォン専修必修。
〔授業の概要〕
サクソフォンを用いて二重奏・三重奏・四重奏に取り組み、アンサンブル能力の向上を目指す。また、ソプラノ・アルト・テナー・バリトンの４種類のサクソフォンの奏法・特徴を学び、アンサンブルの中での各楽器の役割を理解し、実践の中でのコントロールを身につける。
〔授業の到達目標〕
• アンサンブルの中での自身の役割を把握し、演奏に活かすことができる。
• 各楽器の特性を理解し、アンサンブルの中でもその奏法を反映することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　サクソフォン・アンサンブルについて
第 2 回　課題曲選定
第 3 回　奏法①
　　マウスピースとリードのセッティング
第 4 回　奏法②
　　アンブシュア
第 5 回　奏法③
　　タンギング
第 6 回　奏法④
　　呼吸
第 7 回　奏法⑤
　　音程の取り方
第 8 回　奏法⑥
　　ビブラート
第 9 回　奏法⑦
　　立奏、座奏の構え方
第 10 回　課題曲演習
第 11 回　課題曲確認
第 12 回　ソプラノサクソフォンの奏法について
第 13 回　ソプラノサクソフォン・アンサンブル演習
第 14 回　アルトサクソフォンの奏法について
第 15 回　アルトサクソフォン・アンサンブル演習
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レッスン時、常に課題のフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で使用する楽譜を準備し、担当する各パートの楽器の練習を十分に行うこと。また、各楽器の特徴・音程の癖等も把握しておくこと。
授業で取り組む曲はもちろん、それ以外の室内楽作品もCD等を聴いて知識を広げておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
履修学生の希望も取り入れながら、能力に見合った楽曲を選定する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、実習の成果50％で総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1245M/MUS3245M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## サクソフォン・アンサンブルＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期
水曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
Sx専修必修

野原 孝

〔履修条件〕
サクソフォン専修必修。
前期のⅠの単位を修得していること。
〔授業の概要〕
より高度な演奏技術が必要な楽曲に取り組み、さらなる演奏技術・表現力の向上を目指す。また、楽曲を作り上げるプロセスやアプローチの方法を学び、アンサンブルというものに対する理解を深める。
〔授業の到達目標〕
• より高度な演奏技術が必要な楽曲を演奏することができる。
• アンサンブル内で価値観を共有し、奏法に反映することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　テナーサクソフォンの奏法について
第 2 回　テナーサクソフォン・アンサンブル演習
第 3 回　バリトンサクソフォンの奏法について
第 4 回　バリトンサクソフォン・アンサンブル演習
第 5 回　サクソフォン四重奏実践①
　　ハーモニー・音色感
第 6 回　サクソフォン四重奏実践②
　　音量バランスとコントロール
第 7 回　サクソフォン四重奏実践③
　　担当パートの役割も把握
第 8 回　サクソフォン四重奏実践④
　　楽曲の完成イメージの共有
第 9 回　サクソフォン四重奏実践⑤
　　リハーサルの進め方
第 10 回　サクソフォン四重奏実践⑥
　　並び方
第 11 回　サクソフォン四重奏実践⑦
　　多様な表現方法の工夫と検討
第 12 回　アンサンブルレパートリー研究①
　　オリジナルの現代曲
第 13 回　アンサンブルレパートリー研究②
　　ピアノ作品から編曲された楽曲
第 14 回　アンサンブルレパートリー研究③
　　弦楽四重奏作品から編曲された楽曲
第 15 回　コンサートのプログラミング
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レッスン時、常に課題のフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で使用する楽譜を準備し、担当する各パートの楽器の練習を十分に行うこと。また、各楽器の特徴・音程の癖等も把握しておくこと。授業で取り組む曲はもちろん、それ以外の室内楽作品もCD等を聴いて知識を広げておくように。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
より高難度の楽曲を選定する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、実習の成果50％で総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2245M/MUS4245M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ギター・アンサンブルＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
木曜 3限
実務経験あり
演習（技術）
必修
ギター専修必修

佐藤 紀雄

〔履修条件〕
ギター専修者必修。
ギター専修者のみ履修可とする。
〔授業の概要〕
古典から現代までのギターアンサンブル作品、編集作品に加え学生自身の作品、編曲による作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの修得課程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に重要であり、将来様々な楽器とのアンサンブルに役立ててもらいたい。
その経験を活かし各自の音楽活動の幅を広げてもらいたい。
〔授業の到達目標〕
・年２回の自主的発表会に向けて、課題曲の演奏を完成させる。
・その練習の課程で様々な時代の様式を同時に学ぶことができる。
・アンサンブルを行う上で何が必要な技術かを知ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　カルメン組曲①
　　必要な技術を確認し、習得へ向けた計画づくり。
第 2 回　カルメン組曲②
　　各パート毎の達成状況を見る。
第 3 回　カルメン組曲③
　　アンサンブルの難所を集中して練習する。
第 4 回　カルメン組曲④
　　各曲がオペラのどのような場面で使われているかを調べる。
第 5 回　カルメン組曲⑤
　　①～④を踏まえて表現方法を追究していく。
第 6 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲①
　　いくつかの独特の奏法の演奏法を確認する。
第 7 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲②
　　各パートずつ互いに聴き合い理解しておく。
第 8 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲③
　　アンサンブルの中で各パートの役割を確かめ合う。
第 9 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲④

オペラについて調べ、各エピソードが出てくる場面を理解する。
第 10 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲⑤
息の長いフレーズ起伏の激しさを表現する。
第 11 回　バンドゥークイッカン①
各パートの難所の練習課題を見つける。
第 12 回　バンドゥークイッカン②
各パート同士の役割を理解する。
第 13 回　バンドゥークイッカン③
ラテンアメリカ独特のリズムについて調べ、リズムの練習をする。
第 14 回　バンドゥークイッカン④
ラテンアメリカのリズムが作品の中でどのように応用されているかを試す。
第 15 回　バンドゥークイッカン⑤
①～④を踏まえて表現を実現する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の中に演奏上、またはモチベーション上の問題を抱えている者がいる場合は、個々に対面し解決してゆきたい。アンサンブル上で問題があった時には、曲を変える等皆で話し合ってゆきたい。

〔授業時間外の学習〕
あらかじめ課題についての知識を得、また技術的に足りない箇所を準備しておく。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題曲の楽譜と参考資料

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み30％、課題への取り組み30％、期末試験40％にて総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS1246M/MUS3246M

〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
ー

## ギター・アンサンブルＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
木曜 3限
実務経験あり
演習（技術）
必修
ギター専修必修

佐藤 紀雄

〔履修条件〕
ギター専修者必修。
ギター専修者のみ履修可とする。
前期のⅠの単位を修得していること。

〔授業の概要〕
古典から現代までのギターアンサンブル作品、編集作品に加え学生自身の作品、編曲による作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの修得課程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に重要であり、将来様々な楽器とのアンサンブルに役立ててもらいたい。
その経験を活かし各自の音楽活動の幅を広げてもらいたい。

〔授業の到達目標〕
・年２回の自主的発表会に向けて、課題曲の演奏を完成させる。
・その練習の課程で、様々な時代の様式を同時に学ぶことができる。
・アンサンブルを行う上で、何が必要な技術かを知ることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」①
各パートを練習。
第 2 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」②
二組みずつで合わせて他を聞く。
第 3 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」③
現代の作曲様式の影響を理解する。
第 4 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」④
特殊なアンサンブルを理解する。
第 5 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」⑤
様々な演奏形態を試す。
第 6 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」①
多くあるパートの難所を練習する。
第 7 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」②
複雑に絡み合ったところを理解する。
第 8 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」③
全体を通して流れをつかむ。
第 9 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」④

この作品の成立の課程を調べ、このワルツの特性を理解する。
第 10 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」⑤
めまぐるしく変化するテンポを表現できるようにする。
第 11 回　ヴィヴァルディー四季より「春」①
この曲に必要な技術を準備する。
第 12 回　ヴィヴァルディー四季より「春」②
各パート毎に弾いて役割を理解する。
第 13 回　ヴィヴァルディー四季より「春」③
テンポの激しい変化を皆で理解し練習する。
第 14 回　ヴィヴァルディー四季より「春」④
バロック音楽の特徴を調べ、合わせた表現。
第 15 回　ヴィヴァルディー四季より「春」⑤
作品の中での自然の描写を豊かに再現する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の中に演奏上、またはモチベーション上の問題を抱えている者がいる場合は、個々に対面し解決してゆきたい。アンサンブル上で問題があった時には、曲を変える等皆で話し合ってゆきたい。

〔授業時間外の学習〕
あらかじめ課題についての知識を得、また技術的に足りない箇所を準備しておく。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題曲の楽譜と参考資料

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み30％、課題への取り組み30％、期末試験40％にて総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2246M/MUS4246M

〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## うたＡ/Ｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
木曜 3限
実務経験なし
演習（技術）
必修
日本音楽専修必修

今藤 美知央

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
邦楽（長唄・三味線）・歌舞伎・日本舞踊に興味がある者。
遅刻・欠席の場合は必ず連絡すること。

〔授業の概要〕
日本の伝統音楽「長唄」は、江戸時代に歌舞伎と共に、庶民の音楽として大流行、その後も進化・発展し、現代に至る音楽である。
長唄を通して日本の文化・音楽を理解し、今後自分の芸術表現にも活かせるよう技術を学ぶ。

〔授業の到達目標〕
• 情景を大切にしながら音楽的表現ができる。
• きれいな発音で唄うこと、話すことができる。
• 心地良い「間」を表現することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入
「うた」とは
第 2 回　課題曲の稽古①
楽器の説明、発声、間のとり方
※講義内容は前後することがある。
※「課題曲の稽古」とは、唄と語りの実習。
第 3 回　課題曲の稽古②
西洋音楽との違い、長唄の特徴
第 4 回　課題曲の稽古③
三味線あれこれ
第 5 回　課題曲の稽古④
唄と語りとセリフ
第 6 回　課題曲の稽古⑤
三味線で色々な表現をする
第 7 回　課題曲の稽古⑥
歌舞伎について
第 8 回　課題曲の稽古⑦
唄の技術「ごろ」
第 9 回　課題曲の稽古⑧
「当てて唄う」「外して唄う」「間を遊ぶ」
第 10 回　課題曲の稽古⑨
日本人の豊かな感性
第 11 回　課題曲の稽古⑩
学校教育における長唄
第 12 回　指揮者のいない合奏
第 13 回　決まりのない音楽・本当にあったハプニング
第 14 回　学習到達度の確認・発表

第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に個別に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
与えられた課題の研究、予習、復習に努めること。
「邦楽演奏会」「歌舞伎」等、劇場に足を運んでみること、ネット鑑賞すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書はなし。
資料、譜面等は授業時に配布する。配布されたものは必ず毎回持参すること。
授業内での見本演奏は録音して、予習復習に活用すること。
〔成績評価〕
授業への取り組み60％、課題に対する成果等40％を総合して評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1203M/MUS3200M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
△
※専攻科演劇専攻のみ履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 邦楽アンサンブルＡⅠ/ＢⅠ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　前期
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
日本音楽専修必修

花岡 操聖

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
余韻が延びる楽器とそうでない楽器、発音が遅れがちな楽器など、邦楽器はそれぞれに様々な個性を持っている。各楽器の特性を認識し、その楽器の良い個性を伸ばしながら合奏する。合奏を積み重ねる中で、お互いのパートを聴き合い呼応し合うアンサンブル力を体得する。
〔授業の到達目標〕
楽譜を正しく読むことだけでなく、楽譜には書ききれていない風景などをイメージし曲を構成する力を養う。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　学生との意見交換を行い、学生の希望も取り入れながら前期の選曲を行う。
第 2 回　古典曲
　例「八千代獅子」
第 3 回　古典曲
　例「八千代獅子」
第 4 回　古典曲
　例「五段砧」
第 5 回　古典曲
　例「五段砧」
第 6 回　新日本音楽の作品
　作曲家例「宮城道雄」「中能島欣一」「杵屋正邦」
第 7 回　新日本音楽の作品
　作曲家例「宮城道雄」「中能島欣一」「杵屋正邦」
第 8 回　1960年代の作品
　作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」ほか
第 9 回　1960年代の作品
　作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」「清瀬保二」ほか
第 10 回　1960年代の作品
　作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」「清瀬保二」ほか
第 11 回　1960年代の作品
　作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」「清瀬保二」ほか
第 12 回　1970年代の作品
　作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 13 回　1970年代の作品
　作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 14 回　1970年代の作品
　作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 15 回　1970年代の作品
　作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で演奏する場合は毎回総評を行う。
演奏しない学生には、曲の理解度を確認するため適宜質疑応答を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内で演奏する場合は、譜読み・練習を必ず行う。
演奏に参加しない週でも事前に楽譜に目を通しておくこと。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて、教員より指示する。

〔成績評価〕
積極的な授業への取り組み（準備予習50％、成果50％）を総合的に評価する。
※遅刻や欠席は評価に含む（やむを得ない場合は除く）
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でている）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確である）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容への理解・演奏能力・課題への取り組みが良好である）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分である）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しようとせず、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある）
〔科目ナンバリング〕
MUS1247M/MUS3247M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 邦楽アンサンブルＡⅡ/ＢⅡ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　後期
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
日本音楽専修必修

花岡 操聖

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
余韻が延びる楽器とそうでない楽器、発音が遅れがちな楽器など、邦楽器はそれぞれに様々な個性を持っている。各楽器の特性を認識し、その楽器の良い個性を伸ばしながら合奏する。合奏を積み重ねる中で、お互いのパートを聴き合い呼応し合うアンサンブル力を体得する。
〔授業の到達目標〕
楽譜を正しく読むことだけでなく、楽譜には書ききれていない風景などをイメージし曲を構成する力を養う。
〔授業計画〕
第 1 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 2 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 3 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 4 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 5 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 6 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 7 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 8 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 9 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 10 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 11 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 12 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 13 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 14 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 15 回　総まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で演奏する場合は毎回総評を行う。
演奏しない学生には、曲の理解度を確認するため適宜質疑応答を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内で演奏する場合は、譜読み・練習を必ず行う。
演奏に参加しない週でも事前に楽譜に目を通しておくこと。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて、教員より指示する。
〔成績評価〕
積極的な授業への取り組み（準備予習50％、成果50％）を総合的に評価する。
※遅刻や欠席は評価に含む（やむを得ない場合は除く）
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でている）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確である）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容への理解・演奏能力・

課題への取り組みが良好である）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分である）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しようとせず、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある）
〔科目ナンバリング〕
MUS2247M/MUS4247M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 伴奏法Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期
水曜 4限
実務経験なし
演習（技術）
必修
教職課程受講者（日本音楽専修以外）必修

**揚原 さとみ**

〔履修条件〕
教職課程受講者（日本音楽専修除く）は必修とするが、そうでない学生もアンサンブルに関心を持ち、他者の演奏に興味を持って聴ける学生は歓迎する。
〔授業の概要〕
主として音楽教育の場に最適なピアノ伴奏法を、実技レッスン・オーディオ資料鑑賞・講義により研究し、実際の教育現場で活かせるよう学んでいく。具体的には歌唱や合唱、また器楽合奏指導に適したピアノ伴奏の技法・練習法・呼吸法等を理解し、実践形式で習得していく。譜読みの力を向上させるための初見ピアノ伴奏や、指導に欠かせないピアノ弾き語り・コードネームでの即興伴奏についても目を向けたい。
教職課程必修科目のため、対象場面は学校教育現場としているが、様々な音楽活動においてのピアノ伴奏法を探りたい。
〔授業の到達目標〕
• 効果的なピアノ伴奏を可能とする音感を養うことができる。
• 基本のコードネームを把握し、即興でシンプルな伴奏付けができる。
• 音楽でのコミュニケーション力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス・中学校の音楽授業考察（鑑賞）
※受講生の人数や社会情勢等により、内容変更の可能性がある。
第 2 回　中学校の音楽授業考察（講義）・斉唱曲の初見練習
第 3 回　学習指導案の作成方法について（講義・実践）
第 4 回　ピアノ伴奏を用いた模擬授業発表と研究①
1 人約30分程度
第 5 回　ピアノ伴奏を用いた模擬授業発表と研究②
1 人約30分程度
第 6 回　ピアノ伴奏を用いた模擬授業発表と研究③
1 人約30分程度
第 7 回　ピアノ伴奏を用いた模擬授業発表と研究④
1 人約30分程度
第 8 回　ピアノ連弾・古典派
（メロディと伴奏のバランス感覚を養う）
第 9 回　ピアノ連弾・ロマン派
（読譜の理解を深め音楽創りを研究する）
第 10 回　初見ピアノ伴奏
第 11 回　弾き語りの練習
第 12 回　コードネームについて（基本）
第 13 回　基本コードによる即興伴奏付け
第 14 回　課題曲レッスン①
第 15 回　課題曲レッスン②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表後、振り返りとして全体に総評を、希望者には個別講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回課題が出されるので、予習・復習に努めること。
特にグループやペアを組んでのレッスンは、互いに協力を深め必ず受講前に練習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
五線紙を毎時間持参すること。
授業時に楽譜やプリントを配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、各自の練習30％、受講態度30％、実技レッスン及び発表40％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、発表未受験者、受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2202M
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技演習基礎

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期
金曜 1限
実務経験なし
演習（技術）
選択

三浦 剛、冨士川 正美

〔履修条件〕
• 音楽専攻の学生で、「演技」に興味がある者。
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、できるだけ動きやすい服装が好ましい。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 前半9回と後半5回で、2名の演出家（三浦・冨士川）による別課題を元に演技の基礎的なメソッドを学習していく。
• 前半（三浦）：発声、滑舌、呼吸方法など「演技」の根幹をなす「台詞」術の基礎を学ぶ。
• 前半（三浦）：相手役とのコミュニケーションを重視し、配布された「戯曲」を課題として、稽古し、演技をして発表する。
• 後半（冨士川）：新たに配布された戯曲を読み込み、その中の一場面を演じてみる。実践的な稽古を通じて場面を作り上げ、発表する。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の稽古、と発表から演技における「声」と「身体」の扱い方を知ることができる。
• 相手との対話で必要な「間」や「呼吸」を知ることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス・トレーニング①
　　呼吸のトレーニング
　　※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②課題発表
　　身体表現のトレーニング・課題戯曲発表
第 3 回　トレーニング③、読み稽古①
　　呼吸と身体トレーニング・課題戯曲の読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④、読み稽古②
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤キャスティング、読み稽古③
　　キャスティングをして、再度課題戯曲の読み稽古を行う。
第 6 回　トレーニング⑥、立ち稽古①
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦、立ち稽古②
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　通し稽古
　　全シーンを発表に向けて、通し稽古をする（前半）
第 9 回　発表・総評
　　前半課題の発表し、成果や課題を総評する。
第 10 回　読み合わせ稽古①（冨士川①）
　　新たな戯曲・場面に取り組む。
第 11 回　読み合わせ稽古②（冨士川②）
　　立ち稽古をイメージしながらの読み合わせ
　　会話とは？
第 12 回　立ち稽古①（冨士川③）
　　ミザンセーヌとは？
第 13 回　立ち稽古②（冨士川④）
　　ステイタスの変化について
第 14 回　立ち稽古③（冨士川⑤）
　　仕上げの稽古
第 15 回　個々の演技発表、総評、ディスカッション
　　個々の課題演技を発表。
　　三浦、冨士川の総評とディスカッションを行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技毎に個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「コミュニケーション能力」を鍛えること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布。（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。

〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な演技メッソドの理解に欠け、演技に利用できていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）

〔科目ナンバリング〕
MUS2204M

〔学位授与方針との関係〕
③、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 初見演奏（基礎）

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 1限
実務経験なし
演習（技術）
必修
ピアノ専修必修

大家 百子

〔履修条件〕
音 1 ピアノ専修は必修。
他専修生でも、ピアノに興味と意欲があれば受講可。
〔授業の概要〕
バロックから現代に至るピアノ（チェンバロ）ソロ、連弾、歌曲、他楽器とのデュオ等の作品を教材とする。楽譜は毎授業開始時に配布する。
楽譜を手にしたなら、取り敢えずピアノに向かって弾き始めるということをせずに、楽譜を読むことから始めよう。まずは、大掴みに作品の様式と形式を捉える。次に、音の動き、和音の連なりを確認していく。その際、テンポ、曲想はもちろんのこと、強弱、アーティキュレーション、フレージング、ペダリング等にもできる限り目を通す。調性音楽であるなら転調の移り変わりを把握しよう。ここまでの作業は、当面、受講生皆で意見を出し合いながら進めていく。
読譜の後、初見奏に臨む。予め読み取った情報をどこまで演奏に反映させることができるかは、奏者の集中力に関わってくるであろう。さらには、初見奏での反省を生かし、二度目の演奏を充実した内容に進化させる能力も身につけられたらと考えている。受講生の自主的、積極的な参加が望まれる。
こうした初見奏の訓練を通して培われる読譜力と集中力が、各人のピアノ演奏能力の向上につながっていくことを願っている。
〔授業の到達目標〕
限られた時間の中で、楽譜から作品の概要、すなわち作曲家の意図を読み取り、初見奏と言えども、音を追うだけにとどまらない音楽的な演奏ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　初見演奏を学ぶとはどういうことか？また、その学び方について
第 2 回　ピアノソロの小品①
　　ごく易しい作品
第 3 回　ピアノソロの小品②
　　易しい作品
第 4 回　ピアノソロの小品③
　　少し難易度を上げて
第 5 回　連弾の小品
第 6 回　歌曲の伴奏
第 7 回　バロックの作品①
　　ポリフォニー
第 8 回　バロックの作品②
　　ホモフォニー
第 9 回　古典派の作品 ソナタ形式を把握する①
第 10 回　古典派の作品 ソナタ形式を把握する②
第 11 回　ロマン派の作品
第 12 回　近代の作品
第 13 回　現代の作品①
　　ごく易しい無調の作品
第 14 回　現代の作品②
　　少し難易度を上げて
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 毎授業時、５～７名の受講生が演奏をすることになるが、それに対し初見奏の観点からの指導を行う。
• 毎授業後、課題曲 1 題の初見奏が宿題として課される。これを録音（録画）し、３～４日中に提出してもらうが、それに対する講評をClassroomのストリームに個別に返す。
〔授業時間外の学習〕
• 授業で取り上げた作品全体について復習をし、演奏を試みる。
• 毎授業で課される宿題に取り組む。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に配布。
〔成績評価〕
平常点50％、実技テスト50％とする。
平常点： 授業に能動的参加をしているか。努力は見られるか。成果はあったか。
実技テスト（初見演奏）: 与えられた予見時間内に読譜を十分に行えたか。集中力を持って初見演奏に臨み、音を追うのみにとどまることのない、音楽的な表現ができたか。
Ｓ 総合点90点以上の者（上記項目の全てを満たし、優秀と認められる者）
Ａ 総合点80点以上の者（上記項目をよく満たしていると認められる者）
Ｂ 総合点60点以上の者（上記の項目を一定レベルにおいて満たしていると認められる者）
Ｃ 総合点50点以上の者（上記の項目のいくつかにおいてやや不足があると認められる者）
Ｄ 総合点50点未満の者（上記の項目の多くに不足があると認められる者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1204M
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 身体と表現との調和

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　集中
実務経験なし
演習（技術）

志村 寿一

〔履修条件〕
演奏の際の身体の使い方・動きについて学びたい人。演奏による身体の痛みを持っていたり、立ち方、楽器の構え方、奏法、練習方法などについて悩みを持っている人。

身体の動きと自分の出す音や声との関連性について、良い音、特に倍音の豊かな音とはどのようなものなのかについて、また自然な音楽によるパフォーマンスとはどのようなものなのかを探求したい全てのジャンルの生徒が対象。
〔授業の概要〕
毎回クラス内で数人の生徒に短いパフォーマンスをしてもらい、それに対して教師がアレクサンダー・テクニーク等の知識をベースとした独自のメソッドにより、アドバイスする。
聴講している生徒はパフォーマンスを見て聴いて、身体の使い方と生み出される音や声との関連性について、一緒に観察し学ぶ。実際にパフォーマンスをする生徒は仕上がっている曲（作品）を持ってくる必要はなく、簡単なスケールや曲の一部分、あるいは開放弦等のシンプルな音を弾く（声を出す）だけでも大丈夫である。
〔授業の到達目標〕
自分の心と身体を含む、自己全体のより良い使い方を学び、“部分”ではなく常に“全体性”を持って動き、演奏し、自然に表現することの重要性を理解する。
〔授業計画〕
第 1 回　“自然”で“個性的”な演奏とは
第 2 回　身体の構造と動きについて
第 3 回　身体の使い方と音・音楽との関連性について
第 4 回　実践①
第 5 回　実践②
第 6 回　実践③
第 7 回　実践④
第 8 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、必要に応じて個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
日常生活の中において普段からどのように自分の身体を使っているかが、パフォーマンスの質そのものに大きな影響を及ぼすことを理解し、自分の身体の動きについて常に考えることを習慣づける。
〔教科書・参考書等〕
その都度必要に応じて資料を配付する。

参考資料として、
志村寿一「ヴァイオリン演奏のための身体と音楽との調和」（せきれい社）
続・身体と音楽との調和/ヴァイオリン演奏のための志村メソッド（せきれい社）を推薦する。
〔成績評価〕
成績評価については、出席および授業参加への積極性50％、レポート課題50％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート課題未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2201M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 第一実技Ⅰ・Ⅱ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
実技
必修

永井 由比

〔履修条件〕
全学生の専門実技として必修科目である。
〔授業の概要〕
全ての授業の中で、一番関心・意欲を持って取り組むべき授業であり、演奏技術、表現力を身につけることを目的とする。
全学生が各自の専修実技を担当講師のもとで、本科は週 1 回50分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。
試験は前期・後期と 2 回行い、特に後期試験はレッスンを20回以上受講しないと試験を受ける権利を得ることができない（ただし、声楽については 1 年次のみ前期には試験を行わない）。1 年次後期試験と 2 年次前期試験の成績優秀者は学内演奏会に出演することができ、2 年次後期試験の成績優秀者は卒業演奏会に出演することができる。

〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一での授業となるため、到達目標は各自異なる。
専門実技のテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標になるが、担当講師が各学生のレベルを把握し、レベルに応じてエチュード、楽曲等を与え、与えた課題をレッスンを通して演奏できるようにしていくことを到達目標とする。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。
第 2 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 3 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 4 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 5 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 6 回　楽曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 7 回　試験曲の検討または新しい課題の検討
第 8 回　試験曲の決定
第 9 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは与えられた課題のレッスン
第 10 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは与えられた課題のレッスン
第 11 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは与えられた課題のレッスン
第 12 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは与えられた課題のレッスン
第 13 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは与えられた課題のレッスン
第 14 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
第 15 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
第 16 回　新たな課題の検討
第 17 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 18 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 19 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 20 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 21 回　楽曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 22 回　試験曲の検討
第 23 回　試験曲の決定
第 24 回　エチュードおよび試験曲研究
第 25 回　エチュードおよび試験曲研究
第 26 回　エチュードおよび試験曲研究
第 27 回　エチュードおよび試験曲研究
第 28 回　エチュードおよび試験曲研究
第 29 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、担当教員が随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に120時間以上要する。
〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。
〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。
S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2450M/MUS4450M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 副科実技Ⅰ・Ⅱ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　通年
実技
必修

永井 由比

〔履修条件〕
全学生の必修科目である。
なお、他専攻の学生も履修することができる。
ミュージカルは、声楽専修のみ履修可。
〔授業の概要〕
全学生が各自の実技担当講師のもとで、週 1 回20分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンとなるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていくが、意欲を持ってレッスンに向かう姿勢が求められ、基礎的な演奏技術と表現力を身につけていく。
試験は後期に 1 回行い、20回以上のレッスンを受けることにより試験を受ける権利を得ることができる。
〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。
副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討

※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。
第 2 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 3 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 4 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 5 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 6 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 7 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 8 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 9 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 10 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 11 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 12 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 13 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 14 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 15 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 16 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 17 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 18 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 19 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 20 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 21 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 22 回　試験曲の検討
第 23 回　試験曲の決定
第 24 回　試験曲のレッスン
第 25 回　試験曲のレッスン
第 26 回　試験曲のレッスン
第 27 回　試験曲のレッスン
第 28 回　試験曲のレッスン
第 29 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、担当教員が随時フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。
S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
MUS2351M/MUS4351M

〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
○

## 第二実技Ⅰ・Ⅱ

芸術科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
4単位　通年
実技

永井 由比

〔履修条件〕
別途レッスン料を支払う必要がある。
他専攻の学生も履修することができる。
ミュージカルは、声楽専修のみ履修可。
〔授業の概要〕
副科実技はレッスン時間が短いため、別途徴収にはなるが、レッスン時間を40分にする「第二実技」という制度がある。各自の実技担当講師のもとで、週1回40分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンとなるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていくが、意欲を持ってレッスンに向かう姿勢が求められ、基礎的な演奏技術と表現力を身につけていく。
試験は後期に1回行い、20回以上のレッスンを受けることにより試験を受ける権利を得ることができる。
〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。
副科実技としてのテクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。
第 2 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 3 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 4 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 5 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 6 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 7 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 8 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 9 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 10 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 11 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 12 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 13 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 14 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 15 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 16 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 17 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 18 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 19 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 20 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 21 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 22 回　試験曲の検討
第 23 回　試験曲の決定
第 24 回　試験曲のレッスン
第 25 回　試験曲のレッスン
第 26 回　試験曲のレッスン
第 27 回　試験曲のレッスン
第 28 回　試験曲のレッスン
第 29 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、担当教員が随時フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。
〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。
S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2350M/MUS4350M
〔学位授与方針との関係〕
③、④、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## 伴奏Ａ（１）/伴奏Ｂ（１）

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生のみ履修可。
〔授業の概要〕
前期・後期とも同一学生との５回以上の第一実技レッスン時の伴奏および演奏発表（実技試験・学内演奏会・修了演奏会）を以って各々単位認定を行う。
“伴奏受講票”を使用のこと。
〔授業の到達目標〕
様々な楽器に関心を持ち、「伴奏」という立場に責任を持ち、意欲的にアンサンブルを作り上げることができる。そこで得た経験を試験、演奏会という場につなげることができる。
〔授業計画〕
各々の実技担当教員のレッスン計画による。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2248M/MUS4248M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 伴奏Ａ（２）/伴奏Ｂ（２）

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生のみ履修可。
〔授業の概要〕
前期・後期とも同一学生との５回以上の第一実技レッスン時の伴奏および演奏発表（実技試験・学内演奏会・修了演奏会）を以って各々単位認定を行う。
“伴奏受講票”を使用のこと。
〔授業の到達目標〕
様々な楽器に関心を持ち、「伴奏」という立場に責任を持ち、意欲的にアンサンブルを作り上げることができる。そこで得た経験を試験、演奏会という場につなげることができる。
〔授業計画〕
各々の実技担当教員のレッスン計画による。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2248M/MUS4248M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 海外特別演習Ａ / Ｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
2単位　前期集中
演習（技術）

柏原 佳奈、井上 由紀

〔履修条件〕
研修旅行に参加して学ぶ意欲の高い者。
〔授業の概要〕
ハンガリー・ブダペストのリスト音楽院にて、１週間のレッスン研修を行う。
後半は、作曲家ゆかりの地を訪れ音楽家の業績を辿ることにより、芸術全般の知識・教養を深める。
〔授業の到達目標〕
内容の濃い充実した旅行とする。そのためには、早くから個人の実技練習を十分に積んでおく。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　旅行会社による説明会①
第 3 回　訪問都市についての勉強会①
第 4 回　訪問都市についての勉強会②
第 5 回　旅行会社による説明会②
第 6 回　訪問都市についての勉強会③
第 7 回　受講曲による試演会
第 8 回　研修旅行
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
訪れる街の歴史や、関係する作曲家について深く学んでおく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
事前授業への取り組み30％、研修中の取り組み50％、レポート20％で総合的に評価する。
Ｓ　総合点90点以上の者（事前授業の内容を深く理解し、研修旅行に積極的に参加し、レッスンへの取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点80点以上の者（事前授業の内容を理解し、研修旅行に積極的に参加し、レッスンへの取り組みが良好だった者）
Ｂ　総合点60点以上の者（事前授業の理解・レッスンへの取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点50点以上の者（事前授業の理解・レッスンへの取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点50点未満の者（事前授業の内容を理解しなかった者、レポート未提出者、レッスンへの取り組み・受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1248M/MUS3248M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 特別演習Ａ / Ｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　通年
実務経験なし
演習（技術）
必修

志村 寿一、井上 由紀、布施 雅也

〔履修条件〕
Ａ・Ｂ共に全専修必修。
〔授業の概要〕
特別公開講座、公開講座、学内演奏会、定期演奏会、卒業演奏会の5つが特別演習の内容である。特別公開講座では国内外で活躍している著名な演奏家などによる演奏を聴き、それについてのレポートを提出する。公開講座は卒業生を含む様々な演奏家による演奏会や講義を中心とする。定期演奏会は２夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による

演奏会である。
これらの演奏会を聴講することことで単位認定を行う。

〔授業の到達目標〕
音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんのことだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことから得るものの大きさも是非認識して欲しい。様々な演奏、楽曲を聴くことにより、音楽の理解力をさらに深めることができる。
〔授業計画〕
特別公開講座・公開講座・学外演奏会・学内演奏会などの日程・演目の詳細はオリエンテーション時に発表するが、日程は変更となる場合や追加となる場合もあるので、常に掲示板やClassroomを確認すること。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
特別公開講座のみについては、レポートを提出後、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
ゲストの音楽家や演奏される楽曲について調べ、理解を深めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
全ての演目に出席することを前提とし、授業への取り組みとレポートにより評価する。
S 公演の内容を深く理解し、取り組みが的確かつ秀でた者
A 公演の内容を理解し、取り組みが的確だった者
B 公演の内容を理解し、取り組みが良好だった者
C 公演の内容を理解し、取り組みが不十分だった者
D 公演の内容を理解しなかった者、取り組み・受講態度等に問題のある者
〔科目ナンバリング〕
MUS2203M/MUS4200M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 特別講座

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　後期集中
実務経験なし
講義
必修

中山 博之

〔履修条件〕
音 1 必修。
〔授業の概要〕
編曲作品は演奏会で取り上げられることはもちろん、映画・ゲーム・アニメ・CM音楽にも多々用いられている。この講座では、編曲法について様々なスタイルを紹介しながら想像・創造することの大切さを学んでいく。
〔授業の到達目標〕
様々なスタイルの編曲法を学ぶことにより、音楽への想像力・創造力をさらに高め、深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　編曲の重要性について
第 2 回　ゲーム音楽のピアノ編曲の手法
第 3 回　メドレーの手法
第 4 回　オーケストレーションについて
第 5 回　新しい譜面に対する解釈
第 6 回　コード(和音)による色彩の表情の変化
第 7 回　編曲法
第 8 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
講座後の復習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、レポート50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、レポートへの取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、レポートへの取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解し、レポートへの取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解し、レポートへの取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2000M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## コラボレイト実習Ａ（１）/Ｂ（１）

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習

柏原 佳奈

〔履修条件〕
専攻主任からの指名により履修できる。
〔授業の概要〕
専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会・卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、５回以上の稽古への参加と発表を以って単位認定を行う。
“コラボレイト実習受講票”を使用のこと。
なお、単位認定は、前期・後期１回ずつを限度とする。自らが与えられた場に対して関心を持ち、存在意義を考察し演奏表現に結びつけていくことが求められる。
〔授業の到達目標〕
• 演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶことができる。
• 音楽専攻の催しの場合には、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　打合せ
　　各々の公演担当教員の稽古計画による。
第 2 回　稽古への参加①
　　※ 稽古への参加は１回につき、授業３回分に相当。
第 3 回　稽古への参加②
第 4 回　稽古への参加③
第 5 回　本番
　　※本番は授業５回分に相当。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
音楽専攻・演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかなくてはならない。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
公演台本等、各公演により異なる。
〔成績評価〕
授業態度50％、課題50％にて総合的に評価する。
Ｓ　90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ａ　80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ｂ　60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2550M/MUS4551M
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## コラボレイト実習Ａ（2）/Ｂ（2）

芸術科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習

柏原 佳奈

〔履修条件〕
専攻主任からの指名により履修できる。
〔授業の概要〕
専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会・卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、５回以上の稽古への参加と発表を以って単位認定を行う。
“コラボレ
イト実習受講票”を使用のこと。
なお、単位認定は、前期・後期１回ずつを限度とする。自らが与えられた場に対して関心を持ち、存在意義を考察し演奏表現に結びつけていくことが求められる。
〔授業の到達目標〕
• 演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶことができる。
• 音楽専攻の催しの場合には、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　打合せ
　　各々の公演担当教員の稽古計画による。
第 2 回　稽古への参加①
　　※ 稽古への参加は１回につき、授業３回分に相当。
第 3 回　稽古への参加②
第 4 回　稽古への参加③
第 5 回　本番
　　※本番は授業５回分に相当。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
音楽専攻・演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかなくてはならない。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
公演台本等、各公演により異なる。
〔成績評価〕
授業態度50％、課題50％にて総合的に評価する。
Ｓ　90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ａ　80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ｂ　60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2550M/MUS4551M
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 音楽理論［和声］III a

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
水曜 4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

平井 正志

〔履修条件〕
音２（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声］I・II」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
２年次においては、属９の和音、借用和音（準固有、副属和音）、サブ・ドミナント諸和音（副七の和音、四度の付加６）と各種の変化和音（増六、ドリアの四度、ナポリの６の和音）を扱ったバス課題の実施を通じて、より多様で高度な声部進行法の練達を目指す。
さらに、それらの和音を含み、かつ近親転調を伴うソプラノ課題の実施によって、２年間に学んだ和声法の総合的な習熟を図る。
〔授業の到達目標〕
• 属９の和音について、９音との関係における配置の制限、９音の限定進行とそれに伴う声部間の同時進行における禁則の留意点を理解し、課題の実施に反映できること。
• 借用和音や変化和音などの多彩な和音を扱ったバス課題を確実に実施できる力を養うことができる。
• 転調を含むソプラノ課題の実施を通して、和声進行の本質が把握できる素養を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　属９の和音
配置の制限、９音の限定進行とそれに伴う声部間の同時進行における禁則の留意点についての説明、出題の第一回
第 2 回　属９の和音
第一回の出題の添削と、第二回の出題
第 3 回　属９の和音
実施課題確認・第二回
第 4 回　準固有和音
借用和音の概説
半音階的半音関係固有和音と混交する際の注意
対斜についての注意
出題第1回
第 5 回　準固有和音
実施課題確認・第１回と、出題第２回
第 6 回　準固有和音
実施課題確認・第２回
第 7 回　借用のドミナント和音
概論
五度五度の和音の各種形態について限定進行と声部進行法について
出題第１回
第 8 回　借用のドミナント和音
実施課題確認・第１回と出題第２回
第 9 回　借用のドミナント和音
実施課題確認・第２回と出題第３回
第 10 回　借用のドミナント和音
実施課題確認・第３回
第 11 回　五度五度の下方変位の和音
変化和音の概論
増六の和音の各種形態とその通称
第 12 回　五度五度の下方変位の和音
連結の可能性
声部進行の注意点
出題第１回
第 13 回　五度五度の下方変位の和音
実施課題確認・第１回と出題第２回
第 14 回　五度五度の下方変位の和音
実施課題確認・第２回と出題第３回
第 15 回　五度五度の下方変位の和音
実施課題確認・第３回
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の添削指導に加え、必要に応じてメール送付かClassroomへの再提出によって、実施課題を添削指導する。
〔授業時間外の学習〕
講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。やむを得ない事情で欠席した場合は、講義内容を他の受講者から入手するか参考書を調べて自習し、出題された課題を実施して提出すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：資料と課題を配布。
参考書：執筆責任者・島岡　譲「和声『理論と実習』」第一巻・第二巻（音楽之友社）
〔成績評価〕
前期末に筆記試験課題のレポート提出を行う。筆記試験の成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、課題の実施実績と課題の実施内容についても勘案し、総合的な判断によって合否を決定する。成績の評価基準は、筆記試験答案40%、課題の実施状況40%、授業への取り組み姿勢20%とする。
S　90点以上の者（重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して自在な練達が感じられる）
A　80点以上の者（重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い）
B　60点以上の者（概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足）
C　50点以上の者（重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない）
D　50点未満の者（重要な公理が理解できておらず、和声法を修めたと認めがたい）
〔科目ナンバリング〕
MUS3010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声］Ⅳａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
水曜4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

平井 正志

〔履修条件〕
音２（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声］I・II・III」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
２年次においては、属９の和音、借用和音（準固有、副属和音）、サブ・ドミナント諸和音（副七の和音、四度の付加６）と各種の変化和音（増六、ドリアの四度、ナポリの６の和音）を扱ったバス課題の実施を通じて、より多様で高度な声部進行法の練達を目指す。
さらに、それらの和音を含み、かつ近親転調を伴うソプラノ課題の実施によって、２年間に学んだ和声法の総合的な習熟を図る。
〔授業の到達目標〕
• 借用和音や変化和音などの多彩な和音を扱ったバス課題を確実に実施できる力を養うことができる。
• 転調を含むソプラノ課題の実施を通して、和声進行の本質が把握できる素養を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　二度の七、四度の七の和音
七の和音について総論
副７の和音における第７音の予備と限定進行
第二転回形における低音４度の予備について
出題第1回
第 2 回　二度の七、四度の七の和音
実施課題確認・第１回と出題第２回
第 3 回　二度の七、四度の七の和音
実施課題確認・第２回
第 4 回　ドリアの四度の七、ナポリの六の和音
和音進行の可能性
限定進行
出題第１回
第 5 回　ドリアの四度の七、ナポリの六の和音
実施課題確認・第１回と出題第２回
第 6 回　ドリアの四度の七、ナポリの六の和音
実施課題確認・第２回と出題第３回
第 7 回　付加六、付加四六の和音
「ドリアの四度の七、ナポリの六の和音」実施課題確認・第３回
「付加六、付加四六の和音、長調の付加四六について」
第５音の予備
例題の実施と確認
第 8 回　近親転調を伴うソプラノ課題
近親転調概論
和音設定概論
出題第１回と実施法解説
第 9 回　近親転調を伴うソプラノ課題
実施課題確認・第１回
出題第２回出題と実施法解説
第 10 回　近親転調を伴うソプラノ課題
実施課題確認・第２回
出題第３回出題と実施法解説
第 11 回　近親転調を伴うソプラノ課題
実施課題確認・第３回
出題第４回出題と実施法解説
第 12 回　近親転調を伴うソプラノ課題
実施課題確認・第４回
出題第５回出題と実施法解説
第 13 回　近親転調を伴うソプラノ課題
実施課題確認・第５回
後期レポート課題の出題
第 14 回　ソプラノ課題：要諦の総括
実施法要諦の解説
第 15 回　後期レポート課題・評価判定基準等の説明
後期レポートの提出に備え、教程内容の理解度確認

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の添削指導に加え、必要に応じてメール送付かClassroomへの再提出によって、実施課題を添削指導する。
〔授業時間外の学習〕
講義の回と実施した課題内容を添削する回を交互に行う。出題された課題は必ず授業に先立って実施し、かつ鍵盤楽器によって実際に音を出し、内容を確認、点検しておくこと。やむを得ない事情で欠席した場合は、講義内容を他の受講者から入手するか参考書を調べて自習し、出題された課題を実施して提出すること。
〔教科書・参考書等〕
教科書：資料と課題を配布。
参考書：執筆責任者・島岡　譲「和声『理論と実習』」第一巻・第二巻（音楽之友社）
〔成績評価〕
後期末に最終実施課題をレポートとして提出する。レポートの成績を元に下記の評定を行うが、単位認定の条件としては、課題の実施実績と課題の実施内容についても勘案し、総合的な判断によって合否を決定する。成績の評価基準は、レポートの内容40%、課題の実施状況40%、授業への取り組み姿勢20%とする。
S　90点以上の者（重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して自在な練達が感じられる）
A　80点以上の者（重要な公理を確実に理解し、課題の実施に際して習熟度が高い）
B　60点以上の者（概ね重要な公理が理解できているが、課題の実施に際しては練達不足）
C　50点以上の者（重要な公理の理解不足が散見され、課題実施に向けた努力が足りない）
D　50点未満の者（重要な公理が理解できておらず、和声法を修めたと認めがたい）
〔科目ナンバリング〕
MUS4010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声］III b

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
2単位　前期
水曜 4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

関戸 正清

〔履修条件〕
音２（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声］Ⅰ・Ⅱ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
古典的な音楽作品における和声（ハーモニー）を読み解くための基礎知識を習得する。
授業内容は「分析」（主に読むこと）と「実施」（主に書くこと）の二つに分かれ、それぞれ異なる進度で交互に実習を進めていく。
「分析」では、各種の和音や連結用法など、分析に必要な知識を幅広く学び、それらを楽譜上で的確に認識できることを目指す。
「実施」では、課題の和声を自らの手で書き上げる経験を通じて、分析力の土台となる音楽書法の技術的詳細の一端に触れる。
なお、状況に応じて進度や項目を変更することがある。
〔授業の到達目標〕
基礎的な和声を分析・実施することができる。
〔授業計画〕
第1-2回
既習内容の確認等、（分析）転調①
第3-4回
（実施）属七和音①、（分析）転調②
第5-6回
（実施）属七和音②、（分析）転位音①
第7-8回
（実施）属七和音③、（分析）転位音②
第9-10回
（実施）属七和音④、（分析）転位音③
第11-12回
（実施）属七和音⑤、（分析）反復進行等
第13-14回
（実施）属九和音①、（分析）確認等
第15回
総括

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題の分析・実施について確認・添削を授業内で行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる課題を読譜・演奏により確認すること。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：島岡譲／他『和声　理論と実習Ⅰ』（音楽之友社）
参考書：島岡譲『和声と楽式のアナリーゼ』（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業への取り組み・受講態度等40％、定期試験60％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）

D 総合点が50点未満の者（受講態度等に問題があった者、授業内容を理解しなかった者、試験を受けなかった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［和声］Ⅳｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
水曜 4限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

関戸 正清

〔履修条件〕
音２（日本音楽専修以外）必修。
「音楽理論［和声］Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
古典的な音楽作品における和声（ハーモニー）を読み解くための基礎知識を習得する。
授業内容は「分析」（主に読むこと）と「実施」（主に書くこと）の二つに分かれ、それぞれ異なる進度で交互に実習を進めていく。
「分析」では、各種の和音や連結用法など、分析に必要な知識を幅広く学び、それらを楽譜上で的確に認識できることを目指す。
「実施」では、課題の和声を自らの手で書き上げる経験を通じて、分析力の土台となる音楽書法の技術的詳細の一端に触れる。
なお、状況に応じて進度や項目を変更することがある。
〔授業の到達目標〕
基礎的な和声を分析・実施することができる。
〔授業計画〕
第1-2回
（実施）属九和音②、（分析）総合分析①
第3-4回
（実施）属九和音③、（分析）総合分析②
第5-6回
（実施）属九和音④、（分析）総合分析③
第7-8回
（実施）属九和音⑤、（分析）総合分析④
第9-10回
（実施）D諸和音①、（分析）総合分析⑤
第11-12回
（実施）D諸和音②、（分析）総合分析⑥
第13-14回
（実施）確認等、（分析）確認等
第15回
総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題の分析・実施について確認・添削を授業内で行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる課題を読譜・演奏により確認すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：島岡譲／他『和声　理論と実習Ｉ』（音楽之友社）
参考書：島岡譲『和声と楽式のアナリーゼ』（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業への取り組み・受講態度等40％、定期試験60％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（受講態度等に問題があった者、授業内容を理解しなかった者、試験を受けなかった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4010M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 対位法Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
講義

池田 哲美

〔履修条件〕
和声の基本的な知識が必要。
対位法および対位法による楽曲に興味を持ち、対位法による楽曲作成・分析に意欲を持つ者。
〔授業の概要〕
J.S.BACHの対位法による楽曲の分析と共に、具体的な対位法の手法を、簡単な課題の実施を行うことで、その用法を学習する。インベンション、シンフォニア、平均律クラヴィーア等の楽曲を分析する。

実施では、二声の対位法を第一類（全音符）～第五類（華麗対位法）まで学び、課題を実施する。また、フーガの主題の作成にも取り組む。

〔授業の到達目標〕

対位法の知識と具体的な創作によって、フーガその他対位法による楽曲をより身近に感じ、実際の演奏に活用できる。

〔授業計画〕

第 1 回　導入
多声部楽曲の一般形態

第 2 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
音域

第 3 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
方法と禁止事項①

第 4 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
方法と禁止事項②

第 5 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
実習①

第 6 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
実習②

第 7 回　BACH　インベンションからおよび二声対位法第一類
全音符
様々な調
dur ①

第 8 回　BACH　シンフォニアからおよび二声対位法第一類
全音符
様々な調
dur ②

第 9 回　BACH　シンフォニアからおよび二声対位法第二類
二分音符
方法と禁止事項①

第 10 回　BACH　シンフォニアからおよび二声対位法第二類
二分音符
方法と禁止事項②

第 11 回　BACH　シンフォニアからおよび二声対位法第二類
二分音符
実習①

第 12 回　BACH　シンフォニアからおよび二声対位法第二類
二分音符
様々な調
dur ①

第 13 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
方法と禁止事項①

第 14 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
方法と禁止事項②

第 15 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
様々の調
dur ①

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。

〔授業時間外の学習〕

課題の実施の宿題を含めた復習と、対位法楽曲に日頃から親しむこと。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

J.S.BACHの対位法による楽曲と対位法の各教科書における重要部分を、進み具合に応じて、適宜配布。

〔成績評価〕

ほぼ毎回、小テストとして分析・課題の実施を行う。評価は授業への取り組み40％、学期末試験60％を総合的に評価する。

S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）

A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）

B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）

C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）

D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕

MUS3011M

〔学位授与方針との関係〕

②、③

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

—

## 対位法 II

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
水曜 2限
実務経験なし
講義

池田 哲美

〔履修条件〕
「対位法Ｉ」の単位を修得していること。
和声の基本的な知識が必要。
対位法および対位法による楽曲に興味を持ち、対位法による楽曲作成・分析に意欲を持つ者。
〔授業の概要〕
J.S.BACHの対位法による楽曲の分析と共に、具体的な対位法の手法を、簡単な課題の実施を行うことで、その用法を学習する。インベンション、シンフォニア、平均律クラヴィーア等の楽曲を分析する。
実施では、二声の対位法を第一類（全音符）～第五類（華麗対位法）まで学び、課題を実施する。またフーガの主題の作成にも取り組む。
〔授業の到達目標〕
対位法の知識と具体的な創作によって、フーガその他対位法による楽曲をより身近に感じ、実際の演奏に活用できる。
〔授業計画〕
第 1 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
様々の調
dur ②
第 2 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
様々の調
dur ③
第 3 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
様々の調
moll ①
第 4 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
様々の調
moll ②
第 5 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
実習①
第 6 回　BACH　平均律クラヴィーア第 1 巻および二声対位法第三類
四分音符
実習②
第 7 回　BACH　オルガン曲　および二声対位法第四類
方法と禁止事項①
第 8 回　BACH　オルガン曲　および二声対位法第四類
方法と禁止事項②
第 9 回　BACH　オルガン曲　および二声対位法第四類
実習①
第 10 回　BACH　オルガン曲　および二声対位法第四類
実習②
第 11 回　BACH　ゴールドベルク変奏曲
二声対位法第五類
華麗対位法
方法と禁止事項①
第 12 回　BACH　ゴールドベルク変奏曲
二声対位法第五類
華麗対位法
方法と禁止事項②
第 13 回　BACH　ゴールドベルク変奏曲
二声対位法第五類
華麗対位法
実習①
第 14 回　BACH　ゴールドベルク変奏曲
二声対位法第五類
華麗対位法
実習②
第 15 回　年度末のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
課題の実施の宿題を含めた復習と、対位法楽曲に日頃から親しむこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
J.S.BACHの対位法による楽曲と対位法の各教科書における重要部分を、進み具合に応じて、適宜配布。
〔成績評価〕
ほぼ毎回、小テストとして分析・課題の実施を行う。評価は授業への取り組み40％、学期末試験60％を総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4011M

〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## コード論Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2年生
2単位　前期
木曜4限
実務経験あり
講義

小林 真人

〔履修条件〕
コードの仕組みや活用に関心のある学生。
〔授業の概要〕
コードとは何かを知り、それぞれのコードを覚える。
メロディに対して、シンプルなコード付けをできるようにする。
ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏する際のアイデアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。
コードを元に柔軟に演奏する方法を体験する。
コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。
〔授業の到達目標〕
• 3和音と4和音のコードを覚える。
• セカンダリードミナントセブンを覚える。
• メロディに対して簡単なコード付けができる。
• コードの機能と連結を理解して、それを元にしたシンプルなコードの発展のさせ方を知る。それらをピアノ等で演奏、表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　コードとは
第 2 回　コード論　入門編①
　　3和音
第 3 回　コード論　入門編②
　　4和音
第 4 回　コード論　基礎編①
　　3和音のダイアトニックコード
第 5 回　コード論　基礎編②
　　4和音のダイアトニックコードと機能
第 6 回　コード論　基礎編③
　　同じ機能内での代理
第 7 回　コード付けの実践①
　　単純なコード付け
第 8 回　コード付けの実践②
　　ボイシング
第 9 回　コード論　基礎編④
　　ドミナントモーションとⅡm7-Ⅴ7
第 10 回　コード論　基礎編⑤
　　セカンダリードミナントセブン
第 11 回　コード論　基礎編⑥
　　セカンダリードミナントセブンのⅡm7-Ⅴ7
第 12 回　コード付けの実践③
　　リハモナイズとリズムパターンの組み合わせ
第 13 回　コード付けの実践④
　　循環コードと逆循環コード
第 14 回　コード付けの実践⑤
　　様々なコード進行と発展
第 15 回　学習到達度の確認と総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
復習・予習をして授業に臨むこと。
ピアノ等の和音が出せる楽器を使い、コードのサウンド感を「感覚的」に捉えられるようにする。
これらの学修に60時間を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に、その都度プリントを渡す。
〔成績評価〕
授業態度（出席含む）50％、課題発表への取り組む姿勢・レポート等での総合評価50％
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS3012M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
◎
※芸術科2年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
—

## 楽器法

芸術科 ＞ 音楽専攻
2年生
2単位　前期集中
実務経験あり
講義

布施 雅也

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
人が音を奏でる手段としての楽器は太古から今日に至るまで、実に多くの種類が作られてきた。伝達、信号として登場した楽器は次第に歌や踊りの伴奏として使われ、やがて

音楽を伝える主役楽器となった。
授業では現在の管弦楽等で使われる楽器について講義するが、その楽器の原点である民族楽器についても触れる。木管、金管、打楽器、弦楽器に分類して、その誕生と現在の役割、使用楽曲、メンテナンス等についてゲスト講師をお招きして講義行っていただく。これら楽器の正確な知識は、あらゆる音楽に携わる全ての行動に必要不可欠であろう。また、人間の「声」は一種の楽器として取り扱われることもあるので、その構造についても触れる。
〔授業の到達目標〕
• 楽器というものが、どのように分類され、どのような歴史をたどって、現在使われているかを理解する。また作編曲、器楽指導に必要な楽器の基礎知識を学習することができる。
• 気鳴楽器、弦鳴楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、機械電気楽器の５つの楽器体系を理解し、全ての楽器がこれらに分類されることを理解できる。
•身近な「声」についても学び、自分の専門分野に生かすことができる。
〔授業計画〕
［進行予定］
１～２.管楽器・
・木管楽器：フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン
・金管楽器：トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、テューバ
３.弦楽器：ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス
4.打楽器 体鳴楽器：シンバル、トライアングル、ドラ、鍵盤楽器他
膜鳴楽器：太鼓、ティンパニー、タンバリン、ボンゴ他

５～６:ピアノの歴史、調律・分解
７.声
８.まとめ

［ポイント］
１.構造： 発音原理、楽器の材質
２.音域：調性、最低音、最高音、適切音域
３.特色：得意な奏法、不得意な奏法
４.同属楽器：調性の異なる同属楽器
５.歴史：楽器の誕生について
６.楽曲：この楽器を説明するのに適した楽曲
７.メンテナンス：楽器の取り扱い上での注意点
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
口頭質問にて、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
室内楽、管弦楽、声楽のコンサートを鑑賞し、使用される各楽器の特徴を調べておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考プリントを授業で配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み・受講態度、まとめのレポートの総合100％で評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS3004M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
○

## 音楽マネジメント

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
月曜 2限
実務経験あり
講義

楠瀬 寿賀子

〔履修条件〕
音楽や音楽家の社会的な役割を踏まえて、コンサートやアウトリーチ等の企画を考察する意欲を持つ者。
〔授業の概要〕
芸術音楽の制作のノウハウやスキルを学ぶだけでなく、音楽が自らの生きる力を高めるため、また、それによって生まれる豊かな社会を創出する、という考え方に基づいた音楽マネジメントが重要となる。
この授業では、基本的にはマネジメントの様々なシーンで使える考え方やスキルを学んでいくが、その背景にある音楽の社会的役割の重要性を深く考察し、グループディスカッションやワークショップの形態も交えながら、その考えに即した実施方法を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
積極的な興味・関心をもとに豊かな知識やスキルを得て、自らが社会におけるニーズに応えられるようになること。
• 音楽の企画制作の基礎的な能力を身につけることができる。
• 言葉にしにくい音楽・芸術を扱う上で必要な言語化の力を身につけることができる。
• コンサート・アウトリーチ・ワークショップ等の制作手法を理解し、自ら創造することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　音楽マネジメントとは
第 2 回　コンサートホールなど文化施設の変遷
　　日本における音楽マネジメントの歴史
第 3 回　芸術文化に関わる法律
　　文化芸術基本法、著作権法等
第 4 回　音楽企画の社会性①

音楽文化が社会にもたらすもの
第 5 回　音楽企画の社会性②
社会性を踏まえた企画の手法を学ぶ
第 6 回　音楽企画のビジネス的側面
クラシック音楽業界の現状等
第 7 回　企画内容の多様性
演奏家の才能を引き出す等
第 8 回　アウトリーチ・ワークショップ
実例から学ぶ
第 9 回　コンサート
企画立案の事例等
第 10 回　広報と宣伝について
広報・宣伝それぞれの活用方法や広報物の作り方
第 11 回　企画の作り方①
グループディスカッション
第 12 回　企画の作り方②
ワークショップ
第 13 回　企画の作り方③
具体的に企画を提案する
第 14 回　企画の作り方④
企画発表
第 15 回　総括・振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題提出や企画発表後に講評を行い、必要に応じてその後の授業の中で振り返りを行う。

〔授業時間外の学習〕
様々なコンセプトや構成のコンサートにできるだけ足を運び、運営者の立場での観察に努めてほしい。
マスコミやネット等で話題になる音楽や音楽事業、文化会館の動向等に関するニュースに注意を払い、些細なことでもよいので知識や考察の引き出しを増やすことに努めてほしい。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。
参考書等も授業内で適宜紹介する。

〔成績評価〕
筆記試験は行わないが、小論文課題を提出してもらう。評価は小論文50点、日常のレポートや発言等50点として採点する。
S　総合点90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS3000M

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
—

〔キャップ対象外〕
—

## 音楽史特講Ａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
2単位　前期
水曜 3限
実務経験なし
講義
選択

成田 麗奈

〔履修条件〕
特に条件はないが、授業内容に関心を持ち主体的に学ぶことは必須である。

〔授業の概要〕
音楽における描写・象徴・物語
音楽は、音によって表現をする表現芸術だが、文学的・視覚的なものと深く結びついた表現や作品タイトル・演奏指示などがあり、その歴史は長いものである。本講義では西洋芸術を中心に、音楽における描写・象徴・物語のさまざまなかたちや歴史的背景を理解することで、音楽を鑑賞・表現・教育することに生かしていくことを目指す。
授業計画は各回で中心的に取り上げる作品の成立時期に応じたものとなっているが、履修者の関心や理解度に応じて、授業の順序や内容を変更する場合がある。

〔授業の到達目標〕
• 音楽における描写・象徴・物語の特徴を理解することができる
• 音楽における描写・象徴・物語の歴史的背景を理解することができる。
• 自身の専攻と関連づけて、音楽における描写・象徴・物語に関して、適切な参考文献を参照し、考えたことを論理的な文章にすることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入：音楽における描写・象徴・物語の概要／参考文献や評価基準の説明
第 2 回　音楽における虫の鳴き声・羽ばたき
第 3 回　パストラル～パンの笛をめぐって
第 4 回　音楽における季節
第 5 回　音楽における「嵐」
第 6 回　狩の音楽
第 7 回　邦楽作品における花鳥風月
第 8 回　音楽における鳥（鳴き声・動態）
第 9 回　音楽における鐘の音～その象徴・意味をめぐって
第 10 回　水の音楽
第 11 回　音楽における「月の光」
第 12 回　舞曲～「スペイン風」を中心に
第 13 回　音楽による物語～ベルリオーズを中心に

第 14 回　音楽における冗談・笑い
第 15 回　講義全体の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
講義内およびコメント課題で質問等を受け付け、次回以降の講義内で応答する。
〔授業時間外の学習〕
• 毎回、授業の予習・復習となるような課題を提示する。任意で取り組むことを推奨する。
• 授業時間には作品の一部しか視聴できないため、授業外に全曲視聴することを推奨する。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時参考資料をGoogle Driveにアップロードする。
授業の配布資料に参考文献一覧を掲載する。期末レポート執筆にあたっては、図書・論文は必ず複数参照してよく読み込むこと。
〔成績評価〕
平常点（コメント課題、予習・復習課題）50%、期末レポート50%による。
なお、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS3020M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽史特講Ｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
金曜 5限
実務経験なし
講義

たかの 舞俐

〔履修条件〕
特に条件はないが、授業内容への関心と受講意欲は必須である。また、 これまで学んできた音楽史の知識を振り返りながら、さらに深く音楽に自分なりに考察する受講姿勢を期待する。
〔授業の概要〕
この授業では、西洋音楽のルーツである「グレゴリオ聖歌」のような単旋律の音楽がどのように多声になり、様々な楽器奏法が生まれていったのか、どのように構造が発展し、どのような経緯を辿っていったのか等、歴史的なアプローチだけではなく創作的な視点から西洋音楽史を考察していく。最終的には受講生が希望する作品、あるいは時代について発表してもらうので、そのために指導する時間も随時設けていく。
〔授業の到達目標〕
• 音楽史におけるそれぞれの作曲家の作風の変化を感じることができる。
• 音楽が時代によってどのように変化、または発展してきたのか、自分なりの考えを述べることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンスと導入
授業の方向性について　中世音楽からルネサンス前期へ　1 声から多声へ
第 2 回　ルネサンス後期からバロック音楽
対位法から和声へ　響きの変容を聞く
第 3 回　バッハの音楽の普遍性
抽象性とドラマ性　同世代の作曲家の音楽との相違
第 4 回　ウィーン古典派①バッハからの影響
モーツァルト、ベートーヴェンの作品における対位法
第 5 回　ウィーン古典派②市民の音楽へ
ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの音楽の相違
第 6 回　19世紀ロマン派の先駆者としてのベートーヴェン
中期の激動性から晩年の作風への変化
第 7 回　ロマン派の作曲家① それぞれの独自性
シューベルトの後期の歌曲、ブラームスのピアノ作品　西洋の黄昏
第 8 回　ロマン派の作曲家②　ピアニズム
シューマン、ショパンのピアノ作品で比較検証する
第 9 回　ワーグナーのオーケストレーション、ポリフォニー
後の作曲家に与えた影響を考察する
第 10 回　マーラーの音楽語法
交響曲第５番　独特な和声進行
第 11 回　世紀転換期ロシアの音楽
ラフマニノフ、スクリャービンの作風（ピアニズム、和音構造）
第 12 回　フランスの印象派・象徴主義の音楽
ドビュッシー《喜びの島》ラベル《オンディーヌ》 構造を比較検証
第 13 回　シェーンベルクのポリフォニー　無調へ
《グレの歌》《５つの管弦楽曲Op.16》
第 14 回　発表及び討論①
受講生による発表、質疑応答等
第 15 回　発表及び討論②
受講生による発表、質疑応答等

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
最終発表について授業内で準備状況を指導する。
発表後、講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業では多くの作曲家やその作品について触れることになるが、授業時間内に例として鑑賞できるのはほんの一部に過ぎない。図書館等に所蔵された各種のメディアを使って積極的に作品に触れ、理解を深めてもらいたい。
各これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時プリントを配布する。
参考書については、適宜紹介・指示する。
〔成績評価〕
受講姿勢20％、期末発表80%による。
総合評価100%中、90%以上かつ上位10%の者をS評価
80%以上をA評価
60%以上をB評価
50%以上をC評価
50％未満をD評価とする。
なお、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。
〔科目ナンバリング〕
MUS3021M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽史演習Ａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
演習（理論）
選択

成田 麗奈

〔履修条件〕
特に条件はないが、授業内容に関心を持ち主体的に学ぶことは必須である。
〔授業の概要〕
音楽について学び実践するうえで生じる、素朴かつ重要な疑問と関連するテーマについて、音楽学のさまざまな研究を参照しながら考えていく。参考書の講読と、履修者の専攻や関心を生かしたプレゼンテーションや議論を行う。
履修者の関心や理解度に応じて、授業の順序や内容を変更する場合がある。
〔授業の到達目標〕
• 授業で取り上げたテーマについて、主体的に考えることができる
• 音楽の多様性について問題意識を持って考えることができる
• 芸術について考える力を育み、言語化する習慣を身につけることができる。
• 授業で学んだことをふまえて、自身の専攻を関連づけて、適切な参考文献に基づいて、プレゼンテーションを行うことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入：授業の概要の説明、参考文献や評価基準の説明
第 2 回　音楽の普遍性～「音楽は世界共通言語」なのか？
第 3 回　東アジア人が西洋音楽をすることについて
第 4 回　音楽史の時代区分について
第 5 回　肖像画・伝記～作曲家のイメージ
第 6 回　「大作曲家」とは何か
第 7 回　「名作・傑作」とは何か
第 8 回　音楽史におけるマイノリティ（１）：女性音楽家をめぐって
第 9 回　音楽史におけるマイノリティ（２）：非西洋の音楽
第 10 回　音楽史におけるマイノリティ（３）：「マイナー」なジャンル
第 11 回　楽器とその奏法の歴史
第 12 回　演奏すること／聴くこと
第 13 回　楽譜について（１）：記譜法・演奏指示を中心に
第 14 回　楽譜について（２）：エディションの問題を中心に
第 15 回　講義全体の総括・議論
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
講義内およびコメント課題で質問等を受け付け、次回以降の講義内で応答する。
〔授業時間外の学習〕
• 毎回、授業の予習・復習となるような課題を提示する。任意で取り組むことを推奨する。
• 授業時間には作品の一部しか視聴できないため、授業外に全曲視聴することを推奨する。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。
参考書として、下記の文献を参照することを推奨する。
松本直美『ミュージック・ヒストリオグラフィー：どうしてこうなった？音楽の歴史』ヤマハミュージックメディア、2023年。

随時参考資料をGoogle Driveにアップロードする。
授業の配布資料に参考文献一覧を掲載する。プレゼンテーションにあたっては、図書・論文は必ず複数参照してよく読み込むこと。
〔成績評価〕
平常点評価50%（コメント課題、授業への主体的な貢献）および学期内担当部のプレゼンテーションの内容50%による。
なお、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。
Ｓ　総合点が90点以上の者

A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS4120M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽史演習Ｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　後期
金曜 5限
実務経験なし
演習（理論）

たかの 舞俐

〔履修条件〕
特に条件はないが、「現代音楽の流れについて知識を得たい」など、授業内容への関心と受講意欲は必須である。
〔授業の概要〕
この授業では、20世紀の「現代音楽」を取り上げる。無調の音楽から始まり、12音技法、セリエル音楽等、主にそれぞれの作曲家の作曲技法や音楽語法について講義を行う。
「現代音楽」の理解を深めるため、可能な限り、実際に授業で講師が準備した簡単な現代音楽の手法を演奏したり、実習することも行っていく。
また理解の促進のため、現代音楽を使用したバレエのDVD視聴等も導入する。
最終的には各受講者にそれぞれ興味のある現代の作品について発表してもらうか、あるいは当講座で学んだ現代音楽の作曲技法を用いた短い曲を作曲、発表してもらう。
〔授業の到達目標〕
以下２点を到達目標として掲げる。
• 現代音楽の作品に理解を深める。
• それぞれの音楽様式と社会との関連を感じ取ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンスと導入
　　現代音楽の先駆けとなる、すでに無調が見られる後期ロマン派の作品
第 2 回　12音技法①
　　12音技法の導入と実習
第 3 回　12音技法②
　　シェーンベルク、ウェーベルン、ベルクの作品における12音技法の使い方を比較する
第 4 回　ベルクのオペラにおける12音技法
　　オペラ《ルル》について
第 5 回　メシアンの音楽
　　メシアン の音楽語法、トータル・セリエリズムへ
第 6 回　トータル・セリエリズム
　　ピエール・ブーレーズの《主なき槌》を中心に
第 7 回　シュトックハウゼンの音楽
　　電子音楽のパイオニア
第 8 回　アメリカの作曲家①
　　アイヴスから始まり、同時代の女性作曲家ルース・クロフォード・シーガー、またカウエル、ケージの音楽について
第 9 回　アメリカの作曲家②
　　ミニマル・ミュージック、コンロン・ナンカロウの自動ピアノ、ハリー・パーチの創作楽器
第 10 回　スペクトル楽派
　　フランスの作曲家ジェラール・グリゼーの音楽を中心に
第 11 回　ジェルジ・リゲティ①
　　ジェルジ・リゲティの初期の作品からミクロポリフォニーについて
第 12 回　ジェルジ・リゲティ②
　　オペラ《ル・グラン・マカーブル》以降の作品について
第 13 回　新しいスタイルに向けて
　　たかの舞俐作品の音楽語法
　　民族音楽、ジャズ、ポップスからの影響
第 14 回　発表及び討論①
　　受講生による発表、質疑応答等
第 15 回　発表及び討論②
　　受講生による発表、質疑応答等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
最終発表のための指導を授業内で随時設けていく。各発表については、授業内で総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
図書館等に所蔵された各種のメディアや文献を積極的に活用し、理解を深めてもらいたい。
これらの学習に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時プリントを配布する。
参考書については、参考文献表を配布する他、授業中に適宜紹介・指示する。
〔成績評価〕
受講姿勢20%、期末発表80%による。総合評価100%中、
90%以上かつ上位10%の者をS評価
80%以上をA評価
60%以上をB評価
50%以上をC評価
50%未満をD評価とする。
なお、3分の2以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。
〔科目ナンバリング〕
MUS4121M

〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽療法概論

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
金曜 5限
実務経験なし
講義

鈴木 千恵子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
音楽療法とは、心身に障害のある方、発達の遅れや問題を持った方々へ治療・援助の手段として音楽を役立てることであるが、最近では病気や障害に限らず人間の健康な生活に役立てる音楽療法としてのアプローチまで幅広い考え方も広まっている。
本講義では、療法（セラピー）を考える前に、人間の生活と音楽との関わりや人間の健康とは何かを学ぶ。次に音楽療法の様々な背景を考えながら、基本的な知識を学んでいく。
〔授業の到達目標〕
人間の生活と音楽の関わりを理解し、さらに療法として音楽を用いる意義とその方法を理解することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　授業内容と目的等
第 2 回　人間の生活と健康・音楽
　　健康の定義と音楽の働き
第 3 回　音楽療法とは何か①
　　音楽療法の歴史
第 4 回　音楽療法とは何か②
　　楽曲研究
第 5 回　緩和ケアの音楽療法①
　　カナダ
第 6 回　緩和ケアの音楽療法②
　　日本
第 7 回　高齢者の音楽療法①
　　活動紹介
第 8 回　高齢者の音楽療法②
　　プログラム作成
第 9 回　高齢者の音楽療法③
　　受講生同士で練習
第 10 回　高齢者の音楽療法④
　　受講生同士で実践発表
第 11 回　児童の音楽療法
　　発達障害児・重度重複障害児
第 12 回　音楽療法の技術①
　　音楽技術
第 13 回　音楽療法の技術②
　　コミュニケーション技術
第 14 回　音楽の治療的機能
　　音楽の生理的、心理的、社会的働き
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後、個別に講評を行う。また、実践に関しては発表の後に振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行う。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書：松井紀和「音楽療法の手引き」（牧野出版）
　　松井紀和、鈴木千恵子他「音楽療法の実際」（牧野出版）
教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。
〔成績評価〕
授業の取組みと態度60％、授業内試験の総合評価40％
Ｓ 総合点90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
Ａ 総合点80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
Ｂ 総合点60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
Ｃ 総合点50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
Ｄ 総合点50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
MUS3001M
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 演奏解釈(1)ピアノ楽曲

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
木曜 3限
実務経験なし
講義
必修
ピアノ専修必修

池田 哲美

〔履修条件〕
ピアノ専修必修。
他専修も積極的に履修してほしい。
〔授業の概要〕
あらゆる楽曲の中でも、ピアノで演奏されるものは多岐に渡って豊富に作品が存在する。楽器の持つ幅広い可能性、あるいは利便性から、ピアノは独奏のみならずあらゆる音楽シーンの中で必要とされる場面も多く、そこではピアニストに柔軟な能力が求められる。
この授業では独奏曲はもとより、多様なジャンルの楽曲にも触れながら、楽器や楽曲の持つ特性を理解し、それぞれの状況の中でどのように楽譜を解釈し、演奏したら良いかを一緒に学んでいきたい。
他専修の学生の参加も大いに歓迎する。
〔授業の到達目標〕
ピアノという楽器の特性やそれぞれの楽曲の時代やジャンルに応じた楽譜の読み方・解釈の仕方を理解し、ふさわしい演奏方法を見つけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　16 ～ 17世紀の鍵盤楽器音楽①
　　Bachを中心に
第 2 回　16 ～ 17世紀の鍵盤楽器音楽②
　　Bachを中心に
第 3 回　18世紀の作曲家①
　　Haydn・Mozartを中心に
第 4 回　18世紀の作曲家②
　　Haydn・Mozartを中心に
第 5 回　18世紀の作曲家③
　　Haydn・Mozartを中心に
第 6 回　19世紀の作曲家①
　　Beethovenを中心に
第 7 回　19世紀の作曲家②
　　Beethovenを中心に
第 8 回　19世紀の作曲家③
　　Beethovenを中心に
第 9 回　19世紀の作曲家④
　　Beethovenを中心に
第 10 回　19世紀の作曲家⑤
　　Schubertを中心に
第 11 回　19世紀の作曲家⑤
　　Schubertを中心に
第 12 回　19世紀の作曲家⑥
　　Chopinを中心に
第 13 回　19世紀の作曲家⑦
　　Chopinを中心に
第 14 回　発表
　　演奏による発表
第 15 回　発表
　　演奏による発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回の授業の内容について、自分なりに予備知識を持って臨めるようにすること。また、各回の内容は積み重ねになっていくので、復習もしっかりすること。
授業で話した内容については、図書館、インターネットを利用しチェックすること。
これらの学修には60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
その都度必要に応じて指示、配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、学期末課題の結果50%を総合的に判断して行う。
S　総合点90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、課題未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4000M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演奏解釈(2)声楽曲

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
木曜 3限
実務経験あり
講義
必修
声楽専修必修

布施 雅也

〔履修条件〕
2年生前期におかれる声楽専修必修科目。
演奏に対する知識を得たい他専修も積極的に履修可能。
〔授業の概要〕
声楽が他の演奏分野と決定的に違うのは、音楽に言葉が付属している点にある。
歌唱する上で声を鍛錬することは重要だが、音楽表現を追究することも同様にとても大切なことである。この授業では歌詞の理解と、その歌詞に音楽をつけた作曲家の意図をなどを探っていく。実際の現場ではどの様に楽譜を読んでいくのか、演奏家としての【譜読み】の仕方についても学んでいく。
前半はオペラの代表的作品であるモーツァルト作曲の《フィガロの結婚》を取り上げて鑑賞、解釈していく。後半はプッチーニ作曲《ラ・ボエーム》を取り上げる。また、日本歌曲の演奏についても触れていく。
〔授業の到達目標〕
・楽譜と歌詞の両面から理解を深めることで、曲に込められた想いを読み取ることができる。
・プロセスを踏んだ解釈をすることで、演奏する上での土台を作ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　オリエンテーション
第 2 回　オペラの現場と稽古について１
　　オペラの成立と歴史的背景
　　歌手に求められることとは？
第 3 回　オペラの現場と稽古について２
　　指揮者、演出家、共演者とどの様に作品を作り上げていくか
第 4 回　フィガロの結婚１
　　作品解説と第一幕
第 5 回　フィガロの結婚２
　　作品解説と第二幕
第 6 回　フィガロの結婚３
　　作品解説と第三幕
第 7 回　フィガロの結婚４
　　作品解説と第四幕
第 8 回　ラ・ボエーム
　　作品解説
　　モーツァルトの時代との比較
第 9 回　ラ・ボエーム２
　　第一幕
第 10 回　ラ・ボエーム３
　　第二幕
第 11 回　ラ・ボエーム４
　　第三幕
第 12 回　ラ・ボエーム５
　　第四幕
第 13 回　日本歌曲について１
　　日本における西洋音楽の導入
　　日本語の発語について
第 14 回　日本歌曲について２
　　瀧廉太郎と山田耕筰
　　日本歌曲の黎明期を代表する二人の作曲家について
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内での質疑応答、レポート、クラスルームにてその都度対応する。
〔授業時間外の学習〕
《フィガロの結婚》《ラ・ボエーム》のあらすじや登場人物について予習し、DVDなどで視聴しておくこと。
スコア、対訳集を参照し理解を深めておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に楽譜とプリントを適宜配布する。
（オペラスコア、対訳集を用意することが望ましい）
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度50％、課題に対する成果30％、レポート20％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、課題未提出者、授業への取り組み・受講態等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3002M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 演奏解釈(3)室内楽曲

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
水曜1限
実務経験あり
講義
必修
弦楽器専修必修

髙橋 宗芳

〔履修条件〕
弦楽器専修必修。
他専修も履修できる。
〔授業の概要〕
この授業のタイトルである演奏解釈とは、楽曲の受け取め方と、その表現上の手段の選択という二つの要素から成り立つ。この授業では、作曲背景を知りスコアから曲の基調となる情感や構成を読み解くといった大きな音楽の捉え方をしたうえで、表現上のディテールに焦点を当ててゆく。
古典派の弦楽による室内楽作品を中心に取り扱うが、弦楽器以外の専修学生にも広く開放している。履修者の状況により、ピアノ、管楽器等も含まれる作品も取り上げ授業を進めていく。
授業形態としては、スコアを読み解き作曲家と楽曲に関する知識を深めてから、実際に生徒グループが演奏をし、表現手段を考え意見交換してゆく。数回のレポート提出と期末の演奏発表がある。
〔授業の到達目標〕
楽曲を解釈演奏するにあたり、自らの力で考え表現するための思考回路を形作り、どのような楽曲でも自力で解釈し表現する能力の礎を作る。
〔授業計画〕
第 1 回　導入および演奏グループの検討　バッハ①
演奏解釈の概説。演奏をしながらグループ決め。（楽器持参必須）
バッハ作曲ゴールドベルク組曲の弦トリオ版を取り扱う。
第 2 回　構成と和声の理解　バッハ②
楽曲の構成と和声を理解する。細かな楽句よりもより大きな構成をとらえる。
第 3 回　装飾音と演奏慣習　バッハ③
装飾音と歴史的な演奏慣習について学ぶ。
第 4 回　各グループによる演奏　古典派①
各グループのこれまでの授業を通じての演奏解釈の進歩を確認する。
モーツアルトの初期の弦楽四重奏のスコアを読む。
第 5 回　古典派の特徴　古典派②
古典派楽曲の特徴を学ぶ。引き続きモーツァルトの楽曲を読み解き演奏実践する。
第 6 回　古典派楽曲の歴史的理解　古典派③
古典派楽曲の歴史的な理解を深める。引き続きモーツァルトの楽曲を読み解き演奏実践する。
第 7 回　古典派④
ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン等の作曲かの作品から新たな楽曲を選びさらなる学びを深める。
第 8 回　古典派⑤
ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン等の作曲かの作品から新たな楽曲を選びさらなる学びを深める。
第 9 回　古典派⑥
ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン等の作曲かの作品から新たな楽曲を選びさらなる学びを深める。
第 10 回　ロマン派音楽の概説　ロマン派①
ロマン派音楽の概説。シューベルト・メンデルスゾーン・ブラームス等の楽曲の演奏①
第 11 回　ロマン派②
シューベルト・メンデルスゾーン・ブラームス等②
第 12 回　ロマン派③
シューベルト・メンデルスゾーン・ブラームス等③およびこれまでの振り返り。
第 13 回　任意の曲①
発表演奏に向けて各グループの選択した任意の曲を演奏する。またその解釈について討論する。
第 14 回　任意の曲②
発表演奏に向けて各グループの選択した任意の曲を演奏する。またその解釈について討論する。
第 15 回　期末演奏発表
各グループの進歩を演奏発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
期間を通じて演奏発表時に、個別（グループ）に指導・フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で演奏するメンバーは事前にリハーサルをしておくこと。また、その曲の作曲者についてや作曲された背景、各自の楽器の詳細についても調べておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
課題となる曲のスコアとパート譜をプリントして配布するので、必ず授業に持参すること。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度40％、課題への取り組み30％、発表・演奏への積極性30％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、

学期末課題未提出者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3003M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［楽式］Ⅰ①

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
月曜 3限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

宍戸 里佳

〔履修条件〕
日本音楽専修以外は必修。
〔授業の概要〕
音楽形式の基礎。バロック・古典派の主な形式についての説明を行い、楽曲の分析を試みる。
授業は講義形式で行うが、自分の頭で考え、授業に積極的に参加することが求められる。
〔授業の到達目標〕
音楽形式の基本を理解し、簡単な楽曲を自分で分析できる。
〔授業計画〕
第 1 回　音楽形式とは
第 2 回　動機と形式
第 3 回　二部形式（バッハ）
第 4 回　三部形式（シューマン）
第 5 回　二部形式・三部形式のまとめ
第 6 回　複合三部形式①
　　モーツァルト
第 7 回　複合三部形式②
　　ベートーヴェン
第 8 回　ロンド形式①
　　ベートーヴェン（１曲目）
第 9 回　ロンド形式②
　　ベートーヴェン（２曲目）
第 10 回　ロンド形式③
　　モーツァルト
第 11 回　ソナタ形式①
　　ベートーヴェン（１曲目）
第 12 回　ソナタ形式②
　　ベートーヴェン（２曲目）
第 13 回　ソナタ形式①
　　モーツァルト（１曲目）
第 14 回　ソナタ形式②
　　モーツァルト（２曲目）
第 15 回　前期まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出課題は採点のうえ、返却を行う。
〔授業時間外の学習〕
予習：知らない曲は、事前にCD等で聴いておくこと。
復習：次の授業までに、一度は授業内容に目を通しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリント配布。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み等30％、学期末試験70％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3013M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［楽式］Ⅱ①

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
月曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

宍戸 里佳

〔履修条件〕
日本音楽専修以外は必修。
「音楽理論［楽式］Ⅰ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
音楽形式の基礎。バロック・古典派の主な形式についての説明を行い、楽曲の分析を試みる。
授業は講義形式で行うが、自分の頭で考え、授業に積極的に参加することが求められる。

〔授業の到達目標〕
音楽形式の基本を理解し、簡単な楽曲を自分で分析できる。
〔授業計画〕
第 1 回　前期の復習
第 2 回　変奏曲形式①
　　モーツァルト（１曲目）
第 3 回　変奏曲形式②
　　モーツァルト（２曲目）
第 4 回　変奏曲形式③
　　モーツァルト（３曲目）
第 5 回　変奏曲形式④
　　ベートーヴェン
第 6 回　フーガ形式（バッハ）①
　　インヴェンション２声
第 7 回　フーガ形式（バッハ）②
　　インヴェンション３声
第 8 回　フーガ形式（バッハ）③
　　平均律フーガ２声・３声
第 9 回　フーガ形式（バッハ）④
　　平均律フーガ４声
第 10 回　歌曲の分析①
　　イタリア歌曲
第 11 回　歌曲の分析②
　　ベートーヴェン、シューベルト
第 12 回　歌曲の分析③
　　シューマン
第 13 回　自由形式①
　　モーツァルト
第 14 回　自由形式②
　　ベートーヴェン
第 15 回　後期まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出課題は採点のうえ、返却を行う。
〔授業時間外の学習〕
予習：知らない曲は、事前にCD等で聴いておくこと。
復習：次の授業までに、一度は授業内容に目を通しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリント配布。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み等30％、学期末試験70％の結果を総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末試験未受験者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4012M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［楽式］Ⅰ②

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　前期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

〔履修条件〕
　音楽専攻２年生（日本音楽専修以外）は必修。
〔授業の概要〕
　古典的作品における音楽形式・楽曲構造を研究する。
　楽譜の分析を通じて多種多様な実体を観察しながら、それらの構成原理を探って行く。
　和声法等の理論にも関連する内容であり、状況に応じて授業計画の進度・内容を調整することがある。
〔授業の到達目標〕
　音楽形式の観点から、古典的作品の楽譜を分析することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　概説、モチーフ
第 2 回　楽節
第 3 回　二部形式
第 4 回　三部形式
第 5 回　複合二部形式
第 6 回　複合三部形式①
第 7 回　複合三部形式②
第 8 回　ロンド形式
第 9 回　大ロンド形式
第 10 回　ソナタ形式①
第 11 回　ソナタ形式②
第 12 回　ソナタ形式③
第 13 回　ソナタ形式④
第 14 回　ロンド・ソナタ形式
第 15 回　総括あるいは補遺
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
　問いかけへの反応等を見ながら適宜対応する。
〔授業時間外の学習〕
　授業で取り上げた譜例と似た構造を持つ作品について、楽譜を読んで比較検討してみること。
　これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
　プリントを配布する。
〔成績評価〕
　授業への取り組み・受講態度等60％、定期試験40％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、定期試験を受けなかった者、授業への取り組み・受講態度等に問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3013M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［楽式］Ⅱ②

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
2単位　後期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修以外必修

〔履修条件〕
　音楽専攻２年生（日本音楽専修以外）は必修。
「音楽理論［楽式］Ⅰ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
　古典的作品における音楽形式・楽曲構造を研究する。
　楽譜の分析を通じて多種多様な実体を観察しながら、それらの構成原理を探って行く。
　対位法等の理論にも関連する内容であり、状況に応じて授業計画の進度・内容を調整することがある。
〔授業の到達目標〕
　音楽形式の観点から、古典的作品の楽譜を分析することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　変奏曲①
第 2 回　変奏曲②
第 3 回　バロック的構成①
第 4 回　バロック的構成②
第 5 回　フーガ①
第 6 回　フーガ②
第 7 回　コラール前奏曲
第 8 回　協奏曲の構造①
第 9 回　協奏曲の構造②
第 10 回　多楽章構成
第 11 回　声楽曲①
第 12 回　声楽曲②
第 13 回　応用分析①
第 14 回　応用分析②
第 15 回　総括あるいは補遺
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
　問いかけへの反応等を見ながら適宜対応する。
〔授業時間外の学習〕
　授業で取り上げた譜例と似た構造を持つ作品について、楽譜を読んで比較検討してみること。
　これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
　プリントを配布する。
〔成績評価〕
　授業への取り組み・受講態度等60％、定期試験40％を基準として、総合的に意欲・理解度を評価する。

Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確かつ秀でた者 ）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・授業への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、定期試験を受けなかった者、授業への取り組み・受講態度等に問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4012M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
※芸術科２年生以上履修可。
〔キャップ対象外〕
―

## Ｓ．Ｈ．Ｍ．Ⅲ・Ⅳ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　前期・後期
木曜 2限
演習（理論）
必修

**塩﨑 美幸、三瀬 俊吾、大家 百子、加藤 千春**

〔履修条件〕
音２必修。
「S.H.M.Ⅰ・Ⅱ」の単位を修得していること。
各自、能力を向上させる努力を常に実践すること。
〔授業の概要〕
授業内容は「S.H.M.Ⅰ・Ⅱ」の延長上にある。
能力に応じて、基礎力の充実からより音楽的な応用まで、各自力をつけていく。
レベル別４クラスに分けて授業を行う。
〔授業の到達目標〕
音楽実践に必要な基礎的能力を高め、幅広く優れた音楽性を身につけることができる。
〔授業計画〕
初回授業にてクラス分け試験を行う。
通年の授業計画については、漠然とした内容を記すが、各クラスで異なる。
• 多様なリズムの習得
• 多様な拍子の理解
• ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号の理解
• 正しい読譜による初見視唱の練習
• 正確な音程を身につける
• より高度なメロディーの書き取り
• ２声、３声等同時に鳴る音への理解
• 種類の違う和音がもたらす響きの色彩を感じ取る
• 和音の機能の理解と聴き分け
• 四声体の書き取り、その重唱
• 多様な調への挑戦
• 転調を伴う課題における調の判定
• 移調奏
• 多様な音階による課題
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる課題の添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
各クラスの教員の指示に従い自習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
クラスの担当教員から指示される場合もある。
〔成績評価〕
授業への取り組み40％、学期末課題60％の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取組が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取組が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業態度や課題への取組に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3130M/MUS4130M
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 指揮法Ⅰ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　前期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）
必修
教職課程受講者必修

**福永 一博**

〔履修条件〕
教職課程受講者は必修。
指揮、指揮することに興味を持つ者。
〔授業の概要〕
指揮者は、音楽の体現者である。自ら音を出すことのできない指揮者が、最も的確かつ雄弁に音楽を語り得る手段が、指揮法である。
本授業では、桐朋学園大学で長らく指揮法を教え、数多くの名指揮者を輩出した斉藤秀雄先生の著した「指揮法教程」の考え方をベースに、オーケストラ・吹奏楽・合唱等あらゆるジャンルに共通する基本的な指揮の技法を体得する。また、培った指揮の技法を、コンコーネや合唱曲等、実際の作品を用いて演習する。基本的に週ごとに講義回→実習回に分けて行い、実習回では２つのグループに分かれて演習を行う。
〔授業の到達目標〕
自分の音楽的意図を、指揮を通じて表現できるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　授業の概要、進め方、参考書、指揮棒についての説明
第 2 回　指揮者の歴史、役割／指揮法の大原則／叩きの運動（脱力）
第 3 回　実習
　　叩きの運動
　　指揮棒の持ち方
　　指揮法用語

第 4 回　叩きの図形／平均運動について
第 5 回　実習
　　叩きの図形・平均運動
第 6 回　平均運動の図形／しゃくいの運動／しゃくいの図形
第 7 回　実習
　　平均運動の図形
第 8 回　実習
　　しゃくいの図形
第 9 回　演奏を開始するために①
　　予備運動・中間予備運動
　　演奏を終止するために
　　デュナーミクを表現するために①
　　アゴーギクを表現するために①
第 10 回　実習
　　「ふるさと」
第 11 回　演奏を開始するために②
　　様々な予備運動
　　引き延ばし運動
　　デュナーミクを表現するために②
　　「コンコーネNo.2」
第 12 回　実習
　　「コンコーネNo.2」
第 13 回　裏拍を表現する方法
　　引っ掛け
　　数取り
　　様々な中間予備運動
　　「コンコーネNo.4」
第 14 回　実習
　　「コンコーネNo.4」
第 15 回　前期の総復習／「コンコーネNo.10」

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習の後に個々に指導を行う。

〔授業時間外の学習〕
指揮法の習得には技術的鍛錬が大切である。したがって課題実習のための練習を十分に行うことが求められる。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
参考書：斉藤秀雄著「指揮法教程」（音楽之友社）
　　高階正光著「指揮法入門」（音楽之友社）
指揮棒を用意すること（１回目の授業時に指示）。

〔成績評価〕
成績評価は、授業への取り組み30％、受講態度30％、発表40％を総合的に判断して行う。
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組みに問題があった者）

〔科目ナンバリング〕
MUS3100M

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
ー

## 指揮法 II

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
1単位　後期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）
必修
教職課程受講者必修

福永 一博

〔履修条件〕
教職受講者は必修。
「指揮法Ｉ」の単位を修得していること。
指揮、指揮することに興味を持つ者。

〔授業の概要〕
指揮者は、音楽の体現者である。自ら音を出すことのできない指揮者が、最も的確かつ雄弁に音楽を語り得る手段が、指揮法である。
本授業では、桐朋学園大学で長らく指揮法を教え、数多くの名指揮者を輩出した斉藤秀雄先生の著した「指揮法教程」の考え方をベースに、オーケストラ・吹奏楽・合唱等あらゆるジャンルに共通する基本的な指揮の技法を体得する。また、培った指揮の技法を、コンコーネや合唱曲等、実際の作品を用いて演習する。基本的に週ごとに講義回→実習回に分けて行い、実習回では２つのグループに分かれて演習を行う。

〔授業の到達目標〕
自分の音楽的意図を、指揮を通じて表現できるようになる。

〔授業計画〕
第 1 回　実習
　　「コンコーネNo.10」
第 2 回　６拍子／アゴーギクを表現するために②
　　分割
　　演奏を停止するために（３種類のフェルマータ）
　　「コンコーネNo.16」
第 3 回　実習
　　６拍子
　　フェルマータの短曲実習
第 4 回　実習
　　「コンコーネNo.16」
第 5 回　先入法／二段叩き／様々な変拍子
第 6 回　実習

先入法
二段叩き
変拍子の短曲実習
第 7 回　円運動①
一拍三分割の技法
第 8 回　実習
「美しく青きドナウ」
第 9 回　円運動②
一拍三分割の技法
第 10 回　実習
「浜辺の歌」「無言歌」
第 11 回　跳ね上げ
短曲実習
第 12 回　左手の使用法／「森へ行きましょう」
第 13 回　実習
「森へ行きましょう」
第 14 回　総まとめ／「夏の思い出」
第 15 回　実習
「夏の思い出」

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習の後に個々に指導を行う。

〔授業時間外の学習〕
指揮法の習得には技術的鍛錬が大切である。したがって課題実習のための練習を十分に行うことが求められる。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
参考書：斉藤秀雄著「指揮法教程」（音楽之友社）
高階正光著「指揮法入門」（音楽之友社）
指揮棒を用意すること。

〔成績評価〕
成績評価は、授業への取り組み30％、受講態度30％、発表40％を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組みに問題があった者）

〔科目ナンバリング〕
MUS4100M

〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 室内楽Ａａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
演習（技術）

野口 千代光､荻野 千里

〔履修条件〕
２年生前期におかれる選択科目。
積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。

〔授業の概要〕
ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲・ピアノ五重奏曲を中心に取り上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。
授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

〔授業の到達目標〕
• 様々な時代および編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術の基礎を確立できる。
• 楽器を通してのコミュニケーション力を身につけることができる。
• 古典から近現代までの様々な様式・形式を学ぶことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入、学習曲目の検討
第 2 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等①
第 3 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等②
第 4 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等③
第 5 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等④
第 6 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等①
第 7 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等②
第 8 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等③
第 9 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）①
第 10 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）②
第 11 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）③
第 12 回　声楽を含む室内楽①
第 13 回　声楽を含む室内楽②

第 14 回　7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて①
第 15 回　7月に行われる定期演奏会オーディションに向けて②

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に個別（グループ）に指導・フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。
また、お互いの楽器の特徴等も調べておくこと。
日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲。
ベートーヴェン、メンデルスゾーンのピアノ三重奏曲。
モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

〔成績評価〕
成績評価については、演奏曲目の下調べ30％、各自の練習40％、授業態度30％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS3240M

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 室内楽Ａｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
1単位　前期
金曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

菊池 奏絵

〔履修条件〕
楽譜を見たまま正確に演奏するだけでなく、作品にふさわしい様式感、演奏習慣等に興味を持ち、様々な角度から視野を広げたい者。

〔授業の概要〕
本授業では、バロック時代から古典派の音楽を主な題材とし、実践を通して学んでいく。様式感、演奏習慣とは何か。音楽学的考察や現在の実践現場から見えてくる様々な方面からのアプローチを知り、アンサンブルを試みる。自分の専修以外の楽器や声楽との関わり、表現と演奏方法についても考える。
各回の内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えていく可能性あり。演奏の実践を中心に進めるが、講義も取り入れながら総合的に学んでいく。アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。

〔授業の到達目標〕
これまでの時代の演奏習慣を知り、自分の演奏に活かしていく。どのよう演奏したらその作品が活きるかを自分で考えることができる。過去の音楽の影響を受けているその後の作曲家への理解が深まり、あらゆる時代の音楽と関連付けることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　歴史的知識に基づく演奏とは
第 2 回　楽譜について
第 3 回　アンサンブル組み
第 4 回　バロック時代周辺の楽器について
第 5 回　演奏習慣について
第 6 回　通奏低音①
　　数字の理解
第 7 回　通奏低音②
　　基本形
第 8 回　アンサンブル中間発表
第 9 回　装飾法①
　　フランス様式
第 10 回　装飾法②
　　イタリア様式
第 11 回　舞曲、組曲について
第 12 回　当時の文献を読む
第 13 回　音楽修辞学について
第 14 回　アンサンブル仕上げ
第 15 回　発表

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業演奏時に個別・グループにアドバイス、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
アンサンブル曲の情報収集を図書館等を利用して、自分なりにやってくること。
個人練習、グループでの練習を十分にしてくること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布。授業内で参考書を紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、理解度25%、演奏の成果25%とし、総合的に評価する。
S　総合点90点以上（積極的に取り組み、知識を自分のものにし、演奏に成果が表れる）
A　総合点80点以上（積極的に取り組み、理解を深めようとし、演奏に変化が見られる）
B　総合点60点以上（積極的に取り組み、演奏に生かそうとする）
C　総合点50点以上（程よく取り組み、程よく演奏する）
D　総合点50点未満（取り組む姿勢に欠け、演奏の変化が見られない）
〔科目ナンバリング〕
MUS3240M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 室内楽Ｂａ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　後期
火曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

阪本 奈津子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。
〔授業の到達目標〕
互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中で、アンサンブルの基本を習得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入および曲目の検討
※専攻楽器の種類によって、変更あり。
第 2 回　古典派の室内楽作品　モーツァルト①
ピアノと弦楽器　二重奏
第 3 回　モーツァルト②
第 4 回　モーツァルト③
管楽器を含む室内楽作品、楽器の相違によるフレージングの注意点
第 5 回　ハイドンの室内楽作品①
モーツァルトとの関連性ー弦楽四重奏曲
第 6 回　音程について　純正律と平均律　ハイドン②
ピアノを含む室内楽作品
第 7 回　ベートーヴェン①
ベートーヴェンにおける強弱記号の捉え方
第 8 回　ベートーヴェン②
二重奏から五重奏
第 9 回　シューベルト①
ピアノとの室内楽
第 10 回　シューベルト②
シューベルトの音色の選び方
第 11 回　シューマン①
古典派、ロマン派によるヴィブラートの違い
弦楽器の室内楽作品
第 12 回　シューマン②
ピアノを含む室内楽作品
第 13 回　ドヴォルザーク①
国民楽派　関連する作曲家について
弦楽器の室内楽作品
第 14 回　ドヴォルザーク②
ピアノを含む室内楽作品
第 15 回　まとめと確認
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に個別（グループ）に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度40%、課題に取り組む姿勢40%、演奏成果20%の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4241M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 室内楽Ｂｂ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
1単位　後期
金曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

蓼沼 恵美子

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生を対象とするが、ピアノを含む室内楽曲（ただし声楽曲を除く）を体得したい他の器楽専修の学生の履修も可。
〔授業の概要〕
ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や音楽の柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性を踏まえた上で、作曲家が意図する音楽表現のために必要なそれぞれのパートの役割や演奏技術を実践で学ぶ。
演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。
〔授業の到達目標〕
アンサンブルにおける奏法を修得し、共に音楽をつくり上げる室内楽の楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。
具体的には以下の点を到達目標とする。
• 相手の音をよく聴き、呼吸を合わせることができる。
• 各々の楽器との響きの融合を考えた音作りができる。
• 表現のためのそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げることができる。
• 楽曲の様式や作曲家の意図を踏まえた、より幅広い表現ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび曲目とメンバーの決定
※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。
※試験期間中に発表演奏会を行う。
第 2 回　アンサンブル実習①
第 3 回　アンサンブル実習②
第 4 回　アンサンブル実習③
第 5 回　アンサンブル実習④
第 6 回　アンサンブル実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習⑬
第 15 回　アンサンブル実習⑭
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に指導・フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
各自個人練習及び合わせ等、十分に準備して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことはできない。事前に音源を聴いたり、スコアを見る等、他のパートにも目を向けておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で演奏するグループが、演奏曲の楽譜をその都度配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み（演奏曲の準備を含む）・意欲70％、発表演奏の成果30％にて総合的に行う。
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業への取り組み・意欲、演奏能力等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4241M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 室内楽Ｂｃ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
1単位　後期
月曜 3限
実務経験あり
演習（技術）

吉岡 次郎

〔履修条件〕
管楽器専修を中心とするが、他専修の受講も可。
アンサンブル（管楽器＋弦楽器、ピアノ等）に興味と意欲のある学生。
〔授業の概要〕
フルートを中心とする二重奏～複数のアンサンブルを基盤に、レパートリー修得と室内楽での演奏法や基礎を学ぶ。

並びに、授業当日指定で初見のアンサンブル実習も催し、そこで様々な対応力を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
個々の技術の更なる向上と、室内楽における他者との合わせ方、リードの仕方、協調性等を習得する。初見練習においてはリズムや調性を瞬時に感じる力や、難しいパッセージに対応する力等を習得する。
〔授業計画〕
第 1 回　受講生の習熟度の確認と初見演奏について
第 2 回　学習曲目の検討および組み合わせと初見演奏実習①
第 3 回　アンサンブル実習、初見実習②
第 4 回　アンサンブル実習、初見実習③
第 5 回　アンサンブル実習、初見実習④
第 6 回　アンサンブル実習、初見実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習、初見実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習、初見実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習、初見実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習、初見実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習、初見実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習、初見実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習、初見実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習、初見実習⑬
第 15 回　アンサンブル発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
各回の初見実習の発表後に総評を行い、必要な場合は個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
個々の練習と合わせを授業前に的確に行って準備しておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて教員より指示する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み70%、課題発表（発表演奏会）30%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4241M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 室内楽Ｂｄ

芸術科 ＞ 音楽専攻
2 年生
1単位　後期
月曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

〔履修条件〕
楽譜を見たまま正確に演奏するだけでなく、作品にふさわしい様式感、演奏習慣等に興味を持ち、様々な角度から視野を広げたい者。
〔授業の概要〕
本授業では、バロック時代の音楽を題材とし、実践を通して学んでいく。時代の様式感とは何か。バロックの演奏習慣を音楽と結びつけて、音楽学的見知から、また現在の実践現場から見えてくる様々な方面からのアプローチを知り、アンサンブルを試みる。自分の専修以外の楽器や声楽との関わり、表現と演奏方法についても考える。
各回の内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えていく可能性あり。演奏の実践を中心に進めるが、講義も取り入れながら総合的に学んでいく。アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。
〔授業の到達目標〕
バロック時代の音楽の演奏法を理解、習得し、どのように演奏したらその作品が生きるかを自分で考えることができる。また、バロック時代の影響を受けているその後の作曲家への理解も深まり、あらゆる時代の音楽と関連付けることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　歴史的知識に基づく演奏とは
第 2 回　楽譜について
第 3 回　アンサンブル組み
第 4 回　バロック時代周辺の楽器について
第 5 回　演奏習慣について
第 6 回　通奏低音①
　　数字の理解
第 7 回　通奏低音②
　　基本形
第 8 回　アンサンブル中間発表
第 9 回　装飾法①
　　フランス様式
第 10 回　装飾法②
　　イタリア様式
第 11 回　舞曲、組曲について
第 12 回　当時の文献を読む
第 13 回　音楽修辞学について
第 14 回　アンサンブル仕上げ
第 15 回　発表

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業演奏時に個別・グループにアドバイス、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
アンサンブル曲の情報収集を図書館等を利用して、自分なりにやってくること。
個人練習、グループでの練習を十分にしてくること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布。授業内で参考書を紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、理解度25％、演奏の成果25％とし、総合的に評価する。
S　総合点90点以上（積極的に取り組み、知識を自分のものにし、演奏に成果が表れる）
A　総合点80点以上（積極的に取り組み、理解を深めようとし、演奏に変化が見られる）
B　総合点60点以上（積極的に取り組み、演奏に生かそうとする）
C　総合点50点以上（程よく取り組み、程よく演奏する）
D　総合点50点未満（取り組む姿勢に欠け、演奏の変化が見られない）
〔科目ナンバリング〕
MUS4241M
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 伴奏法Ⅱ

芸術科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　前期
月曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
教職課程受講者（日本音楽専修以外）必修

揚原 さとみ

〔履修条件〕
「伴奏法Ⅰ」の単位を修得していること。
教職課程受講者（日本音楽専修除く）は必修とするが、そうでない学生もアンサンブルに関心を持ち、他者の演奏に興味を持って聴ける学生は歓迎する。
〔授業の概要〕
主として音楽教育の場に最適なピアノ伴奏法を、実技レッスン・オーディオ資料鑑賞・講義で研究し、教育現場で活かせるよう学んでいく。具体的には、譜読みの力を向上させるための初見ピアノ伴奏や、指導に欠かせないピアノ弾き語り・コードネームでの即興伴奏について深めていく。「伴奏法Ⅰ」で学んだ基礎を発展・展開していきたい。
教職課程必修科目のため対象場面は学校教育現場としているが、様々な音楽活動においてのピアノ伴奏法を探りたい。
〔授業の到達目標〕
• 教育場面において、音楽指導を伴うピアノ伴奏ができる。
• 効果的なピアノ伴奏ができる音感を養うことができる。
• コードネームを把握し、即興でシンプルな伴奏付けができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス・初見の基礎
※受講生の人数や社会情勢等により、内容変更の可能性があります。
第 2 回　初見の練習
第 3 回　初見のピアノ伴奏と即興伴奏付け
第 4 回　ピアノ連弾①
呼吸を合わせる練習
第 5 回　ピアノ連弾②
音楽創りの練習
第 6 回　コードネーム①
３和音について
第 7 回　コードネーム②
４和音について
第 8 回　コードにおける伴奏付け①
筆記編
第 9 回　コードにおける伴奏付け②
実践編
第 10 回　弾き語り①
第 11 回　弾き語り②
第 12 回　スコアリーディング
（弦楽曲を用いた要約ピアノ演奏）
第 13 回　課題曲レッスン（前半）
第 14 回　課題曲レッスン（後半）
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表後、振り返りとして全体に総評を、希望者には個別講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回課題が出されるので、予習・復習に努めること。
グループやペアを組んでのレッスンは、互いに協力を深め受講前に必ず練習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
五線紙を毎時間持参すること。
授業時に楽譜やプリントを配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、各自の練習30％、受講態度30％、実技レッスン及び発表40％の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）

D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、発表未受験者、受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3201M
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 日本音楽概論

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 1限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修・教職課程受講者必修

〔履修条件〕
日本音楽専修および教職課程受講者は必修。
演劇専攻者も歓迎する。
授業への取組みを重視する。
〔授業の概要〕
日本で音楽や舞台芸術に関わる者にとって必要な、伝統芸能に関する基礎知識を身につけることを目標とする。教職を目指す者は必修とする。
将来教育の現場で活用できる知識はもとより、日本の音楽教育にとって重要な日本文化全般への眼差しと伝統音楽との関係に気付いていくことの重要性を認識したい。
〔授業の到達目標〕
日本の音楽や楽器についての基礎知識を身につけると共に、伝統芸能に親しむことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　日本の伝統音楽を学ぶ意義や、日本の音楽、芸能の現況を改めて見直す。
第 2 回　古代の芸能
　日本固有の芸能はどうやって生まれたのかを考察する。
第 3 回　雅楽①舞楽
　雅楽の中でももっとも大規模な舞楽について学ぶとともに、古代アジアの音楽が日本に与えた影響を知る。
第 4 回　雅楽②管絃
　楽器だけの合奏である管絃について学ぶ。特に雅楽の楽器について知識と、音楽構造を学ぶ。
第 5 回　雅楽③国風歌舞
　外来の音楽が伝来する以前の種目とされるものについて学ぶとともに、歌の記譜法についても学ぶ。
第 6 回　中世の芸能
　中世の芸能が誕生した背景と、現在までの伝承について概観する。
第 7 回　能
　中世を代表する芸能である能について学ぶ。
第 8 回　狂言
　能とともに発達した芸能である狂言を学ぶとともに、能との対比や、後世の歌舞伎への影響を考察する。
第 9 回　歌舞伎の音楽
　近世を代表する総合芸能である歌舞伎とその音楽について学ぶ。
第 10 回　日本舞踊
　歌舞伎の舞踊、およびそれから生まれた日本舞踊と音楽について学ぶ。
第 11 回　文楽
　歌舞伎と並行して誕生した人形浄瑠璃(文楽)について学ぶ。特にその音楽である義太夫節についても考察する。
第 12 回　箏曲
　独奏楽器として新たな種目となった箏の音楽について学ぶ。特に日本の音階と箏の調弦法の変遷を考察する。
第 13 回　三曲
　近世に室内楽として発達した三曲合奏について学ぶ。尺八、胡弓についても取り上げる。
第 14 回　明治以降の邦楽
　西洋音楽との出会いを通じて日本の音楽がどう変化したかを考察する。
第 15 回　現代の邦楽
　現代における日本音楽について考察する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時リアクションペーパーによる質問や感想を提出し、次回に回答する。
〔授業時間外の学習〕
歌舞伎、文楽等の舞台上演、邦楽演奏会等に積極的に足を運ぶようにしてほしい。
学修内容については60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要なプリントは随時配付する。
推奨する参考書としては、月渓恒子著「日本音楽との出会い」（東京堂出版）
〔成績評価〕
授業への取組み・態度50％、課題50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2022M
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## 楽器法（和楽器）

芸術科 ＞ 音楽専攻
2単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

花岡 操聖

〔履修条件〕
日本音楽専修生必修。
他専修でも興味のある学生は、積極的に履修してほしい。
〔授業の概要〕
数多ある日本古来の楽器の歴史や構造を知り、楽譜の読み方を学んでいく。
楽器の成り立ちや歴史の理解を深めることは、演奏上だけでなくアウトリーチや教育現場など幅広い場面で役立つに違いない。
日本音楽専修以外の履修者にもわかりやすく授業を進めていく。
〔授業の到達目標〕
それぞれの楽器の特徴を理解し、最終的には自分が専門とする楽器や音楽との違いについて解説することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス
履修者が取り上げて欲しい楽器があれば、出来うる限り実現させたい。
※2回目以降の内容については一例である。履修者の状況によって多少変更する可能性がある。
第 2 回　雅楽（笙）
雅楽の歴史や楽器の構造を知り、演奏を鑑賞する。
第 3 回　琵琶（薩摩琵琶もしくは筑前琵琶）
琵琶法師で有名な琵琶。滅多に見ることの出来ない琵琶の構造を学び、演奏を鑑賞する。
第 4 回　箏
歴史と構造を学び、最後は演奏体験をする。
第 5 回　尺八
歴史と構造を学び、演奏を鑑賞する。（可能であれば体験も行う）
第 6 回　三味線（地歌三味線）
三味線の音楽ジャンルはとても多いが、その中でも歴史のもっとも古い地歌三味線を取り上げる。楽器の数に限りはあるが、演奏体験も行う。
第 7 回　三味線（長唄三味線）
歌舞伎音楽で演奏される長唄三味線の歴史を知り、演奏を鑑賞。
第 8 回　日本の三味線（津軽三味線）
三味線音楽の中でも比較的新しいジャンル。音楽の成り立ちを知り、演奏を鑑賞する。
第 9 回　囃子（小鼓）
囃子は日本の伝統音楽の中では裏方的な存在であるが、あるか無いかで大きく音楽の印象が変わる。その中の花形とも言える小鼓の構造を学び、最後には演奏体験を行う。
第 10 回　日本の横笛
横笛といっても篠笛、龍笛、能管など数多く存在する。使用する楽器によって音楽ジャンルは変わるが、音色の違いからその音楽的特徴を感じてもらう。
第 11 回　胡弓
邦楽器の中でも非常に鑑賞機会の少ない胡弓。歴史や構造を学んだ後は、演奏を鑑賞する。
第 12 回　三味線（現代のアプローチ）
三味線を用いて現代作品を多く演奏し世界的に活躍する本学講師の本條秀慈郎氏を迎え、三味線の魅力などの話を交えながら演奏を鑑賞する。
第 13 回　箏（多絃箏）
箏といっても伝統的な十三本の箏だけではなく、低音専門の十七絃、二十絃箏、二十五絃箏と数々あるが、音楽はどのように変化していってるのか鑑賞しながら進めていく。
第 14 回　作曲家から見た邦楽器
数多くの邦楽作品を書いている現役の作曲家を招いて、西洋楽器との作品の違いや邦楽器を扱う時の注意点などを作曲家の視点から話を展開する。
第 15 回　まとめ
小テストとレポート提出（テーマについては追って提示する）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
各授業ごとの要点をまとめた小テスト（ただし成績には影響しない）とレポート提出を行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に取り上げる楽器について調べることを望む。
〔教科書・参考書等〕
その都度、配布する。
〔成績評価〕
積極的な授業への取り組み（出席率80％、レポート20％）を総合的に評価する。
※遅刻や欠席は評価に含む（やむを得ない場合は除く）
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でている）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確である）
B　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取り組みが良好である）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが不十分である）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しようとせず、課題への取り組みに問題がある）
〔科目ナンバリング〕
MUS1005M
〔学位授与方針との関係〕
①、③

〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 合奏基礎（和楽器）

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
演習（技術）
必修
日本音楽専修必修必修

〔履修条件〕
日本音楽専修必修。
その他、和楽器に興味がある他専修生。
〔授業の概要〕
少編成（二重奏から三重奏）のアンサンブルを中心に、基礎的な邦楽器合奏の取り組み方を身につけていく。楽譜の読み方はもちろん、曲の時代背景等を知ることで知識を高める。
また、日本音楽特有の口唱歌にも触れ、各楽器の特徴を掴み、合奏に活かしていきたい。
〔授業の到達目標〕
「他パートの音を聴きながら、かつ柔軟な発想と姿勢での合奏」ができる。
具体的には、第 1 回目に発表した各自の課題を、授業最終日までに克服することを目標とする。
〔授業計画〕
第 1 回　発表・ディスカッション、授業計画について
まずはこの授業に参加するにあたり、自分の課題を 1 つ決めてくること。（弾きたい曲や克服したい事柄等）
第 1 回は各自の課題を発表・ディスカッションし、2 回目以降の授業計画を具体的に立てる。履修者数や学生の目標により、授業計画を変更する可能性がある。
演奏曲例として、「六段の調」「春の海」「二つの田園詩」「詩曲一番」。その他希望の曲があれば適宜取り上げる。
第 2 回　六段の調①
箏・三絃・尺八の合奏
第 3 回　六段の調②
箏・三絃・尺八の合奏（仕上げ）
第 4 回　春の海
箏と尺八の合奏
第 5 回　春の海
箏と尺八の合奏（仕上げ）
第 6 回　二つの田園詩（一章）
箏・十七絃・尺八の合奏（一章）
第 7 回　二つの田園詩（一章）
箏・十七絃・尺八の合奏（一章仕上げ）
第 8 回　二つの田園詩（二章）
箏・十七絃・尺八の合奏
第 9 回　二つの田園詩（二章）
箏・十七絃・尺八の合奏（二章仕上げ）
第 10 回　詩曲一番
箏と尺八の合奏
第 11 回　詩曲一番
箏と尺八の合奏
第 12 回　詩曲一番
箏と尺八の合奏（仕上げ）
第 13 回　学生の希望曲①
合奏
第 14 回　学生の希望曲②
合奏（仕上げ）
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
必要であれば授業内でフィードバックを行う
〔授業時間外の学習〕
演奏に臨む際は、個人練習をしてくること。
聴く側の場合は、楽譜を読んでおくこと。
〔教科書・参考書等〕
特になし。適宜配付する。
〔成績評価〕
成績は、授業に臨む姿勢（80％）と授業内の発表（20％）にて評価する。

S　総合点90点以上
A　総合点80点以上
B　総合点60点以上
C　総合点50点以上
D　総合点50点未満
〔科目ナンバリング〕
MUS1249M
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
－
〔キャップ対象外〕
―

## 演奏解釈(4)日本音楽

芸術科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
火曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

〔履修条件〕
日本音楽専修必修。
その他の学生は特に条件はないが、自分の専修以外の楽器や音楽に興味や意欲があること。

〔授業の概要〕
演奏するということにおいては、譜面通りに演奏するということだけでなく、各自がその作品を通して、自分の音楽性や個性を表現できることが重要であると考える。
この授業では、様々な邦楽器のための音楽を中心として題材に選び、それについて分析し、演奏解釈や演奏方法について模索してみる等、積極的な意見交換を交えて進めていきたいと思っている。
最初にアンケートをとり、可能な限り受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えている。また、中間と最後に、それまでの講義で学んだことを元にした発表の場を設けたいと思っている。
〔授業の到達目標〕
この授業では、以下を到達目標とする。
１．それぞれの楽曲に対して、作曲者の意図を理解し、それを自分なりに表現することを考　え、実践することを試みることができる。
２．邦楽以外のジャンルの音楽でも自分の音楽表現ができる演奏を考え、実践してみることができる。
３．学期の最後に、自分の演奏した曲や、現在演奏している曲等を演奏するコンサートを行うことによって、講義で学んだことを発表できる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション、アンケート
順序・内容は、受講生の希望や能力に合わせて、変更する可能性がある。
第 2 回　邦楽の原点、雅楽
第 3 回　箏曲「六段の調べ」分析＆派による演奏相違について
第 4 回　地歌「ままの川」その他ＤＶＤ鑑賞
第 5 回　現代邦楽で取り上げられている様々な奏法について①
第 6 回　現代邦楽で取り上げられている様々な奏法について②
第 7 回　受講生による中間発表、意見交換
第 8 回　箏のプリペアド方法についてのレクチャー、即興指導等
第 9 回　たかの編曲作品の演奏解釈指導
第 10 回　邦楽器演奏の新たな可能性①ジャンルを超えて
第 11 回　邦楽器演奏の新たな可能性②ジャンルを超えて
第 12 回　実習①
最終日のコンサートのための準備を含める。
第 13 回　実習②
最終日のコンサートのための準備を含める。
第 14 回　実習③
最終日のコンサートのための準備を含める。
第 15 回　レクチャーコンサート
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
コンサートの後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容においては、自主練習が必要な場合がある。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で毎回プリントを配布。

〔成績評価〕
授業への取組み40％、コンサート60％。

Ｓ　総合点が90点以上の者（積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート課題において卓越した評価を得ている）
Ａ　総合点が80点以上の者（積極的に授業に参加しており、試験ないしレポート課題において高い評価を得ている）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業の欠席が少なく、真面目に授業に参加し、試験ないしレポート提出をこなしている）
Ｃ　総合点が50点以上の者（Ｂに次ぐ）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業参加日数が十分でなく、試験不参加ないしレポート未提出である）
〔科目ナンバリング〕
MUS2002M
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
－
〔キャップ対象外〕
―

## 基礎演劇演習Ａａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
金曜 3限 金曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
• a組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 授業では稽古着と稽古靴を着用すること。

〔授業の概要〕
まずは舞台に立って、台詞を言ってみよう。
そのひと言はなぜ、そこで発せられるのだろう？――そう疑問を持つことから始めよう。
授業では、
①簡単なシアターゲームなどを通じて俳優として必要な感覚・感性を養いつつ、
②ひとつの戯曲を取り上げ、模擬上演としての発表会を想定した実践的な稽古を重ねる中で、
③稽古へ向けた準備のあり方や稽古場で行うべきこと、相手役とどう向き合っていくか、など演劇人として基本的な心構えを身につけて行く。

〔授業の到達目標〕
課題として取り上げられた戯曲を研究し、稽古し、演じ切ることで、
①戯曲の読み解き方、場面と役の理解の仕方、台詞の働き、などについて、自分なりの方法と見解を持つことができる。
②演劇が、ひとりひとりの孤独で内的な思考の積み重ねと、稽古場での協働作業の絶え間のない往復のうちに形作られることを体験する。
③自分の台詞は相手役のためにある、ことが理解できる。
④次の稽古場に立つために、自分に何が不足しているか、あるいは必要なのかが自覚できている。

〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介
　　たがいを知り合うエクササイズ
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　シアターゲームとエクササイズ、課題戯曲について
　　空間感覚を養う
　　本読み、場面割り
第 3 回　シアターゲームとエクササイズ、本読み
　　呼吸と身体
　　本読み、場面割り
第 4 回　シアターゲームとエクササイズ（以後適宜）、シーンスタディ①
　　読み稽古①
第 5 回　シーンスタディ②
　　読み稽古②　衣装、小道具についての検討　授業後キャスティング
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　立ち稽古⑤
第 11 回　立ち稽古⑥
第 12 回　立ち稽古⑦
第 13 回　発表会
第 14 回　反省／課題、返し稽古
第 15 回　まとめと総評

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。

〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディおよび立ち稽古では各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。

〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）

〔科目ナンバリング〕
THE1230T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 基礎演劇演習Ａｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
火曜 1限 火曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

三浦 剛

〔履修条件〕
• ｂ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演劇における「声」と「身体」の扱い方を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
　　呼吸
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
　　身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
　　呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
　　呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
　　戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
　　関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。

〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メッソドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）

〔科目ナンバリング〕
THE1230T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 基礎演劇演習Ａｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
金曜 3限 金曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ｃ組必修。
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でゲームとインプロビゼーションとエチュードを行う。
次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。
①サブテクストをどのように創出するのか
②なりゆきの重要性を理解する
③ターニングポイントのきっかけを掴む
④困難な状況において自分の演技を維持する。
さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。
以上を通じて「役になる」のではなく「役を演じる」ことを学んでいく。授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。
〔授業の到達目標〕
演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解することの基本から、演じることに対する理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、シアターゲーム
第 2 回　シアターゲーム、基本技術：全身
　　宿題：人間観察全身物まね、星の王子さま紹介
第 3 回　シアターゲーム、基本技術：手
　　宿題：人間観察手物まね、星の王子さまを読む
第 4 回　シアターゲーム、基本技術：足
　　宿題：人間観察足物まね、星の王子さま
第 5 回　エチュード、小道具、大道具、RudolfPenka紹介、星の王子さま
第 6 回　エチュード、スペース、舞台組み合わせ、星の王子さま
第 7 回　エチュード、コスチューム、篠崎System紹介、星の王子さま
第 8 回　インプロゼーション、ボイストレーニング、星の王子さま
第 9 回　インプロゼーション、ステータス、KeithJohnstone紹介、星の王子さま
第 10 回　シーンワーク、StanislawskiSystem紹介、星の王子さま
第 11 回　シーンワーク、星の王子さま
第 12 回　稽古、星の王子さま
第 13 回　稽古、星の王子さま
第 14 回　発表会、星の王子さま
第 15 回　反省、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
Ｓ　①～④まで90％以上獲得した者
Ａ　①～④まで80％以上獲得した者
Ｂ　①～④まで60％以上獲得した者
Ｃ　①～④まで50％以上獲得した者
Ｄ　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE1230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 基礎演劇演習Ａｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
火曜 1限 火曜 2限
実務経験あり
演習（演技）
必修

〔履修条件〕
• ｄ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。
〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演劇における「声」と「身体」の扱い方を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
　　呼吸
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
　　身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
　　呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
　　呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
　　戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
　　関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メッソドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE1230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 基礎演劇演習Ｂａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
土曜 1限 土曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ａ組必修。
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でゲームとインプロビゼーションとエチュードを行う。
次にワンシーンを使って演技の基礎をさらに深める。
①サブテクストをどのように創出するのか
②なりゆきの重要性を理解する
③ターニングポイントのきっかけを掴む
④困難な状況において自分の演技を維持する。
さらに、実に些細な個人的状況がより大きな世界の諸問題とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を独自の方法によって表現することを身につけてほしい。

以上を通じて「役になる」のではなく「役を演じる」ことを学んでいく。
授業はルドルフ・ベンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用い、演劇訓練の基本を復習することから始める。
〔授業の到達目標〕
演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解することの基本から、演じることに対する理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、シアターゲーム
第 2 回　シアターゲーム、基本技術：全身
　　宿題：人間観察全身物まね、星の王子さま紹介
第 3 回　シアターゲーム、基本技術：手
　　宿題：人間観察手物まね、星の王子さまを読む
第 4 回　シアターゲーム、基本技術：足
　　宿題：人間観察足物まね、星の王子さま
第 5 回　エチュード、小道具、大道具、RudolfPenka紹介、星の王子さま
第 6 回　エチュード、スペース、舞台組み合わせ、星の王子さま
第 7 回　エチュード、コスチューム、篠崎System紹介、星の王子さま
第 8 回　インプロゼーション、ボイストレーニング、星の王子さま
第 9 回　インプロゼーション、ステータス、KeithJohnstone紹介、星の王子さま
第 10 回　シーンワーク、StanislawskiSystem紹介、星の王子さま
第 11 回　シーンワーク、星の王子さま
第 12 回　稽古、星の王子さま
第 13 回　稽古、星の王子さま
第 14 回　発表会、星の王子さま
第 15 回　反省、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーンなどは、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢、態度、協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等４０％を総合的に評価する。
Ｓ　①～④まで90％以上獲得した者
Ａ　①～④まで80％以上獲得した者
Ｂ　①～④まで60％以上獲得した者
Ｃ　①～④まで50％以上獲得した者
Ｄ　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE1231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 基礎演劇演習Ｂｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
木曜 3限 木曜 4限
実務経験あり
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
• ｂ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 授業では稽古着と稽古靴を着用すること。
〔授業の概要〕
まずは舞台に立って、台詞を言ってみよう。
そのひと言はなぜ、そこで発せられるのだろう？――そう疑問を持つことから始めよう。
授業では、
①簡単なシアターゲームなどを通じて俳優として必要な感覚・感性を養いつつ、
②ひとつの戯曲を取り上げ、模擬上演としての発表会を想定した実践的な稽古を重ねる中で、
③稽古へ向けた準備のあり方や稽古場で行うべきこと、相手役とどう向き合っていくか、など演劇人として基本的な心構えを身につけて行く。
〔授業の到達目標〕
課題として取り上げられた戯曲を研究し、稽古し、演じ切ることで、
①戯曲の読み解き方、場面と役の理解の仕方、台詞の働き、などについて、自分なりの方法と見解を持つことができる。
②演劇が、ひとりひとりの孤独で内的な思考の積み重ねと、稽古場での協働作業の絶え間のない往復のうちに形作られることを体験する。
③自分の台詞は相手役のためにある、ことが理解できる。
④次の稽古場に立つために、自分に何が不足しているか、あるいは必要なのかが自覚できている。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介
　　たがいを知り合うエクササイズ
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　シアターゲームとエクササイズ、課題戯曲について

空間感覚を養う
本読み、場面割り
第 3 回　シアターゲームとエクササイズ、本読み
呼吸と身体
本読み、場面割り
第 4 回　シアターゲームとエクササイズ（以後適宜）、シーンスタディ①
読み稽古
第 5 回　シーンスタディ②
読み稽古　衣装、小道具についての検討　授業後キャスティング
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　立ち稽古⑤
第 11 回　立ち稽古⑥
第 12 回　立ち稽古⑦
第 13 回　立ち稽古⑧
第 14 回　立ち稽古⑨
第 15 回　発表会、まとめと総評

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。

〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディおよび立ち稽古では各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。

〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）

〔科目ナンバリング〕
THE1230T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
ー

## 基礎演劇演習Ｂｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

三浦 剛

〔履修条件〕
• ｃ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
呼吸
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表

第 11 回　上演（1班）・反省/課題
第 12 回　上演（2班）・反省/課題
第 13 回　上演（3班）・反省/課題
第 14 回　上演（4班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
TEA1231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 基礎演劇演習Ｂｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
土曜 1限 土曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

〔履修条件〕
• ｄ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に基礎的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。
〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
　　呼吸
　　※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
　　身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
　　呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
　　呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
　　戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
　　関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（1班）・反省/課題
第 12 回　上演（2班）・反省/課題
第 13 回　上演（3班）・反省/課題

第 14 回　上演（4班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
TEA1231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 身体トレーニングａｂｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 2限 火曜 3限 火曜 4限
実務経験あり
実技
必修

山本 光二郎

〔履修条件〕
必修。
カラダを動かすことをいとわない者。
〔授業の概要〕
カラダで表現することに気付き、可能性を確かめる授業である。テクニックの習得もさることながら、受講者個人のカラダに対する許容範囲を広げることを目的とする。
• カラダの柔軟性、カラダの持っているリズムを確認する。
• ダンスカンパニーコンドルズの持つ不思議な世界を紹介する。さらに舞台人として自身の見せ方、見られ方を学ぶ。
• 声や、カラダから出せる音（楽器を含む）などを自身のパフォーマンスと融合することを学ぶ。
〔授業の到達目標〕
カラダを動かすことによって気付く自身の可能性を発見、認識、利用、表現することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入、紹介
＜カラダほぐし＞
第 2 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞①
第 3 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞②
第 4 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜基本＞③
第 5 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜応用＞④
第 6 回　ストレッチする・カラダで遊ぶ・踊るを遊ぶ
＜応用＞⑤
第 7 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜基本＞①
第 8 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜基本＞②
第 9 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜応用＞③
第 10 回　動きのフレーズを体験する
振付けを覚えるトレーニング、音楽と共に動きのフレーズを学習する。雑誌、絵本等メディアを使って踊ることを学ぶ
＜応用＞④
第 11 回　演出を含めた小作品をつくる
コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞①
第 12 回　演出を含めた小作品をつくる
コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞②
第 13 回　演出を含めた小作品をつくる

コンドルズのダンスを踊ってみる・演出を含めた小作品をつくる
＜稽古＞③
第 14 回　演出を含めた小作品をつくる
＜仕上げ＞④
第 15 回　演出を含めた小作品をつくる
＜発表＞⑤

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業ごとに、個々もしくはグループへの動き、演技、演出に対するフィードバックをする。

〔授業時間外の学習〕
授業に参加するには健康であることが大前提であるので、日常的に怪我や病気に注意し､健やかな状態を維持すること。これらの学修に15時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
動きやすい、床に転がってもよい服装。
裸足もしくは靴下。

〔成績評価〕
授業への取り組み重視90％、レポート提出10％を100点に換算する。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
THE1330T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## ボイス・トレーニング（歌唱）ａｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 3限 火曜 4限
実務経験なし
実技
必修

**藍澤 幸頼**

〔履修条件〕
• ａｃ組必修。
• 授業課題を稽古に、積極的に取り組むこと。
• 額を出し、体の線が出る服を着用すること。

〔授業の概要〕
声を出す準備として、姿勢や癖の有無を見つめ直し、身体をニュートラルな状態にする。旧俳優座・劇団四季などのメソッドを取り入れた発声訓練により、声の通り道・声の高低・筋肉を意識することによって、呼吸法を学ぶ。詩の暗唱によって、演劇的表現にふさわしい語感を学び、メロディーに語感を乗せる方法を学ぶ。

〔授業の到達目標〕
• 演劇人としてのニュートラルな身体と発声表現の基礎を身につけることができる。
• 個々の声の状態を把握し、コントロールする能力を身につけることができる。
• メロディーに語感表現をのせて、唱う方法を習得することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　演劇人としての心構え・発声訓練の基礎・自己紹介
※授業内容に関しては、その進行具合により、変更することがある。
第 2 回　発声訓練・自己紹介
第 3 回　発声訓練・個人歌唱①
第 4 回　発声訓練・個人歌唱②
第 5 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練①
第 6 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練②
第 7 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練③
第 8 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練④
第 9 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練⑤
第 10 回　詩の暗唱による語感表現・発声訓練⑥
第 11 回　歌唱表現・発声訓練①
第 12 回　歌唱表現・発声訓練②
第 13 回　個人発表試験・発声訓練①
第 14 回　個人発表試験・発声訓練②
第 15 回　講評

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
個々の発表時に、フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業で学んだ呼吸法、発声訓練
• 課題の暗唱、暗譜
これらの学修に30時間以上を要する。
• 毎週必ず 1 本は、舞台、映画、動画配信サイトなどを鑑賞する。

〔教科書・参考書等〕
上田敏「海潮音ー上田敏訳詞集」（新潮文庫）
高村光太郎「高村光太郎詩集」（岩波文庫）
ミュージカル「レ・ミゼラブル（最新版）」（ハル・レナード社/ミュージカルヴォーカルセレクション）
ピアノ/ヴォーカルセレクション「ミス・サイゴン2004年キャスト版」（WATANABE）

〔成績評価〕
心身の健康管理（出席率を含む）25％、授業への取り組み（個々の進歩・真摯な姿勢）25％、発表内容の到達度50％の配分で、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
VOM1310T

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ボイス・トレーニング（歌唱）ｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
実技
必修

信太 美奈

〔履修条件〕
ｂ組必修。
素直に何でもトライしたい意欲のある者。
顔面が見えるヘアースタイルで参加。
〔授業の概要〕
芝居のため、歌のための呼吸・筋肉・声の出し方・歌い方等を学ぶ。
「ヴォイス」声とはどんな物なのかを知る。
声と心と筋肉の関係を知る。
声について色々な角度から試す。
〔授業の到達目標〕
• 芝居・歌において、身体を使った声で舞台に立つことができる。
• 完全にはできなくとも、意識は持つことができる。
• 筋肉と感情がコントロールできる。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介①
　　自己分析した自己紹介をしてもらう。
　　※予定通りに進まない場合もある。
第 2 回　自己紹介②
　　ひとりひとり歌ってもらう
第 3 回　呼吸と声
　　声とは？
第 4 回　声と心①
　　声と呼吸について
　　声と心について
第 5 回　声と筋肉と心②
　　声を出すための筋肉について
第 6 回　発声と感情
　　声と感情
　　声と筋肉
第 7 回　身体の意識
　　自分の体を意識する
第 8 回　発声をしながら気持ちを出す①
　　自分の身体を意識した発声
第 9 回　発声をしながら気持ちを出す②
　　具体的な課題で試してみる
第 10 回　台詞を言いながらの気持ちと筋肉について意識する①
　　課題を使っての台詞と歌①
第 11 回　台詞を言いながらの気持ちと筋肉について意識する②
　　課題を使っての台詞と歌②
第 12 回　台詞、歌を通しての気持ちと筋肉について意識する①
　　課題を使っての台詞と歌③
第 13 回　台詞、歌を通しての気持ちと筋肉について意識する②
　　課題を使っての台詞と歌④
第 14 回　台詞、歌を通しての気持ちと筋肉について意識する③
　　課題を使っての台詞と歌⑤
第 15 回　課題出して試験、まとめ
　　課題の総仕上げ（グループ）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 授業中の発表の後に総評する。
• ひとりひとり、発声している時にチェックしてアドバイスする。
〔授業時間外の学習〕
授業でやったことを必ず復習。次の授業の時にはそれが無意識でもできるようにしてくる。
たくさんの音楽を聞く。たくさんの舞台人の声を聞く。
他の授業でも、この授業で習ったことを利用して、コラボし合うように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業中に課題を配布。
〔成績評価〕
授業態度・課題への取組み（予習・復習）80％、課題の成果20％を元に総合的に評価する。
出席は重視。
Ｓ 総合点が90点以上の者（意欲があり、課題の予習・復習をしっかり行い成果がある者）
Ａ 総合点が80点以上の者（意欲があり、課題をやってまあまあ成果が見られた者）
Ｂ 総合点が60点以上の者（課題には向き合うが、向上していない者）
Ｃ 総合点が50点以上の者（課題に向き合う精神が見られない者）
Ｄ 総合点が50点未満の者（授業態度、取り組みが悪い者）
〔科目ナンバリング〕
VOM1310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇演習Ａａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
火曜 3限 火曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

三浦 剛

〔履修条件〕
• ａ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に実践的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
　　呼吸
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
　　身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
　　呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
　　呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
　　戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
　　関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。

〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）

〔科目ナンバリング〕
THE2230T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
ー

## 演劇演習Ａｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
火曜 4限 火曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ｂ組必修。
授業時間外での予習・復習に積極的に取り組むこと。
「個」の訓練とグループワークの２つを両立させること。
補習を随時実施する予定であるので出席すること。
〔授業の概要〕
この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機付けと学習習慣の確立、さらには良きアンサブルの取り方を学ぶ。
そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの元に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な“モノローグドラマ”として完成させるという方法をとる。加えて、第二の課題として戯曲（台詞劇）の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。
なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。
〔授業の到達目標〕
• 「自画像を演ずる」というテーマの元に“モノローグドラマ”を完成し、発表することができる。
• 戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を完成し、発表することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　課題へ向けてのウォーミングアップ
第 3 回　「自画像」台本の作成
第 4 回　「自画像」台本の発表
第 5 回　「シーンワーク」の課題提示
第 6 回　「シーンワーク」の本読み①ことば
第 7 回　「シーンワーク」の本読み②うごき
第 8 回　「シーンワーク」の本読み③関係
第 9 回　「シーンワーク」のオーディション
第 10 回　「シーンワーク」の立ち稽古①台詞
第 11 回　「シーンワーク」の立ち稽古②行動
第 12 回　「シーンワーク」の立ち稽古③アンサンブル
第 13 回　「シーンワーク」の作品発表
第 14 回　自己の「自画像」を演じ発表する。
第 15 回　他者の「自画像」を演じ発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 「シーンワーク」: 日々の授業および集中稽古期間における戯曲解釈、演技指導のコメント。
• 「自画像」の創作 :「自画像」の上演台本および演出・演技へのコメント。
〔授業時間外の学習〕
「自画像」は個人、「シーンワーク」はグループでの自主稽古を徹底しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書:井上ひさし「化粧」井上ひさし全芝居その三（新潮社）
宮本研「ブルーストッキングの女たち」宮本研戯曲集第六巻（白水社）
教科書・教材は授業初日に配布。
〔成績評価〕
毎回の授業への取り組み50％、発表内容の質50％を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。
Ｓ　90点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる）
Ａ　80点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる）
Ｂ　60点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる）
Ｃ　50点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した）
Ｄ　50点未満の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない）
〔科目ナンバリング〕
THE2230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 演劇演習Ａｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
金曜 4限 金曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
• ｃ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 授業では稽古着と稽古靴を着用すること。
〔授業の概要〕
前期発表会ではそれぞれ自分について何を発見しただろう。各自が自覚した課題を踏まえた上で、後期の授業では戯曲

の場面をさらに深く掘り下げて表現していくことを学ぶ。
そのために、シアターゲームなどを通じて俳優として必要な感覚・感性を養いつつ、新たにひとつの戯曲を取り上げ、実践的な稽古を重ねていく。
〔授業の到達目標〕
課題として取り上げられた戯曲とその一場面を研究し、稽古を重ねていくことで、
①戯曲全体とその場面の関係、場面と役の理解の仕方、その場面で自分の役が何をしようとしているか、などについて、自分なりの考えを深めることができる。
②台詞で相手役を動かし、動かされることができるようになる。
③次の稽古場に立つために、自分に何が不足しているか、あるいは必要なのかが自覚できている。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介、前期の反省
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　シアターゲームとエクササイズ、課題戯曲について
空間感覚を養う
本読み、場面割り
第 3 回　シアターゲームとエクササイズ、本読み
呼吸と身体・読み稽古
第 4 回　シアターゲームとエクササイズ（以後適宜）、シーンスタディ①
読み稽古　小道具と衣裳などの検討　稽古後キャスティング
第 5 回　シーンスタディ②
立ち稽古
第 6 回　シーンスタディ③
立ち稽古
第 7 回　シーンスタディ④
立ち稽古
第 8 回　シーンスタディ⑤
立ち稽古
第 9 回　シーンスタディ⑥
立ち稽古
第 10 回　シーンスタディ⑦
立ち稽古
第 11 回　通し稽古①
立ち稽古
第 12 回　通し稽古②
立ち稽古
第 13 回　発表会
劇場での上演
第 14 回　反省会、返し稽古
第 15 回　まとめと総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。
〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディでは各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。
〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）
〔科目ナンバリング〕
THE2231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ａｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
木曜 3限 木曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

〔履修条件〕
• ｄ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に実践的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
　　呼吸
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
　　身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
　　呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
　　集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
　　呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
　　身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
　　集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
　　戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
　　関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE2230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｂａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
木曜 3限 木曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
• a組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 授業では稽古着と稽古靴を着用すること。
〔授業の概要〕
前期発表会ではそれぞれ自分について何を発見しただろう。各自が自覚した課題を踏まえた上で、後期の授業では戯曲の場面をさらに深く掘り下げて表現していくことを学ぶ。そのために、シアターゲームなどを通じて俳優として必要な感覚・感性を養いつつ、新たにひとつの戯曲を取り上げ、実践的な稽古を重ねていく。
〔授業の到達目標〕
課題として取り上げられた戯曲とその一場面を研究し、稽古を重ねていくことで、
①戯曲全体とその場面の関係、場面と役の理解の仕方、その場面で自分の役が何をしようとしているか、などについて、自分なりの考えを深めることができる。
②台詞で相手役を動かし、動かされることができるようになる。
③次の稽古場に立つために、自分に何が不足しているか、あるいは必要なのかが自覚できている。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介、前期の反省
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　シアターゲームとエクササイズ、課題戯曲について

空間感覚を養う
本読み、場面割り
第 3 回　シアターゲームとエクササイズ、本読み
呼吸と身体・本読み、場面割り（続き）
第 4 回　シアターゲームとエクササイズ（以後適宜）、シーンスタディ①
読み稽古　稽古後キャスティング
第 5 回　シーンスタディ②
立ち稽古
第 6 回　シーンスタディ③
立ち稽古
第 7 回　シーンスタディ④
立ち稽古
第 8 回　シーンスタディ⑤
立ち稽古
第 9 回　シーンスタディ⑥
立ち稽古
第 10 回　シーンスタディ⑦
立ち稽古
第 11 回　通し稽古①
第 12 回　通し稽古②
第 13 回　通し稽古③
第 14 回　授業内発表
第 15 回　まとめと総評

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。

〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディでは各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。

〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）

〔科目ナンバリング〕
THE2231T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｂｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
金曜 2限 金曜 3限
実務経験なし
演習（演技）
必修

三浦 剛

〔履修条件〕
• ｂ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に実践的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。

〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
呼吸
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①

戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。

〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）

〔科目ナンバリング〕
THE2231T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 演劇演習Ｂｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 1限 水曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ｃ組必修。
授業時間外での予習・復習に積極的に取り組むこと。
「個」の訓練とグループワークの２つを両立させること。
補習を随時実施する予定であるので出席すること。

〔授業の概要〕
この授業では、前期に開講された「基礎演劇演習」で培った力量を礎に、俳優を目指すための更なる動機付けと学習習慣の確立、さらには良きアンサブルの取り方を学ぶ。
そのために、第一の課題として「自画像を演ずる」というテーマの元に、自分自身をできるだけ客観的に見つめ、分析し、自己の自画像を演劇的な“モノローグドラマ”として完成させるという方法をとる。加えて、第二の課題として戯曲（台詞劇）の一部を題材にとった「シーンワーク」を通して、配役のオーディション、本読み稽古、立ち稽古、作品発表へと段階を追って進みながら、演技表現の基本を学ぶこととする。
なお、履修条件にも記したように、両課題とも日課の授業時間以外に、随時補習を実施し、作品の完成度を高めることに努める。

〔授業の到達目標〕
• 「自画像を演ずる」というテーマの元に“モノローグドラマ”を完成し、発表することができる。
• 戯曲の一部を題材にとった「シーンワーク」を完成し、発表することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
第 2 回　課題へ向けてのウォーミングアップ
第 3 回　「自画像」台本の作成
※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 4 回　「自画像」台本の発表
第 5 回　「シーンワーク」の課題提示
第 6 回　「シーンワーク」の本読み①ことば
第 7 回　「シーンワーク」の本読み②うごき
第 8 回　「シーンワーク」の本読み③関係
第 9 回　「シーンワーク」のオーディション
第 10 回　「シーンワーク」の立ち稽古①台詞
第 11 回　「シーンワーク」の立ち稽古②行動
第 12 回　「シーンワーク」の立ち稽古③アンサンブル
第 13 回　「シーンワーク」の作品発表
第 14 回　自己の「自画像」を演じ発表する。
第 15 回　他者の「自画像」を演じ発表する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 「シーンワーク」: 日々の授業および集中稽古期間における戯曲解釈、演技指導のコメント。
• 「自画像」の創作 :「自画像」の上演台本および演出・演技へのコメント。
〔授業時間外の学習〕
「自画像」は個人、「シーンワーク」ではグループでの自主稽古を徹底しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書:井上ひさし「化粧」井上ひさし全芝居その三（新潮社）
宮本研「ブルーストッキングの女たち」宮本研戯曲集第六巻（白水社）
教科書・教材は授業初日に配布。
〔成績評価〕
毎回の授業への取り組み50％、発表内容の質50％を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、補習も含めた授業への出席が良好であることを前提とする。
Ｓ　90点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が特別に評価できる）
Ａ　80点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が高く評価できる）
Ｂ　60点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できる）
Ｃ　50点以上の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が最低限の域に達した）
Ｄ　50点未満の者（授業への取り組み、自画像、シーンワークの発表が評価できない）
〔科目ナンバリング〕
THE2231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｂｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
金曜 3限 金曜 4限
実務経験なし
演習（演技）
必修

〔履修条件〕
• ｄ組必修
• 授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
• 稽古着は基本的に自由だが、必ず足袋（地下足袋は不可）を着用すること。
• 授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。

〔授業の概要〕
• 毎授業で舞台俳優として必要な身体、呼吸の訓練を中心に実践的な演技メソッドを学習していく。
• 相手役との「関係性」を重視し、配布された戯曲を「課題」として、研究、稽古、完成させ発表する。
• 「台詞」「身体表現」「小道具」「衣装」「音響」「照明」俳優にとって必要なこれらの基礎的な扱い方を課題の中で学習していく。
〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究、完成と発表から演技の本質を知ることができる。
• 上演した成果から一人一人の新たな問題点・課題を発見することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①
呼吸
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　トレーニング②
身体表現・課題発表
第 3 回　トレーニング③
呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④
集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤
呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥
身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦
集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古①
戯曲解釈
第 9 回　立ち稽古②
関係性
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　上演（１班）・反省／課題
第 12 回　上演（２班）・反省／課題
第 13 回　上演（３班）・反省／課題
第 14 回　上演（４班）・反省／課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
• 演技発表会後、全員で収録映像を確認し、個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の台詞を入れる。
• 稽古を行う中で「台詞」と「身体表現」を鍛えること。
• 課題上演で自分が利用する「小道具」「衣装」「音響」「照明」を検討、準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲）
参考書：随時授業時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE2231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇演習Ｃａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期
水曜 2限 水曜 3限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ａ組必修。
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
ひとつの演劇作品のワンシーンを用いて、演技の基礎をさらに深める。
以下のことを学ぶ。
- 「サブテクスト」をどのように創出するのか
- 「なりゆき」の重要性を理解する
- 「ターニングポイント」のきっかけを掴む
- 困難な状況において自分の演技を維持する

さらに、実に些細な個人的状況が、より大きな「世界の諸問題」とどのように結びつくのかを考える。このような状況に対する自分自身の結論を、独自の方法によって表現することを身につけてほしい。以上を通じて、役に「なる」のではなく、役を「演じる」ことを学んでいく。
〔授業の到達目標〕
演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解することの基本から、演じることに対する理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、シアターゲーム、作品紹介
第 2 回　ワンシーンオーディション（二人―五人）、作品準備：劇作家、時代等
第 3 回　学生レポート：作品コンテクスト、キャラクターアナライズ
第 4 回　読む稽古
第 5 回　衣装準備、小道具、舞台大道具等セット
第 6 回　照明、音響、映像等セット
第 7 回　ワンシーン通し、反省
第 8 回　シーン直し、個人反省
第 9 回　ワンシーン稽古、ボイストレーニング
第 10 回　ワンシーン稽古
第 11 回　ワンシーン通し、反省
第 12 回　ワンシーン直し
c
第 13 回　ワンシーン発表会
第 14 回　個人反省
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に60時間以上を要する
〔教科書・参考書等〕
戯曲、戯曲のコンテクスト本
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
Ｓ　①～④まで90％以上獲得した者
Ａ　①～④まで80％以上獲得した者
Ｂ　①～④まで60％以上獲得した者
Ｃ　①～④まで50％以上獲得した者
Ｄ　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE3230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇演習Ｃｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期
木曜 3限 木曜 4限
実務経験あり
演習（演技）
必修

吉田 小夏

〔履修条件〕
• ｂ組必修。
• アーティストとして心身の健康管理ができること。もしくは、自分なりのその方法を見つける意欲のある者。
• 遅刻欠席をせず、積極的に授業に参加する姿勢を持つこと。
• その都度の授業内容に見合った稽古用の服装と履物を準備すること。

〔授業の概要〕
前半ではワークショップ形式の授業を行い、講義、演技の実践、フィードバックを重ねて演技技術を訓練し感性を磨く。特に、俳優の仕事、演出家の仕事、作家の仕事それぞれの視点から、課題の現代劇のテキストを丁寧に読み解く。戯曲を出発点に創作する時、俳優と演出家は何を担ってゆくのかを知り、表現者として体現するための方法論と選択肢を、学習してゆく。
後半では、前半の学習内容を元に、グループごとにシーンのクリエイションに取り組む。公演の稽古を模した進行で、自主稽古した課題にディレクションやフィードバックを受けながら、小作品を完成させて発表する。
授業全体を通して、卒業後のアーティストとしての社会での活動の仕方、その選択肢の種類やビジョンの持ち方等についても紹介し、学生それぞれの進路へのアプローチ方法を共に発見してゆく。

〔授業の到達目標〕
• 自分達が主に日本語で演技をしているということに自覚と誇りを持ち、言葉を味方につけたリアルな演技が実践できる。
• 日本語で書かれた戯曲、発語される台詞について、その言語的特徴や文化背景を理解しながら、シーンを読解できる。
• ナチュラルな演技、ディフォルメした演技それぞれがどんな技術で成り立ち、どんなシーンで効果的となるのか、理解しプランできる。
• 表現者としての今の自分の強味・弱点・独創性を発見し、それを生かしながら、チームメンバーと協力して創作ができる人材となる。

〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス&ワークショップ①
イントロダクションとアイスブレイク
※各ワークショップには、演技技術の基礎身体訓練としてのエクセサイズやシアターゲームが含まれる。
※授業内容に関しては、そのクラスの学習の進行具合により、多少の前後があることを前提とする。
第 2 回　ワークショップ②
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅠ
第 3 回　ワークショップ③
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅡ
第 4 回　ワークショップ④
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅢ
第 5 回　ワークショップ⑤
講義と実践：ダイアローグとモノローグの多様性Ⅰ/近代演劇史を踏まえて
第 6 回　ワークショップ⑥
講義と実践：ダイアローグとモノローグの多様性Ⅱ/集団創作のワークⅠ
第 7 回　ワークショップ⑦
講義と実践：集団創作のワークⅡ
第 8 回　ワークショップ⑧
講義と実践：キャスティングの秘密を知るワークショップ
第 9 回　②～⑧の講義の総括と、課題戯曲の読み合わせ稽古
第 10 回　課題戯曲によるクリエイション①
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 11 回　課題戯曲によるクリエイション②
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 12 回　課題戯曲によるクリエイション③
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 13 回　課題戯曲によるクリエイション④
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 14 回　課題戯曲によるクリエイション⑤
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 15 回　課題発表の上演会とその講評/授業全体のまとめと振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 授業内での演技の実技の実践の際に、演技指導として、具体的な言葉で学生へのディレクションを伝える。
• 講義や総括の際に、学生それぞれの学習到達度について一緒に確認し、それぞれの今後の課題について直接言葉で伝える。
• 宿題に対しては、その次の授業の中で、宿題の出来栄えについて学生と共有しフィードバックする時間を作る。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題に対して、授業内で行われた演出や指導を、次の授業でしっかり体現できるよう、自主稽古をすること。
• 発表に向けては、個人の学習・練習と、グループでの学習・練習の、いずれも同じく重視し、大切に時間を使うこと。
• 教科書、参考書、参考資料については、授業の前後で十分に目を通し、理解しておくこと。
• 常に視野を広く持ち、できるだけ色々な舞台を観て、長い人生の中で自分が演劇にどのように関わるかのビジョンを

探し出すこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書・参考書として、講師の作成したプリント類および戯曲の抜粋を使用する。
演技の技術の参考資料として、動画を含むWEBサイトの紹介をする場合もある。
いずれも、随時授業時に紹介・配布する。
〔成績評価〕
以下の項目につき、1項目の評価の割合について20％を目安とし、総合的に100点換算で評価する。
①授業内容への理解度②演技技術・技能の進歩③表現者としての感受性の開花④課題発表の出来栄え⑤授業への態度や意欲
S　総合評価で90点以上となる者
A　総合評価で80点以上となる者
B　総合評価で60点以上となる者
C　総合評価で50点以上となる者
D　総合評価で50点未満となる者
〔科目ナンバリング〕
THE3230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｃｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期
水曜 4限 水曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
ｃ組必修。
演劇する人間として戯曲をどう「読ん」だらよいのか、興味と探求意欲のある者。
稽古着、稽古靴を着用すること。
〔授業の概要〕
どんなに長大な戯曲も「場面」の連なりでできている。そして、「場面」とは「細部（リアリティ）」の連続体だ。
この授業では、「場面」を読み解き、それが戯曲全体とどう関わっていくのかを理解しつつ、実践的な稽古を通じて「場面」を作り上げていく。役者としてめいめいが与えられた役を理解し、台詞と役の行動を自らの身体に落とし込んでいくことを体験する。
〔授業の到達目標〕
• 戯曲を「場面」の連続として理解できる。「場面」もまたより小さな場面（出来事）の連なりであることを理解できる。
• それぞれの「場面」で何が起きているかを理解できる。場面の始まりと終わりとで何が変わっているかを理解できる。
• その場面の中で自分が演じる「役」が、何をしたいかを理解できる。
• 戯曲全体を通して、あるいはその演目を通して、作者が、演出家が、そして役を演じる自分自身が、何をしたいのか、感じ、また考えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介、戯曲の紹介
※授業内容に関しては、その進行具合等により、多少の前後・変更があることを承知しておくこと。
第 2 回　通し読み①
第 3 回　通し読み②
第 4 回　戯曲全体に関するディスカッション
第 5 回　場面割り　キャスティング　グループごとのディスカッション
第 6 回　＜シーンスタディ＞読み稽古①
第 7 回　＜シーンスタディ＞読み稽古②
第 8 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古①
第 9 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古②
第 10 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古③
第 11 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古④
第 12 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古⑤
第 13 回　授業内発表①
第 14 回　授業内発表②
第 15 回　まとめと総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。
〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディでは各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。
〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）

〔科目ナンバリング〕
THE3230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｃｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期
火曜 4限 火曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修

田中 壮太郎

〔履修条件〕
ｄ組必修。
与えられた課題に十分な時間をかけて自主的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
演技を技術として学ぶ。戯曲を読み解き、場面として起こし、発表に至る過程でプロの俳優の作業を実践し、更に癖を見極め個性を引き出していく。
〔授業の到達目標〕
舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得する、もしくはそれらの演技と自分の演技の違いを自覚し、明確な目標を持つことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入、シアターゲーム
第 2 回　課題作品発表、シアターゲーム
第 3 回　作品についての話し合い、本読み
第 4 回　オーディション
第 5 回　配役発表、読み合わせ
第 6 回　読み合わせ、作品についての話し合い
第 7 回　立ち稽古①
　　空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
　　目的、行動の明確化
第 9 回　立ち稽古③
　　人物の要求の強さを上げる
第 10 回　立ち稽古④
　　セリフを身体から外す
第 11 回　立ち稽古⑤
　　作品の中での人物の変遷
第 12 回　通し稽古
　　相手を動かすことの再認識
第 13 回　通し稽古
　　照明や音響を入れての演技
第 14 回　発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対するあらゆる方面からの理解のためのリサーチ。
身体からセリフが離れる感覚を得るまでセリフを入れる。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて、授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②自分の問題と向き合ったか10％③座組の一員としての姿勢10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE2230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｄａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　後期
土曜 1限 土曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

冨士川 正美

〔履修条件〕
a組必修。
演劇する人間として戯曲をどう「読ん」だらよいのか、興味と探求意欲のある者。
稽古着、稽古靴を着用すること。
〔授業の概要〕
どんなに長大な戯曲も「場面」の連なりでできている。そして、「場面」とは「細部（リアリティ）」の連続体だ。
この授業では、「場面」を読み解き、それが戯曲全体とどう関わっていくのかを理解しつつ、実践的な稽古を通じて「場面」を作り上げていく。役者としてめいめいが与えられた役を理解し、台詞と役の行動を自らの身体に落とし込んでいくことを体験する。
〔授業の到達目標〕
• 戯曲を「場面」の連続として理解できる。「場面」もまたより小さな場面（出来事）の連なりであることを理解できる。
• それぞれの「場面」で何が起きているかを理解できる。場面の始まりと終わりとで何が変わっているかを理解できる。

• その場面の中で自分が演じる「役」が、何をしたいかを理解できる。
• 戯曲全体を通して、あるいはその演目を通して、作者が、演出家が、そして役を演じる自分自身が、何をしたいのか、感じ、また考えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介、戯曲の紹介
※授業内容に関しては、その進行具合等により、多少の前後・変更があることを承知しておくこと。
第 2 回　通し読み①
第 3 回　通し読み②
第 4 回　戯曲全体に関するディスカッション
第 5 回　場面割り　キャスティング　グループごとのディスカッション
第 6 回　＜シーンスタディ＞読み稽古①
第 7 回　＜シーンスタディ＞読み稽古②
第 8 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古①
第 9 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古②
第 10 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古③
第 11 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古④
第 12 回　＜シーンスタディ＞立ち稽古⑤
第 13 回　授業内発表①
第 14 回　授業内発表②
第 15 回　まとめと総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
稽古時において個人、あるいはグループに対し、その都度改善点等を指摘、提案する。
〔授業時間外の学習〕
• 戯曲の背景となっている時代や社会等について、積極的に調べること。
• シーンスタディでは各自与えられた役の台詞を入れ、グループで活発な自主稽古を重ねること。
• 稽古に必要な仮小道具、衣装等を準備すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
課題となる戯曲は、授業時間に配布する。
〔成績評価〕
以下の項目について1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み、理解度②稽古への取組み、協調性③自らを研鑽する意欲④演技能力の進歩、感受性の開花⑤心身の健康管理
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、表現者としても優れている者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、表現者としても真摯に取り組んでいる者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者として今一歩の努力を要する者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解如何に関わらず、表現者としてさらなる努力を要する者）
D 総合点が50点未満の者（授業・稽古への取組み、演技ともに不十分な者）
〔科目ナンバリング〕
THE3230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｄｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
2単位　後期
金曜 4限 金曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修

田中 壮太郎

〔履修条件〕
ｂ組必修。
与えられた課題に十分な時間をかけて自主的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
演技を技術として学ぶ。戯曲を読み解き、場面として起こし、発表に至る過程でプロの俳優の作業を実践し、更に癖を見極め個性を引き出していく。
〔授業の到達目標〕
舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得する、もしくはそれらの演技と自分の演技の違いを自覚し、明確な目標を持つことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入、シアターゲーム
第 2 回　課題作品発表、シアターゲーム
第 3 回　作品についての話し合い、本読み
第 4 回　オーディション
第 5 回　配役発表、読み合わせ
第 6 回　読み合わせ、作品についての話し合い
第 7 回　立ち稽古①
空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
目的、行動の明確化
第 9 回　立ち稽古③
人物の要求の強さを上げる
第 10 回　立ち稽古④
セリフを身体から外す
第 11 回　立ち稽古⑤
作品の中での人物の変遷
第 12 回　通し稽古
相手を動かすことの再認識
第 13 回　通し稽古
照明や音響を入れての演技
第 14 回　発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。

〔授業時間外の学習〕
作品に対するあらゆる方面からの理解のためのリサーチ。身体からセリフが離れる感覚を得るまでセリフを入れる。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて、授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②自分の問題と向き合ったか10％③座組の一員としての姿勢10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE2231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｄｃ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　後期
火曜 1限 火曜 2限
実務経験なし
演習（演技）
必修

Peter Goessner

〔履修条件〕
ｃ組必修。
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。
まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置づけを想像させるものである。
授業は、ルドルフ・ペンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。
〔授業の到達目標〕
演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、シアターゲーム、作品紹介
第 2 回　ワンシーンオーディション（二人—五人）、作品準備：劇作家、時代等
第 3 回　学生レポート：作品コンテクスト、キャラクターアナライズ
第 4 回　読む稽古
第 5 回　衣装準備、小道具、舞台大道具等セット
第 6 回　照明、音響、映像等セット
第 7 回　ワンシーン通し、反省
第 8 回　シーン直し、個人反省
第 9 回　ワンシーン稽古、ボイストレーニング
第 10 回　ワンシーン稽古
第 11 回　ワンシーン通し、反省
第 12 回　ワンシーン直し
第 13 回　ワンシーン発表会
第 14 回　個人反省
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
絹川友梨「インプロ・ゲーム」
研究旅行（キース・ジョンストン「ルーズムースシアター」）で集めた書類
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
S　①～④まで90％以上獲得した者
A　①～④まで80％以上獲得した者
B　①～④まで60％以上獲得した者
C　①～④まで50％以上獲得した者
D　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE4230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇演習Ｄｄ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　後期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験あり
演習（演技）
必修

吉田 小夏

〔履修条件〕
• ｄ組必修。
• アーティストとして心身の健康管理ができること。もしくは、自分なりのその方法を見つける意欲のある者。
• 遅刻欠席をせず、積極的に授業に参加する姿勢を持つこと。
• その都度の授業内容に見合った稽古用の服装と履物を準備すること。

〔授業の概要〕
前半ではワークショップ形式の授業を行い、講義、演技の実践、フィードバックを重ねて演技技術を訓練し感性を磨く。特に、俳優の仕事、演出家の仕事、作家の仕事それぞれの視点から、課題の現代劇のテキストを丁寧に読み解く。戯曲を出発点に創作する時、俳優と演出家は何を担ってゆくのかを知り、表現者として体現するための方法論と選択肢を、学習してゆく。
後半では、前半の学習内容を元に、グループごとにシーンのクリエイションに取り組む。公演の稽古を模した進行で、自主稽古した課題にディレクションやフィードバックを受けながら、小作品を完成させて発表する。
授業全体を通して、卒業後のアーティストとしての社会での活動の仕方、その選択肢の種類やビジョンの持ち方等についても紹介し、学生それぞれの進路へのアプローチ方法を共に発見してゆく。

〔授業の到達目標〕
• 自分達が主に日本語で演技をしているということに自覚と誇りを持ち、言葉を味方につけたリアルな演技が実践できる。
• 日本語で書かれた戯曲、発語される台詞について、その言語的特徴や文化背景を理解しながら、シーンを読解できる。
• ナチュラルな演技、ディフォルメした演技それぞれがどんな技術で成り立ち、どんなシーンで効果的となるのか、理解しプランできる。
• 表現者としての今の自分の強味・弱点・独創性を発見し、それを生かしながら、チームメンバーと協力して創作ができる人材となる。

〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス&ワークショップ①
イントロダクションとアイスブレイク
※各ワークショップには、演技技術の基礎身体訓練としてのエクセサイズやシアターゲームが含まれる。
※授業内容に関しては、そのクラスの学習の進行具合により、多少の前後があることを前提とする。
第 2 回　ワークショップ②
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅠ
第 3 回　ワークショップ③
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅡ
第 4 回　ワークショップ④
講義と実践：現代口語演劇の方法論を用いてⅢ
第 5 回　ワークショップ⑤
講義と実践：ダイアローグとモノローグの多様性Ⅰ/近代演劇史を踏まえて
第 6 回　ワークショップ⑥
講義と実践：ダイアローグとモノローグの多様性Ⅱ/集団創作のワークⅠ
第 7 回　ワークショップ⑦
講義と実践：集団創作のワークⅡ
第 8 回　ワークショップ⑧
講義と実践：キャスティングの秘密を知るワークショップ
第 9 回　②～⑧の講義の総括と、課題戯曲の読み合わせ稽古
第 10 回　課題戯曲によるクリエイション①
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 11 回　課題戯曲によるクリエイション②
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 12 回　課題戯曲によるクリエイション③
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 13 回　課題戯曲によるクリエイション④
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 14 回　課題戯曲によるクリエイション⑤
グループでのシーン作り＋ディレクションとフィードバック
第 15 回　課題発表の上演会とその講評/授業全体のまとめと振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 授業内での演技の実技の実践の際に、演技指導として、具体的な言葉で学生へのディレクションを伝える。
• 講義や総括の際に、学生それぞれの学習到達度について一緒に確認し、それぞれの今後の課題について直接言葉で伝える。
• 宿題に対しては、その次の授業の中で、宿題の出来栄えについて学生と共有しフィードバックする時間を作る。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題に対して、授業内で行われた演出や指導を、次の授業でしっかり体現できるよう、自主稽古をすること。
• 発表に向けては、個人の学習・練習と、グループでの学習・練習の、いずれも同じく重視し、大切に時間を使うこと。
• 教科書、参考書、参考資料については、授業の前後で十分に目を通し、理解しておくこと。
• 常に視野を広く持ち、できるだけ色々な舞台を観て、長い人生の中で自分が演劇にどのように関わるかのビジョンを

探し出すこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書・参考書として、講師の作成したプリント類および戯曲の抜粋を使用する。
演技の技術の参考資料として、動画を含むWEBサイトの紹介をする場合もある。
いずれも、随時授業時に紹介・配布する。
〔成績評価〕
以下の項目につき、1項目の評価の割合について20％を目安とし、総合的に100点換算で評価する。
①授業内容への理解度②演技技術・技能の進歩③表現者としての感受性の開花④課題発表の出来栄え⑤授業への態度や意欲
S　総合評価で90点以上となる者
A　総合評価で80点以上となる者
B　総合評価で60点以上となる者
C　総合評価で50点以上となる者
D　総合評価で50点未満となる者
〔科目ナンバリング〕
THE4230T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技演習Ａ（ダイアローグ）ａｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期・後期
木曜 4限 木曜 5限 月曜 4限 月曜 5限
実務経験あり
演習（演技）
必修
ストレートプレイコース必修

**大谷 賢治郎**

〔履修条件〕
ストレートプレイコース必修。
授業時間外での自習、自主稽古を必要とする。アーティストとしての自立、ならびに共同作業の二つを両立させること。
稽古着を着用すること
〔授業の概要〕
「ダイアローグ＝対話」の演劇創造を可能とするための「相手と関わる」ことのできる俳優の心身の確立。アーティスト自身の想像力を以って、即興からグループワークでシーンを作る、ディバイジングの用法を用いて自分自身と客観的に向き合うシーンを創る。
ダイアローグをメインにしたシーンを既存の戯曲から抜粋、「シーンワーク」を行う。創造過程を学習し、最終発表を行う。シーンの中の対話に留まらず、演劇活動における全ての対話、「アーティスト同士の対話」「観客との対話」「社会との対話」にも創造過程において目を向ける。
〔授業の到達目標〕
• ディバイジングによるシーンの発表（グループワーク）ができる。
• 課題で与えられたシーンの発表（二人一組）ができる。
• 自分で見つけたシーンの発表（二人一組）ができる。
• 創造過程における自分自身について、そして他者についての発見の報告（個人）ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入／目標設定
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　身体訓練について/演劇的自己紹介①
第 3 回　演劇的自己紹介②
第 4 回　サブテキストによる対話シーンの創造①
１回目の発表
第 5 回　サブテキストによる対話シーンの創造②
２回目の発表
第 6 回　フィジカルシアター（身体表現）①
ジェスチャー
第 7 回　フィジカルシアター（身体表現）②
テンポと空間的関係性
第 8 回　ディバイジング（グループワークの創造）①
１回目の発表
第 9 回　ディバイジング（グループワークの創造）②
２回目の発表
第 10 回　翻訳戯曲によるシーンワーク①
取り組む戯曲の提案と本読み
第 11 回　翻訳戯曲によるシーンワーク②
１回目の発表
第 12 回　翻訳戯曲によるシーンワーク③
２回目の発表
第 13 回　課題戯曲によるシーンワーク①
１回目の発表
第 14 回　課題戯曲によるシーンワーク②
２回目の発表
第 15 回　総評/自己と他者に関する発見の報告
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の課題発表後に講評を行い、場合によっては個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
各シーンワーク発表に向けての自習ならびに自主稽古。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：教材は授業時に発表。
参考書：必要に応じて随時指定。
〔成績評価〕
授業への取組み80％、発表の内容の総合的評価20％の総合評価
S　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が大変高く評価できる。
A　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。

Ｂ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
Ｃ　各課題の発表まで達している。
Ｄ　各課題の発表が評価できない。
〔科目ナンバリング〕
THE3231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技演習Ｂ（アンサンブル）ａｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期・後期
月曜 3限 月曜 4限 水曜 2限 水曜 3限
実務経験あり
演習（演技）
必修
ストレートプレイコース必修

シライ ケイタ

〔履修条件〕
ストレートプレイコース必修。
自分に興味があること。他者に興味があること。表現に興味があること。演技に興味があること。つまり、人間に興味があること。
〔授業の概要〕
演劇におけるアンサンブルとは、没個性を意味しない。突出した個性の集合体としてのアンサンブルを探求する。言葉にできる「感情」を起点とする演技ではなく、言葉にできない「衝動」「本能」「生理現象」を起点とする演技を学ぶ。「衝動」が、具体的な「目的」を生み、「行動」に至るという人間の仕組み、つまり演技の仕組みを理解する。演技における「目的」とは、自分の役柄の感情や状態の説明ではなく、常に他者を変化させるために設定するべきであることを理解する。演技における「行動」とは、「台詞」と「動作」であることを理解し、具体的に「話す」「動く」ことを学ぶ。
グループで小作品を制作することで演劇作品の制作過程を体験し、「他者」との関わりの中での「自分」というものを自覚する。
〔授業の到達目標〕
• 演技は楽しいものだと知ることができる。
• 戯曲を「感情」ではなく「目的」で読む癖をつけることができる。
• 演技は抽象的なものではなく、具体的なものであることを理解できる。
• 「他者」との共同作業を通じて、演劇作りの楽しさを体験できる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス：自己紹介と授業全体像の把握
１～14回は座学と実技を並行して行っていく。
座学は、演劇の歴史、演技術の変遷、現代リアリズム演技の基本、日本の演劇界の現在、戯曲の読み方等を話す。
実技は、既存のテキストを使う集団創作と、テキスト作りから体験する集団創作を
行う。
第 2 回　【座学】演劇とは。演技とは。【実技】テキストを使って二人の会話を体験する
第 3 回　【座学】課題発表に対する講評　【実技】二人の会話の課題発表
第 4 回　【座学】日本における演技方法の変遷　【実技】「説明」する演技ではなく、「存在」する演技を体験する
第 5 回　【座学】「感情」ではなく「衝動」を大切に　【実技】テキストを使って複数での会話を体験する
第 6 回　【座学】課題発表に対する講評　【実技】複数人の会話の課題発表①
第 7 回　【座学】言葉の「意味」ではなく、身体の「状態」で演技する　【実技】言葉の「意味」に頼らないコミュニケーションを体験する
第 8 回　【座学】課題発表に対する講評　【実技】複数人の会話の課題発表②
第 9 回　【座学】演技とは「行動」であり、「感情」を操作することではない　【実技】「行動」の後に「感情」が生まれることを体験する
第 10 回　【座学】テキストの読み解き方　【実技】テキストを読む訓練のために、テキストを自ら作ってみる
第 11 回　【座学】 課題の稽古に対する講評　【実技】集団創作の課題の稽古①
第 12 回　【座学】課題発表に対する講評　【実技】集団創作の課題発表①
第 13 回　【座学】課題の稽古に対する講評　【実技】集団創作の課題の稽古②
第 14 回　【座学】課題発表に対する講評　【実技】集団創作の課題発表②
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
出された課題に対し、グループでよく話し合い稽古する時間を確保すること。
とにかく、様々な体験をすること。日常を生き生きと、貪欲に生きること。
演劇を沢山見ること。同年代のプロフェッショナル達が、どんなレベルで仕事をしているかを知ること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
テキストは適宜、授業時に配布する。
「俳優のためのハンドブック」（フィルムアート社）を参考書として勧める。が、これを元に授業を行うわけではないので、無理に買うことはない。しかし読めばかなり役に立つ。

〔成績評価〕
授業への取り組み40％、日々の自己研鑽30％、課題発表の成果30％を総合的に判断して評価する。なお、当然ながら、授業への出席が良好であることを前提とする。
S　総合評価90点以上の者（授業への取り組み、課題の発表が特別に評価できる）
A　総合評価80点以上の者（授業への取り組み、課題の発表が高く評価できる）
B　総合評価60点以上の者（授業への取り組み、課題の発表が評価できる）
C　総合評価50点以上の者（授業への取り組み、課題の発表が最低限の域に達した）
D　総合評価50点未満の者（授業への取り組み、課題の発表が評価できない）
〔科目ナンバリング〕
THE4231T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ショーダンスⅠ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2年生
1単位　前期
金曜 3限 金曜 4限
実務経験なし
実技
必修
ミュージカルコース必修

三村 みどり

〔履修条件〕
ミュージカルコース必修。
〔授業の概要〕
• 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
• 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につけるために、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
• 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
• ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
• 振りを覚えて、表現、感性を磨く。
〔授業の到達目標〕
振付された踊りを踊りきることにより、作品として振付表現を学ぶことができる。
各自、ビデオ撮影を見て、自分の反省点・課題を見つけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　1年次の復習と確認①
　　前半
第 2 回　1年次の復習と確認②
　　後半
第 3 回　さらに表現を広げ、自分の個性が生かされるよう肉体の訓練を行う①
　　基礎
第 4 回　さらに表現を広げ、自分の個性が生かされるよう肉体の訓練を行う②
　　応用
第 5 回　さらに表現を広げ、自分の個性が生かされるよう肉体の訓練を行う③
　　発展
第 6 回　振り付けを覚える①
　　基礎
第 7 回　振り付けを覚える
　　応用
第 8 回　振り付けを覚える
　　発展
第 9 回　踊り込み①
　　基礎
第 10 回　踊り込み
　　応用
第 11 回　踊り込み
　　発展
第 12 回　踊りを創り上げ、作品化する①
　　稽古
第 13 回　踊りを創り上げ、作品化する②
　　落とし込み
第 14 回　踊りを創り上げ、作品化する③
　　仕上げ
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による個々への指導時の言葉。
〔授業時間外の学習〕
できない振り付けは自主トレーニングして参加すること。
欠席した場合も事前に習っておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用すること。
〔成績評価〕
授業参加における積極性・取り組み・授業態度40％、実技試験60％にて評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC3310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ショーダンスⅡ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　後期
金曜 2限 金曜 3限
実務経験なし
実技
必修
ミュージカルコース必修

三村 みどり

〔履修条件〕
ミュージカルコース必修。
「ショーダンスⅠ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
• 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
• 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につけるために、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
• 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
• ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
• 振りを覚えて、表現、感性を磨く。
〔授業の到達目標〕
色んなジャンルの踊りを踊ることにより、踊りの幅を広げることができる。
自分に不足していることを考え、自分の目標を新たに持つことができる。
踊りの技術を高め、感性、表現の幅を広げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　今まで学んだことを復習、確認①
　　前半
第 2 回　今まで学んだことを復習、確認②
　　後半
第 3 回　技術を向上させ、肉体訓練を行う①
　　入門
第 4 回　技術を向上させ、肉体訓練を行う②
　　基礎
第 5 回　技術を向上させ、肉体訓練を行う③
　　応用
第 6 回　技術を向上させ、肉体訓練を行う④
　　発展
第 7 回　得意分野だけでなく、色々な踊りのジャンルを体現する①
　　入門
第 8 回　得意分野だけでなく、色々な踊りのジャンルを体現する②
　　基礎
第 9 回　得意分野だけでなく、色々な踊りのジャンルを体現する③
　　応用
第 10 回　得意分野だけでなく、色々な踊りのジャンルを体現する④
　　発展
第 11 回　踊りにおける、感性、表現の幅を広げていく①
　　入門
第 12 回　踊りにおける、感性、表現の幅を広げていく②
　　基礎
第 13 回　踊りにおける、感性、表現の幅を広げていく③
　　応用
第 14 回　踊りにおける、感性、表現の幅を広げていく④
　　発展
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
日々の稽古による、個々への指導時の言葉。
〔授業時間外の学習〕
できない振り付けは自主トレーニングして次の授業に参加すること。
欠席した場合も事前に習っておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用すること。
〔成績評価〕
授業参加における積極性・取り組み・授業態度40％、実技試験60％にて評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC4310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ミュージカルトレーニングＢ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　前期
金曜 2限 金曜 3限
実務経験なし
実技
必修
ミュージカルコース必修

信太 美奈

〔履修条件〕
• ミュージカルコース必修。
• 日常のクラスはなるべく身体のラインが見える練習着を着用する。
• ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加する

こと。「ミュージカルトレーニングＢ①」履修者は「ミュージカルトレーニングＢ-ＬＡ①」、「ミュージカルトレーニングＢ②」履修者は「ミュージカルトレーニングＢ-ＬＡ②」に参加すること。
• シューズはジャズシューズと女子はヒールのあるダンスシューズが必要。
• ナンバーに合う練習着を着用。
• 顔面が見えるヘアスタイルで参加。

〔授業の概要〕
ミュージカル作品の歌を、ストーリー、セリフの中からの流れで気持ちをどのように込めて歌うか。
呼吸法・発声法・筋肉の使い方。
最後に７月の高校生のためのワークショップを公開試験とする。

〔授業の到達目標〕
１年次より引き続き、呼吸、筋肉の意識を高めることができる。
暗譜したミュージカルナンバーを、ダンスやステージングに取り入れながら表現することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　前年度の反省と今学期の目標等について語り合う
　　自己紹介も兼ねる
第 2 回　歌唱とダンス
　　一人一人の今の実力を見る。歌とダンスを披露
第 3 回　自分の姿への意識
　　舞台での姿勢、歩き方、身体で感じる音
　　自分を知る

　　次週のためのオーディション曲を渡す
第 4 回　オーディション
　　課題に挙げた曲を歌う。
　　課題のダンスをする。
第 5 回　課題になった楽曲を歌い込む
　　それぞれの課題曲を歌いこむ
第 6 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習①
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 7 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習②
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 8 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習③
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 9 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習④
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 10 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習⑤
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 11 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習⑥
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 12 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習⑦
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 13 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習⑧
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 14 回　歌の周囲のステージング、セリフ等も練習⑨
　　課題を歌い、ダンスする。
　　セリフがある場合はそれも。
第 15 回　公開試験
　　※オーディションにより決まったナンバーを披露

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• ７月の発表に向けての各自の曲について、総評・アドバイスをする。
• 全体で発表する曲への細かいアドバイスをする。

〔授業時間外の学習〕
• 呼吸・筋肉の使い方をマスターするように日々努力する。
• 楽譜が読めるように努力する。
• 課題を必ず次の授業までに暗譜する。
• グループで歌う場合は集まって練習する。
• 毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
ＣＤ、ミュージカル作品を見たり聞いたりしてほしい。
授業中に資料配布。

〔成績評価〕
授業態度・課題への取り組み（予習・復習）60％、課題の成果40％を元に総合的に評価する。
出席重視
Ｓ　90点以上の者（意欲があり、課題の予習・復習をしっかり行い成果がある者）
Ａ　80点以上の者（意欲があり、課題をやってまあまあ成果が見られた者）
Ｂ　60点以上の者（課題には向き合うが、向上していない者）
Ｃ　50点以上の者（課題に向き合う精神がみられない者）
Ｄ　50点未満の者（授業態度、取り組みが悪い者）
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

〔科目ナンバリング〕
VOM3310T

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## ミュージカル演習①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　後期
木曜 4限 木曜 5限
実務経験なし
演習（演技）
必修
ミュージカルコース必修

大塚 幸太

〔履修条件〕
ミュージカルコース必修。
授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。
稽古着・稽古靴着用。
〔授業の概要〕
「音」を「楽しみ」、心が動く「演技表現」と空間と空気を動かす「身体表現」を学ぶ。ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」とは何かを学ぶ。
シーンワークでは（群像・ペア・ソロ）ミュージカル特有の「形だけの演技」ではない、演技をしっかり構築し「役として生きる」ことを体感する。
俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。
〔授業の到達目標〕
各自がそれぞれ得手不得手を素直に理解し、自らそれをさらに伸ばし、克服しようとする努力をすることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　課題の歌入れ・振付①
第 2 回　課題の歌入れ・振付①
第 3 回　課題作品の演出
第 4 回　課題作品の演出
第 5 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 6 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 7 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 8 回　課題の歌入れ・振付②
第 9 回　課題の歌入れ・振付②
第 10 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 11 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 12 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 13 回　課題作品①②演出
第 14 回　課題作品①②演出
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で個別にアドバイスを伝える。
〔授業時間外の学習〕
授業に向けての予習・復習。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で配布されるプリント。
〔成績評価〕
以下の項目につき 1 項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業態度②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢と実力④自らを研鎖する意欲⑤身体的・精神的健康の維持
S　総合点が90点以上の者（①～⑤を満たし、即戦力となりうる可能性のある実力がある者）
A　総合点が80点以上の者（①～⑤を満たしている）
B　総合点が60点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足）
C　総合点が50点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足・授業態度や他の学生に及ぼす影響）
D　総合点が50点未満の者（①～⑤を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
THE4232T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 演劇特別演習A①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
月曜 3限 月曜 5限
実務経験あり
演習（演技）

鴻上 尚史

〔履修条件〕
運動しやすい格好であること。積極的に参加すること。
〔授業の概要〕
俳優の基本である「正しい発声」について徹底的に伝えます。正しい発声を知らずに、演技したり舞台に立つことは俳優としては、重大な損失です。続いて演技の基本である「スタニスラフスキー・システム」を伝えます。演技とは何かを、系統的に理論的に教えます。共に俳優にとっては必修のことです。「正しい身体とは何か？」についても伝えます。プロポーションでも筋肉でもなく、俳優にとって必要な身体とは何か、ということです。
〔授業の到達目標〕
舞台に立つだけではなく、日常でもかれない、表現力豊かな声を獲得できる。また、演技の根本が分かり、演技に対しての恐怖感や自意識、苦手意識を克服できるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　正しい発声とは何か？①
腹式呼吸、胸式、肩式呼吸の違いと、腹式呼吸の特性。
第 2 回　正しい発声とは何か？②
共鳴の5つの身体の場所について。
第 3 回　正しい発声とは何か？③

お腹、つまり丹田で支えるということのメリット。
第 4 回　正しい発声とは何か？④
声のベクトルを意識する。ベクトルとは何か？方向と幅について。
第 5 回　正しい発声とは何か？⑤
それぞれの個人の声の確認。
第 6 回　正しい発声とは何か？⑥
個人の声の確認の続きと声全般の鍛え方、ケアの仕方。発声のまとめ。
第 7 回　正しい身体とは何か？①
正しい身体を外側の視点で検証する。
第 8 回　正しい身体とは何か？②
正しい身体を内側の視点で検証する。アレクサンダーテクニック、フェルデンクライス、野口体操など。
第 9 回　正しい身体とは何か？③
自由な身体とは何か？表現する身体を考える。
第 10 回　スタニスラフスキー・システムについて①
「与えられた状況」を理解する。自意識を取り除くために。
第 11 回　スタニスラフスキー・システムについて②
「魔法のもし マジック・イフ」の視点から演技を考える。
第 12 回　スタニスラフスキー・システムについて③
目的と障害を明確にする。
第 13 回　スタニスラフスキー・システムについて④
目的と障害を明確にした後、それを現す行動を見つけ出す。
短いスキットを演じてみる。
第 14 回　スタニスラフスキー・システムについて⑤
演技を状況ではなく行動から構成する。スキットの続き。
第 15 回　上手な演技とは何か？
上手な演技とは何かを明確に定義する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎時間、授業の進度に合わせて、適時、学生にフィードバックを行う。スキット発表後は、各学生に講評を行う。毎時間、冒頭に、質問の時間を取り、学生の疑問を受けつけ、それに対して、誠実に対応する。
〔授業時間外の学習〕
授業内で、何をすればよいか適時伝える。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）、「演劇入門」（集英社新書）、「演技と演出のレッスン」「発声と身体のレッスン」（白水社）である。が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。
〔成績評価〕
授業への取り組みおよび授業での参加態度100％で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2232T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇特別演習B①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　前期
火曜 3限 火曜 4限
実務経験あり
演習（演技）

鴻上 尚史

〔履修条件〕
やる気があること。動きやすい服装をしていること。
「演劇特別演習Ⅰ」の単位を修得していることが望ましいが、修得していなくてもよい。
〔授業の概要〕
• 上手な演技とは何かを中心に、演技に対して様々な角度からアプローチする。
• 「声の５つの要素」
• 三つの集中の輪
• リアルな感情と意識した動きの共通部分としての演技の追求。
• 舞台の演技と映像の演技の違いなど。実践的でプロにつながら演技を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
リアルにかつ楽しく演技ができるようになる。つまり、演技が上達することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　声の教養・身体の教養を上げるために①
声を5つの要素に分解し,さまざまな声を使えるようにする。
第 2 回　声の教養・身体の教養を上げるために②
「声で遊ぶ」ことにより、多様な声を獲得する。
第 3 回　声の教養・身体の教養を上げるために③
「スタニスラフスキーの集中の輪」を理解し、三つの輪を表現できるようにする。
第 4 回　声の教養・身体の教養を上げるために④
三つの輪を動く演技を創り、発表する。
第 5 回　リアルな演技とは何か？①
演技における「嘘」と「リアル」と「嘘くさい」の違いを理解する。
また、「ナチュラル」と「リアル」の違いも理解する。
第 6 回　リアルな演技とは何か？②

「映像の演技」と「舞台の演技」の違いを理解する。
第 7 回　リアルな演技とは何か？③
身体で感じるということはどういうことかを体験する。
第 8 回　リアルな演技とは何か？④
身体で表現するとはどういうことかを体験する。
第 9 回　リアルな演技とは何か？⑤
言葉で表現することを体験する。
第 10 回　様々な演技のトライアル①
セリフの文節に区切ってアプローチする。
第 11 回　様々な演技のトライアル②
観客と関係をつくることをシアターゲームで学ぶ。
第 12 回　様々な演技のトライアル③
お互いをステイタスを意識することをシアターゲームで学ぶ。
第 13 回　様々な演技のトライアル④
セリフのさまざまな言い方を見つけてみる。
第 14 回　様々な演技のトライアル⑤
動きとセリフの一致を、さまざまなシアターゲームで探る。
第 15 回　演技のまとめ
演技とはなんだったか？プロを目指すこと、アマチュアで続けること。表現することの目的と意味を考える。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
適時、学生の課題発表に対して、講評をする。それに対する質問があればいつでも受け付ける。火曜日の放課後でも可。

〔授業時間外の学習〕
授業内で、何をすればよいか適時伝える。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
参考書としては、「あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント」（講談社文庫）、「俳優入門」（講談社文庫）、「演技と演出のレッスン」（白水社）である。
が、あくまで参考書であるので、無理に買うことはない。授業でちゃんと行う。

〔成績評価〕
授業への取り組みおよび授業での参加態度100％で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
THE3232T

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
ー

## マイム①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
月曜 4限 月曜 5限
実務経験なし
実技

江ノ上 陽一

〔履修条件〕
表現する身体に関心を持ち、表現者となるための熱意を行動で示すことができる。
意欲を持って取り組むこと。
稽古着、稽古履き着用のこと。
無断での遅刻、欠席は厳禁。

〔授業の概要〕
パントマイムとは言語という具象行為を意図的に廃し言葉さえも身体化する芸術である。それは、日常全ての言語を身体化するということ。
そのためには身体の緊張と弛緩、分解、重心移動、動くスピードのコントロール等を習得することが必須である。また、肉体訓練を継続して行い、演技者として人前に立つために不可欠な、想いを表現できる身体の獲得を目指す。
同時に、観察をもとに無意識な日常行動における身体的動作の認識作業を行い、「動き」に「想い」を込め、独自の魅力的な所作を手に入れる。
基本的なテクニックを身につけた上で、「無声」、「何もない空間」という状況の中で、想像力を駆使し身体だけの表現を体現できるようにする。

〔授業の到達目標〕
正確なパントマイムテクニックの習得。自由で型破りな想像力を獲得する。
身体だけで言葉を使わずに、自分の「想い」を他者に伝える術を得ることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　ボディコントロールの訓練
身体のみで表現するために必要な筋力を強化する。
思い描いた動きを体現するためには必要不可欠な要素なのである。
第 2 回　重心移動を学ぶ
その場で歩行（移動）を表現する方法の取得。
第 3 回　緊張と弛緩を身につける
テクニックのスキルアップは勿論、多様な感情表現を体現する。
また、呼吸との関係も学ぶ。
第 4 回　知識を得る
講師の舞台作品映像を鑑賞し、講師の作品説明のもと「ノンバーバル」芸術を具体的な知識として得る。
第 5 回　観察力を養う

生徒同士の発表の場において、お互いの演技の感想を述べ合うことで見る目を養う。眼で覚えるという感覚を磨く。

第 6 回　間の取り方を知る
文章に「、」や「。」があるように、身体言語にも必要不可欠な「、」や「。」を知り、活用する。

第 7 回　デフォルメ
ある動きを誇張し、そのことで強く印象付ける術を学ぶ。

第 8 回　ここまで習得したテクニックの小テストを行う
決められた時間内でのパフォーマンスをアンサンブルにて表現する。
他者と一緒にパフォーマンスすることで、協力して創作する術を体験する。（状況によってはソロパフォーマンスとする）

第 9 回　既存のイメージからの脱却
発想の転換を図り、独自の表現を生み出す。

第 10 回　仕草
様々なちょっとした動作や表情（仕草）、所作にて魅力的なキャラクターを創る。

第 11 回　アンサンブル
８.での小テストを踏まえ、成熟させる時間とする。
無声での会話、ルール（時間）がある上での表現の完成。

第 12 回　パフォーマンス①
複数人でのグループ創作作業。
各々アイデアを駆使し、与えられたテーマで創作。（状況によってはソロパフォーマンスとする）

第 13 回　パフォーマンス②
各グループをシャッフルし、違う仲間との創作作業で新たな体験を生み出す。（状況によってはソロパフォーマンスとする）

第 14 回　パフォーマンス③
与えられたテーマ、音楽、時間にて短い物語をつくり、表現としての構想を練る。

第 15 回　パフォーマンス④
練り上げた構成をもとに作品を成熟させていく。

「実技試験」完成させた作品の発表

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演技発表後、個別（グループ）に指導、フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
• 基本的なストレッチや身体訓練を自主的に行うこと。
• 中間テストを実施するので、グループごとに授業内容をよく復習しておくこと。
・日常生活の中で反復、復習すること。「読む」「見る」「触れる」「食べる」･･･全ての経験を糧にするよう、完成を研ぎ澄ませて生活すること。
上記の学修に30時間以上要すること。

〔教科書・参考書等〕
参考資料等は必要時に配布。また、講師が授業にて見せる演技は「生きた教材」である。見逃さず参考にすること。
講師の「作品映像」を鑑賞し、非言語の演技に関して実際に説明を受ける。

〔成績評価〕
授業への取り組み50%、レポート20%、実技試験30%。
Ｓ　総合点が90点以上の者（①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方の理解度が非常に高い②テクニックのスキルレベルが非常に高い③作品創作にあたりストーリー構築にオリジナリティがある）
Ａ　総合点が80点以上の者（①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方の理解度が高い②テクニックのスキルレベルが高い③独自の発想による表現ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（①パントマイムを演じる上での身体の使い方、考え方をある程度理解している②テクニックのスキルレベルが高い③既存のイメージではない発想にて表現ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（Bの①②③のうち1つは身につけている者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（Bの①②③が全く身についていない者）

〔科目ナンバリング〕
THE1331T

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## アクション①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
月曜 2限 月曜 3限
実務経験なし
実技

藤田 けん

〔履修条件〕
特になし。

〔授業の概要〕
現代アクション・時代アクション（殺陣）を隔週で行う。立ち廻りによって身体を動かすことにより、湧き上がる感情を自然に表現できるよう基本を指導する。
現代アクションは、表現者として身体を使って感情を出せるように指導する。
時代アクションは、刀等武器に感情が乗るように指導する。あくまでも芝居でありスポーツではないことを学ぶ

〔授業の到達目標〕
• 俳優として最小限の基本を身につけることができる。
• 人を怪我させないように立ち廻りをすることができる。
• 心と体が連携できる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入

役者のアクションに対する考え方の説明
自分がこの授業で何をできるようにするかの目的を作る。
第 2 回　現代アクションの基本練習①
殴り（蹴り）たいという気持ちが出て、体が反応して殴る（蹴る）動作になる
第 3 回　時代アクションの基本練習①
時代アクションは体ではなく、武器を持った時に感情で武器を扱えるようにする。
刀の使い方
第 4 回　現代アクションの基本練習②
基本練習①で行ったことをもっと深く学んでいく
１対１での基本練習
殴り、蹴り
第 5 回　時代アクションの基本練習②
基本練習①で行ったことをもっと深く学んでいく
１対１での基本練習
正眼、真っ向、袈裟
第 6 回　現代アクションの基本練習③
１対１での基本練習
殴られ方など
第 7 回　時代アクションの基本練習③
１対１での基本練習
斬られ方など
第 8 回　現代アクションの基本練習④
１対１での基本練習
簡単なアクションをやってみる。
第 9 回　時代アクションの基本練習④
１対１での基本練習
簡単なアクションをやってみる。
第 10 回　現代アクションの基本練習⑤
１対１での基本練習
お芝居を入れたアクションをやっていく
第 11 回　時代アクションの基本練習⑤
１対１での基本練習
お芝居を入れたアクションをやっていく
第 12 回　現代アクションの基本練習⑥
１対１での基本練習
今までやってきたアクションの完成度を上げる
第 13 回　時代アクションの基本練習⑥
１対１での基本練習
今までやってきたアクションの完成度を上げる
第 14 回　現代アクションの基本練習⑦
１対１での基本練習
みんなの前で完成したアクションを発表する
第 15 回　現代アクションの基本練習⑦
１対１での基本練習
みんなの前で完成したアクションを発表する

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実技をしてもらった学生に対し、授業中に評価を行う。
〔授業時間外の学習〕
自己の体調管理、体力の増進を行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特にないが、動きやすい格好で受講すること。
〔成績評価〕
やる気・授業態度40%、課題への取組み40%、課題の成果20%をもとに総合的に評価する。
S　90点以上の者（立ち廻りが指導でき、表現できている者）
A　80点以上の者（立ち廻りが表現できる者）
B　60点以上の者（立ち廻りがやや表現できる者）
C　50点以上の者（立ち廻りがほぼ表現できない者）
D　50点未満の者（立ち廻りがまったく表現できない者）
〔科目ナンバリング〕
THE2330T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 日本舞踊Ⅰ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
火曜 2限 火曜 3限
実務経験なし
実技

**藤間 希穂**

〔履修条件〕
１．稽古着は浴衣を含む和服・足袋着用、舞踊扇子持参の上、参加すること。
２．授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。
３．授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、髪の長さが肩まで届く場合は必ず結うこと。
４．授業内に座学と実技があるが、必ず両方参加のこと。
５．遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出しにくること。
〔授業の概要〕
１．表現者として唯一無二の存在になることを確認する。
２．プロフェッショナルとしての心得とマナーの体得する。
３．グローバルに活躍するためにも、日本人としての価値観を見出し磨く。
４．古典芸能を通して、現場で説得力を増すスキルを身に付ける。
５．「人前へ出ること」に必要な美意識を向上させる。
以上を目標に「座学」と「実技」の二部構成で行う。

※座学では活躍し続ける表現者として必要な「価値を生む素養～健康・品性・コミュニケーション～」について学ぶ。美意識を高めると共に、表現者として必須の精神性を学ぶ。またClassroomコメントを毎時間記入し、講師の助言を通して課題や解決策を見出し、自立自走を目指す。
※実技では「人前で表現する者として必要な所作」を古典芸

能を通じて体得する。座学で深めた理解を、実際に表現する手法を学ぶ。

【曲目】
立方（たちかた）：長唄「松」
女形（おんながた）：長唄「新曲娘道成寺」または「京の四季」（受講人数等により、どちらか1曲を講師が選定）

〔授業の到達目標〕
• 座学をもとにした学習到達度の確認にて８割以上得点できる。
• 実技では課題曲を人前で発表できるスキルを身につけることを目標とする。
• 授業態度では積極的に発言すると共に傾聴を重んじ、自ら考え行動することができる。
• Classroomコメントでは自己成長を促す「得意分野」と「改善点」を見出し表現できる。

〔授業計画〕
第 1 回　導入
松、新曲娘道成寺の助手による実演着付け、畳み方、立ち居振る舞い

【授業タイムスケジュール】
男女共通前半50分：出席10分、座学25分、知恵袋５分、所作10分
後半40分：男子「松」・女子「松＋新曲娘道成寺」
※座学がない進行の場合、知恵袋が繰り上がり、実技時間が25分長くなる。

※予定は進行状況により変更される場合がある。
※ハイブリッド型授業の場合
座学：オンラインまたはオンデマンド授業
実技：教室の人数制限に合わせて人数を分割して進行

第 2 回　価値観3choice 自己紹介—知恵袋①
男子：松10C ＋手踊り
女子：松10C ＋新娘　基本動作
着付け、畳み方チェック、立ち居振る舞い、扇開閉、構え、すり足

第 3 回　自己分析シート—知恵袋②
男子：松20C ＋手踊り
女子：松20C ＋新娘　基本動作
立居振舞、帯結びテスト

第 4 回　価値を生む—知恵袋③
男子：松後ろ向き左手扇＋手踊り
女子：松後ろ向き左手扇＋新娘伊達者
立居振舞、構え

第 5 回　ディスプレイルール—知恵袋④
男子：松前半最後＋手踊り
女子：松前半最後＋新娘　１番
立居振舞、摺足

第 6 回　継続と行動①—知恵袋⑤
男子：松前半復習＋手踊り
女子：松前半復習＋新娘　１番復習
立居振舞、扇開閉

第 7 回　継続と行動②—知恵袋⑥
男子：松ちらし荒磯松＋手踊り
女子：松ちらし荒磯松＋新娘　封じ文
立居振舞、扇握り方確認

第 8 回　継続と行動③—知恵袋⑦
男子：松さつさつ＋手踊り
女子：松さつさつ＋新娘　２番最後
立居振舞、要返し

第 9 回　継続と行動④—知恵袋⑧
男子：松ちらし最後＋手踊り
女子：松さつさつ＋新娘　３番
立居振舞、要ほどき

第 10 回　コミュニケーションワーク—知恵袋⑨
フォーメーション練習①
振りに役立つ立居振舞抜粋①

第 11 回　プライオリティシーリング—知恵袋⑩
フォーメーション練習②
振りに役立つ立居振舞抜粋②

第 12 回　自己計画表作成提出—知恵袋⑪
フォーメーション練習③
振りに役立つ立居振舞抜粋③

第 13 回　コミュニケーションワーク—知恵袋⑫
実技学習到達度の確認用練習①

第 14 回　プレテスト実技学習到達度の確認用練習②

第 15 回　学習到達度の確認（スタジオ発表）

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
１．授業内の実技指導時の言葉（個・全体）
２．Classroomへのコメント（グループ）
３．学習到達度の確認後全体への総評

〔授業時間外の学習〕
１．座学内容の理解を深める復習
２．実技課題曲歌詞の理解
３．実技課題曲振りの確認
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
どちらも授業時間内に配付。

〔成績評価〕
筆記・実技の学習到達度の確認40％、授業態度（取り組み）40％、Classroomへのコメント20％を総合して評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが秀でている者）
Ａ　総合評価80点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが的確な者）
Ｂ　総合評価70点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが良好な者）
Ｃ　総合評価50点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが不十分な者）
Ｄ　総合評価50点未満の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントに問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
DNC2330T

〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 日本舞踊Ⅱ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
火曜 2限 火曜 3限
実務経験なし
実技

藤間 希穂

〔履修条件〕
１.「日本舞踊Ⅰ」の単位を修得していること。
２．稽古着は浴衣を含む和服・足袋着用、舞踊扇子持参の上、参加すること。
３．授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。
４．授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、髪の長さが肩まで届く場合は必ず結うこと。
５．授業内に座学と実技があるが、必ず両方参加のこと。
６．遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出しにくること。
〔授業の概要〕
「日舞Ⅰ」で目標にした１～５の目標をさらに深耕し、「座学」と「実技」の二部構成で行う。
※座学では「日舞Ⅰ」にて学んだ表現者の心得（品性・健康・コミュニケーション能力・美意識）をもとに、さらにプロフェッショナルとしての素養を身につける。またClassroomコメントを毎時間記入し、講師の助言を通して課題や解決策を見出し、自立自走を目指す。
※実技では座学で学ぶロジックに加え、実技公開テストで発表する古典（全員参加）と創作（自由参加）の演目の構築を通して表現者に必要な所作を学ぶ。

【曲目】
立方（たちかた）　：長唄「青海波」または「外記猿」（受講人数等によりどちらか1曲を講師が選定）
女形（おんながた）：長唄「あやめ浴衣」または常磐津「紅売り」（受講人数等によりどちらか1曲を講師が選定）
創作：講師が企画・振付・演出する創作舞踊（例：「櫻姫」「かぐやの君」等）
〔授業の到達目標〕
• 座学をもとにした学習到達度の確認にて８割以上得点できる。
• 実技では課題曲を舞台で発表できるスキルを身につけることを目標とする。
• 授業態度では積極的に発言すると共に行動変容も伴い、傾聴の結果、共同作品に良い効果を生むこと。
• Classroomコメントでは自己課題の抽出、課題解決提案ができ、実行および言語表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　自己価値観復習
青：松島の～なつかしき
あ：飾り兜の～白重ね
紅：紅染めの～たしなみはの前

【授業タイムスケジュール】
前半20分：出席10分、所作10分
中半40分：「青海波or外記猿」・「あやめ浴衣or 紅売りor 菊の栄」
後半30分：創作
※座学はオンデマンドにてそれぞれ受講のこと。

※「菊の栄」の進行は状況を見て考慮。その他の予定も進行状況により変更される場合がある。
※ 7月に行われる実技公開試験に参加の者のみ単位取得となる。不参加の場合単位取得とならないので注意すること。
※ハイブリッド型授業の場合
座学：オンラインまたはオンデマンド授業
実技：教室の人数制限に合わせて人数を分割して進行
第 2 回　礼儀①・１分間スピーチ
青：梅の花貝～あかぬなる
あ：暑さに～染浴衣
紅：たしなみは～恋の色
第 3 回　礼儀②・１分間スピーチ
青：花の跡～船の中
あ：古代模様の～晴浴衣
紅：恋の色の後～京育ち
第 4 回　礼儀③・１分間スピーチ
青：あらめで鯛は～初めしより
あ：鬢のほつれを～好いた同士
紅：蛤の貝～浅じめり
第 5 回　礼儀④・１分間スピーチ
青：蛭子の神の～漁火の
あ：命と腕に～糸柳
紅：情けを～贅こきな
第 6 回　礼儀⑤・１分間スピーチ
青：ちらりちらちら～一様に
あ：めぐる杯～芳村と
紅：足にも～伊達のの前
第 7 回　礼儀⑥・１分間スピーチ
青：波も静かに～栄ゆく家の寿を
あ：栄うる～最後
紅：伊達の～最後
第 8 回　礼儀⑦・１分間スピーチ
青：なほ幾千代も～最後
あ・紅：全体通し
第 9 回　礼儀⑧・１分間スピーチ

青：フォーメーション組み
あ・紅　共通：フォーメーション組み
第 10 回　礼儀⑨・１分間スピーチ
青：フォーメーション練習①
あ・紅：フォーメーション練習①
第 11 回　礼儀⑩・１分間スピーチ
青：フォーメーション練習②
あ・紅：フォーメーション練習②
第 12 回　テスト直前対策
青：フォーメーション練習③
あ・紅：フォーメーション練習③
第 13 回　プレテスト 青・あ・紅：実技公開試験用練習①
第 14 回　本テスト 青・あ・紅：実技公開試験用練習②（場当たり・通し稽古）
第 15 回　オーディション対策
青：１分間の見栄えがする振付
あ・紅：現場で望まれる所作の勉強

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
１．授業内の実技指導時の言葉（個・全体）
２．Classroomへのコメント（グループ）
３．学習到達度の確認後全体への総評

〔授業時間外の学習〕
１．座学内容の理解を深める復習
２．実技課題曲歌詞の理解
３．実技課題曲振りの確認
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
どちらも授業時間内に配布。

〔成績評価〕
筆記・実技の学習到達度の確認40％、授業態度（取り組み）40％、Classroomコメント20％を総合して評価する。
Ｓ　総合点90点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが秀でている者）
Ａ　総合点80点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが的確な者）
Ｂ　総合点60点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが良好な者）
Ｃ　総合点50点以上の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントが不十分な者）
Ｄ　総合点50点未満の者（学習到達度・授業への取り組み・Classroomへのコメントに問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
DNC3330T

〔学位授与方針との関係〕
③、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## 狂言Ⅰ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験あり
実技
必修
日本音楽専修必修

善竹 大二郎

〔履修条件〕
特になし。
音楽専攻日本音楽専修は必修。

〔授業の概要〕
• 丹田を意識した腹式呼吸を、狂言の謡から体得する。
• 隙のない身体表現を、狂言の小舞を舞うことで体得する。
• 狂言「附子」または「呼声」の実習で、狂言の演出や感情表現を学ぶ。

〔授業の到達目標〕
• 狂言の発声（日本古来の声の出し方）を身につけ、隙のない身体表現と狂言の感情表現を知ることができる。
• 浴衣・袴の着付けを体得できる。

〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
浴衣・袴の着付と「盃」の謡①
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少変更する場合がある。
第 2 回　「盃」の謡②
声楽と謡の違い
第 3 回　「盃」の謡③・「盃」の舞①
摺り足について
第 4 回　「盃」の謡④・「盃」の舞②・「泰山府君」の謡①・狂言の台本読み①
第 5 回　「盃」の謡⑤・「盃」の舞③・「泰山府君」の謡②・狂言の台本読み②
第 6 回　「 盃」の舞④・「泰山府君」の謡③・「泰山府君」の舞①・狂言の台本 読み③
第 7 回　「盃」の舞⑤・「泰山府君」の謡④・「泰山府君」の舞②・狂言の台本読み④
第 8 回　「 泰山府君」の謡⑤・「泰山府君」の舞③・「土車」の謡①・狂言の立ち稽古①
第 9 回　「泰山府君」の舞④・「土車」の謡②・「土車」の舞①・狂言の立ち稽古②
第 10 回　「土車」の謡③・「土車」の舞②・狂言の立ち稽古③
第 11 回　「 土車」の謡④・「土車」の舞③・狂言の立ち稽古④
第 12 回　「 土車」の謡⑤・「土車」の舞④・狂言の立ち稽古⑤
第 13 回　「 土車」の舞⑤・狂言の立ち稽古⑥
第 14 回　狂言の立ち稽古⑦
役決め

第 15 回　謡と舞の復習・狂言の立ち稽古⑧
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー・小テストにて、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容を踏まえ、自主練習を行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「狂言ハンドブック」（三省堂）
〔成績評価〕
平常点（授業への取組み・受講態度）50%、実技点50%を総合的に判断する。
S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2331T
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## 狂言Ⅱ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　前期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験あり
実技
必修
日本音楽専修必修

善竹 大二郎

〔履修条件〕
「狂言Ⅰ」の単位を修得していること。
音楽専攻日本音楽専修は必修。
〔授業の概要〕
• 丹田を意識した腹式呼吸を、狂言の謡から体得する。
• 隙のない身体表現を、狂言の小舞を舞うことで体得する。
• 狂言「附子」または「呼声」の実習で、狂言の演出や感情表現を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 狂言の発声（日本古来の声の出し方）を身につけ、隙のない身体表現と狂言の感情表現を知ることができる。
• 浴衣・袴の着付けを体得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　狂言の身体表現、感情表現、狂言面について
第 2 回　小舞の復習、「雪山」の謡①・狂言の台本読み①
第 3 回　「雪山」の謡②・「雪山」の舞①・狂言の台本読み②
第 4 回　「雪山」の謡③・「雪山」の舞②・狂言の台本読み③
第 5 回　「雪山」の謡④・「雪山」の舞③・狂言の台本読み④
第 6 回　「雪山」の謡⑤・「雪山」の舞④・狂言の台本読み⑤
第 7 回　「雪山」の舞⑤・「十七八」の謡①・狂言の立ち稽古①
第 8 回　「十七八」の謡②・「十七八」の舞①・狂言の立ち稽古②
第 9 回　「十七八」の謡③・「十七八」の舞②・狂言の立ち稽古③
第 10 回　「十七八」の謡④・「十七八」の舞③・狂言の立ち稽古④
第 11 回　「十七八」の謡⑤・「十七八」の舞④・狂言の立ち稽古⑤
第 12 回　今までの謡の復習・「十七八」の舞⑤・狂言の立ち稽古⑥（役決め）
第 13 回　実技公開試験の課題の稽古（小舞と狂言）
第 14 回　実技公開試験
　　小舞「盃」「泰山府君」「土車」「雪山」「十七八」
　　狂言「附子」または「呼声」
第 15 回　特別授業（狂言の舞、狂言の特殊な役の身体表現）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー・小テストにて、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容を踏まえ、自主練習を行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
「狂言ハンドブック」（三省堂）
〔成績評価〕
平常点（授業への取組み・受講態度）50%、実技点50%を総合的に判断する。
S 総合点が90点以上の者
A 総合点が80点以上の者
B 総合点が60点以上の者
C 総合点が50点以上の者
D 総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE3330T
〔学位授与方針との関係〕
①、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## アフレコ実技Ａ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
水曜1限
実務経験なし
実技

小金丸 大和

〔履修条件〕
健康管理に十分留意し、遅刻・欠席のないようにすること。
受け身の姿勢ではなく、積極的な研究心を持って講義を受講すること。
受講人数によっては実技指導を受けられない回も有り得るが、その際は他者に対する指導・ダメ出しをよく聞き、「見取り稽古」を行うこと。
収録でより良い演技ができるよう、講師の指導に基づく自主学習を行うことが望ましい。
声優演技を題材にした講師の著書「ＶＯＩＣＥ ＣＵＳＳＩＯＮ」（小学館クリエイティブ刊・現在は電子書籍でも発行）を読んでおくこと。
〔授業の概要〕
声優として必要な演技術を学ぶ。
具体的には発声・発音・アーテュキレーションの見直しから始まり、基礎訓練の方法を知り、アフレコ（アフターレコーディング）における台詞術、役作り、脚本の読解、演技プランの方法について研究を進めていく。また、現場での礼儀作法・マイクワーク・専門用語の理解等、実践的な技術の習得を目指す。
「空間感覚・距離感の確立」
「呼吸領域を意識し、身体を鳴らすことを覚える」
「声にパーソナリティを持たせる」
上記３点を柱とし、実際にアニメーション映像にアフレコを行い、それを視聴してみることで、アフレコにはどのような技術・能力が必要かを考える。
〔授業の到達目標〕
将来、プロの声優としてアフレコ現場のマイク前で通用する演技ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　声優演技について
　　声優に必要な演技と、俳優に必要な演技の共通点、相違点について理解を深める。
第 2 回　発声・発音・アーテュキレーションの見直し
　　アーテュキレーションの小テストを行い、受講生の能力を把握する。
第 3 回　声優の基礎訓練の方法
　　発声練習、発音練習について、基礎訓練の方法を習得させる。
第 4 回　呼吸領域の理解
　　呼吸領域の変化が声に及ぼす影響を理解させ、ブレストレーニングの方法も伝授する。
第 5 回　基礎能力テスト
　　これまでの講義の理解度、肉体訓練の進捗状況を把握する。
第 6 回　マイクワークの練習
　　マイクワークの基礎知識、セオリーを理解させる。
第 7 回　アフレコ脚本の読み方、特殊表記の解説
　　実際に使用されたアフレコ脚本を配布し、使用方法を教える。
第 8 回　キャラクター表現について
　　アフレコ収録におけるキャラクターの広げ方、作り方について勉強する。
第 9 回　声優に必要な専門知識のまとめ
　　声優演技時における基礎知識、専門知識をおさらいし、理解度を確かめる。
第 10 回　アフレコ実習①
　　短編アニメーションモノローグの練習を行う。
第 11 回　アフレコ実習②
　　短編アニメーションダイアローグの練習を行う。
第 12 回　アフレコ実習③
　　長編アニメーションモノローグの練習を行う。
第 13 回　アフレコ実習④
　　長編アニメーションダイアローグの練習を行う。
第 14 回　アフレコ実習⑤
　　長編アニメーション通しの収録を行い、視聴してみる。
第 15 回　前期のまとめ
　　前期で行った座学、実技の理解度を確かめ、後期アフレコ実技Bに繋がる基礎訓練の在り方を伝達する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
• 配布された資料、台本をしっかり読み込んでおくこと。
• 声優に必要な肉体の訓練、呼吸の訓練を日常的に行うこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：教材プリント、台本は授業時に配布する。
参考資料： 小金丸大和「VOICE CUSSION」（小学館クリエイティブ刊・現在は電子書籍でも発行）を読んでおくこと。
　　小金丸大和作・演出「さんにんのかい」ＤＶＤ「新選組」「孫悟空」（ＶＡＰより発売）を視聴しておくこと。
〔成績評価〕
受講態度および実技試験における技術の習得状況において評価する。
追加試験、補習授業は原則的に行わないものとする。
成績は、以下の項目につき、１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み②課題の成果③表現者としての魅力、個性④自らを研鑽する意欲⑤身体的、精神的健康の維持
S　総合点が90点以上の者（講義内容をほぼ完璧に理解し、声優演技技術の基礎を応用できている）
Ａ　総合点が80点以上の者（講義内容を理解し、かつ実践できるレベルに達している）

Ｂ　総合点が60点以上の者（講義内容を理解することができている）
Ｃ　総合点が50点以上の者（講義内容を理解するに至ってはいないが、努力と研究が見られる）
Ｄ　総合点が50点未満の者（講義内容を理解していない、授業への取り組みにも問題がある）
〔科目ナンバリング〕
THE3331T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## アフレコ実技Ｂ

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期
水曜1限
実務経験なし
実技

小金丸 大和

〔履修条件〕
健康管理に十分留意し、遅刻・欠席のないようにすること。
前期に「アフレコ実技A」を履修していることが望ましい。
受講人数によっては実技指導を受けられない回も有り得るが、その際は他者に対する指導・ダメ出しをよく聞き、「見取り稽古」を行うこと。
収録でより良い演技ができるよう、自主学習を行うことが望ましい。
声優演技を題材にした講師の著書「ＶＯＩＣＥ ＣＵＳＳＩＯＮ」（小学館クリエイティブ刊・現在は電子書籍でも発行）を読んでおくこと。
〔授業の概要〕
声優として必要な演技術を学ぶ。「アフレコ実技Ａ」で習得した技術論を分析し、応用し、より具体的にしていく。
「空間感覚・距離感の確立」
「呼吸領域を意識し、身体を鳴らすことを覚える」
「声にパーソナリティを持たせる」
上記３点を柱とし、実際にアニメーション映像にアフレコを行い、それを視聴してみることで、アフレコにはどのような技術・能力が必要かを考える。
ボイスサンプルを実際に作成し、収録、配布する。自分の声の持っている特質、長所、弱点を知る。
〔授業の到達目標〕
• 将来、プロの声優として活動することができる。
• プロの現場オーディション、所属オーディションで合格できる。
〔授業計画〕
第 1 回　声優演技について（復習）
　　前期で行った講義の要点を抽出し、短時間で前期のおさらいを行う。
第 2 回　神経の多数化について（座学）
　　アフレコ時に必要な、台本を読む、発声を行う、マイクワークを行う、相手の台詞を聞く、映像を見る、等を同時に行えるようになる為の訓練を行う。
第 3 回　アフレコ実習①
　　アフレコの現場における立ち居振る舞い、演技の基礎を学ぶ。
第 4 回　アフレコ実習②
　　状況の表現　シチュエーションの変化に伴い、ふさわしい発声、発音の練習を行う
第 5 回　アフレコ実習③
　　感情の表現　キャラクターの感情表現の振り幅を大きくすることを学ぶ
第 6 回　オーディオドラマ演技①
　　マイクワークの実践　多人数による収録時、マイクの使い方とそのルールを学ぶ
第 7 回　オーディオドラマ演技②
　　状況の表現　空間感覚を意識し、その場所に相応しい発声表現を学ぶ
第 8 回　オーディオドラマ演技③
　　感情の表現　声だけの演技表現で、自分の演じる役の感情表現をどこまでビビッドに表現出来るかを学ぶ
第 9 回　アフレコ実習④
　　キャラクター表現理論　キャラクターとその役のシナリオに対する役割を理解し、自分の演じる役のキャラクターを構築するセオリーを学ぶ
第 10 回　アフレコ実習⑤
　　洋画吹き替え　アニメアフレコ、オーディオドラマ収録時とは違う、外画の吹替の技法を学ぶ
第 11 回　アフレコ実習⑥
　　洋画コメディ吹き替え　洋画コメディを教材として使用し、コメディ吹替の音声表現を学ぶ
第 12 回　プロダクションマネージャーによる質疑応答
　　プロダクションマネージャーをゲストとして招聘し、業界の仕組みやマネジメントの概論について理解する
第 13 回　ボイスサンプル原稿作成
　　自己の持ち味、武器を加味し、ボイスサンプルの原稿を作成する
第 14 回　ボイスサンプルリハーサル、収録
　　ボイスサンプルの収録を行う
第 15 回　ボイスサンプル視聴と講評
　　第１４回講義で収録したボイスサンプルを視聴し、講評を行う
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
目標とするプロの声優・俳優の出演しているアニメーション作品を複数視聴する。
各プロダクション・養成所・研究所の情報を集め、どの事

務所がどの方面の仕事に強いかを研究しておき、卒業後の進路を決定する時の指針とする。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：教材プリント、台本は随時授業時に配布する。
参考資料： 小金丸大和「VOICE CUSSION」（小学館クリエイティブ刊・現在は電子書籍でも発行）を読んでおくこと。
小金丸大和作・演出「さんにんのかい」ＤＶＤ「新選組」「孫悟空」（ＶＡＰより発売）を視聴しておくこと。
〔成績評価〕
受講態度および実技試験における技術の習得状況において評価する。
追加試験、補習授業は原則的に行わないものとする。
成績は、以下の項目につき、１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業への取組み②課題の成果③表現者としての魅力、個性④自らを研鑽する意欲⑤身体的、精神的健康の維持
S 総合点が90点以上の者（講義内容をほぼ完璧に理解し、覚えた声優演技技術を応用できている）
A 総合点が80点以上の者（プロの声優として作品に出演できるレベル）
B 総合点が60点以上の者（プロダクション所属オーディション等に合格できるレベル）
C 総合点が50点以上の者（講義内容を理解し、理論としての声優演技基本を理解できた者）
D 総合点が50点未満の者（講義内容を理解できていない、実践することができていない者）
〔科目ナンバリング〕
THE4330T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## クラシック唱法Ⅰ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
土曜 2限 土曜 3限
実務経験なし
実技

松井 康司

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
クラシックの発声の基本は「響き」にある。大オーケストラの伴奏であっても、マイクも使わずに声が通るのは全身が響いているからである。いかに声を響かせ遠くに飛ばすか、それは芝居のセリフにおいても同じである。
この授業では、発声について知識の理解を深めた上で、響きを意識することに重点を置いて発声を学んでいく。なお、独唱曲ばかりでなく、ハーモニー感覚を身につけるため、合唱曲も取り上げ、歌うことへの関心を高めていく。
〔授業の到達目標〕
• 日本語による歌唱のハーモニー感覚を身につけることができる。
• 響きを意識した発声法を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
クラシックの発声法を学ぶ意義について
第 2 回　ヴォイス・トレーニング①
歌うための呼吸について
第 3 回　ヴォイス・トレーニング②
声と響きについて
第 4 回　ヴォイス・トレーニング③
発音（母音）について
第 5 回　ヴォイス・トレーニング④
発音（子音）について
第 6 回　ヴォイス・トレーニング⑤
言葉について
第 7 回　ヴォイス・トレーニング⑥
声＆言葉＆表現
第 8 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング①
第 9 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング②
第 10 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング③
第 11 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング④
第 12 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング⑤
第 13 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング⑥
第 14 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング⑦
第 15 回　全員でのヴォイストレーニングおよび個々のヴォイストレーニング⑧
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
各授業のテーマについて、次の授業までに、各自実践的に復習しておくこと。また、個人ヴォイストレーニングで与えられた課題は、日々の訓練として活用していくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に楽譜を配付。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度50％、課題50％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱表現力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌

唱表現力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・歌唱表現力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・歌唱表現力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、歌唱表現力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
VOM2310T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## クラシック唱法Ⅱ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
土曜 2限 土曜 3限
実務経験なし
実技

松井 康司

〔履修条件〕
「クラシック唱法Ⅰ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
「クラシック唱法Ⅰ」で学んだことを基礎に、発声することから表現することへレベルアップしていく。日本語の歌を取り上げ、いかに良い発声で日本語を美しく歌えるようにしていくかを理解しながら演奏できるようにする。
実技公開試験に向けては、２～３人で１曲を割り振るので、与えられた曲を協力して演出し、歌と演技によるパフォーマンスを創造し自己表現する。
〔授業の到達目標〕
• ひとりひとりが歌うことに自信を持つことができる。
• 言葉と旋律との関連性を理解し、歌唱表現の幅を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、試聴会
第 2 回　試聴会
第 3 回　合唱曲の練習
第 4 回　実技公開試験の選曲決定、公開レッスン形式の個別指導
第 5 回　公開レッスン形式の個別指導および合唱練習①
第 6 回　公開レッスン形式の個別指導および合唱練習②
第 7 回　公開レッスン形式の個別指導および合唱練習③
第 8 回　公開レッスン形式の個別指導および合唱練習④
第 9 回　演技パフォーマンスを加えた歌唱指導および合唱練習①
第 10 回　演技パフォーマンスを加えた歌唱指導および合唱練習②
第 11 回　演技パフォーマンスを加えた歌唱指導および合唱練習③
第 12 回　演技パフォーマンスを加えた歌唱指導および合唱練習④
第 13 回　演技パフォーマンスを加えた歌唱指導および合唱練習⑤
第 14 回　通し稽古
第 15 回　Ｇ．Ｐ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
与えられた曲に対し、各グループごとに予習復習を必ず行うこと。また、その曲に対するイメージをしっかり持ち、演出を考えていくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に楽譜を配付。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度50％、課題40％、テスト10％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱表現力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱表現力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・歌唱表現力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・歌唱表現力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、歌唱表現力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
VOM3311T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ミュージカルトレーニングＡ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
金曜 2限 金曜 4限
実務経験なし
実技

**藍澤 幸頼**

〔履修条件〕
• ＬＡによる補習に参加できる者：「ミュージカルトレーニングＡ①」の履修者は「ミュージカルトレーニングＡ-ＬＡ①」を、「ミュージカルトレーニングＡ②」の履修者は「ミュージカルトレーニングＡ-ＬＡ②」を、それぞれ必ず履修すること。（それぞれ内容が異なる場合がある）
• 遅刻・欠席なく参加できる者（ステージングを行うため、共演者・指導者に迷惑がかかる）
• 体のラインがはっきりわかる練習着・ジャズシューズを用意すること。女子は、レオタード・稽古用スカート（ゴム等で着脱が簡単なもの）とヒールのあるダンスシューズも用意すること。
＊ 怪我などを抱えているものには困難が伴う。
〔授業の概要〕
ミュージカルのプロダクションに参加しているシミュレーションを通して、稽古場のマナーや共演者とのコミュニケーションと共に、歌う・踊る・語ることと、作品への向かい方の基本を学習する。ブロードウェイミュージカル『コーラスライン』を教材に取り上げる予定である、
また、試験は公開になる場合もある。
〔授業の到達目標〕
トリプルスレット（歌・舞踊・セリフ、全てが高い水準にある俳優）を目指して、個々の弱点を知り、今後の努力の方向を知ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　自己紹介
第 2 回　ナンバーの解説、役作りのグループワーク
第 3 回　歌唱・ステージング①
第 4 回　歌唱・ステージング②
第 5 回　歌唱・ステージング③
第 6 回　ナンバー中のオーディション・歌唱・ステージング
第 7 回　歌唱・舞踊・ステージング①
第 8 回　歌唱・舞踊・ステージング②
第 9 回　歌唱・舞踊・ステージング③
第 10 回　歌唱・舞踊・ステージング④
第 11 回　稽古を振り返り、ディスカッション
第 12 回　歌唱・舞踊・ステージング⑤
第 13 回　歌唱・舞踊・ステージング⑥
第 14 回　試験リハーサル
第 15 回　試験を兼ねた発表
ホールの使用許可が降りた場合、場所を移してホールで発表を行う。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業時、口頭による個々への指導。
発表後、個々への改善点を伝える。
〔授業時間外の学習〕
それぞれの弱点を克服するために必須である。特に舞踊においてのピルエットやトゥール・ザン・レールなどできないことは、次回までに自主練をして次に参加すること。また歌唱において、音取り・歌詞暗記、芝居においての台詞暗記は必須である。また。発声・ストレッチを授業時間前に終えていること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
ネット上で、作品のプロの舞台版・映画版を研究すること。
〔成績評価〕
授業態度20％、授業への取り組み（個々人の弱点の克服）40％、協調性20％、実技試験20％をもとに総合的に評価する。
※ ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上あればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上の参加、両方揃っていなくてはならない」と正しく理解すること。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM2311T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＡ①

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
水曜 4限
実務経験なし
実技

**三村 みどり**

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＡ①」履修者は「ジャズダンスＡ-ＬＡ①」、「ジャズダンスＡ③」履修者は「ジャズダンスＡ-ＬＡ③」に参加すること）

〔授業の概要〕
• 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
• 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につけるために、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
• 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
• ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
• 振りを覚えて、表現、感性を磨く。
〔授業の到達目標〕
それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性表現を習得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　自分の肉体の長所、短所を知る①
基礎
第 2 回　自分の肉体の長所、短所を知る②
応用
第 3 回　全身または部分でリズムをとる①
基礎
第 4 回　全身または部分でリズムをとる②
応用
第 5 回　全身または部分でリズムをとる③
発展
第 6 回　床を踏む、身体を引き上げるということを学ぶ①
基礎
第 7 回　床を踏む、身体を引き上げるということを学ぶ②
応用
第 8 回　身体の軸を覚え、身体をコントロールして動くことを知る①
基礎
第 9 回　身体の軸を覚え、身体をコントロールして動くことを知る②
応用
第 10 回　筋肉を張ったり、緩めたり、表現の幅を広げる①
基礎
第 11 回　筋肉を張ったり、緩めたり、表現の幅を広げる②
応用
第 12 回　基本的なステップを覚え、全身を使って動けるようにする①
基礎
第 13 回　基本的なステップを覚え、全身を使って動けるようにする②
応用
第 14 回　振り付けを覚えて、音、振り付けで感じた感性をプラスし、踊りで自 分や作品を表現していく
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
日々の稽古による、個々への指導時の言葉。
〔授業時間外の学習〕
できない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。欠席した場合も事前に習っておくこと。
毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用すること。
〔成績評価〕
授業参加における積極性・取り組み・授業態度40％、実技試験60％にて評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者
Ａ　総合評価80点以上の者
Ｂ　総合評価60点以上の者
Ｃ　総合評価50点以上の者
Ｄ　総合評価50点未満の者
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。
〔科目ナンバリング〕
DNC1310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＡ②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
水曜 3限
実務経験なし
実技

畔柳 小枝子

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＡ②」履修者は「ジャズダンスＡ-ＬＡ②」、「ジャズダンスＡ④」履修者は「ジャズダンスＡ-ＬＡ④」に参加すること）
〔授業の概要〕
最近、ダンスは身近なものになり、ほとんどの人々が経験をしたことがある・得意であるという状況になっている。そのため、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。
この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の実技を行う。授業で使用する曲等で、ジャズダンスの特長であるリズム感を養い、コンビネーションで振付を覚えて、音楽に合っ

た表現を踊り、どう見せるか？見せたいか？見えたか？を考えながら、身体表現の演習を行う。

〔授業の到達目標〕

到達目標は各自のスキルアップが目標であるが、基礎知識・基礎訓練が中心でもあるため、自分自身の身体を知り、自信をつける反面、欠点を認識し、トレーニング方法を見つけることができる。

数回、小テストを行うことにより、本人の得意・不得意を知り、自分自身の成長に気付くことができる。

〔授業計画〕

第 1 回　ストレッチ・エクササイズ中心（正しいストレッチの仕方）
音のとり方・のり方
コンビネーション１導入
※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがある。

第 2 回　ストレッチ・エクササイズ中心
音のとり方・のり方
コンビネーション１基礎

第 3 回　アイソレーション・クロスフロアー重視
ストレッチ・エクササイズ
軸のとり方
コンビネーション１応用

第 4 回　アイソレーション・クロスフロアー重視
ストレッチ・エクササイズ
軸のとり方
コンビネーション１発展

第 5 回　コンビネーション１重視・学習到達度の確認
コンビネーション1のまとめ

第 6 回　ステップ、ジャンプ、ターン重視
トレッチ・エクササイズ
コンビネーション２導入

第 7 回　ステップ、ジャンプ、ターン重視
ストレッチ・エクササイズ
コンビネーション２基礎

第 8 回　ステップ、ジャンプ、ターン重視
ストレッチ・エクササイズ
コンビネーション２応用

第 9 回　ステップ、ジャンプ、ターン重視
ストレッチ・エクササイズ。
コンビネーション２発展

第 10 回　コンビネーション２重視・学習到達度の確認
コンビネーション2まとめ

第 11 回　基礎トレーニング
ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ
コンビネーション３導入

第 12 回　基礎トレーニング
ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ
コンビネーション３基礎

第 13 回　基礎トレーニング
ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ
コンビネーション３応用

第 14 回　基礎トレーニング
ステップ、ジャンプ、ターンの組み合わせ。
コンビネーション３発展
授業総括

第 15 回　まとめ
コンビネーション3のまとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

個人的には授業の前後にて対応する。

全体的には小テストの後に行う。

〔授業時間外の学習〕

各自、柔軟、筋力トレーニングを行うこと。小テストを行うので各自練習をしておくこと。

毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）

これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

稽古着を着用。

ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。

〔成績評価〕

授業への取組み・授業態度30％、小テスト・期末テスト70％の状況で評価する。

Ｓ 90点以上の者（身体と精神のコントロールができ、振付の意図を考え、優れた技術・表現力で躍ることができた者）

Ａ 80点以上の者（音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者）

Ｂ 60点以上の者（音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者）

Ｃ 50点以上の者（振付を覚えて踊れる。または成果が出た者）

Ｄ 50点未満の者（振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者）

※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

〔科目ナンバリング〕

DNC1310T

〔学位授与方針との関係〕

②、⑤

〔他専攻〕

○

〔キャップ対象外〕

―

## ジャズダンスＡ③

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
水曜 3限
実務経験なし
実技
選択

渡辺 美津子

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。(「ジャズダンスＡ③」履修者は「ジャズダンスA-ＬＡ③」に参加すること)
〔授業の概要〕
• 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
• 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につけるために、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
• 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
• ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
• 振りを覚えて、表現、感性を磨く。
〔授業の到達目標〕
それぞれが目標を作り、その目標に向かって肉体訓練、踊りの感性表現を習得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　自分の肉体の長所、短所を知る①
基礎
第 2 回　自分の肉体の長所、短所を知る②
応用
第 3 回　全身または部分でリズムをとる①
基礎
第 4 回　全身または部分でリズムをとる②
応用
第 5 回　全身または部分でリズムをとる③
発展
第 6 回　床を踏む、身体を引き上げるということを学ぶ①
基礎
第 7 回　床を踏む、身体を引き上げるということを学ぶ②
応用
第 8 回　身体の軸を覚え、身体をコントロールして動くことを知る①
基礎
第 9 回　身体の軸を覚え、身体をコントロールして動くことを知る②
応用
第 10 回　筋肉を張ったり、緩めたり、表現の幅を広げる①
基礎
第 11 回　筋肉を張ったり、緩めたり、表現の幅を広げる②
応用
第 12 回　基本的なステップを覚え、全身を使って動けるようにする①
基礎
第 13 回　基本的なステップを覚え、全身を使って動けるようにする②
応用
第 14 回　振り付けを覚えて、音、振り付けで感じた感性をプラスし、踊りで自 分や作品を表現していく
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
日々の稽古による、個々への指導時の言葉。
〔授業時間外の学習〕
できない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。欠席した場合も事前に習っておくこと。
毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと)
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用すること。
〔成績評価〕
授業参加における積極性・取り組み・授業態度40％、実技試験60％にて評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者
Ａ　総合評価80点以上の者
Ｂ　総合評価60点以上の者
Ｃ　総合評価50点以上の者
Ｄ　総合評価50点未満の者
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。
〔科目ナンバリング〕
DNC1310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＢ①

芸術科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
実技

畔柳 小枝子

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。(「ジャズダンスＢ②」履修者は「ジャズダンスＢ-ＬＡ②」、「ジャズダンスＢ④」履修者は「ジャズダンスＢ-ＬＡ④」に参加すること)
〔授業の概要〕
最近、ダンスは身近なものになり、ほとんどの人々が経験したことがある・得意であるという状況になっている。そのため、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。
この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の実技を通して、表現方法を見つけていく。 ストレッチエクササイズ・アイソレーション・クロスフロアー・コンビネーションで実技を行う。
〔授業の到達目標〕
各自のスキルアップができる。
柔軟・筋力トレーニングを通して、各自のトレーニング方法を見つけ、動きの範囲を広げることで、表現方法に生かし、更にテクニックをつけることができる。
小テストを行うことにより、自分自身の成長に気付くことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
コンビネーション１導入
※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがある。
第 2 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
コンビネーション１基礎
第 3 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
コンビネーション１応用
第 4 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
コンビネーション１発展
第 5 回　コンビネーション１重視・学習到達度の確認
コンビネーション1のまとめ
第 6 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
基礎トレーニング
コンビネーション２導入
第 7 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
基礎トレーニング
コンビネーション２基礎
第 8 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
基礎トレーニング
コンビネーション２応用
第 9 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
基礎トレーニング
コンビネーション２発展
第 10 回　コンビネーション２重視・学習到達度の確認
コンビネーション2のまとめ
第 11 回　動きの見せ方について考えて踊る①
基礎トレーニング
コンビネーション3基礎
第 12 回　動きの見せ方について考えて踊る②
基礎トレーニング
コンビネーション3応用
第 13 回　音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を考える
コンビネーション3発展
第 14 回　音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を表わす・授業総括
コンビネーション4の基礎、応用、発展
第 15 回　まとめ
コンビネーション4まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
個人的には授業の前後にて対応する。
全体的には小テストの後に行う。
〔授業時間外の学習〕
各自、柔軟、筋力トレーニングを行うこと。小テストを行うので各自練習をしておくこと。
毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。(ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと)
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用。
ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。
〔成績評価〕
授業への取組み・授業態度30％、小テスト・期末テスト70％の状況で評価する。
Ｓ 90点以上の者（身体と精神のコントロールができ、振付の意図を考え、優れた技術・表現力で躍ることができた者）
Ａ 80点以上の者（音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者）
Ｂ 60点以上の者（音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者）
Ｃ 50点以上の者(振付を覚えて踊れる。または成果が出た者)
Ｄ 50点未満の者（振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者）

※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。

〔科目ナンバリング〕

DNC2310T

〔学位授与方針との関係〕

②、⑤

〔他専攻〕

○

〔キャップ対象外〕

―

## ジャズダンスＢ②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
水曜 2限
実務経験なし
実技
選択

渡辺 美津子

〔履修条件〕

ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＢ②」履修者は「ジャズダンスＢ-ＬＡ②」に参加すること）

〔授業の概要〕

最近、ダンスは身近なものになり、ほとんどの人々が経験したことがある・得意であるという状況になっている。そのため、要求されるレベルも上がり、ダンスの技術や基本がとても大切になる。

この授業では、ダンスの基礎を理解し、動きに対応できる柔軟性・筋力のトレーニング・身体の使い方の実技を通して、表現方法を見つけていく。 ストレッチエクササイズ・アイソレーション・クロスフロアー・コンビネーションで実技を行う。

〔授業の到達目標〕

各自のスキルアップができる。

柔軟・筋力トレーニングを通して、各自のトレーニング方法を見つけ、動きの範囲を広げることで、表現方法に生かし、更にテクニックをつけることができる。

小テストを行うことにより、自分自身の成長に気付くことができる。

〔授業計画〕

第 1 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
　　コンビネーション１導入
　　※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがある。
第 2 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
　　コンビネーション１基礎
第 3 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
　　コンビネーション１応用
第 4 回　ストレッチエクササイズ等、基礎トレーニング中心
　　コンビネーション１発展
第 5 回　コンビネーション１重視・学習到達度の確認
第 6 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
　　基礎トレーニング
　　コンビネーション２導入
第 7 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
　　基礎トレーニング
　　コンビネーション２基礎
第 8 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
　　基礎トレーニング
　　コンビネーション２応用
第 9 回　クロスフロアー中心（ステップ・ターン・ジャンプ）
　　基礎トレーニング
　　コンビネーション２発展
第 10 回　コンビネーション２重視・学習到達度の確認
第 11 回　動きの見せ方について考えて踊る①
　　基礎
第 12 回　動きの見せ方について考えて踊る②
　　応用
第 13 回　音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を考える
第 14 回　音楽の音色・アクセントも合わせて表現方法を表わす・授業総括
第 15 回　まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

個人的には授業の前後にて対応する。

全体的には小テストの後に行う。

〔授業時間外の学習〕

各自、柔軟、筋力トレーニングを行うこと。小テストを行うので各自練習をしておくこと。

毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）

これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

稽古着を着用。

ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。

〔成績評価〕

授業への取組み・授業態度30％、小テスト・期末テスト70％の状況で評価する。

Ｓ 90点以上の者（身体と精神のコントロールができ、振付

の意図を考え、優れた技術・表現力で躍ることができた者）
Ａ 80点以上の者（音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練した者）
Ｂ 60点以上の者（音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者）
Ｃ 50点以上の者（振付を覚えて踊れる。または成果が出た者）
Ｄ 50点未満の者（振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者）
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。
〔科目ナンバリング〕
DNC2310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＢ③

芸術科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　後期
水曜 4限
実務経験なし
実技

三村 みどり

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＢ①」履修者は「ジャズダンスＢ-ＬＡ①」、「ジャズダンスＢ③」履修者は「ジャズダンスＢ-ＬＡ③」に参加すること）
〔授業の概要〕
• 肉体表現者として、自分の身体を知り、鍛え、表現の幅を広げていくための授業である。
• 身体の軸、コントロール、柔軟性を身につけるために、ストレッチや筋肉トレーニングを行う。
• 部分、または全身で音楽に乗って動かすアイソレーションを行う。
• ステップを覚えて、身体の流れ方、空間の使い方、動かし方を学ぶ。
• 振りを覚えて、表現、感性を磨く。
〔授業の到達目標〕
前期で修得した技術をより高め、踊りの質を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　前期の授業の確認①
　　基礎
第 2 回　前期の授業の確認②
　　応用
第 3 回　より軸を強くし動きが大きく、安定した踊りができるようになる①
　　入門
第 4 回　より軸を強くし動きが大きく、安定した踊りができるようになる②
　　基礎
第 5 回　より軸を強くし動きが大きく、安定した踊りができるようになる③
　　応用
第 6 回　より軸を強くし動きが大きく、安定した踊りができるようになる④
　　発展
第 7 回　曲調や動きの流れ等を感じ取り、表現の幅を広げていく①
　　入門
第 8 回　曲調や動きの流れ等を感じ取り、表現の幅を広げていく②
　　基礎
第 9 回　曲調や動きの流れ等を感じ取り、表現の幅を広げていく③
　　応用
第 10 回　曲調や動きの流れ等を感じ取り、表現の幅を広げていく④
　　発展
第 11 回　同じ振りを踊り込むことにより、作品と向かい合い自分の感性をプラスした表現ができるようになる①
　　入門
第 12 回　同じ振りを踊り込むことにより、作品と向かい合い自分の感性をプラスした表現ができるようになる②
　　基礎
第 13 回　同じ振りを踊り込むことにより、作品と向かい合い自分の感性をプラスした表現ができるようになる③
　　応用
第 14 回　同じ振りを踊り込むことにより、作品と向かい合い自分の感性をプラスした表現ができるようになる④
　　発展
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
日々の稽古による、個々への指導時の言葉。
〔授業時間外の学習〕
できない振りは自主トレーニングして、次の授業に参加すること。欠席した場合も事前に習っておくこと。
毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用すること。
〔成績評価〕
授業参加における積極性・取り組み・授業態度40％、実技試験60％にて評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者
Ａ　総合評価80点以上の者
Ｂ　総合評価60点以上の者
Ｃ　総合評価50点以上の者
Ｄ　総合評価50点未満の者
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すること。
〔科目ナンバリング〕
DNC2310T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＣ①③

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
月曜 2限 月曜 3限
実務経験なし
実技

渡辺 美津子

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＣ①」履修者は「ジャズダンスＣ-ＬＡ①」、「ジャズダンスＣ③」履修者は「ジャズダンスＣ-ＬＡ③」に参加すること）
〔授業の概要〕
• ストレッチ、筋肉トレーニング、アイストレーションで基本的な動きをマスターする。
• 重心の移し方、体の引き上げ方、ハイレベルなバランス感覚を身につけ、幅広いジャンル、様々な動きに対応できる体幹を鍛える。
• 振付を覚えステップを習得する。場合によっては、個人レベルに合わせたグループ分けをし振付する。
• 最終的にはテクニックのみならず、表現力も身につけていきたい。イマジネーション力を鍛え、振付の中で自由に自己表現できるようにする。
〔授業の到達目標〕
振付を正確に踊ることができる。ニュアンスを感じ取ることができる。
自己表現ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション1－①
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション1－②
第 3 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション1－③
第 4 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション1－まとめ
第 5 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション2－①
第 6 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション2－②
第 7 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション2－③
第 8 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション2－まとめ
第 9 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション3－①
第 10 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション3－②
第 11 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション3－③
第 12 回　ストレッチ、筋トレ、アイストレーション、バレエ基礎、ターン、コンビネーション3－まとめ
第 13 回　学習到達度の確認①
第 14 回　学習到達度の確認②
第 15 回　学習到達度の確認③、授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
日々のレッスン時、および課題発表後に振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
• 毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導、監督するのでその指示に従うこと）
• 日頃から、音楽を聴いたり、ダンス動画、ミュージカルのダンスシーン等を見て、知識を増やしておくこと。
• 授業中に話をしたことを、インターネットでチェックすること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
・動画撮影する場合は授業終了後に行うこと。振付を覚えること、指導を身体に染み込ませることは本来授業時間内に行うものであり、授業時間内に出来なかった者、もしくは自己チェックの為に動画を希望する者は、終了後自主的に撮影すること。
・稽古着を着用。サルエル、ワイドパンツ不可。

・バレエ基礎、コンビネーションは裸足で行うこともあるのでフータータイツ不可。
・ジャズダンスシューズ、ジャズスニーカー着用。バレエシューズは不可。

〔成績評価〕
授業への取組み・授業態度30％、実技公開試験（課題に対する成果50％、表現力および想像力20％）を総合的に評価する。
Ｓ　総合点90点以上の者（優れた表現力のある者）
Ａ　総合点80点以上の者（表現力のある者）
Ｂ　総合点60点以上の者
Ｃ　総合点50点以上の者
Ｄ　総合点50点未満の者
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。授業および、ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。
〔科目ナンバリング〕
DNC3311T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ジャズダンスＣ②④

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
月曜 2限 月曜 3限
実務経験なし
実技

畔柳 小枝子

〔履修条件〕
ＬＡ（レッスンアシスタント）による補習に毎週参加すること。（「ジャズダンスＣ②」履修者は「ジャズダンスＣ-ＬＡ②」、「ジャズダンスＣ④」履修者は「ジャズダンスＣ-ＬＡ④」に参加すること）
〔授業の概要〕
• 舞台上で踊る基本的な居方、表現方法を学ぶ。
• ダンスに必要な柔軟・筋力・身体の使い方・リズム感をトレーニングし、シチュエーション、音色・リズム・アクセントを身体を使って表現することを演習する。ダンスを通して、身のこなしと感受性豊かな表現力を身につける。
〔授業の到達目標〕
• 肉体・精神共にコントロールすることを身につけことができる。
• 踊ることを通して表現豊かなパフォーマンスを実践することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ストレッチ、クロスフロアー、振付：導入
※スケジュールは、授業進行状況等により変更されることがある。
クロスフロアー重視、オーディション
第 2 回　ストレッチ・エクササイズ・クロスフロア・振付：基礎
クロスフロアー重視、振付、オーディション
第 3 回　ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー・振付：応用
振付、オーディション
第 4 回　ストレッチ・エクササイズ・クロスフロアー・振付：発展
振付M1
第 5 回　ステップ、ターン、ジャンプ、リズムのトレーニング・振付：導入
振付M1、M2
第 6 回　ステップ・ジャンプ・ターン・振付：基礎
振付M1.M2
第 7 回　ステップ・ジャンプ・ターン・振付：応用
振付M2.M3.M1
第 8 回　ステップ・ジャンプ・ターン・振付：発展
振付M3.M2
第 9 回　ステップ・ジャンプ・ターン・振付：導入
振付M3.M2
第 10 回　各ナンバー振り確認・振付
振付M3.M4
第 11 回　音の音色・アクセントのつけ方、見せ方の確認・振付：導入
振付M4.
第 12 回　音の音色・アクセントのつけ方、見せ方のトレーニング・振付：基礎
振付M4.M1.M2.M3
第 13 回　. 更に踊りの表現方法を考える。各ナンバー確認：応用
振付M4.M1
第 14 回　更に踊りの表現方法を考える。通し稽古：発展・授業総括
M1.M2.M3.M4、通し
第 15 回　まとめ
通し
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
個人的には授業の前後にて対応する。
振付の際に対応する。
〔授業時間外の学習〕
各自、柔軟、筋力トレーニングを行うこと。
振付の練習を必ずし、次の授業迄にその音やイメージの表現を研究しておくこと。
毎回、授業と並行して「ＬＡ補習」に参加し、授業で出された課題・振り付けの復習・再確認・確実な習得を行ってから翌週の授業に出席すること。（ＬＡ補習はＬＡが指導・監督するのでその指示に従うこと）
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着を着用。
ダンスシューズ（ジャズシューズ等）を使用。

〔成績評価〕
授業への取組み・授業態度30％、課題の成果30%、試験40%状況で評価する。
Ｓ 90点以上の者（身体と精神のコントロールができ、振付の意図を考え、優れた技術・表現力で躍ることができた者）
Ａ 80点以上の者（音楽に合った動き、ポーズ等を上手く表現でき、研究・訓練し、踊れた者）
Ｂ 60点以上の者（音や動きに対して、表現する者として研究成果の見えた者）
Ｃ 50点以上の者（振付を覚えて踊れる。または成果が出た者）
Ｄ 50点未満の者（振付を覚えず練習もしなかった者。出席日数が足りず受験資格がなかった者）
※ＬＡ補習への参加状況・受講態度も評価の材料となる。ＬＡ補習への参加が３分の２に満たない学生は、実技試験等の受験資格が与えられない。「授業出席とＬＡ補習参加の合計回数が、２つの総合計回数の３分の２以上であればよい」のではなく、「授業の３分の２以上の出席、ＬＡ補習の３分の２以上参加、両方きちんとそろっていなければならない」と正しく理解すると。
〔科目ナンバリング〕
DNC3311T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## バレエ・ムーヴメント①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
金曜 1限 金曜 2限
実務経験なし
実技

中農 美保

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、下記の事項等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。
• 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
• あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
• 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
• 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚
〔授業の到達目標〕
初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンができる。
〔授業計画〕
第 1 回　姿勢とプレイスメント、５つの足のポジション、ポール・ド・ブラ
※毎回、床上のフロアーストレッチから始める。
※２回目以降は「バーの基本レッスン」
プリエ、バットマン・タンジュ、バットマンデガジェ、ロンドジャンプ・ア・テール、グランバットマン
※順序および内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　導入・入門
第 3 回　基礎①
体の使い方
第 4 回　基礎②
綺麗に魅せる
第 5 回　基本レッスンの復習
上記に加えて、バットマン・フラッペ、バットマンフォンジュ、デヴロッペ
第 6 回　応用①
体の使い方
第 7 回　応用②
綺麗に魅せる
第 8 回　２～７回のまとめ
※９回目以降は「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは９回以降、以下の基本ステップを加えていく」
アダージョ、バットマン・タンジュ、シャンジェマ・エシャッペ、グリッサード、アッサンブレ、シソンヌ、ピルエット等
第 9 回　ステップの導入・入門
第 10 回　ステップの基礎
第 11 回　発展①
バーとセンターの組み合わせ
第 12 回　発展②
音楽に合わせてみる
第 13 回　２～12回のまとめ
第 14 回　試験のアンシェヌマン
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。
女性は髪をまとめるように。
〔成績評価〕
授業への取り組み･授業の状況40％、課題に対する成果30％、期末試験30％を総合的に100点満点で評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者

C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC1300T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## クラシックバレエⅠ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験なし
実技

中農 美保

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、下記の事項等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。
• 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
• あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
• 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
• 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚
〔授業の到達目標〕
初歩のバーレッスン、センターでの簡単なアンシェヌマンができる。
〔授業計画〕
第 1 回　姿勢とプレイスメント、足の５つのポジション、ポール・ド・ブラ
※１限は初心者クラス、２限は経験者クラスとして、レベルに応じたレッスンを行う。
※２回目以降は「バーの基本レッスン」
プリエ、バットマン・タンジュ、バットマンデガジェ、ロンドジャンプ・ア・テール、グランバットマン、ルルベ
※順序および内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　導入・入門
第 3 回　基礎：体の使い方
第 4 回　基本レッスンの復習
上記に加えて、バットマン・フラッペ、バットマンフォンジュ、デヴロッペ、ロン・ド・ジャンプ・アン・レール
第 5 回　応用①
体の使い方
第 6 回　応用②
綺麗に魅せる
第 7 回　２～６回のまとめ
８回目以降は「バーレッスンとセンターレッスン。センターでは８回以降、以下の基本ステップを加えていく」
アダージョ、バットマン・タンジュ、バランセ（ワルツステップ）、ピルエット、小さいジャンプ、グリッサード等
第 8 回　ステップの導入・入門
第 9 回　ステップの基礎・体の使い方
第 10 回　８・９回のまとめ
センターでは11回以降、以下の基本ステップを加えていく。
アッサンブレ、ジュッテ、シスンヌ、ジュッテアントラセ、移動する回転等
第 11 回　ステップの応用①
体の使い方
第 12 回　ステップの応用②
綺麗に魅せる
第 13 回　８～ 12回のまとめ
第 14 回　試験のアンシェヌマン
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。
女性は髪をまとめるように。
〔成績評価〕
授業への取り組み･授業の状況40％、課題に対する成果30％、期末試験30％を総合的に100点満点で評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC2300T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## クラシックバレエⅡ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
木曜 1限 木曜 2限
実務経験なし
実技

**中農 美保**

〔履修条件〕
「クラシックバレエⅠ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、下記の事項等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。
• 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
• あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
• 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
• 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚
〔授業の到達目標〕
• それぞれが自分の体と向き合い、豊かな表現ができる体を作ることができる。
• バレエのアカデミックなムーヴメント、テクニックを学び、音楽的に踊れるように感性を磨くことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　クラス分け
　１限は経験者クラス、２限は初心者クラスとして、レベルに応じたレッスンを行う。
　順序および内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　【初心者クラス】Ⅰの復習①基本 【中・上級者クラス】Ⅰの復習・クラスレッスン①導入
第 3 回　【初心者クラス】Ⅰの復習②応用 【中・上級者クラス】クラスレッスン②基本
第 4 回　【初心者クラス】発展的な体の使い方 【中・上級者クラス】クラスレッスン③応用
第 5 回　【初心者クラス】綺麗に魅せる 【中・上級者クラス】クラスレッスン④発展
第 6 回　体の使い方①応用
　６回以降は「バーレッスン、センターレッスン、実技公開試験のアンシェヌマン」
　６～９回では「アダージョ、バットマン・タンジュ、ピルエット、グラン・バットマン等」
第 7 回　体の使い方②発展
第 8 回　綺麗に魅せる
第 9 回　６～８回のまとめ
　10～ 13回では「アレグロ、ワルツ、グラン・アレグロ、コーダ等」
第 10 回　体の使い方①応用
第 11 回　体の使い方②発展
第 12 回　綺麗に魅せる
第 13 回　10～13回のまとめ
第 14 回　クラスレッスンと実技公開試験のアンシェヌマンのまとめ
第 15 回　実技公開試験
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。
女性は髪をまとめるように。
〔成績評価〕
授業への取り組み･授業の状況40％、課題に対する成果30％、期末試験30％を総合的に100点満点で評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DCN3300T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## タップダンスⅠ①

芸術科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　後期
土曜 1限
実務経験なし
実技

**中谷 諭紀**

〔履修条件〕
タップダンスに関心のある学生。
〔授業の概要〕
リズム感はダンスの基本としてはもとより、芝居や歌を唄うことにおいても大変重要なことである。基礎～テクニックのステップを学び、より表現力を豊かにするため、様々なジャンルの曲に合わせて振り付けをしていく。
〔授業の到達目標〕
基礎～テクニックのステップを学び、数曲の振り付けを覚え、幅広い表現力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　タップシューズと床の感触をつかんではっきりした音を出す
第 2 回　正確に基礎ステップを覚える①

導入
第 3 回　正確に基礎ステップを覚える②
基礎
第 4 回　基礎ステップを練習しながらスタンダードな曲に合わせてステップを踏む①
導入
第 5 回　基礎ステップを練習しながらスタンダードな曲に合わせてステップを踏む②
基礎
第 6 回　基礎ステップを練習しながらスタンダードな曲に合わせてステップを踏む③
体の使い方
第 7 回　基礎ステップを練習しながらスタンダードな曲に合わせてステップを踏む④
リズムに合わせて正確に踏む
第 8 回　基礎ステップを練習しながらスタンダードな曲に合わせてステップを踏む⑤
まとめ
第 9 回　テクニカルの練習をしながら、完結した曲の練習
第 10 回　テクニカルの練習をしながら、曲に合わせてステップを踏む①
導入
第 11 回　テクニカルの練習をしながら、曲に合わせてステップを踏む②
基礎
第 12 回　テクニカルの練習をしながら、曲に合わせてステップを踏む③
体の使い方
第 13 回　テクニカルの練習をしながら、曲に合わせてステップを踏む④
リズムに合わせて正確に踏む
第 14 回　テクニカルの練習をしながら、曲に合わせてステップを踏む⑤
強弱やアクセントの工夫
第 15 回　まとめ・試験

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表（試験）の後に振り返りとして、総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
復習・自主練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着、タップシューズを使用。
〔成績評価〕
授業への取組み・授業態度30％、課題の成果30％、試験40％の3つを総合評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者
Ａ　総合評価80点以上の者
Ｂ　総合評価60点以上の者
Ｃ　総合評価50点以上の者
Ｄ　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC2320T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## タップダンスⅠ②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
土曜 2限
実務経験なし
実技

近藤 淳子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
タップダンスの楽しさからプロになるための本格的なテクニックまでを基礎からしっかりと学ぶ。リズム感（音の強弱・音色・アクセント）ダンスの基本としてはもとより、芝居や歌を唄うことにも大変重要なことである。タップダンスのレッスンを通じて身体全体で感じることや表現することを体得してもらったらと思う。
〔授業の到達目標〕
基本のスキルアップを覚え、数曲の振付を仕上げていく過程で各自のスキルアップと幅広い表現力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　音の出し方、タップシューズとチップの床の感触のつかみ、重心移動について
※順序および内容は、履修者数や能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　ウォーミングアップ、基礎ステップのパターン、リズムバリエーション①導入、練習曲1
第 3 回　ウォーミングアップ、基礎ステップのパターン、リズムバリエーション②基本、練習曲1
第 4 回　ウォーミングアップ、基礎ステップのパターン、リズムバリエーション③まとめ、復習、練習曲1
第 5 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション、課題曲1
第 6 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション、課題曲、アカペラ①序盤
第 7 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション、課題曲、アカペラ②中盤
第 8 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション、課題曲、アカペラ③終盤
第 9 回　前回の復習、課題曲2、アカペラ①②③
第 10 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、リズムバリエーション、課題曲2
第 11 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題曲1、復習、課題曲2＋アカペラ①②③グループでの演習

第 12 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題曲1、復習、課題曲2＋アカペラ①②③創意工夫を試みる
第 13 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題曲1、復習、課題曲2＋アカペラ①②③グループ内で息を合わせる
第 14 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題曲1、復習、課題曲2＋アカペラ④11 ～14回のまとめ演習
第 15 回　学習到達度の確認

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内に指導・学習到達度の確認時に、フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
前回の授業内容を復習し練習すること。欠席した場合のステップ課題を授業前に学んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
稽古着、タップシューズを使用。

〔成績評価〕
授業への取り組み30％、課題の成果30％、試験40％の３つを総合して評価する。
S 総合点90点以上の者（意欲的に課題に取り組み、研究し優れた表現力がある）
A 総合点80点以上の者（音の強弱等、音楽に的確に合わせたステップができ表現力がある）
B 総合点60点以上の者（曲に合わせステップを覚えて踊ることができる、積み重ねの成果がある（音の強弱等））
C 総合点50点以上の者（ステップを覚えて踊ることができる）
D 総合点50点未満の者（課題のステップを覚えていない、練習の成果が見えない）

〔科目ナンバリング〕
DNC2320T

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## タップダンスⅡ①

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　前期
土曜 1限
実務経験なし
実技

中谷 諭紀

〔履修条件〕
「タップダンスⅠ」の単位を修得していること。

〔授業の概要〕
基礎～テクニックのステップを用い、より表現力を豊かにするため、様々なジャンルの曲に合わせて振り付けをしていく。また、発表の場を体験し、舞台創りの楽しさと厳しさを学ぶ。

〔授業の到達目標〕
リズム感・テクニックとより幅広い表現力を身につけることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　基礎ステップ・テクニカルステップの練習①
基礎
第 2 回　基礎ステップ・テクニカルステップの練習②
応用
第 3 回　基礎ステップ・テクニカルステップの練習③
まとめ
第 4 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ①
導入
第 5 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ②
基礎
第 6 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ③
細かな体の使い方
第 7 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ④
応用
第 8 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ⑤
発展
第 9 回　自分が出す音を聞いて色々なリズムのバリエーションを覚える ⑥
まとめ
第 10 回　曲に合わせて、より多くの表現力を身につける①
曲序盤
第 11 回　曲に合わせて、より多くの表現力を身につける②
曲中盤
第 12 回　曲に合わせて、より多くの表現力を身につける③
曲終盤
第 13 回　曲に合わせて、より多くの表現力を身につける④
強弱やアクセントの工夫
第 14 回　曲に合わせて、より多くの表現力を身につける⑤
落とし込む
第 15 回　まとめ・試験

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表（試験）の後に、総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
復習・自主練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
稽古着、タップシューズを使用。

〔成績評価〕
授業への取組み・授業態度30、課題の成果30％、試験40％の3つを総合評価する。

Ｓ　総合評価90点以上の者
Ａ　総合評価80点以上の者
Ｂ　総合評価60点以上の者
Ｃ　総合評価50点以上の者
Ｄ　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC3320T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## タップダンスⅡ②

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
土曜 2限
実務経験なし
実技

近藤 淳子

〔履修条件〕
「タップダンスⅠ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
より表現力を豊かにするための様々な曲に合わせてジャズ、ヒップホップ等のステップを使って振付していく。音の強弱、アクセント、リズムを身体を使って踊りこみタップダンスの奥深さを学んでほしい。
また、発表会を体験し、舞台創りの楽しさと厳しさを学びの技術のみならず表現者としての骨格を骨太にしていきたい。
〔授業の到達目標〕
幅広い表現方法を身につけ、作品ごとに求められる表現方法を自ら思考・工夫できる。
真摯に探求心を持って体全体を使って表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲１、アカペラ、レベルアップコンビネーション①体の使い方
※順序および内容は、履修者数や能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲１、アカペラ、レベルアップコンビネーション②リズムに合わせる
第 3 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲１、アカペラ、レベルアップコンビネーション③リズムに合わせて正確なタップを試みる
第 4 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲１、アカペラ、レベルアップコンビネーション④1 ～ 4回の復習、まとめ
第 5 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲２① 体の使い方
第 6 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲２② リズムに合わせて正確なタップを試みる
第 7 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲２③ 強弱やアクセントの工夫
第 8 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲２④ 5 ～ 7回の復習、まとめ
第 9 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、課題曲３
第 10 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題、復習、課題曲１・２・３、アカペラ① グループで息を合わせる
第 11 回　ウォーミングアップ、基礎ステップ、各自＋グループ課題、復習、課題曲１・２・３、アカペラ② 強弱やアクセントの工夫
第 12 回　復習、通し稽古①各々の課題発見
第 13 回　復習、通し稽古②「魅せる」を意識する
第 14 回　復習、通し稽古③実技公開試験に向けて
第 15 回　実技公開試験、学習到達度の確認
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中に指導、通し稽古・学習到達度の確認時に、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
前回の授業内容を復習し練習すること。欠席した場合のステップ課題を授業前に学んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着、タップシューズを使用。
〔成績評価〕
授業への取り組み30％、課題の成果30％、試験40％の３つをを総合して評価する。
S 総合点90点以上の者（意欲的に課題に取り組み、研究し優れた表現力がある）
A 総合点80点以上の者（音の強弱等、音楽に的確に合わせたステップができ表現力がある）
B 総合点60点以上の者（曲に合わせステップを覚えて踊ることができる、積み重ねの成果がある（音の強弱等））
C 総合点50点以上の者（ステップを覚えて踊ることができる）
D 総合点50点未満の者（課題のステップを覚えていない、練習の成果が見えない）
〔科目ナンバリング〕
DNC3320T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 歌唱（個人レッスン）A～D

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
2単位　前期・後期
実技

〔履修条件〕
講師と1対1の個人レッスン。
声や歌に対して興味のある者、成長したいという意欲のある者。
〔授業の概要〕
個人レッスンのためその担当の講師により細かい内容は異なるが、声や歌の向上に繋がるレッスンを重ねる。1回40分のレッスンとなる。
〔授業の到達目標〕
• 音程や発音を正しく、身体を使って発声できる。
• 表現者として感動を与える表現を伴った歌を歌うことができる。
〔授業計画〕
各講師に委ねられるが、声や歌に関することを学ぶ。身体の使い方から声の出し方、声のケアの仕方、歌の表現法等を学びながら最後の個人歌唱の試験を迎える。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 課題となっている曲への総評をする。
• 発声についてもアドバイスをする。
• 全体的な表現への総評。
〔授業時間外の学習〕
毎日の練習。曲への理解。
他の音源を聴いて学ぶ。
沢山の情報を得てその曲を深めていく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
担当学生に合うと思われる各講師の用意した曲、あるいは学生が用意した曲を講師と相談して使用。
〔成績評価〕
学期末に個人レッスン担当の講師が揃った中、一人で披露し、講師全員で得点をつけた後、その平均で評価する。
S　講師の平均が90点以上の者
A　講師の平均が80点以上の者
B　講師の平均が60点以上の者
C　講師の平均が50点以上の者
D　講師の平均が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM1410T/VOM2410T/VOM3410T/VOM4410T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 歌唱（個人レッスン）E～H

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　前期・後期
実技

〔履修条件〕
講師と1対1の個人レッスン。
声や歌に対して興味のある者、成長したいという意欲のある者。
〔授業の概要〕
個人レッスンのためその担当の講師により細かい内容は異なるが、声や歌の向上に繋がるレッスンを重ねる。1回20分のレッスンとなる。
〔授業の到達目標〕
• 音程や発音を正しく、身体を使って発声できる。
• 表現者として感動を与える表現を伴った歌を歌うことができる。
〔授業計画〕
各講師に委ねられるが、声や歌に関することを学ぶ。身体の使い方から声の出し方、声のケアの仕方、歌の表現法等を学びながら最後の個人歌唱の試験を迎える。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 課題となっている曲への総評をする。
• 発声についてもアドバイスをする。
• 全体的な表現への総評。
〔授業時間外の学習〕
毎日の練習。曲への理解。
他の音源を聴いて学ぶ。
沢山の情報を得てその曲を深めていく。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
担当学生に合うと思われる各講師の用意した曲、あるいは学生が用意した曲を講師と相談して使用。
〔成績評価〕
学期末に個人レッスン担当の講師が揃った中、一人で披露し、講師全員で得点をつけた後、その平均で評価する。
S　講師の平均が90点以上の者
A　講師の平均が80点以上の者
B　講師の平均が60点以上の者
C　講師の平均が50点以上の者
D　講師の平均が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM1411T/VOM2411T/VOM3411T/VOM4411T
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台芸術概論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 1限
実務経験なし
講義
必修

**高橋 宏幸**

〔履修条件〕
1 年生前期に置かれる必修科目。
〔授業の概要〕
舞台芸術に関する概論として、様々な舞台芸術のジャンルを幅広く取り扱う。
日本の古典芸能（能・狂言・歌舞伎）、西洋の古典から近代・現代の演劇、日本の近代・現代の演劇、セリフ劇、実験演劇、フィジカルシアター、ポストドラマ演劇、児童演劇、ミュージカル、ダンス（バレエ・モダン・コンテンポラリー）等、多種多様な舞台芸術の表現があることを知るための授業である。一口に演劇や舞台、ミュージカルといっても、様々な形態があり、それが何に根差した文化の形態としてあるのか。舞台芸術の幅の広さを知るためであるが、同時に歴史や文化といった部分にも目を向けていく。
〔授業の到達目標〕
授業で話された様々な舞台芸術を知って、それを足掛かりに各自の興味を深めていくこと。
幅広いジャンルの舞台芸術を提示する分、百花繚乱的になりがちだが、今後舞台芸術の深い世界を知るためにも、多種多様なものをまずは知ること。
また、単に色々な舞台があったというだけで終わるのではなく、そこから、演劇と社会、演劇と公共圏、演劇と地域等、どのような接点があるのかを考える。
最終的には、自分自身で知的好奇心を持って、舞台芸術や授業で話されたトピック等について調べたり、考える力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション：多様なる舞台芸術の世界
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　演技とは何か：古典芸能の型の演技
第 3 回　演技とは何か：西洋演劇の内面の演技
第 4 回　能、狂言、文楽、歌舞伎　日本の古典芸能
第 5 回　西洋演劇の震源地としての古代ギリシャ演劇
第 6 回　西洋演劇のモダンと現代
第 7 回　日本の近代演劇
第 8 回　日本の現代演劇のセリフ劇
第 9 回　実験演劇の時代
第 10 回　ミュージカル
第 11 回　バレエとモダン、もしくは舞踏
第 12 回　コンテンポラリーダンスの世界
第 13 回　こどもと演劇
第 14 回　フィジカルシアターとポストドラマ演劇
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：「日本史」「世界史」（山川出版社）、もしくは、それぞれの高校で使った日本史と世界史の教科書。
参考書：授業時にプリントを配布。
〔成績評価〕
レポート50%、授業態度と授業中の取り組み50%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1000T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## 日本演劇史Ａ（古典）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
金曜 5限
実務経験なし
講義
必修

**安冨 順**

〔履修条件〕
必修。
〔授業の概要〕
この授業では俳優として最低限備えておきたいと考えられる、日本演劇史に関する知見より、いわゆる《古典分野》を学ぶものである。具体的には日本三大古典演劇と称される能楽（能・狂言）・歌舞伎・人形浄瑠璃（文楽）の史的発生とその展開、さらに演劇的性格・本質等について解説を

行う。
演劇史である以上、歴史研究分野の一部であることは、言うを俟たない。
通常、歴史の記述は遠い過去より現在に近い地平へと降りるものである。が、当該授業ではそれとは正反対に、より現代に近い過去から出発し歴史の流れを遡ることで、三大古典演劇それぞれの発生と展開を探ってみたいと考える。したがって、授業進行に違和感を覚える学生も出ると考えられるので、担当教員は各受講生の負担にならぬよう丁寧な説明を心がける。
上の古典演劇に触れた経験を持たない受講生もいるであろうから、ビデオ・YouTube動画を適宜利用し理解の一助としたい。授業において受講生には今まで耳にしたことがない人物名、作品名、学術用語が頻出するが、基本的事項の把握は全体像の理解するための階梯であると、理解いただきたい。
毎回の講義資料はGoogleC□assroomに配信する。可能な限り、事前学習をお願いしたい。なお教室では配信資料の概略を記したメモを配布する。
〔授業の到達目標〕
講義を通じ、日本古典芸能史および演劇史に関する基本的必須知識、情報を習得し、それらを説明することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　三島由紀夫の演劇世界
　　三島由紀夫と能・歌舞伎そして新劇
第 2 回　現代演劇は歌舞伎をどう見たか
　　寺山修司・唐十郎・蜷川幸雄の歌舞伎観
第 3 回　寡黙の人—河竹黙阿弥①
　　三深（親）切
第 4 回　寡黙の人—河竹黙阿弥②
　　明治への眼差し
第 5 回　七代目市川団十郎
　　『安宅』から『勧進帳』へ
第 6 回　強かな人生—鶴屋南北①
　　「桜姫東文章」を読む
第 7 回　強かな人生—鶴屋南北②
　　現代演劇と南北
第 8 回　人生の真実—近松門左衛門①
　　元禄時代の恋愛
第 9 回　人生の真実—近松門左衛門②
　　「恋の手本となりにけり」（近松『曾根崎心中』）
第 10 回　異端、前衛、そして正統
　　出雲のお国登場
第 11 回　舞と踊り
　　「盆踊りは猿楽ではありません。第一あれは見るものではない。おのれが踊って楽しむものです」（山崎正和『世阿彌』）
第 12 回　世阿弥の人生
　　「命には終はりあり、能には果てあるべからず」（世阿弥『花鏡（かきょう）』奥段（おくのだん）』
第 13 回　世阿弥「風姿花伝」を読む
　　「見物ほど世にきまぐれなものはありませぬ」（山崎正和『世阿彌』）
第 14 回　若き役者『道成寺』に挑む
　　「このころよりは、おほかた、せぬならで手だてあるまじ」（世阿弥『風姿花伝』年来稽古条々五十有余）
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
適宜Classroom内に設ける課題に関し、Classroomを通してフィードバックを実施する。
〔授業時間外の学習〕
指定文献を事前に読むこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布する。
参考となる書籍等については適宜紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み15%、レポート試験85%。
S　総合点90点以上の者（講義内容の理解度が極めて優れていると認められる者）
A　総合点80点以上の者（講義内容の理解度が優れていると認められる者）
B　総合点60点以上の者（講義内容の理解度が一定以上には達したと認められる者）
C　総合点50点以上の者（講義内容の理解度にやや不安を覚えるが、最低限の段階には一応達したと認められる者）
D　総合点50点未満の者（講義内容の理解度が極めて不十分と判断せざるを得ない者）
〔科目ナンバリング〕
THE1001T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## 日本演劇史Ｂ（近現代）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
木曜 5限
実務経験なし
講義
必修

高橋 宏幸

〔履修条件〕
1 年生後期の必修科目。
〔授業の概要〕
日本の現代演劇史を概括して講義する。半期のため、学生は授業時間外で、戯曲や演劇論、そして時代背景についての読書をすることが求められる。我々が現在考えている「演劇」の概念は、いかに日本において作られたのか。それら社会の制度と演劇の位置を見る。
そして、演劇というものが娯楽的な要素を超えて、社会とどのように関わり、どのように人々が翻弄されながらも、

社会に介入しようとしたのか、日本の演劇の歴史を通して考える。そのため、世界史と日本史の高校教科書程度の知識は再度準備しておくこと。

〔授業の到達目標〕

単に演劇史の授業ではなく、作品と人々が社会とどのように接点を持ち、何について考えて行動していたのか、その可能性と限界を問う。自分自身で、ある事柄について考える力を身につけることができる。

〔授業計画〕

第 1 回　イントロダクション：日本の近代、現代の見取り図
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　19世紀末の日本の演劇
第 3 回　新劇のはじまり
第 4 回　アヴァンギャルド演劇の時代
第 5 回　プロレタリア演劇から戦時期の演劇
第 6 回　戦後の演劇
第 7 回　1950年代の自立演劇
第 8 回　1960年安保と演劇
第 9 回　1960年代、アンダーグラウンド演劇と実験演劇の時代
第 10 回　1970年代、マイノリティの演劇
第 11 回　1980年代の演劇　バブルと演劇
第 12 回　1990年代の演劇　静かな演劇と社会派と呼ばれた演劇、ジャンクな 演劇
第 13 回　2000年代以降の演劇についての動向
第 14 回　ポストドラマ演劇
第 15 回　まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

レポートに対してフィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕

• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習は指示するので、それを行うこと。

これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

教科書：「日本史」「世界史」（山川出版社）、もしくは、それぞれの高校で使った日本史と世界史の教科書。
参考書：授業時にプリントを配布。

〔成績評価〕

レポート50％、授業態度と授業中の取り組み50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）

〔科目ナンバリング〕

THE2000T

〔学位授与方針との関係〕

①、③

〔他専攻〕

○

〔キャップ対象外〕

—

## 西洋演劇史Ａ（古典）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
講義
必修

高橋 宏幸

〔履修条件〕

1 年生前期必修科目。

〔授業の概要〕

紀元前 5 世紀の古代ギリシャ劇から17世紀のフランス古典劇に至るまでの西洋演劇史を概観し、時代背景・文化状況を踏まえながら、劇場構造・上演形態・作品等について講義する。
各時代の演劇が後世の演劇にどのような影響を与え、どのような要素が継承されたのかを、それぞれの事象を関連付けながら探っていく。また、古代ギリシャ劇・シェイクスピア劇等の現代における上演を、視聴覚資料を用いて考察する。
この授業では、演劇人に求められる基礎的な知識を確実に身につける。

〔授業の到達目標〕

芸術科演劇専攻のカリキュラムマップに対応し、演劇史に関する知識・理解を深め、関心・意欲を高めることを目指す。具体的には、以下の 3 点をこの授業の到達目標にする。
• 代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
• 劇場構造や上演形態について、その特色を説明することができる。
• 紀元前 5 世紀から17世紀までの西洋演劇史の流れを説明することができる。

〔授業計画〕

第 1 回　ギリシャ神話と演劇
第 2 回　古代ギリシャの劇場
第 3 回　ギリシャ悲劇①アイスキュロス
第 4 回　ギリシャ悲劇②ソポクレス
第 5 回　ギリシャ悲劇③エウリピデス
第 6 回　ギリシャ喜劇／ローマ演劇～中世の宗教劇
第 7 回　コメディア・デラルテ
第 8 回　エリザベス朝演劇

第 9 回　シェイクスピア①ハムレット
第 10 回　シェイクスピア②リア王
第 11 回　シェイクスピア③マクベス
第 12 回　シェイクスピア④オセロー
第 13 回　シェイクスピア⑤史劇
第 14 回　シェイクスピア⑥喜劇
第 15 回　総括と学習到達度の確認
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
各自指定された戯曲を授業までに読んでくること。
第５回までに「オイディプス王」（ソポクレス）、第10回までにシェイクスピアの「ハムレット」等悲劇、第14回までに「夏の夜の夢」「テンペスト（あらし）」を読んでおくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず、授業時にプリントを配付。
参考書は、適宜授業内で紹介する。
〔成績評価〕
レポート50％、授業態度と授業中の取り組み50％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1002T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 西洋演劇史Ｂ（近現代）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修

安宅 りさ子

〔履修条件〕
芸術科演劇専攻 1 年必修。
予習・復習に努め、演劇の基礎知識を習得する意志のある者。
〔授業の概要〕
西洋における近代から現代までの演劇の流れを概観し、時代背景、文化状況をふまえながら、劇場構造、上演形態、戯曲、演劇論等について講義する。また、各国の演劇が他国にどのような影響を与え、どのような発展を遂げたのかを、それぞれの事象を関連付けながら探っていく。さらに、視聴覚資料を用いて作品を考察し、その特性について理解を深めていきたい。この授業では、演劇人に求められる基礎的な知識を確実に身に着けるために、毎回授業の冒頭で、前回の授業内容と事前学習（課題）に関する小テストを行うので、予習と復習に努めてほしい。
〔授業の到達目標〕
○代表的な劇作家とその作品について、説明することができる。
○代表的な演劇理論について、その要点を説明することができる。
○19世紀の自然主義演劇から現在までの西洋演劇史流れを説明することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　市民劇
オペラ『セビリアの理髪師』（ロッシーニ）『フィガロの結婚』（モーツァルト）の原作は、18世紀フランスの劇作家ボーマルシェによる同名の喜劇である。ボーマルシェは、市民の生活を描く市民劇の要素とモリエールの喜劇の伝統を巧みに融合させた。第 1 回の授業では、市民劇の理念とその影響を見ていきたい。
第 2 回　自然主義演劇
19世紀フランスの自然主義の小説家エミール・ゾラにより自然主義演劇が提唱される。第２回の授業では、自然主義演劇の劇作、演技、舞台美術等の特徴を考察する。よく知られる〈第4の壁〉理論はこの時期に生まれたものである。また、自然主義に対抗する形で現れた象徴主義演劇についても言及したい。
第 3 回　イプセン
近代劇の父と呼ばれるノルウェーの劇作家ヘンリック・イプセンの劇作活動を概観する。戯曲「人形の家」と「幽霊」を分析し、これらの作品が当時の演劇と社会に及ぼした影響についても論じたい。また、イプセンに続いて登場したスウェーデンの劇作家ストリンドベリの作品も紹介したい。
第 4 回　モスクワ芸術座
スタニスラフスキーがネミロヴィチ＝ダンチェンコとともに、1898年に創設したモスクワ芸術座の活動は、その後の世界の演劇に多大な影響を与えた。創設者たちの理念を振り返り、彼らが目指した演劇の改革について、具体的な事例をあげながら考察を進める。日本の近代劇運動との関りについても言及したい。
第 5 回　スタニスラフスキー
俳優・演出家のスタニスラフスキーは、俳優の演技こそが演劇にリアリティをもたらすものだと確信し、〈演技の文法〉となるシステムを考案した。

第５回の授業では、彼の著書「俳優の仕事」を参考に、システムの骨子となる項目を考察する。また、スタニスラフスキー・システムとメイエルホリドのビオメハニカを対比し、それぞれの特徴を明らかにしたい。

第 6 回　チェーホフ
チェーホフの四大劇「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」は、現在も世界中で上演され続けている人気演目である。第６回の授業では、チェーホフの劇作法の特徴を探り、その後の演劇に与えた影響について考えてみたい。また、日本におけるチェーホフ劇の受容の歴史を追ってみたい。

第 7 回　英米の近代劇
諸外国の演劇運動に関心を払い、イギリスの近代劇の発展に大きく貢献したジョージ・バーナード・ショーと、アメリカの近代劇の礎を築いたユージン・オニールの代表作を、時代背景を踏まえながら紹介する。また、授業内でショーの「ピグマリオン」とミュージカル「マイフェアレディ」をとりあげ、比較考察したい。

第 8 回　アルトー
フランスの俳優・演出家のアントナン・アルトーは、戯曲中心の西洋の演劇を否定し、舞台と客席を隔てる〈第4の壁〉を有しない東洋の演劇に着目した。彼が提唱した〈残酷の演劇〉は、1960年代以降の前衛演劇に多大な影響をもたらすこととなる。第8回の授業では、アルトーの演劇観について考察を進めたい。

第 9 回　ブレヒト
ドイツの劇作家・演出家ベルトルト・ブレヒトの活動を追いながら、彼の提唱した〈叙事的演劇〉について理解を深めたい。ブレヒトは、観客が舞台に感情移入するのではなく、理性的に眺めることを求め、〈異化〉効果を用いた。代表作「三文オペラ」を例に、ブレヒト劇のソングについても言及したい。

第 10 回　不条理演劇①
第２次世界大戦後のフランスでは、従来とは異なる劇作法で不条理を描く作品が現れた。第10回の授業では、ルーマニア出身の劇作家ウジェーヌ・イヨネスコの代表作「禿の女歌手」「授業」「犀」等をとりあげ、その劇作法の特徴を見ていきたい。

第 11 回　不条理演劇②
第11回の授業では、アイルランド出身の劇作家サミュエル・ベケットの代表作「ゴドーを待ちながら」「勝負の終わり」「しあわせな日々」等をとりあげ、その劇作法の特徴を探る。また。「ゴドーを待ちながら」がその後の世界の演劇に与えた影響についても考察を進める。

第 12 回　テネシー・ウィリアムズ
第2次世界大戦後のアメリカ演劇界に登場した二人の劇作家テネシー・ウィリアムズとアーサー・ミラーの作品は、現在も世界各地で上演されている。第12回の授業では、ウィリアムズの劇作法の特徴を踏まえながら、代表作「ガラスの動物園」と「欲望という名の電車」を分析する。

第 13 回　アーサー・ミラー
第13回の授業では、アーサー・ミラーの代表作「セールスマンの死」と「るつぼ」を中心に戯曲を分析し、その劇作法の特色を探っていく。なお、ウィリアムズ作品とミラー作品の演出を手掛けたエリア・カザンについても言及しておきたい。

第 14 回　ピーター・ブルック
半世紀にわたり世界の演劇界を牽引したピーター・ブルックの活動を追うとともに、彼の著書『何もない空間』に示された演劇観について考察を進める。また、多国籍の俳優・芸術家を起用したブルック演出の舞台から、演劇の未来の可能性を探っていきたい。

第 15 回　総括と学習到達度の確認
第１回から第14回までの授業を総括するとともに、各自の学習到達度を確認する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回の小テストの振り返りとして、総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
〇毎回授業の冒頭で、前回の授業内容に関する小テストを行うので、履修者は各自でノートをまとめ、復習に努めること。
〇第3回までにイプセンの「人形の家」「幽霊」、第6回までにチェーホフの四大劇（「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」）、第9回までにブレヒトの「三文オペラ」、第11回までにベケットの「ゴドーを待ちながら」、第12回までにウィリアムズの「ガラスの動物園」「欲望という名の電車」、第13回までにミラーの「セールスマンの死」「るつぼ」を読み、予習に努めること。
これらの学修に60時間を要する。

〔教科書・参考書等〕
教科書は使用せず、授業時にプリントを配布。
参考書は適宜授業内で紹介する。

〔成績評価〕
成績評価については、授業内テストの成績を100点に換算（小テスト50％　学習到達度の確認50％）
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に把握し、諸事項を関連づけて説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に把握し、各事項の説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（授業内容をほぼ把握し、一定程度の説明ができる）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解が十分でなく、説明があいまいになる）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解せず、説明ができない）

〔科目ナンバリング〕
THE2001T

〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ミュージカル概論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 5限
実務経験なし
講義
必修

橋爪 貴明

〔履修条件〕
演劇専攻 1 年必修。
遅刻、欠席をしないこと。
プロの表現者になる熱意があり、学ぶ欲求があること。
〔授業の概要〕
比較的新しい表現形式であるミュージカルの歴史を研鑽し、他の演劇形式との違い、共通点を学び、ミュージカルの可能性を探っていく。理論と実技、そして映像。それぞれの角度からミュージカルという表現形式の理解を深めていく。ミュージカルの原点は何処にあるのか？どんなルートを辿ってこの芸術、文化が日本に入ってきたのか？オペラからミュージカルが派生したのはどの時点か？フランス～ニューオリンズ～ブロードウェイへと至る変遷、またウエストエンドの状況も同時に学んでいく。また、日本のミュージカルの派生、発展も見ていく。
〔授業の到達目標〕
ミュージカルの作品分類ができ、歴史を理解し、作品の時代背景、社会的な力関係を把握できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、自己受容、自己表現
第 2 回　歌の原点を知る。歴史を学ぶ。
第 3 回　芝居の原点を知り、歴史を学ぶ。
第 4 回　身体表現の原点を知り、歴史を学ぶ。ミュージカル作品の分類の仕方。
第 5 回　新・旧ミュージカル映画作品の比較研究
第 6 回　オペラ～ミュージカル、派生の場所と時期
第 7 回　ボードビルショー、ミンストレル、ニューオリンズで花開くものは...。日本のミュージカルの歴史。浅草オペラ～商業演劇への変遷。
第 8 回　ＤＶＤ鑑賞
第 9 回　作品の分析
第 10 回　レ・ミゼラブル、サウンドオブミュージック、ウエストサイドストーリー
これらの作品の分析と解説および時代背景、作品が社会に与えたものは？
第 11 回　ミュージカルにおける作詞、その作品ごとの研鑽
第 12 回　日本のミュージカルの創成→宝塚、東宝ミュージカルズ等
第 13 回　ＤＶＤ鑑賞
第 14 回　作品の分析
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
与えられた課題の準備を授業前に行うこと。授業中に学んだことを検討し、改善・研究に努めること。
授業の最初に小テストを適時実施するので、前回の授業内容をよく復習しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にプリントを配布。
〔成績評価〕
レポート50％、授業への取り組み50％で100点に換算。
Ｓ　総合点が90点以上の者（講義内容を元にミュージカルの歴史・作品の時代背景を把握、理解し、的確に自論を展開できた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（講義内容を元に的確に自論を展開できた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（講義内容を元に自論を展開できた者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（講義内容は把握できているが、自論を展開できなかった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（レポート未提出、授業への取り組み方が不足の者）
〔科目ナンバリング〕
THE1003T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ミュージカル論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
金曜 1限
実務経験なし
講義
必修

藤原 麻優子

〔履修条件〕
演劇専攻 1 年生必修。
〔授業の概要〕
ミュージカルは、日本を含め現在世界各地で最も人気のある音楽劇のひとつと呼ぶことができる。では、様々な音楽劇の中で、ミュージカルの特徴とは一体何なのだろうか。台詞、歌、ダンスという要素は、どのように作品に組み込

まれているのだろうか。そして、語り、歌い、踊るという演技はどのように組み立てられているのだろうか。
この授業では、いくつかのミュージカル作品を題材に、ミュージカルを分析していく。まず、ミュージカルを理解する上で鍵となる概念について解説する。次に、ミュージカル作品の実践的な分析を通じ、ミュージカルを理解するための基礎的な知識と、ミュージカルを分析するための視点について学習する。
〔授業の到達目標〕
• ミュージカルというジャンルの特徴を説明できる。
• ミュージカル作品を詳細に分析することができる。
• ミュージカルについての自分の考えを説明することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ミュージカルへのアプローチ
※授業の内容については、状況によって変更の可能性がある。
※ 各回のリアクションペーパーや分析課題はオンライン提出を予定。
第 2 回　ミュージカルと“不自然”
第 3 回　ミュージカルと“いい曲”
第 4 回　「美女と野獣」作品視聴
第 5 回　「美女と野獣」作品解説（序盤）
第 6 回　「美女と野獣」作品解説（中盤）
第 7 回　「美女と野獣」作品解説（終盤）
第 8 回　「美女と野獣」作品解説（まとめ）
第 9 回　「カンパニー」作品視聴①
第 10 回　「カンパニー」作品視聴②
第 11 回　「カンパニー」作品解説（構成）
第 12 回　「カンパニー」作品解説（ナンバー）
第 13 回　「カンパニー」作品解説（時代背景）
第 14 回　ミュージカルを分析する
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業冒頭に、全体へのフィードバックの時間をとる。
〔授業時間外の学習〕
• 授業内容についてのリアクションペーパーの提出をすること。
• 視聴映像の分析を提出すること。
• 予習・復習として、授業で取り上げる作品の映像を視聴すること。
これらの学習に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は指定しない。授業時にプリントを配布。
参考書は、適宜授業時に紹介する。
〔成績評価〕
平常点（授業への取り組み、授業態度および課題提出等）30%、期末レポート70%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項をよく理解し、優れた説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を理解し、説明ができる）
B　総合点が60点以下の者（基本的な諸事項をほぼ理解し、説明ができる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が不足する）
D　総合点が50点未満の者（極端に出席が少ないため、講義概要を理解しておらず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE2002T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## アーツマネージメント論

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
2単位　前期
月曜 5限
実務経験なし
講義
必修

広瀬 彩

〔履修条件〕
演劇専攻 2 年生必修。
〔授業の概要〕
この授業では、経営学の中でも特にマーケティングの考え方を学びながら、舞台公演の制作を行う際に必要となる基礎的な知識を身につける。そのうえで、グループで公演の企画を練り、プレゼンテーションを実施する。終盤は、学内公演や各自の経験を振り返りながら、実際の創造の現場が抱える諸問題・課題について考える。
〔授業の到達目標〕
• マーケティングの基礎を理解できる。
• マーケティングの視点から、演劇をはじめとするパフォーミングアーツを取り巻く問題を考えることができる。
• 自身の体験も踏まえて、価値ある芸術体験を観客に届けるためには何が必要か考え、公演の企画を練り、他者に伝えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション・自己紹介
※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後や内容の変更があることを承知しておくこと。
第 2 回　自己紹介の続き・未来を語る
第 3 回　公演の実現のために・経営学の視点から考えるーマーケティング基礎（1）
第 4 回　公演の実現のために・経営学の視点から考えるーマーケティング基礎（2）
第 5 回　公演の実現のために・経営学の視点から考えるーターゲット
第 6 回　公演の実現のために・経営学の視点から考えるー顧客価値

第 7 回　公演の実現のために・経営学の視点から考えるーポジショニング
第 8 回　価格及び提供場所を考える
第 9 回　広報を考える
第 10 回　公演企画を練る（１）
第 11 回　公演企画を練る（２）
第 12 回　公演企画発表　フィードバック（１）
第 13 回　公演企画発表　フィードバック（２）
第 14 回　公演企画発表　フィードバック（３）
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出された課題については、授業内でフィードバックを行う。発表については、発表内容に加えて発表の仕方についても授業内でフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習は指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
適宜指示する。
推薦図書： ジョアン・シェフ・バーンスタイン「芸術の売り方　劇場を満員にするマーケティング」（英治出版株式会社）
〔成績評価〕
課題20％、発表30%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）が50％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE3050T
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## ソルフェージュ基礎①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 3限 水曜 4限
実務経験なし
演習（理論）

布施 雅也

〔履修条件〕
１年後期におかれる選択科目。
音楽（楽譜を正確に読む等）、歌うことに興味のある者。
〔授業の概要〕
音楽の基礎力をつけることを目的とする。
楽典基礎を学び、正確な譜面の読み方・リズム感・音感等ソルフェージュ力を養うことで、音楽への理解を深め、各々のパフォーマンスの向上につなげる。
〔授業の到達目標〕
以下の２点をこの授業の到達目標とする
• 譜面を読んで歌うことができる。
• フレーズ感・リズム感・音感を育てることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　楽典基礎①音符の読み方①（音名）
第 2 回　楽典基礎②音符の読み方②（リズム）
第 3 回　楽典基礎③音楽用語について
第 4 回　楽典基礎④リズムを読む
第 5 回　楽典基礎⑤譜面を読む
第 6 回　視唱
第 7 回　視唱
第 8 回　視唱
第 9 回　視唱
第 10 回　視唱
第 11 回　新曲視唱
第 12 回　新曲視唱
第 13 回　学習到達度確認　譜面の読み方
第 14 回　学習到達度確認　新曲視唱
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業中課題があれば、予習・復習に努めること。
楽譜を通して歌う訓練をする。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、プリント課題30%、学期末課題20%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取

り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、プリント課題・学期末課題未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
VOM2100T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ソルフェージュ①②

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
2単位　前期
月曜 3限 月曜 4限
実務経験なし
実技
必修
ミュージカルコース必修

岩崎 廉

〔履修条件〕
ミュージカルコース必修。
〔授業の概要〕
「ソルフェージュ基礎」で学習した知識をさらに深める。
〔授業の到達目標〕
音楽の基礎知識、音を聞き取り譜面にすることや、視唱のトレーニング、楽典等をさらに深める事が出来る。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
履修者はソルフェージュの内容の説明を受ける事が出来る。
第 2 回　リズムに強くなるトレーニング
履修者は配布するリズム譜を読みながら、声や体を使って再現するトレーニングを受ける事が出来る。
第 3 回　楽典、知識を深める
履修者は基本的な譜面の読み方や、音符の読み方を学ぶ事が出来る。
第 4 回　聴音トレーニング
履修者はピアノで聴いた音を譜面に書き込むトレーニングを受ける事が出来る。
第 5 回　視唱トレーニング
履修者は譜面を読みながら歌うトレーニングを受ける事が出来る。
第 6 回　小テスト
履修者は読譜力や、リズム感、音感などの小テストを受ける事が出来る。
第 7 回　リズムトレーニング②
履修者は更に、口と手や、足などで読んだリズム譜面の再現能力をトレーニングを受ける事が出来る。
第 8 回　楽典②
履修者は音程や、和音の読み方を学ぶ事が出来る。
第 9 回　聴音トレーニング（コード）
履修者は和音を聞き取るトレーニングを受ける事が出来る。
第 10 回　視唱トレーニング（メロディーとリズム）
履修者は声と体で、読み込んだ譜面の再現能力をトレーニングを受ける事が出来る。
第 11 回　楽典③
履修者は楽典のうちの近親調や、音階を学ぶ事が出来る。
第 12 回　楽語ガイダンス
履修者は読譜時に必要な表記方法を学ぶ事が出来る。
第 13 回　ダイナミックスや表現を学ぶ
履修者は音楽のニュアンスや情緒的なものを譜面から読み取るトレーニングを受ける事が出来る。
第 14 回　ミュージカルオーディションのための基礎
履修者はミュージカルのオーディション時に必要な読譜力や、表現方法を学ぶことができる。
第 15 回　総括
履修者は総括として、音楽の基礎力の役立て方などを学ぶ事が出来る。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
レポート提出後、講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
視唱の課題あり。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
五線紙（ノート）
〔成績評価〕
提出物評価30点、実技試験30点、筆記試験40点の3つの点数の総合で評価される。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM3300T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 応用演劇論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
月曜 3限
実務経験あり
講義

大谷 賢治郎

〔履修条件〕
社会において演劇ができることの可能性に関心があること。芸術作品の創造だけでなく、ワークショップのファシリテーター（ワークショップを進める役割の人）等演劇の手法を用いて社会に貢献したり、一般の人に関わることに関心があること。
〔授業の概要〕
応用演劇とは何かを学ぶ。
演劇の手法を用いて社会に貢献のできる、そして一般の人が体験できるワークショップの可能性を学習ならびに模索する。
芸術としての演劇と経験としての演劇を比較、演劇ができることの可能性を探求する。
実際にワークショップの内容を作成し、実践する。
〔授業の到達目標〕
• 多岐にわたる応用演劇について学習し、その現状について説明することができる。
• 演劇を応用した具体例を学び、また自らリサーチすることができる。
• これらの学習を経て、自らが考案したワークショップを実施することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
　　授業内容の説明と目標設定
　　※ 授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　応用演劇とは何か
第 3 回　世界の応用演劇①
　　ドラマ教育
第 4 回　世界の応用演劇②
　　社会との関わり
第 5 回　世界の応用演劇③
　　コミュニティーの形成
第 6 回　応用演劇の実践①
　　ティーチング・アーティストとは
第 7 回　応用演劇の実践②
　　ファシリテーターの役割
第 8 回　応用演劇の実践③
　　グループワークによる実践
第 9 回　社会的弱者のため演劇ワークショップとは何か
第 10 回　タブーワークショップとは何か
第 11 回　タブーワークショップの実践
第 12 回　日本における演劇ワークショップの可能性①
　　発表
第 13 回　日本における演劇ワークショップの可能性②
　　講評
第 14 回　ワークショップ・ファシリテーターの実践
第 15 回　総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
提出された課題に対し講評を行い、場合によっては個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内容の復習・予習を行う。出題された課題に取り組む。ワークショップのアイデアを作成する。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業時に配布。
〔成績評価〕
授業への取組み・創造過程への関わり方80%、発表の内容20%の総合的評価
S　授業への取組み・創造過程への関わり方・発表の内容が大変高く評価できる。
A　授業への取組み・創造過程への関わり方・発表の内容が高く評価できる。
B　授業への取組み・創造過程への関わり方・発表の内容が評価できる。
C　授業への取組み・創造過程への関り方が不十分だが、各課題の発表まで達している。
D　授業への取り組み・創造過程への関わり方・各課題の発表が評価できない。
〔科目ナンバリング〕
THE1004T
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
長期履修 3 年生のみ可。
〔キャップ対象外〕
—

## パフォーミングアーツ論

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
2単位　後期
木曜 3限
実務経験なし
講義

高橋 宏幸

〔履修条件〕
特になし。
演劇専攻 2 年生の専門科目。
〔授業の概要〕
私たちが「演劇」というものを考えた際に、どのようなものをイメージするだろうか。いわゆる舞台のみにとどまらない、「演劇」的なる要素とは何か。演劇を幅広いコンテクストで捉え直してみるというのが、この授業の目標である。そのために、パフォーマンス・スタディーズ、ポストドラ

マ演劇、文化人類学等のいくつものコンセプトを駆使して幅広い要素によって、演劇的なるものを再考する。
〔授業の到達目標〕
私たちの既成概念としての「演劇」というものはどのように基底されたか。
自明なるものを疑うという問題意識を持つことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション：パフォーミング・アーツへの招待
※授業内容に関しては、その進行具合により、前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　パフォーマンス・ステディーズとは何か
第 3 回　リチャード・シェクナーについて
第 4 回　ゴッフマンについて
第 5 回　ターナーについて①前半
第 6 回　ターナーについて②後半
第 7 回　ローズリー・ゴールドバーグ①「パフォーマンス」
第 8 回　ローズリー・ゴールドバーグ②60年代以後のパフォーマンス
第 9 回　ピーター・ブルックについて
第 10 回　日本のパフォーマンス① 60年代
第 11 回　日本のパフォーマンス②80年代
第 12 回　他の国のパフォーマンス①60年代
第 13 回　他の国のパフォーマンス②80年代
第 14 回　まとめ
第 15 回　レポート総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：同様に授業時に指示する。
〔成績評価〕
レポート50％、授業態度と授業中の取り組み50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE4060T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
—
〔キャップ対象外〕
—

## 演出論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
月曜 4限
実務経験あり
講義

鴻上 尚史

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
「演出とは何か？」この根本的な課題を、戯曲を元に、さまざまなアプローチをすることで明確にしていく。
〔授業の到達目標〕
さまざまな演出の形を理解することができる。また、自分にとっての最適解の演出を考えられる力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　演出とは何か？ 総論
演出をどう考えるか？どこまで指示するのが演出なのか？どこまで指示しないのが演出なのか。学生と共に考えてみる。
第 2 回　スタニスラフスキーシステム①
スタニスラフスキーシステムで、戯曲にアプローチしてみる。
リーディングをして、学生が演出してみる。
第 3 回　スタニスラフスキーシステム②
より深く、スタニスラフスキーシステムでリーディングにアプローチし、それを学生が演出してみる。
第 4 回　ブレヒト的アプローチ①
ブレヒトの戯曲を、ブレヒト的に演出するということをやってみる。スタニスラフスキーと何が違うのか。二大演劇論の違いを確認する。
第 5 回　ブレヒト的アプローチ②
戯曲をリーディングして、ブレヒト的アプローチは何かを確認する。
第 6 回　新劇的アプローチ
日本の代表的な「新劇」の演出論を確認する。「新劇的」とはなにか？
第 7 回　アングラ的アプローチ
60年代、一世を風靡したアングラ的な演出とは何か？リーディングしながら確認する。
第 8 回　小劇場的アプローチ

小劇場的なアプローチとは何か？リーディングと共に確認する。
第 9 回　静かな演劇的アプローチ
静かな演劇的な演出を確認する。代表的戯曲をリーディングして確認する。
第 10 回　ミュージカル的アプローチ
ミュージカルにおける演出とは何か？代表的なシーンを確認しながら、演出を明確にする。
第 11 回　それぞれの演出論①
ひとつの戯曲、例えばシェークスピアのワンシーンを、さまざまな演出方法で演出してみて、その違いを確認する。
第 12 回　それぞれの演出論②
講師の指導の元、学生がさまざまな演出の仕方を実践してみる。学生と講師より、適時フィードバックする。
第 13 回　それぞれの演出論③
希望者がいれば、多くの学生に「演出」を体験してもらう。それによって見えてくるものを確認する。
第 14 回　それぞれの演出論④
さらに、さまざまな演出論を、多くの学生で演出してみる。
第 15 回　まとめ
学生それぞれに、「自分の考える演出と何か？」を見つけてもらう。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表とリーディング後に随時、振り返りをする。
〔授業時間外の学習〕
自分の選んだ演出論の予習をして、リーディングの戯曲を選び、発表の準備をしておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にその都度プリントを配付する。参考文献としては、「演劇入門」(鴻上尚史 集英社新書)「名セリフ！」(鴻上尚史 ちくま文庫)がある。買う必要はない。授業中に適時、伝える。
〔成績評価〕
受講態度60％、課題への積極性20％、課題の理解度20％にて総合的に評価する。
S：90点以上の者
A：80点以上の者
B：60点以上の者
C：50点以上の者
D：50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2020T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## 演劇論

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
2単位　前期
火曜 5限
実務経験あり
講義

鴻上 尚史

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
「演劇とは何か？」この古くて新しい疑問に対して、いろいろな角度からアプローチします。デジタル全盛の時代に、アナログの代表のような演劇がなぜ生き延び、観客を集めているのか。演劇の定義、歴史、分類などから、演劇に迫ります。
学生諸君には、担当する演劇を選んでもらい、授業で発表し、その分野の戯曲を何人かでリーディングしてもらおうと思っています。頭と目と耳で演劇に迫れればいいと思います。
〔授業の到達目標〕
演劇とは何で、自分が学ぶ演劇は過去とどうつながり、自分の演劇に対する立ち位置に対して、深く明確に考えられるようになることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　演劇とは何か？
ピーター・ブルックの定義、寺山修司の書簡演劇などを通じて、「演劇とは何か？」にアプローチする。
第 2 回　何故演劇なのか？
デジタルの時代に、何故演劇が生き延びているのか？演劇であるメリットは何か？さまざまな考えを確認する。
第 3 回　ギリシャ演劇
ギリシャ演劇を研究し、演劇の始原を確認する。ギリシャ演劇のひとつを選び、リーディングしてみる。
第 4 回　シェイクスピアの演劇
シェイクスピアとは何か？どういう流れでシェイクスピアの演劇は生まれたのか？
作品をひとつ選び、リーディングしてみる。
第 5 回　チェーホフの演劇
チェーホフとは何か？チェーホフの魅力は？チェーホフの戯曲をひとつ選び、リーディングしてみる。
第 6 回　ブレヒトの演劇
ブレヒトの演劇とはどういう演劇なのか。異化効果とは何かを選び、戯曲のひとつをリーディングしてみる。
第 7 回　イプセンの演劇

イプセンの演劇とは何か？イプセンの社会的意味は何か？イプセンの戯曲を選びリーディングしてみる。
第 8 回　不条理演劇
不条理演劇は何故生まれたのか？代表的な戯曲を調べ、その社会的意義を確認する。戯曲をひとつリーディングしてみる。
第 9 回　新劇
日本における西洋演劇の導入と、その発展である「新劇」を考える。
新劇の代表的な戯曲をリーディングしてみる。
第 10 回　アングラ演劇
どうしてアングラ演劇は生まれたか？アングラ演劇とはどういうものだったか？
代表的な戯曲をリーディングしてみる。
第 11 回　小劇場演劇
小劇場演技とは何か？その特徴、興隆と衰退を確認する。
代表的な戯曲をリーディングしてみる。
第 12 回　静かな演劇
静かな演劇とは何か？なぜ生まれたのか？
代表的な戯曲をリーディングしてみる。
第 13 回　2.5次元演劇
2.5次元演劇とは何か？その興隆と社会的意味。
代表的な戯曲をリーディングしてみる。
第 14 回　まとめ①
取り上げた「演劇」の中で、特に学生が興味を持ったものをもう一度取り上げる。
第 15 回　まとめ②
それぞれの学生が考える「演劇とは何か？」を確認する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中の発表時にコメント、フィードバックをする。レポートに対してもフィードバックする。質問を適時、受付け、返答する。
〔授業時間外の学習〕
• 発表のために、図書館、インターネット、書店等で調べ、適時、資料を作ること。
• リーディングに参加し、戯曲に親しんでおくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：「演劇入門」(鴻上尚史著 集英社新書)だが、買う必要はない。内容は授業中に適時、解説する。
〔成績評価〕
レポート50％、授業態度と授業中の取り組み50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE2003T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## 劇作法

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
金曜 4限
実務経験あり
講義

川村 毅

〔履修条件〕
俳優志望者。演出家志望者。劇作家志望者。
さらに舞台に関わるスタッフすべての志望者。
〔授業の概要〕
すべての舞台関係者にとって戯曲の読解は必須である。劇作家志望者はもとより、俳優、演出家、スタッフは何より戯曲を読み、理解しなければならない。当授業は何本かの戯曲を声に出して読み、戯曲というものをどう読み込み、理解するか、小説等他文芸ジャンルの読み方といかに違うか、そして理解した作品をいかに台詞として成立させ、舞台化していくかを学ぶ。
〔授業の到達目標〕
戯曲の読解力。履修者は戯曲の読み方を理解できる。
〔授業計画〕
第 1 回　戯曲とは何か
戯曲という文芸ジャンルの起源、あり方、書き方の基礎を学ぶ。
第 2 回　戯曲を読む1
川村毅の戯曲『路上』を声に出して読む。
第 3 回　ディスカッション
読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。
第 4 回　戯曲を読む2
川村毅の戯曲『路上2』を読む。
第 5 回　ディスカッション
読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。
第 6 回　戯曲を読む3
川村毅の戯曲『路上3』を声に出して読む。
第 7 回　ディスカッション
読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。

第 8 回　戯曲を読む4
　　川村毅の戯曲『路上4』を声に出して読む。
第 9 回　ディスカッション
　　読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。
第 10 回　戯曲を読む5
　　川村毅の戯曲『路上5』を声に出して読む。
第 11 回　ディスカッション
　　読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。
第 12 回　戯曲を読む6
　　川村毅の戯曲『路上6』を声に出して読む。
第 13 回　ディスカッション
　　読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。
第 14 回　戯曲を読む7
　　川村毅の戯曲『路上7』を声に出して読む。
第 15 回　まとめ
　　読み上げた戯曲についてレポートを提出し、それをもとにディスカッションする。戯曲の読み方、構造分析について総まとめをする。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポートに対してのフィードバックは常に授業内に取り込まれている。
〔授業時間外の学習〕
内外問わず様々な劇作家の戯曲をできる限り多く読むこと。川村毅の戯曲以外でも授業で紹介する劇作家の戯曲は目を通すこと。
〔教科書・参考書等〕
授業時に指示もしくはプリントを配付する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、レポートの提出度50％で評価する。
S　総合点が90点以上の者（ディスカッションに積極的に参加し、戯曲読解への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（ディスカッションに積極的に参加し、戯曲読解への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（ディスカッションに参加し、戯曲読解への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（ディスカッションに参加せず、戯曲読解への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（出席日数が足りない等授業の取り組みに欠けた者）
〔科目ナンバリング〕
THE2010T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 舞台照明実習①

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
照明部以外対象

〔履修条件〕
照明部以外の学生を対象とする。
〔授業の概要〕
• 舞台照明の変遷
• 舞台照明の基本的な設備と配置
• 各種照明器材の説明
• 仕込みから撤去まで、照明の基本的な作業内容
• 照明デザインと表現者の関わり方
• 舞台で作業する上での安全確保
以上のことを、実際に小劇場の機構を使用して実習する。
〔授業の到達目標〕
• 舞台の基本的な照明機構や機材を理解できる。
• 舞台における照明の効果を理解して、それを表現手段のひとつとして、利用することができる。
• 舞台の設営作業の安全基準の現状を知ることによって、安全に対して意識を持ち、怪我や事故等から身を守ることができる。
〔授業計画〕
小劇場を実際の舞台に見立て、照明器材を通常よく使われている位置に簡易に設置して、実物を前に説明したり、スポットに実際に接してその効果を体感・理解してもらう。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習時に、個別に必要と思われるフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
劇上演実習等の際、照明の存在を意識して、表現を深めるための効果を、照明を利用して得られる方法を検討してみる。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目25点満点とし、総合的に評価する。①授業態度②課題への取り組み③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解していなかった者、課題への取り組み・授業態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
THE1540T

〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台照明実習②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
照明部対象

兼子 慎平

〔履修条件〕
照明部の学生を対象とする。
実習が主になるので、稽古着・稽古履等動きやすい服装で受講すること。
また、（舞台）照明に興味があること。舞台照明作業に一度でも触れていることが望ましい。
〔授業の概要〕
参加者全体で取り組む舞台照明の作業を通して、各々の協調性・自立性、またそのバランスのとり方を体で認識すること。そしてその認識を頭と体で昇華し、それぞれの段階で作業に「実践」してみるところまでを、この実習では求めることとする。
作業の中で上記過程を繰り返すことにより、基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を学ぶことを目標とする。照明と演者の関係を考察してみる機会も提供する。
〔授業の到達目標〕
基本的かつ実践的な舞台照明の基礎を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　照明機材についての基本的知識
第 2 回　照明の仕込み作業を学ぶ①（午前）
第 3 回　照明作業における適切なコミュニケーションについて
第 4 回　照明の仕込み作業を学ぶ②（午後）
第 5 回　特殊機材を扱う/舞台照明（シーン）を作る
第 6 回　質疑応答
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習終了時に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
舞台照明に触れる機会があれば積極的に参加すること。
舞台照明に関わる書籍を読み、用語等知識を増やしておくこと
安全に作業するにはどんな点に留意すればよいか、必要な事を日ごろから考察すること。
同セクション、他の各スタッフや演出家とコミュニケーションをとる上で
「意味が伝わりやすく」かつ「正確な言葉」で伝えられるよう日頃から実践すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
参考図書：
藤井直　著「ステージ・舞台照明入門　舞台の基礎からDMX、ムービングまで」（リットーミュージック）
小川昇　著「光のデッサンから舞台照明のつくり方まで」（レクラム社）
石井強司　著「舞台美術・照明・音響効果篇（高校生のための実践演劇講座）」（白水社）
藤井 直他著「ネットワーク時代のステージ照明システム構築」
岩城 保　著「新・舞台照明講座: 光についての理解と考察」（レクラム社）　　他
〔成績評価〕
授業への取り組みと積極性60%、講義内容・作業への理解度40%にて総合的に評価する。
S　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性の両方が認められ、特にリーダーシップも発揮できる者
A　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性の両方が認められた者
B　講義・作業に積極的に関わり、協調性・自立性どちらか一方でも認められた者
C　積極性にはやや欠けるが、講義内容を努めて真面目に理解しようと認められた者
D　積極性に欠け、講義内容も理解しようと認められなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE1541T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台音響実習①

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
音響部以外対象

佐藤 こうじ

〔履修条件〕
音響部以外の学生を対象とする。
〔授業の概要〕
舞台における俳優が知っておくとよい音響の知識を学ぶ。音響的なことではなく、俳優視点の授業である。授業の最後に、実習を行う。

〔授業の到達目標〕
• 音響の仕事、機器の扱いを理解することにより、スタッフの意図を汲み、よりクオリティの高い作品づくりを目指すことができる。
• 「伝える」ことの難しさを理解できる。
〔授業計画〕
第 1 回　搬入、仕込み、サウンドチェックの説明
機材の持ち方、運び方、置き方、仕込み時間の音響の仕事の説明
第 2 回　ライブハウスPA、舞台音響、ミュージカル音響の違い
音響の仕事の説明
第 3 回　スピーカーの向きの検証（モニターの必要性）
モニターがないとどのように聞こえるのか
第 4 回　カラオケボックスでキーンとなるのは何故か（ハウリングの検証）
舞台でハウリングが起きる原因を説明
第 5 回　有線マイク、ワイヤレスマイク（ハンドマイク、ピンマイク）の取り扱い
正しいマイクの使い方
第 6 回　サンプラーの紹介（刀の音、殴る、蹴る等の音を動きと合わせる音響効果）
俳優の動きに合わせる。
第 7 回　実習の場当たり（チームごとに分かれる）
俳優チーム　音響チームと分かれて班をつくり、場当たり
第 8 回　実習
俳優チーム　音響チームと分かれて班をつくり、実習
第 9 回　撤去
安全な撤去を目指しましょう。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表後、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
実習で使用するプリントを事前配布するので、目を通し理解しておくこと。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布する。
筆記用具、舞台で動けるようなシャツ、ズボン着用のこと。小劇場で作業をするために必要な上履き、運動靴着用のこと。
〔成績評価〕
授業への取組み50％、実習への取り組みと態度50％を100点換算して評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1542T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台音響実習②

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
音響部対象

宮崎 淳子

〔履修条件〕
音響部の学生を対象とする。
〔授業の概要〕
基本的な音響機材の使用方法、効果を知り、学内イベントや稽古でのセッティング、オペレートに役立てる。
〔授業の到達目標〕
• 音響機材の信号の流れを理解し、基本的な結線がスピーディーに行うことができる。
• 簡単なトラブルシューティングができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ケーブルの名称を再確認、統一する。
第 2 回　機材の用途、機能を知る。
第 3 回　仕込図（配線図）を書くことができるようにする。
第 4 回　信号の流れに沿った結線をする。
第 5 回　スピーカー吊り込み作業の補助、高所作業時の注意点を学ぶ。
第 6 回　2人 1 組で 5 分以内に卓周りの結線をする。
第 7 回　音が正常に出ない時の原因究明の方法
第 8 回　台本への書き込み方、音のIN/OUTの技法を学ぶ。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
適宜、指示する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にプリントを配布。
〔成績評価〕
実技試験70％、筆記試験30％で100点に換算。
Ｓ　90点以上の者
Ａ　80点以上の者
Ｂ　60点以上の者
Ｃ　50点以上の者
Ｄ　50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1543T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
○

## 舞台製作実習

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）

鈴木 健介

〔履修条件〕
原則として演劇専攻 1 年生は全員参加。
〔授業の概要〕
大道具を作成することから、工具、材料、尺貫法、舞台の組み方を学ぶ。
工具＜なぐり、ノコギリ、バールなど＞の使い方。材料＜ベニヤ、コンパネ、タルキ、コワリなど＞の識別と使い方。尺貫法＜1 分、1 尺、1 間＞の理解と使い方。箱馬と木足で舞台を高くする方法を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 舞台で使う基本の工具、材料を知ることができる。
• 工具、材料、尺貫法を使いながら木足を作成できる。
• 箱馬、木足を使い舞台を組むことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　講義①
　　舞台製作の基本
第 2 回　講義②
　　工具を知る
第 3 回　講義③
　　材木を知る
第 4 回　講義④
　　尺貫法を知る
第 5 回　講義⑤
　　木足の作成方法を知る
第 6 回　講義⑥
　　舞台の組み方を知る
第 7 回　実習①
　　工具を使う
第 8 回　実習②
第 9 回　実習③
　　木足を作る
第 10 回　実習④
　　木足を作る
第 11 回　実習⑤
　　舞台を組む
第 12 回　実習⑥
　　舞台を組む
第 13 回　実習⑦
　　舞台を組む
第 14 回　実習⑧
　　バラシ、解体作業
第 15 回　振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内にて個別に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
学んだことを演技発表会や試演会等で実践し復習すること。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず作業着を着用し、釘袋その他の作業道具を各自用意し、内履きシューズを使用すること。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、実習での貢献度30%、作業マナー20%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1546T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台監督実習

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）

鈴木 健介

〔履修条件〕
原則として演劇専攻 1 年生は全員参加。
〔授業の概要〕
小劇場の舞台、客席を設営することで劇場の仕込みバラシ作業を学ぶ。
各部署（舞台監督、客席、幕、パンチなど）のそれぞれの仕事をしっかり把握する。
それぞれの部署がチームワークを持って、安全に的確に時間を守って作業ができるようにしていく。
特に舞台監督はその要としての役割をしっかり担えるようこの実習で学習する。
〔授業の到達目標〕
• 小劇場の舞台、客席を自分達で設営できる能力を身につけることができる。
• 劇場でのマナー、チームワーク、スケジュール管理等も身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　講義①
　　劇場空間の基本
第 2 回　講義②

桐朋の小劇場を把握
第 3 回　実習①
仕込みの準備
第 4 回　実習②
仕込み作業＜基本舞台＞
第 5 回　実習③
仕込み作業＜基本舞台＞
第 6 回　実習④
仕込み作業＜客席＞
第 7 回　実習⑤
仕込み作業＜客席＞
第 8 回　実習⑥
仕込み作業＜幕＞
第 9 回　実習⑦
仕込み作業＜幕＞
第 10 回　実習⑧
仕込み作業＜パンチ＞
第 11 回　実習⑨
バラシ作業＜パンチ＞
第 12 回　実習⑩
バラシ作業＜幕＞
第 13 回　実習⑪
バラシ作業＜客席＞
第 14 回　実習⑫
バラシ作業＜基本舞台＞
第 15 回　振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内にて個別に指導、フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
各部署、事前に先輩からの引き継ぎをしっかり行う。
学んだことを演技発表会や試演会等で実践し復習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必ず作業着を着用し、釘袋その他の作業道具を各自用意し、内履きシューズを使用すること。

〔成績評価〕
授業への取り組み50%、実習での貢献度30%、劇場でのマナー20%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
THE1545T

〔学位授与方針との関係〕
②、④

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
○

## 電動工具実習

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）
人数制限あり

鈴木 健介

〔履修条件〕
電動工具を使いたい人。電動工具を使う部署に所属している人。
舞台監督は必ず履修すること。

〔授業の概要〕
仕込み大道具製作で使用する電動工具を学ぶ。
使い方から安全管理、メンテナンス等を学ぶ。
※電動工具＜インパクトドライバー、押し切り、丸ノコ、サンダー等＞

〔授業の到達目標〕
舞台で使う電動工具の特性を知り、それを安全に使うことができる。また、それを仕込み大道具製作へと応用することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　講義①
電動工具の基本と安全管理
第 2 回　講義②
工具の特性を知る
第 3 回　講義③
インパクトドライバー解説
第 4 回　講義④
押し切り、丸ノコ解説
第 5 回　講義⑤
その他工具（サンダー、トリマー等）解説
第 6 回　実習①
インパクトドライバーを使う
第 7 回　実習②
インパクトドライバーを使う
第 8 回　実習③
押し切り、丸ノコを使う
第 9 回　実習④
押し切り、丸ノコを使う
第 10 回　実習⑤
電動工具で箱を作る
第 11 回　実習⑥
電動工具で箱を作る
第 12 回　実習⑦
電動工具で箱を作る
第 13 回　実習⑧
電動工具で箱を作る
第 14 回　実習⑨
電動工具で箱を作る
第 15 回　振り返り

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内にて個別に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
学んだことを演技発表会や試演会等で実践し復習すること。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず作業着を着用すること。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、実習での理解度30%、安全管理20%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1547T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 舞台図面実習

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験あり
実習（staff）

鈴木 健介

〔履修条件〕
舞台図面に興味がある人。舞台図面を使う部署に所属している人。
舞台監督は必ず履修すること。
〔授業の概要〕
舞台で使う図面を理解し、またそれを活用できるようにする。主に舞台平面図、断面図、道具帖の理解と応用。
応用として舞台平面図を解読し、実際の舞台にバミリを取る方法を学ぶ。さらには、稽古が終わった後の状態を図面に記録する方法等も学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 舞台図面を読むことができる。
• 図面から舞台のバミリを取ることができる。
• 稽古後の状態を図面に記録することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　講義①
　　図面の基本を知る
第 2 回　講義②
　　図面の種類を知る
第 3 回　講義③
　　縮尺を知る
第 4 回　講義④
　　三角スケールを知る
第 5 回　講義⑤
　　バミリの取り方を知る
第 6 回　実習①
　　図形を描いてみる
第 7 回　実習②
　　縮尺を変えて描いてみる
第 8 回　実習③
　　三角スケールを使ってみる
第 9 回　実習④
　　劇場図面を読み込んでみる
第 10 回　実習⑤
　　図面からバミリを出してみる
第 11 回　実習⑥
　　実際の舞台にバミリを貼ってみる
第 12 回　実習⑦
　　置き道具を配置してみる
第 13 回　実習⑧
　　置き道具の位置を図面に記録してみる
第 14 回　実習⑨
　　稽古後の状態を図面に記録してみる
第 15 回　振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内にて個別に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
学んだことを演技発表会や試演会等で実践し復習すること。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
シャーペン（鉛筆でも可）、消しゴム、定規（20cm以上）、メジャーを持参すること。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、実習での理解度50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1548T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## ヘアメイク実習

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習（staff）

鈴木 理絵

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
• 舞台におけるメイクアップの基礎理論、基本技術を学ぶ。
• 主に演劇の上で必要となるステージメイクを劇場や照明、演出、役柄等に応じて理解し、舞台での効果的なメイクの基本を実践的に技術習得する。
• メイク講義、デモンストレーションの後、テーマに合わせた舞台メイクの実習を行う。
〔授業の到達目標〕
舞台メイクアップの基礎理論を理解し、基本技術が習得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　舞台メイク基本概論
　　舞台メイクアップの基礎理論・基本実技
　　• ステージメイクの種類、劇場、照明、演出とメイクの関連性。
　　• 顔の骨格と筋肉、顔の修正方法、舞台メイクで使用する化粧品説明および使用方法
第 2 回　男女別舞台メイク基礎デモンストレーション
第 3 回　舞台メイクアップ実習（基礎）
第 4 回　役柄に合わせた顔つくり、デモンストレーション
第 5 回　舞台メイクアップ実習（応用）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実技評価の後に、総評と質疑応答を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業前の予習として、様々な舞台のメイクアップを意識して注目しておくこと。
授業後は、授業中に理解した技術をより深めるために、反復練習すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教材： ファンデーション、パウダー、スポンジ、パフ、アイライナーペンシル等。
その他各自で用意するもの： 鏡、ティッシュ、綿棒、タオル、基礎化粧品、その他普段使用しているメイク道具。
〔成績評価〕
授業態度30％、講義内容への理解30％、メイク技術20％、向上心20％の観点から、総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1544T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## ワークショップ　1 年次

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期集中
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。
ストレートプレイ系、ミュージカル系のどちらのワークショップを受講するか、希望を聞き取る面接あるいは調査を前期末頃、あるいは夏期休暇中に行うので、その日程を発表する掲示を見落とさないこと。
面接あるいは調査で希望の意思表示のない学生は受講できない。
〔授業の概要〕
ストレートプレイ系、ミュージカル系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。
〔授業の到達目標〕
演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現・声による表現に関する理解を体験的に深めることができる。
〔授業計画〕
ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者

B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2630T/THE2631T
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## ワークショップ　２年次

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期集中
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席、遅刻、早退は一切認めない。
〔授業の概要〕
ストレートプレイ系、ミュージカル系のワークショップを各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただく。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに臨むこと。
〔授業の到達目標〕
演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現・声による表現に関する理解を体験的に深めることができる。
〔授業計画〕
ワークショップ担当者は各学期の開講時に、授業計画はワークショップ開始時までに発表する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE3630T/THE3631T
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## ワークショップ（演大連）

芸術科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
1単位　集中
実務経験なし
実習（WS）

三浦 剛

〔履修条件〕
演劇専攻芸術科１・２年生、専攻科１・２年生を対象とする。しかし、履修希望者多数の場合は、５つの大学からの選抜メンバーによってワークショップが開催されるという授業の趣旨もあって、優先的に芸術科２年生、専攻科１・２年生の中から選抜をする。
また、５大学の総合での授業ということもあって、履修できる人数は少数になる。
〔授業の概要〕
演劇大学連盟（桐朋学園芸術短期大学・桜美林大学・日本大学・多摩美術大学・玉川大学）が主催する、共同のサマースクールとしてのワークショップである。
８月上旬の集中講義として行う予定である。
〔授業の到達目標〕
自分と同世代の他大学の学生がどのようなレベルでどのような志向を持って学生生活もしくは演劇活動を行っているのか、ワークショップで切磋琢磨をして、今後の自身の社会生活もしくは卒業後の進路等、目標を持った活動ができるようにする。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　ワークショップのレクチャー（桐朋学園において）
第 3 回　ワークショップ　1日目午前
第 4 回　ワークショップ　1日目午後
第 5 回　ワークショップ　1日目午後
第 6 回　ワークショップ　1日目夕方
第 7 回　ワークショップ　2日目午前
第 8 回　ワークショップ　2日目午後
第 9 回　ワークショップ　2日目午後
第 10 回　ワークショップ　2日目夕方
第 11 回　ワークショップ　3日目午前
第 12 回　ワークショップ　3日目午後
第 13 回　ワークショップ　3日目午後

第 14 回　ワークショップ・発表　３日目夕方
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
追って指示する。
〔成績評価〕
最終発表50％、授業への貢献度50％で100点に換算。
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、発表においても十全にプレゼンスができた）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、発表等の成果においてもプレゼンスを保てた）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、プレゼンスが曖昧になる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、プレゼンスがあまりできない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、プレゼンスが発揮できない）
〔科目ナンバリング〕
THE2632T/THE4630T
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 演劇合宿

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習（WS）

三浦 剛

〔履修条件〕
原則として演劇専攻１年生は全員参加。
〔授業の概要〕
演劇専攻の教育課程の基本は次の３つである。
１．戯曲が読めること。
２．からだを鍛えること。
３．集団行動が取れること。
この授業では、特に３の「集団行動が取れること」が課題となる。個人だけではできない演劇創造の実践を短期間のうちに、しかも限られた状況の中での集中作業で修得する実演発表形式をとる。
なお、この授業は３泊４日の合宿形式による集中講義である。場所は本学の施設八ヶ岳高原寮を使用する。
〔授業の到達目標〕
演劇合宿の全過程を通じて、アンサンブルの重要性を学び、協調性を持って芝居を作ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業ガイダンス・オリエンテーション
第 2 回　第１日目　出発
第 3 回　第１日目
課題の提示。課題作品を読み取り、理解する。
第 4 回　第１日目　レクリエーション①
アンサンブルの前提となるコミュニケー ション能力を発揮する。
第 5 回　第１日目　課題稽古①
課題作品の中から何を表現の主題とするか検討し、いったん台本としてまとめる。
第 6 回　第２日目　レクリエーション②
アンサンブルの前提となる共同作業、共同の体験を積み、体験的に協力する意味を獲得する。
第 7 回　第２日目　課題稽古②
台本の再検討、部分的に立体化を試みる。
第 8 回　第２日目　課題稽古③
立体化したシーンを検討することによって、さらに台本の再検討に進む。
第 9 回　第２日目　課題稽古④
さらに台本をまとめ、完成させる。
第 10 回　第３日目　課題稽古⑤
台本をもとにして完全なる上演を作る。スタッフワークも検討する。
第 11 回　第３日目　舞台稽古
実際の発表会場を使ってスタッフワークと合わせてリハーサルを行う。
第 12 回　第３日目　発表（劇上演）
参加者相互で創作した作品を鑑賞し合う。
第 13 回　第３日目　講評
教員から演技、構想、集団作業の全ての面についての講評を受け、自己分析をする。
第 14 回　第３日目　反省会
お互いの苦労と共同作業の成果を確認し、アンサンブルの意義を再確認する。
第 15 回　第４日目　清掃・帰京
創作の会場に感謝を込めて原状復帰し、創作の全プロセスを締めくくる。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出、担当チューターからの個々への演技指導アドバイスの言葉
• グループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを確認し、あるいは話し合うので、毎回、ミーティングで何が合意されたか、記録を書きとめ、その内容を復習するように努めること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次の時間帯のミーティングで発言できるように事前準備

をすること。毎回合意された内容について作業を行い、着実に完成に向けて進めていくこと。
稽古時間外のそうした思索が、発表する作品成果を左右するので、合宿生活を通して緊張感を維持すること。
これらの学修に30時間以上要する。
〔教科書・参考書等〕
参考資料等：必要に応じて合宿時に配布。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（合宿の内容を十分に把握し、チームリーダーとして作品の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（合宿の内容を十分に把握し、演技・その他のスタッフワークで貢献ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（合宿の内容を十分に把握し、演技で貢献ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（合宿の内容を十分に把握しておらず、チームに貢献できてない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（合宿の内容を理解しておらず、チームに貢献できてない）
〔科目ナンバリング〕
THE1600T
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 演劇研修

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習（WS）

Peter Goessner、高橋 宏幸、冨士川 正美

〔履修条件〕
良好な体調をもって研修に参加できること。
また、事前の説明会（授業として、行く場所についての準備）や、作品のツアー（地方公演としての旅公演の制作など）も全員で行うので参加すること。
〔授業の概要〕
研修旅行として、演劇作品の発表やワークショップを行ったり、演劇に関する文化的な場所をめぐったり、日本や海外の演劇教育機関におけるワークショップや講習を受けたり、それぞれの地域や文化を実際におとずれて学ぶ。また、それぞれの地域の、美術館・博物館を回り、演劇はもちろん、さまざまな文化を理解する。また、様々な人と実際に触れ合う機会があるので、臆することなく積極的に参加すること。
昨今では、イタリアのテアトロ・アルセナーレ、オーストラリアの国立演劇学校であるＮＩＤＡ、スイスのチューリッヒ芸術大学、カナダのカルガリーのルーズムーズシアター、台湾の国立台北芸術大学でのワークショップや視察、沖縄、東北、瀬戸内などでの研修、広島への旅公演を行っている。
〔授業の到達目標〕
研修旅行を通じて、国際的な知見を持って視野を広めることができる。また、様々な人と触れ合うことにより、日本国内においても地域など、文化の多様性を知ることができる。単なる旅行ではなく、あくまで研修として様々なものを学ぶ機会としてこの授業はある。そのためには事前の学習は必要である。
〔授業計画〕
第 1 回　説明会①
第 2 回　説明会②
第 3 回　準備①
第 4 回　準備②
第 5 回　事前学習①
第 6 回　事前学習②
第 7 回　結団式
第 8 回　ワークショップ
第 9 回　ワークショップ
第 10 回　公演
第 11 回　公演
第 12 回　公演
第 13 回　ワークショップ
第 14 回　視察①
第 15 回　視察②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
最終日にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
訪問する場所について調べておくこと。それぞれの地域を知り、ワークショップや公演などにスムーズに参加できるように準備しておくこと。
また、体験したことを踏まえて、さらに調べること。
時間外学習として30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
訪問先の舞台に関する様々な資料をその都度配布するので、読んでおくこと。
〔成績評価〕
①研修の予備調べ、および事前説明会や学習会への取組み②研修中の態度③修了後のレポートをそれぞれ同じ割合（およそ33％ずつ）にて総合的に評価する。
Ｓ　上記の①②③の総合点が90点以上の者（基本的なことを十分に理解し、さらに独自の見解を得ている）
Ａ　上記の①②③の総合点が80点以上の者（基本的なことをほぼ理解し、さらに自身の見解を得ている）
Ｂ　上記の①②③の総合点が60点以上の者（基本的なことの理解に欠け、自身の見解に欠ける）
Ｃ　上記の①②③の総合点が50点以上の者（基本的なことを理解せず、自身の見解だけがある）
Ｄ　上記の①②③の総合点が50点未満の者（基本的なことを理解せず、自身の見解がない）

〔科目ナンバリング〕
THE2600T/THT4600T
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ａ（試演会）（ストレートプレイコース）

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　パフォーマンスの稽古①
第 7 回　パフォーマンスの稽古②
第 8 回　パフォーマンスの稽古③
第 9 回　パフォーマンスの稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
• 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4700T
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ａ（試演会）（ミュージカルコース）

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。

スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　パフォーマンスの稽古①
第 7 回　パフォーマンスの稽古②
第 8 回　パフォーマンスの稽古③
第 9 回　パフォーマンスの稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
• 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4700T
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 劇上演実習Ｂ（卒業公演）（ストレートプレイコース）

芸術科 ＞ 演劇専攻
２年生
4単位　後期集中
実務経験あり
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　パフォーマンスの稽古①
第 7 回　パフォーマンスの稽古②
第 8 回　パフォーマンスの稽古③
第 9 回　パフォーマンスの稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
• 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき 1 項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4701T
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 劇上演実習Ｂ（卒業公演）（ミュージカルコース）

芸術科 ＞ 演劇専攻
2 年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
卒業に必要な単位修得の見込みのある者のみ参加できる。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、 1 本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　パフォーマンスの稽古①
第 7 回　パフォーマンスの稽古②
第 8 回　パフォーマンスの稽古③
第 9 回　パフォーマンスの稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③

第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
• 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき 1 項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4701T
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 劇上演実習Ｃ/Ｄ（学外出演）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
4単位　集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕
履修登録時に企画書・印刷物（チラシ等）等、企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。
〔授業の概要〕
プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義の認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合にのみ単位認定は可能。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組にも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任を持って管理すること。安易な参加はむしろ控えること。
学業を進めることが損なわれるような現場の日程、要求がされることがないか、事前に十分確認すること。学外出演する学生の単位認定や扱いを、例外扱いしたり、特別優遇するようなことはないので、重々どのような条件の参加になるのか事前に確認して臨むこと。
〔授業の到達目標〕
プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。
様々な現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。
座組の一員としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の 共有①
第 5 回　上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の 共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み　あるいは撮影セット内でのリハーサル
第 11 回　舞台稽古①　あるいはリハーサル①
第 12 回　舞台稽古②　あるいはリハーサル②
第 13 回　舞台稽古③　あるいはリハーサル③
第 14 回　本番　あるいは撮影
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉

※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕

様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。

毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。

これらの学修に120時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

特になし。

〔成績評価〕

以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理

S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕

THE2700T/THE2701T

〔学位授与方針との関係〕

②、④、⑤

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

○

## 劇上演実習Ｅ/Ｆ（学内出演）

芸術科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕

履修登録時に企画書・印刷物（チラシ等）等、企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

〔授業の概要〕

学内の実習（他専攻の実習・演習を含む）への出演者としての参加。ただし出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。

稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組にも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任を持って管理すること。安易な参加はむしろ控えること。

スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

〔授業の到達目標〕

様々な実習・演習に出演者として参加し、様々な関係者・出演者・スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。

本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能・心構え・現場での対応力を獲得することができる。

〔授業計画〕

第 1 回　本読み①
学内の実習（他専攻の実習・演習を含む）に出演者として参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。

第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉

※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者
Ａ　総合点が80点以上の者
Ｂ　総合点が60点以上の者
Ｃ　総合点が50点以上の者
Ｄ　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2702T/THE2703T
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 特別講義Ａ / Ｂ

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
2単位　前期
月曜 5限
実務経験なし
講義
必修

高橋 宏幸

〔履修条件〕
認定専攻科、演劇専攻の学生の必修授業。
毎週、ゲスト講師を招聘して講義をしていただく。授業の第１回目に全体の説明や注意事項を
する。また、毎回質問時間を設けるので、積極的に質問ができるように準備すること。
〔授業の概要〕
演劇界を中心に第一線で活躍するゲストをお呼びし、テーマに沿った講義をしていただく。それぞれのゲストがどのように芸術を見て、どのような作品をつくり、プロデュース等しているのか。それぞれのトークから、受講者は自分なりにアートの世界を知って、どのような傾向があるのかを考えること。
〔授業の到達目標〕
• 様々な講師の講義を通して、舞台芸術から社会の問題、自身の持っている価値観・芸術観を相対化して、考えることを試みる。また、演劇をはじめ舞台芸術の最前線で今何が行われているのかを理解し、自分の芸術活動の指標とすることを目指す。
• レポートを書き、質問等も授業中にすることで、自分の理解の客観性や理解度を深め、自分の知識や意見を他者に伝えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　今回のテーマとゲスト講師について
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　ゲストトーク①
第 3 回　ゲストトーク②
第 4 回　ゲストトーク③
第 5 回　ゲストトーク④
第 6 回　ゲストトーク⑤
第 7 回　ゲストトーク⑥
第 8 回　ゲストトーク⑦
第 9 回　ゲストトーク⑧
第 10 回　ゲストトーク⑨
第 11 回　ゲストトーク⑩
第 12 回　ゲストトーク⑪
第 13 回　ゲストトーク⑫
第 14 回　ゲストトーク⑬
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
それぞれのゲスト講師の作品・活動等を調べておき、ゲストのレクチャーの後には、必ず質問ができるように準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
授業態度40％、質疑応答における積極性30％、レポート30％を総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（卓越した授業態度、質疑応答、レポートができ、授業で積極的な役割を果たすことができる）
A　総合点が80点以上の者（優れた授業態度、質疑応答、レポートができ、授業で積極的な役割を果たすことができる）
B　総合点が60点以上の者（授業態度、質疑応答、レポートを書き、授業で一定の役割を果たすことができる）
C　総合点が50点以上の者（授業態度、質疑応答、レポートの内容が不十分で、授業での役割を十分に果たすことができない）
D　総合点が50点未満の者（授業態度、質疑応答、レポートが出せず、授業で必要な役割を果たすことができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1000TA/THE3000TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇学研究Ａ（日本演劇論）(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
2単位　前期
火曜 5限
実務経験なし
講義

高橋 宏幸

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
演劇を観るために、もしくは実践的に活動するために、必要な理論について考える。理論を学びながら、それをベースに実際に舞台を観に行く。舞台が理論によって鮮やかに見える場合もあれば、理論そのものを揺るがすこともあるだろう。その双方向的な視点をもって、舞台について考える。
〔授業の到達目標〕
単に舞台を観る授業ではなく、演劇が社会とどのように接点を持ち、作品から何を見つけるべきなのか、その可能性を問う。そこから自分自身で、ある事柄について考える力を身につけることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　演劇の理論とは
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　ポストコロニアル理論と演劇①
第 3 回　ポストコロニアル理論と演劇②
第 4 回　クィア・スタディーズと演劇①
第 5 回　クィア・スタディーズと演劇②
第 6 回　舞台の報告①
第 7 回　舞台の報告②
第 8 回　実際に書く①
第 9 回　実際に書く②
第 10 回　ディスカッション①
第 11 回　ディスカッション②
第 12 回　ディスカッション③
第 13 回　批評の講評①
第 14 回　批評の講評②
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
講評の回にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。
〔成績評価〕
レポート50%、授業態度と授業中の取り組み50%で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1001TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇学研究Ａ（日本演劇論）(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
木曜 2限
実務経験なし
講義

高橋 宏幸

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
演劇というアートは、社会の中でどのように成り立っているか。もしくは演劇というものを主体的に考えるならば、社会にたいして演劇はなにをなしているのか。それらの関係を双方の側から考えることが、この授業の目的である。たとえば劇場について考えると、経済的なことはもちろん、都市における劇場、地域の劇場など様々な関係がある。演劇が公共圏の形成の一助となることをはじめ、そこについてまわる観客、批評の役割、演劇の制度がある。また作品の側からも公共にどのように波及するのか、実際の舞台作品も具体例としてあげる。毎回、劇場で上演される作品等も検証して、授業を行う。
〔授業の到達目標〕
社会がどのように成り立っているのか。それを、演劇をはじめとした舞台芸術を通して考えることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　演劇と公共
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　公共圏とはなにか①
　　アーレント『人間の条件』を参照として
第 3 回　公共圏とはなにか②
　　ハーバーマス『公共性の構造転換』を参照として
第 4 回　演劇をとりまくトピック　集団について
　　集団性とヒエラルキーの関係
第 5 回　演劇をとりまくトピック　権力について
　　政治的な動物としての人間の権力関係について
第 6 回　実践例として　街と演劇
　　都市と演劇の関係　アンダーグラウンド演劇の実例
第 7 回　地域の演劇①
　　関西圏のアンダーグラウンド演劇とパフォーマンス美術を参照として
第 8 回　実践例として　街と演劇
　　現代における都市空間で演劇をすること　フェスティバルなど
第 9 回　都市と地域のフェスティバル
　　フェスティバルの実例
第 10 回　文化団体の役割
　　助成団体など
第 11 回　批評の役割

評論家について
第 12 回　観客の位置
観客論の再考
第 13 回　ソーシャリー・エンゲイジド・アーツ
実践例 1
第 14 回　ソーシャリー・エンゲイジド・アーツ
実践例 2
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館等でチェックすること。
• 授業中に話をしたことをインターネットでチェックすること。
• 授業中に次の授業までに行う予習・復習は指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時にその都度指示する。
参考書：授業時にその都度指示、またはプリントを配布。
〔成績評価〕
レポート50％、授業態度と授業中の取り組み50％で100点に換算する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE2000TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇学研究Ｂ（西洋演劇論）(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
講義

安宅 りさ子

〔履修条件〕
演技論に関心を持つ者。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムは、ロシアの演出家・俳優コンスタンチン・スタニスラフスキーが俳優教育法を体系的にまとめ上げたものである。このスタニスラフスキー・システムは演技の文法として世界中に普及し、各国で独自の発展を遂げている。
本講義では、スタニスラフスキーの著書「俳優の仕事」をもとに、システムの神髄を探っていく。「俳優の仕事」は〈大部で難解な著作〉と敬遠されがちであるが、演劇学校の生徒の日記という形式で書かれており、演劇を学ぶ学生にとっては身近な話題が取り上げられている。受講生自身の体験と重ねつつ読み込み、演技に関する考察を深めていきたい。また、関連資料も使用しながら、スタニスラフスキー・システムに基づく演技を分析していきたい。
〔授業の到達目標〕
専攻科演劇専攻のカリキュラムマップに対応し、スタニスラフスキー・システムに関する知識・理解を深め、関心・意欲を高めることを目指す。具体的には、以下の２点をこの授業の到達目標とする。
• スタニスラフスキー・システムの基本的な考え方を説明することができる。
• 創造の現場で、スタニスラフスキー・システムを応用することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
初回の授業では、俳優・演出家としてのコンスタンチン・スタニスラフスキーの活動を概観するとともに、今後の学習に役立つ基本的な文献・資料を紹介する。
第 2 回　「俳優の仕事」①
「第１章　ディレッタンティズム」には、新入生の演技発表会の模様が描かれている。受講生自身の経験を振り返りながら、スタニスラフスキーがあげた事例について考察する。
第 3 回　「俳優の仕事」②
「第２章　舞台の芸術と舞台の職人芸」では、俳優の〈芸術〉と〈職人芸〉の区別が描かれている。スタニスラフスキーの目指した〈芸術〉とは何かを考える。
第 4 回　「俳優の仕事」③
「第３章　行動。〈もしも〉、〈与えられた状況〉」では、想像力への働きかけ方について語られている。具体的な事例を見ながら、用語の理解を深める。
第 5 回　「俳優の仕事」④
「第４章　想像力」では、行動に結びつくような具体性を持つ想像を働かせることが求められている。スタニスラフスキーが重視した俳優の想像力について考える。
第 6 回　「俳優の仕事」⑤
「第５章　舞台における注意」では、〈注意の環〉を自在に操作する方法が示されている。スタニス

ラフスキーが舞台上の俳優に求めた注意について考える。
第 7 回 「俳優の仕事」⑥
「第６章　筋肉の解放」では、不要な筋肉の緊張が演技に及ぼす悪影響について語られている。演技の妨げとなる筋肉の緊張を解放する方法を探る。
第 8 回 「俳優の仕事」⑦
「第７章　断片と課題」では、戯曲を〈断片（ピース)〉に分け、それぞれの断片の〈課題（目的)〉を明確にしていく。具体的な事例を見ながら、断片と課題の定め方について考える。
第 9 回 「俳優の仕事」⑧
「第8章　舞台上の真実と確信」では、俳優の身体的行動を通じて感情に働きかけていく。身体的行動の論理と一貫性について理解を深める。
第 10 回 「俳優の仕事」⑨
「第15章　究極課題と一貫した行動」では、〈究極課題（超課題)〉に向かう〈一貫した行動（貫通行動)〉が求められる。また、一貫した行動に相反する行動＝障害の重要性が示されている。具体的な事例を見ながら考察を進める。
第 11 回 「俳優の仕事」⑩
「第２部第6章　テンポ・リズム」では、行動におけるテンポ・リズムの重要性が示されている。具体的な事例を試しながら、理解を深める。
第 12 回 練習とエチュード
第2部付録の「Ⅱ練習とエチュード」にあるスタニスラフスキー・システムの練習課題を参照し、具体的な練習法について考える。
第 13 回 スタニスラフスキー・システムの影響
スタニスラフスキー・システムが同時代そして後世の演劇にどのような影響を与えたのかを考える。
第 14 回 課題発表①
各自が関心をもったテーマを調べ、スタニスラフスキー・システムに関するレポートをまとめ、発表する。
第 15 回 課題発表②
今後、スタニスラフスキー・システムをどのように応用できるのかを考え、レポートにまとめ、発表する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で扱う章を必ず事前に読み、文中の人名、作品名は調べておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
スタニスラフスキー著　堀江新二他訳「俳優の仕事－俳優教育システム　第一部」「俳優の仕事－俳優教育システム　第二部」（未来社）
参考書：スタニスラフスキー著　蔵原惟人・江川卓訳「芸術におけるわが生涯」（上）（下）（岩波書店）
ジーン・ベネディティ著　高山図南雄・高橋英子訳「演技－創造の実際　スタニスラフスキーと俳優」（晩成書房）
〔成績評価〕
レポート30％、発表30％、授業態度40％を総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業に積極的に臨み、優れたレポートをまとめ、自らの考えを発表することができる）
A　総合点が80点以上の者（授業に積極的に臨み、レポートをまとめ、発表をすることができる）
B　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、レポートをまとめ、発表をすることができる）
C　総合点が50点以上の者（授業内容をあまり理解せず、レポート・発表の内容が不十分）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を全く理解せず、レポート・発表ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1002TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 演劇学研究Ｂ（西洋演劇論）(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
講義

安宅 りさ子

〔履修条件〕
演技論・演出論に関心を持つ者。
〔授業の概要〕
ロシア・ソビエト演劇を牽引した演出家フセヴォロド・メイエルホリドの活動を追いながら、社会の変革と芸術運動の関係を概観すると共に、メイエルホリドの演劇が及ぼした影響について考察する。帝政ロシアの崩壊とそれに続く社会主義革命...激動の時代に、ロシアでは前衛的な芸術文化が生まれた。
この講義では、エドワード・ブローン著「メイエルホリド演劇の革命」等を読み、時代背景を捉えながら、メイエルホリドの演劇観の変遷を追い、彼の演劇論と演出作品を紹介していきたい。また、スターリン体制が確立する中で、メイエルホリドが粛清されたため、その業績の継承が途絶えていたが、1955年の名誉回復後は再評価が進み、現在では彼が考案した身体訓練法ビオメハニカを取り入れる演劇学校も少なくない。スタニスラフスキー・システムに対するメイエルホリドの考えについても触れ、両者の共通性と相違点を明確にしていきたい。

〔授業の到達目標〕
専攻科演劇専攻のカリキュラムマップに対応し、演劇に関する知識・理解を深めると同時に、演劇と社会の関りについて関心・意欲を高めることを目指す。具体的には、以下の2点をこの授業の到達目標とする。
• メイエルホリドの演劇観について説明ができる。
• 演劇と社会の関りについて、自分の考えを説明することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
初回の授業では、俳優・演出家としてのフセヴォロド・メイエルホリドの活動を概観するとともに、今後の学習に役立つ基本的な文献・資料を紹介する。
第 2 回　モスクワ芸術座
メイエルホリドの回想を通じて、モスクワ芸術座草創期の自然主義演劇の歴史的意義と問題点について考える。
第 3 回　象徴主義演劇
メイエルホリドの象徴主義演劇の試みを概観し、そこに彼が見出した新たな可能性とその限界について考える。
第 4 回　演劇の約束事
メイエルホリドは「見世物小屋」（ブローク作）以降、コメディアデラルテ等の演劇の〈約束事〉を積極的に活用した。当時の彼の論文を読みながら、〈約束事〉に基づく表現の可能性について考える。
第 5 回　帝室劇場時代
メイエルホリドの帝室劇場（アレクサンドリンスキー劇場、マリインスキー劇場）時代の演出活動を追う。また、当時、帝室劇場で活躍した〈芸術の世界〉の美術家たちについても言及する。
第 6 回　ミステリア・ブッフ①
メイエルホリドと未来派の詩人マヤコフスキーにより、ソビエト演劇第一号「ミステリア・ブッフ」が誕生した。同作を読み、十月革命が演劇にもたらした影響を見ていく。
第 7 回　ミステリア・ブッフ②
「ミステリア・ブッフ」は1921年に改訂版が発表される。前作と比較しながら、時代の変化がどのように反映されているかを考察する。
第 8 回　アジプロ演劇
十月革命後、アジプロ演劇が盛んになる。当時の演劇界の動きとメイエルホリドの活動を概観する。
第 9 回　ビオメハニカ
映像資料を参照し、メイエルホリドが新たな時代の俳優訓練法として編み出したビオメハニカについて考察する。
第 10 回　構成主義演劇
構成主義の舞台美術とビオメハニカを駆使した「堂々たるコキュ」（クロムランク作）等を例に、構成主義演劇の可能性と限界を見ていく。
第 11 回　古典の現代化
「検察官」（ゴーゴリ原作）を中心に、メイエルホリドが行った〈古典の現代化〉の特徴を探り、古典作品上演の意義について考える。
第 12 回　風刺劇
マヤコフスキーの風刺劇（「南京虫」「風呂」）を読み解き、政治と芸術の関係を考察する。
第 13 回　社会主義リアリズムとメイエルホリド批判
粛清にいたるまでのメイエルホリドの活動を追いながら、文学・芸術に対する政治的弾圧について考える。
第 14 回　日本の近代劇運動とメイエルホリド
メイエルホリドの活動が日本の近代劇運動に与えた影響について、具体的な事例を見ながら考察を進めたい。
第 15 回　課題発表
各自が関心をもったテーマを調べ、メイエルホリドに関するレポートをまとめ、発表を行う。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で扱う章を事前に読んでおくこと。また、同時代の文学・美術・音楽・舞踊・映画等についても調べておくこと。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
エドワード・ブローン著　浦雅春・伊藤愉訳「メイエルホリド　演劇の革命」（水声社）
〔成績評価〕
レポート30％、発表30％、授業態度40％を総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業に積極的に臨み、優れたレポートをまとめ、自らの考えを発表することができる）
A　総合点が80点以上の者（授業に積極的に臨み、レポートをまとめ、発表をすることができる）
B　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、レポートをまとめ、発表をすることができる）
C　総合点が50点以上の者（授業内容をあまり理解せず、レポート・発表の内容が不十分）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を全く理解せず、レポート、発表ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE2001TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 劇作研究Ａ（劇作論）

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
2単位　前期
水曜 3限
実務経験あり
講義

坂本 鈴

〔履修条件〕
ドラマ演劇の構造を理解し、シノプシス（あらすじ）を書き上げる意志のある人。
ディスカッションに積極的に参加できる人。
「劇作研究Ｂ」と併せて履修することが望ましい。
〔授業の概要〕
ドラマ演劇の基本構造を理解し、物語の骨格となるログラインをつくり、シノプシス（あらすじ）を書き上げる。お互いのシノプシスを分析し、講評し合う。
〔授業の到達目標〕
• 戯曲の仕組みを理解し、分析できる。
• 長編戯曲のシノプシス（あらすじ）を書き上げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　戯曲とは何か。
第 2 回　ストーリーを作ってみる
　　起承転結について
第 3 回　作家の視座について
第 4 回　人物について
第 5 回　状況、場所について
第 6 回　発表
　　グループワークによる作品発表
第 7 回　台詞と ト書きについて
第 8 回　既存の作品の分析
第 9 回　ログライン作成・発表
第 10 回　シノプシス第一稿発表①
第 11 回　シノプシス第一稿発表②
第 12 回　シノプシス第二稿発表①
第 13 回　シノプシス第二稿発表②
第 14 回　シノプシス第二稿発表③
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の際、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 様々な演劇や映画を見て、構造を分析する。
• 執筆のためのリサーチや取材をする。
〔教科書・参考書等〕
授業時に指示もしくは配布する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、戯曲の完成度50％で評価する。
S　総合点が90点以上の者（ディスカッションに積極的に参加。特に優れた課題を提出）
A　総合点が80点以上の者（ディスカッションに積極的に参加。優れた課題を提出）
B　総合点が60点以上の者（ディスカッションに参加。課題を提出）
C　総合点が50点以上の者（授業に出席。課題を提出）
D　総合点が50点未満の者（出席日数が足りない等授業の取り組みに欠ける、もしくは課題を未提出）
〔科目ナンバリング〕
THE1010TA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 劇作研究Ｂ（劇作演習）

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
1単位　後期
水曜 2限
実務経験あり
演習（理論）

坂本 鈴

〔履修条件〕
長編戯曲を書き上げる意志のある人。
ディスカッションに積極的に参加できる人。
「劇作研究Ａ」と併せて履修することが望ましい。
〔授業の概要〕
シノプシスをもとに戯曲を書き上げる。お互いの戯曲を分析し、講評し合う。
〔授業の到達目標〕
１時間以上の長編戯曲を書き上げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　前期の講義についての振り返り
第 2 回　課題作品の振り返り
第 3 回　第一稿発表①
第 4 回　第一稿発表②
第 5 回　第一稿発表③
第 6 回　第一稿発表④
第 7 回　第二稿発表①
第 8 回　第二稿発表②
第 9 回　第二稿発表③
第 10 回　第二稿発表④
第 11 回　第三稿発表①
第 12 回　第三稿発表②
第 13 回　第三稿発表③
第 14 回　第三稿発表④
第 15 回　作品のリーディング発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の際、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 様々な演劇や映画を見て、構造を分析する。
• 執筆のためのリサーチや取材をする。

〔教科書・参考書等〕
授業時に指示もしくは配布する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50%、戯曲の完成度50％で評価する。
S　総合点が90点以上の者（ディスカッションに積極的に参加。特に優れた戯曲を提出）
A　総合点が80点以上の者（ディスカッションに積極的に参加。優れた戯曲を提出）
B　総合点が60点以上の者（ディスカッションに参加。戯曲を提出）
C　総合点が50点以上の者（授業に出席。戯曲を提出）
D　総合点が50点未満の者（出席日数が足りない等授業の取り組みに欠ける、もしくは戯曲を未提出）
〔科目ナンバリング〕
THE2110TA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演出研究

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
月曜 2限
実務経験あり
講義

小山 ゆうな

〔履修条件〕
• 授業時間外も準備をすること。
• 演出に興味を持ち、積極的にグループワークに参加すること。
〔授業の概要〕
古典・現代翻訳劇・現代日本語劇の３パターンの課題シーンを紹介。
課題シーンまたは、自ら選んだシーンを使用し、演出プランを作成する。
演出の要である①戯曲解釈　②多様なキャスト・スタッフの持ち味をいかに生かすか、の２点を中心にシーンを創作していく。
〔授業の到達目標〕
• 戯曲解釈の基本を習得できる。
• シーンを立ち上げ、上演に向かうプロセスを合理的に進める力を養うことができる。
• 演劇シーンへの意見の伝え方を学び、同時に他者の意見を自己の表現に活かす能力を養うことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　演出の仕事について
　　戯曲解釈について
　　課題戯曲の紹介
第 2 回　課題戯曲（古典・現代翻訳劇・現代日本語劇）の分析
　　課題戯曲または生徒の選んだシーンを本読み・分析・戯曲の中のシーンの見つけ方
第 3 回　グループワーク
　　人物シートの作成・演出シート作成
　　本読み
第 4 回　シーン本読み　立ち稽古①
第 5 回　シーン立ち稽古②
第 6 回　シーン立ち稽古③
第 7 回　シーン立ち稽古④
第 8 回　シーン立ち稽古⑤
第 9 回　シーン発表リハーサル①
第 10 回　シーン発表リハーサル②
第 11 回　シーン発表リハーサル②
第 12 回　シーン発表①　互いのシーンへの合評
第 13 回　シーン発表①　互いのシーンへの合評
第 14 回　シーン発表②　互いのシーンへの合評
第 15 回　シーン発表②　互いのシーンへの合評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古に対するコメント
• シーン発表後、今後の課題と成果を個々にコメント
〔授業時間外の学習〕
授業では複数の戯曲の抜粋を扱って実践的に創作していくため、受講生が事前に作品を読み全容を把握しておくことが望ましい。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
授業への取り組み20%、テキストへの理解10％、自らを研鑽する意欲10％、事前準備の度合い10％、成果発表への評価50％にて総合的に評価する。
S：総合点90点以上の者
A：総合点80点以上の者
B：総合点60点以上の者
C：総合点50点以上の者
D：総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1020TA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 映像映画研究

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
2単位　後期集中
実務経験あり
講義

山岡 信貴

〔履修条件〕
長編映画を観たことがあれば、その他の条件は必要ない。
〔授業の概要〕
映画の制作現場で行われていることやその効果の研究をベースにして、映画という表現手法がどのように成立しているかについて、歴史的経緯を含めて講義し、その中での俳優の役割がどうなっているかやそれに映像技術がどう貢献するかについてを並行して学ぶ。また、映画以外にも多様になってゆく映像表現全般についても考察してゆく。
答えが必ずしもひとつではない内容を多数含んでいるため、授業テーマによっては、実践的な内容やディスカッションを導入することもある。
〔授業の到達目標〕
「映画とは何か」を俯瞰しながら、映画制作の実際の流れを理解し、映像における演技の特徴やそれに対する映像技術面を通しての効果を実例を通して把握する。
〔授業計画〕
第 1 回　映画とはどのようにできているのか？
※授業の進行によっては、内容が前後する可能性がある。
第 2 回　映画制作の概要
第 3 回　映画における俳優の役割
第 4 回　映画史における俳優の変遷
第 5 回　映画撮影の現場①
第 6 回　映画撮影の現場②
第 7 回　カメラと俳優①
第 8 回　カメラと俳優②
第 9 回　編集と俳優①
第 10 回　編集と俳優②
第 11 回　音声と俳優
第 12 回　映画における嘘
第 13 回　映画とテレビ
第 14 回　複製芸術
第 15 回　映画とは何か？
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
基本的には授業内で実施する。それが難しい内容の場合は、メール等で対応する。
〔授業時間外の学習〕
必要に応じて都度指示を出すが、基本的な方針としては、授業で理解したことや疑問に思ったことを意識しながら既存の映画を鑑賞し、気付いたことを授業のディスカッション等で提示する。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業では必要なし。
以下は参考になる資料なので、授業とは関係なく読んだ方が良い。
ロバート.H.ヘスマン「リー・ストラスバーグとアクターズ・スタジオの俳優たち」（劇書房）
フランソワ・トリュフォー、アルフレッド・ヒッチコック「定本映画術ヒッチコック・トリュフォー」（晶文社）
ロベール・ブレッソン「シネマトグラフ覚書」（筑摩書房）
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、レポート50％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みが優れている者）
A　総合点80点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みができている者）
B　総合点60点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みがほぼできている者）
C　総合点50点以上の者（授業内容の理解と授業への取り組みが不十分な者）
D　総合点50点未満の者（授業内容の理解と授業への取り組みに問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
THE2002TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇教育論

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
2単位　後期
月曜 2限
実務経験なし
演習（理論）

柏木 陽

〔履修条件〕
演劇と教育の２つのジャンルを往復しながら、社会の中での教育環境や学習の有り様を考えたいと思っている人。
社会の中に偏在する演劇的環境や演劇的に読み解いていくことに興味のある人。
〔授業の概要〕
この授業は参加する学生の興味の方向によって大きく変わってくる。
主には教育や学習について、現状あるものと、今後必要になっていきそうだと考えられるものを、色々に検討していくことを中心にして授業を行っていくつもりである。

〔授業の到達目標〕
教育行為の中で演劇の果たせる役割はどんなことかを具体的に考えていく。また、それらのアイディアを具体的な活動の形に落とし込んで考えて実践していくにはどのようにしたら良いかのヒントを掴むことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　教育について少し考える①
　　今ある教育環境とはどのようなものだろう
第 2 回　教育について少し考える②
　　教育と学習の違いについて考えてみる
第 3 回　教育について少し考える③
　　現状の教育環境で演劇はどのように働くだろうか
第 4 回　演劇を考えてみる①
　　先行事例を知って考える
第 5 回　演劇を考えてみる②
　　演劇にどのような可能性があるのかを先行事例から考えてみる
第 6 回　演劇を考えてみる③
　　教育演劇とはどのようなものかを想像してみる
第 7 回　演劇と教育の接点を考える①
　　演劇は教育行為のどのような場面で必要になるかを考える
第 8 回　演劇と教育の接点を考える②
　　教育の中での演劇の優位性を考えてみる
第 9 回　演劇と教育の接点を考える③
　　教育環境の中で演劇には難しいことは何なのかを考える
第 10 回　具体的に考える①
　　ここまでの中でどのようなことが可能なのかを具体的に考える
第 11 回　具体的に考える②
　　参加メンバーに対してプレゼンテーションしてみる
第 12 回　具体的に考える③
　　フィードバックを貰いながら対話をしていく
第 13 回　再び教育について考える①
　　日本の中の様々な教育環境の中での実践を考える
第 14 回　再び教育について考える②
　　現状の教育環境の何を変えていきたいのかを考える
第 15 回　まとめ
　　自分にとってまた自分たちにとってこの授業はどのようなものだったか
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内での発表は、発表の後に振り返りとして総評を行う。レポート等は、提出後に講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
普段接する環境の中にどれぐらい演劇的に読み解ける状況があるか等授業の進度と共に考察していくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
資料配布等は授業内で行う。
〔成績評価〕
主として授業への参加と理解50％、授業時間内の実習状況30％、提出物等の成果20％にて総合的に評価を行う。評価テストは行わない。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2100TA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## アーツマネジメント研究(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
火曜 3限
実務経験なし
演習（理論）

広瀬 彩

〔履修条件〕
専攻科生であること。ディスカッションに積極的に参加する意欲のある者。
〔授業の概要〕
広報や助成金申請の際には、プレゼンテーションをしたり企画書を書く等、自身の関わる作品について言語化する必要がある。さらに、協働者を得るために、作品を語る自分の言葉が必要になることも少なからずある。劇団の主宰者や制作者のみならず、海外公演等では、俳優やスタッフもメディアや観客から様々な質問を受けることがある。
この授業では、自身の手がける作品について、企画書を書いたり、プレゼンテーションをすること、さらに他者の企画書を読んだり、プレゼンテーションを聞くことで自身の関わる作品について言語化する力を養う。また、言語化することは同時に、作品を様々なベクトルから深く捉えたり、自身の作品の方向性について見直す機会ともなるだろう。
さらに、アートをめぐる問題やアートの役割について議論し、未来のアートの形を模索する。
〔授業の到達目標〕
自身の関わる作品について言語化し、プレゼンテーションをすることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション・自己紹介
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　自己紹介・未来について語る

第 3 回　制作現場が抱える諸問題（１）
第 4 回　制作現場が抱える諸問題（２）
第 5 回　作品について語る（１）
第 6 回　作品について語る（２）
第 7 回　作品について語る（３）
第 8 回　作品について語る（４）
第 9 回　企画書を書く（１）
第 10 回　企画書を書く（２）
第 11 回　企画書を読み合う（１）
第 12 回　企画書を読み合う（２）
第 13 回　企画書を読み合う（３）
第 14 回　アートの可能性に関するディスカッション
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業中の発言や発表、課題について適宜フィードバックする。提出物については、Classroomやメールで個々にフィードバックを行うこともある。
〔授業時間外の学習〕
発表と課題提出準備。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
適宜、Classroom等で資料を配布する。
〔成績評価〕
発表および課題40%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）60％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（大幅な遅刻欠席がなく、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持って質問や意見を述べることができる。課題の内容も優秀である）
Ａ　総合点が80点以上の者（欠席が３回未満で、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持つことができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（欠席が５回未満で、遅滞なく課題を行う）
Ｃ　総合点が50点以上の者（欠席が５回未満で、課題を提出する）
Ｄ　総合点が50点未満の者（欠席が５回以上または課題が１つでも提出されない場合）
※外部出演等、特別の事情によりやむをえず遅刻・欠席が多い場合は、個別にレポートやプレゼンテーションの課題を課し、その内容によって評価を行う。
〔科目ナンバリング〕
THE1150TA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## アーツマネジメント研究(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
2単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
演習（理論）

広瀬 彩

〔履修条件〕
専攻科生であり、自発的・積極的に参加すること。
〔授業の概要〕
制作者やアーティスト、創作現場を取り巻く問題について経営学の視点からディスカッションを行う。状況に応じて、アーツマネジメントに関する参加学生の関心事や社会的な課題について、ディスカッションや実習を行うことも検討する。音楽専攻の学生も履修可能だが、授業中に戯曲を用いることもある。
〔授業の到達目標〕
・制作現場の抱える課題について考察し、これからのアートのあり方と自分自身について考えることができる。
・さまざまなテーマについてのディスカッションや実践を通じて、社会とアートの関係について知り、自身の活動に活かすことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション・自己紹介
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　創造の現場を取り巻く問題（１）
第 3 回　創造の現場を取り巻く問題（２）
第 4 回　創造の現場を取り巻く問題（３）
第 5 回　経営学とアート（１）
第 6 回　経営学とアート（２）
第 7 回　マーケティングとアーティスト（１）
第 8 回　マーケティングとアーティスト（２）
第 9 回　マーケティングとアーティスト（３）
第 10 回　アート、アーティストの未来像（１）
第 11 回　アート、アーティストの未来像（２）
第 12 回　多様性とアート（１）
第 13 回　多様性とアート（２）
第 14 回　実習/発表
第 15 回　まとめ・振り返り
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表後やレポート提出後にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 授業中に話をしたことを図書館の資料やインターネット等でチェックすること。
• 発表のための準備
• レポート
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
適宜指示、またはプリントを配布する。

〔成績評価〕
発表および課題40%、授業態度と授業中の取り組み（出席含む）60％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（大幅な遅刻欠席がなく、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持って質問や意見を述べることができる。さらに、課題の内容が優秀である）
Ａ　総合点が80点以上の者（欠席が３回未満で、遅滞なく課題を終わらせ、発表内容に意欲が感じられ、他者の発表にも関心を持つことができる。さらに、課題の内容が優秀である）
Ｂ　総合点が60点以上の者（欠席が５回未満で、遅滞なく課題を行う）
Ｃ　総合点が50点以上の者（欠席が５回未満で、課題を提出する）
Ｄ　総合点が50点未満の者（欠席が５回以上または課題が１つでも提出されない場合）
※外部出演等、特別の事情によりやむをえず遅刻・欠席が多い場合は、個別にレポートやプレゼンテーションの課題を課し、その内容によって評価を行う。
〔科目ナンバリング〕
THE2150TA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## アウトリーチ研究Ａ/Ｃ

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
2単位　前期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）

永井 由比

〔履修条件〕
専攻科１年・２年における選択授業。
アウトリーチ活動に関心のある学生。
〔授業の概要〕
アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉等の分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービス等の意味で対応される。
本講義では主に、小学校・学童・福祉施設等での現場実習を通して芸術分野のアウトリーチが具体的にどのような社会貢献ができるか、またその社会的ニーズを模索していく。また、福祉施設・学校等を１年間通して定期的に訪問し、アウトリーチによって利用者がどのように変わっていくかを考察していく。
〔授業の到達目標〕
学校・福祉施設等それぞれに適したアウトリーチコンサートの企画作りとワークショップを企画し、芸術アウトリーチの社会的意義を確認できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチ概論
第 2 回　ワークショップについて
第 3 回　ワークショップ企画作り①
　　小学校
第 4 回　ワークショップ企画作り②
　　福祉施設
第 5 回　ワークショップ発表①
　　小学校①
第 6 回　ワークショップ発表①
　　小学校②
第 7 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設①
第 8 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設②
第 9 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作①
第 10 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作②
第 11 回　学校訪問アウトリーチ　模擬発表
第 12 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）①
第 13 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）②
第 14 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）③
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔授業時間外の学習〕
演奏、ワークショップ発表に向けて、個々またはグループで練習をしっかりとしてくること。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習不参加の者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
THE1151TA/THE3151TA
〔学位授与方針との関係〕
③、④

〔他専攻〕
－
〔キャップ対象外〕
―

## アウトリーチ研究Ｂ/Ｄ

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
木曜 5限
実務経験なし
演習（理論）

永井 由比

〔履修条件〕
専攻科 1 年・2 年における選択授業。
アウトリーチ活動に関心のある学生。
〔授業の概要〕
アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉等の分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービス等の意味で対応される。
本講義では主に、小学校・学童・福祉施設等での現場実習を通して芸術分野のアウトリーチが具体的にどのような社会貢献ができるか、またその社会的ニーズを模索していく。また、福祉施設・学校等を 1 年間通して定期的に訪問し、アウトリーチによって利用者がどのように変わっていくかを考察していく。
〔授業の到達目標〕
学校・福祉施設等それぞれに適したアウトリーチコンサートの企画作りとワークショップを企画し、芸術アウトリーチの社会的意義を確認できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチ概論
第 2 回　ワークショップについて
第 3 回　ワークショップ企画作り①
　　小学校
第 4 回　ワークショップ企画作り②
　　福祉施設
第 5 回　ワークショップ発表①
　　小学校①
第 6 回　ワークショップ発表①
　　小学校②
第 7 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設①
第 8 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設②
第 9 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作①
第 10 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作②
第 11 回　学校訪問アウトリーチ　模擬発表
第 12 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）①
第 13 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）②
第 14 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）③
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔授業時間外の学習〕
演奏、ワークショップ発表に向けて、個々またはグループで練習をしっかりとしてくること。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習不参加の者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
THE2151TA/THE4151TA
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
－
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ａ（日本演劇）(1)　1 年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
金曜 4限
実務経験なし
演習（演技）

三浦 剛

〔履修条件〕
• 専攻科 2 年次の「自主上演実習」に出演する者は履修が望ましい。
• 演技を通して「日本の演劇」への理解を深めたい者。
〔授業の概要〕
• 翌年の「自主上演実習」に向けての作品選び、チーム作りを通して、舞台俳優として必要な身体、呼吸と集中力のトレーニングを中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
• 少人数で数チーム編成し、それぞれの「課題戯曲①」「課題戯曲②」を研究・稽古し、最終的に上演する。
• 日本の現・近代戯曲を利用することで見えてくる、古典戯

曲とは違った今日性の高いテーマを現代に合ったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考に切磋琢磨の中でこそ創造されるグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。

〔授業の到達目標〕

• 課題戯曲の研究・解釈と、稽古を通しての上演作品の完成と上演を通し、現近代演劇における多角的な表現方法を実践できる。

• 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、更なる研鑽に役立てることができる。

〔授業計画〕

第 1 回　トレーニング①呼吸
第 2 回　トレーニング②身体表現・課題発表①
第 3 回　トレーニング③呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古（戯曲解釈）
第 9 回　立ち稽古（関係性）
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　課題①上演（1班）・反省/課題
第 12 回　課題①上演（2班）・反省/課題
第 13 回　課題①上演（3班）・反省/課題
第 14 回　課題①上演（4班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。

• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。

• 期末の発表に対しての個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。

※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕

課題戯曲を研究し、自主稽古を行う。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

教科書：授業時に配布（課題日本戯曲）
参考書：随時授業時に配布

〔成績評価〕

以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理

S　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）

A　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）

B　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）

C　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）

D　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）

〔科目ナンバリング〕

THE1230TA

〔学位授与方針との関係〕

②、④

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

—

## 演技研究Ａ（日本演劇）(2)　1 年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
水曜 4限
実務経験なし
演習（演技）

冨士川 正美

〔履修条件〕

• 専攻科 2 年次の「自主上演実習」に出演する者は履修することが望ましい。

• 演技を通して「日本の演劇」への理解を深めたい者。

〔授業の概要〕

• 翌年の「自主上演実習」に向けて少人数でチームを編成し、それぞれの課題戯曲を研究、稽古する。

• 日本の近・現代戯曲を研究することにより、今日性の高いテーマを現代に合ったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考にしながら切磋琢磨しつつグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。

〔授業の到達目標〕

• 課題戯曲の選択・研究・解釈、稽古を経て上演に至る過程を通じて、日本の近・現代演劇における多角的な表現方法を実践できる。

• 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、さらなる研鑽に役立てることができる。

〔授業計画〕

第 1 回　課題戯曲の検討①
第 2 回　課題戯曲の検討②
第 3 回　読み稽古①
第 4 回　読み稽古②
第 5 回　読み稽古③キャスティング、美術プランの検討
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　立ち稽古⑤
第 11 回　試演（1班）・反省/課題
第 12 回　試演（2班）・反省/課題
第 13 回　試演（3班）・反省/課題

第 14 回　試演（4班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古における、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークにおける、グループへの演出指導の言葉。
• 期末の発表に対してのグループおよび個々への講評。
〔授業時間外の学習〕
課題戯曲を研究し、自主稽古を行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
適宜提示、配布する
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（課題戯曲を十分に理解し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（課題戯曲を十分に理解し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（課題戯曲をほぼ理解し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（課題戯曲をほぼ理解しているが、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（課題戯曲を理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE2230TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ａ（日本演劇）(1)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
金曜 5限
実務経験なし
演習（演技）

三浦 剛

〔履修条件〕
• 演技を通して「日本の演劇」への理解を深めたい者。
•「自主上演実習」で担当演出が三浦の場合は履修が望ましい。
〔授業の概要〕
• 7月の「自主上演実習」に向けての作品ブラッシュアップ、上演を想定した演出を通して、舞台俳優として必要な身体、呼吸と集中力のトレーニングを中心に「台詞」に囚われないダイナミックでグローバルな演技メソッドを学習していく。
• 少人数で数チーム編成し、それぞれの「課題戯曲①」「課題戯曲②」を研究、稽古し、最終的に「自主上演実習」にて上演する。
• 日本の現・近代戯曲を利用することで見えてくる、古典戯曲とは違った今日性の高いテーマを現代に合ったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考に切磋琢磨の中でこそ創造されるグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。
〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の研究・解釈と、稽古を通しての上演作品の完成と上演を通し、現近代演劇における多角的な方法を実践できる。
• 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、さらなる研鑽に役立てることができる。
• 現代日本演劇上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング①呼吸
第 2 回　トレーニング②身体表現・課題発表③
第 3 回　トレーニング③呼吸と身体・読み稽古（前半）
第 4 回　トレーニング④集中・読み稽古（後半）
第 5 回　トレーニング⑤呼吸と台詞・キャスティング
第 6 回　トレーニング⑥身体と台詞・立ち稽古（前半）
第 7 回　トレーニング⑦集中と関係性・立ち稽古（後半）
第 8 回　立ち稽古（戯曲解釈）
第 9 回　立ち稽古（関係性）
第 10 回　小道具、衣装、音響、照明のプランニング発表
第 11 回　課題③上演（１班）・反省/課題
第 12 回　課題③上演（２班）・反省/課題
第 13 回　課題③上演（３班）・反省/課題
第 14 回　課題③上演（４班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、今後の課題とディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古による、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークによる、グループへの演出指導の言葉。
•「自主上演実習」対しての個々へのチェック（良い点、悪い点、改善点）を伝える。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
課題戯曲を研究し、自主稽古を行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（課題日本戯曲）
参考書：随時授業時に配布
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技の質を高められる）

Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な演技メソッドを十分に把握し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な演技メソッドをほぼ把握し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な演技メソッドの理解に欠け、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な演技メソッドを理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE3230TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ａ（日本演劇）(2)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期
水曜 5限
実務経験なし
演習（演技）

冨士川 正美

〔履修条件〕
演技を通して「日本の演劇」への理解を深めたい者。
〔授業の概要〕
• 少人数でチームを編成し、それぞれの課題戯曲を選び、研究・稽古を進めて、最終的に試演する。
• 日本の近・現代戯曲を読み込むことで見えてくる、今日性の高いテーマを現代に合ったリアリティーで上演することを学ぶ。また、お互いのチームを参考にして切磋琢磨することでグレードの高い芝居を完成させ、俳優として「演じる」だけでなく「観る」力も同時に学習する。
• 最高学年として、専攻科１年生の稽古へのアドバイスや、技術面でのアドバイスを行う。
〔授業の到達目標〕
• 課題戯曲の選択・研究・解釈、稽古を経て試演に至る過程を通じて、日本の近・現代演劇における多角的な表現方法を実践できる。
• 上演した成果から一人一人の新たなステップアップに必要な技術面、知識面を発見し、さらなる研鑽に役立てることができる。
• 日本の近・現代演劇上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　課題戯曲の選択、検討①
第 2 回　課題戯曲の選択、検討②チーム編成、キャスティング
第 3 回　読み稽古①
第 4 回　読み稽古②美術プランの検討
第 5 回　立ち稽古①
第 6 回　立ち稽古②
第 7 回　立ち稽古③
第 8 回　立ち稽古④
第 9 回　立ち稽古⑤
第 10 回　立ち稽古⑥
第 11 回　試演①（１班）・反省/課題
第 12 回　試演②（２班）・反省/課題
第 13 回　試演③（３班）・反省/課題
第 14 回　試演④（４班）・反省/課題
第 15 回　全チームの総評、ディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 日々の稽古における、個々への演技指導時の言葉。
• グループワークにおける、グループへの演出指導の言葉。
• 期末の試演に対してのグループおよび個々への講評。
〔授業時間外の学習〕
課題戯曲を研究し、自主稽古を行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
適宜提示、配布する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
Ｓ　総合点が90点以上の者（課題戯曲を十分に理解し、演技の質を高められる）
Ａ　総合点が80点以上の者（課題戯曲を十分に理解し、演技ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（課題戯曲をほぼ理解し、演技ができる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（課題戯曲をほぼ理解しているが、演技に利用できていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（課題戯曲を理解せず、演技になっていない）
〔科目ナンバリング〕
THE4230TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｂ（外国演劇）(1)　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　前期
水曜 4限
実務経験なし
演習（演技）

Peter Goessner

〔履修条件〕
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。
まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置付けを想像させるものである。
授業は、ルドルフ・ペンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。
〔授業の到達目標〕
演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入、シアターゲーム
第 2 回　ワンシーンオーディション（二人ー五人）、作品準備：劇作家、時代等
第 3 回　学生レポート：作品コンテクスト、キャラクターアナライズ
第 4 回　読む稽古、エチュード
第 5 回　衣装準備、小道具、舞台大道具等セット、エチュード
第 6 回　照明、音響、映像等セット、エチュード
第 7 回　ワンシーン通し、反省、ボイストレーニング
第 8 回　シーン直し、個人反省
第 9 回　ワンシーン稽古
第 10 回　ワンシーン稽古
第 11 回　ワンシーン通し、反省
第 12 回　ワンシーン直し
第 13 回　ワンシーン発表会
第 14 回　個人反省
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
絹川友梨「インプロ・ゲーム」
研究旅行（キース・ジョンストン「ルーズムースシアター」）で集めた書類
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
S　①～④まで90％以上獲得した者
A　①～④まで80％以上獲得した者
B　①～④まで60％以上獲得した者
C　①～④まで50％以上獲得した者
D　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE1231TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｂ（外国演劇）(2)　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　後期
木曜 1限
実務経験なし
演習（演技）

Peter Goessner

〔履修条件〕
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。
まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置付けを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ペンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

〔授業の到達目標〕

演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深めることができる。

〔授業計画〕

第 1 回　ワンシーン繰り返し、シアターゲーム
第 2 回　ワンシーンオーディション、エチュード
第 3 回　ボイストレーニング、エチュード
第 4 回　読む稽古
第 5 回　学生レポート、シーン準備
第 6 回　ワンシーン稽古
第 7 回　ワンシーン通し、反省
第 8 回　ワンシーン稽古
第 9 回　ワンシーン発表会
第 10 回　反省、個人反省
第 11 回　ワンシーンオーディション、読む稽古、シーン準備
第 12 回　ワンシーン稽古
第 13 回　ワンシーン稽古
第 14 回　ワンシーン発表会
第 15 回　反省、まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

発表の後に、振り返りとして総評を行う。

〔授業時間外の学習〕

授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。

これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

絹川友梨「インプロ・ゲーム」
研究旅行（キース・ジョンストン「ルーズムースシアター」）で集めた書類
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）

〔成績評価〕

①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。

S　①～④まで90％以上獲得した者
A　①～④まで80％以上獲得した者
B　①～④まで60％以上獲得した者
C　①～④まで50％以上獲得した者
D　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者

〔科目ナンバリング〕

THE2231TA

〔学位授与方針との関係〕

②、④

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

ー

## 演技研究Ｂ（外国演劇）(1)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
金曜 1限
実務経験なし
演習（演技）

Peter Goessner

〔履修条件〕

自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。

〔授業の概要〕

役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。

まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置付けを想像させるものである。

授業は、ルドルフ・ペンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。

最高学年として、専攻科１年生の稽古へのアドバイスや、技術面でのアドバイスを率先して提供することにより、「演じる」だけでなく「創作」する力も養っていく。

〔授業の到達目標〕

• 演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深めることができる。
• 外国演劇上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得できる。

〔授業計画〕

第 1 回　導入、シアターゲーム
第 2 回　ワンシーンオーディション（二人ー五人）、作品準備：劇作家、時代等
第 3 回　学生レポート：作品コンテクスト、キャラクターアナライズ
第 4 回　読む稽古、エチュード
第 5 回　衣装準備、小道具、舞台大道具等セット、エチュード
第 6 回　照明、音響、映像等セット、エチュード
第 7 回　ワンシーン通し、反省、ボイストレーニング
第 8 回　シーン直し、個人反省
第 9 回　ワンシーン稽古
第 10 回　ワンシーン稽古
第 11 回　ワンシーン通し、反省
第 12 回　ワンシーン直し

第 13 回　ワンシーン発表会
第 14 回　個人反省
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
絹川友梨「インプロ・ゲーム」
研究旅行（キース・ジョンストン「ルーズムースシアター」）で集めた書類
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
S　①～④まで90％以上獲得した者
A　①～④まで80％以上獲得した者
B　①～④まで60％以上獲得した者
C　①～④まで50％以上獲得した者
D　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE3231TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技研究Ｂ（外国演劇）(2)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期
金曜 1限
実務経験なし
演習（演技）

Peter Goessner

〔履修条件〕
自分の身体全てを用いて自己を表現することに熱意があり、プロフェッショナルな役者となるためのテクニックを学ぶ強い欲求があること。
〔授業の概要〕
役者の舞台の上で必要な「思い」を創造し、深め、高めるために、この授業でエチュードとインプロビゼーションを行う。
まず、学生は、与えられた課題にアドリブで、パートナーと演劇のシーンを作らなければならない。次に、与えられた課題ではなく、自らが課題を見つけ舞台の上でパートナーと表現する。この演習はお互いに相手を認め、尊重することを学び、さらに自分ひとりでは舞台の進行を決められない、つまりこの経験は社会での自己の位置付けを想像させるものである。
授業は、ルドルフ・ペンカ（ベルリン「エルンスト・ブッシュ」俳優学校教師）とキース・ジョンストン（カルガリー「ルーズムースシアター」）によるメソッドを用いた演技訓練の基本を復習することから始める。
最高学年として、専攻科 1 年生の稽古へのアドバイスや、技術面でのアドバイスを率先して提供することにより、「演じる」だけでなく「創作」する力も養っていく。
〔授業の到達目標〕
• 演劇の技術、特に相手との関係や状況を理解すること、の基本から演じることに対する理解を深めることができる。
• 外国演劇上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　ワンシーン繰り返し、シアターゲーム
第 2 回　ワンシーンオーディション、エチュード
第 3 回　ボイストレーニング、エチュード
第 4 回　読む稽古
第 5 回　学生レポート、シーン準備
第 6 回　ワンシーン稽古
第 7 回　ワンシーン通し、反省
第 8 回　ワンシーン稽古
第 9 回　ワンシーン発表会
第 10 回　反省、個人反省
第 11 回　ワンシーンオーディション、読む稽古、シーン準備
第 12 回　ワンシーン稽古
第 13 回　ワンシーン稽古
第 14 回　ワンシーン発表会
第 15 回　反省、まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業の中で出された課題やショートシーン等は、繰り返し考え、自分の意見を加えて、授業前に自主練習等を行い専門的な準備をすること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
絹川友梨「インプロ・ゲーム」
研究旅行（キース・ジョンストン「ルーズムースシアター」）で集めた書類
キース・ジョンストン「シアタースポーツ」（英語版）
〔成績評価〕
①課題に対する成果10％②授業に取り組もうとする姿勢・態度・協調性の成否20％③役者としてどのくらい能力が培われたか30％④課題に対する到達度等40％を総合的に評価する。
S　①～④まで90％以上獲得した者
A　①～④まで80％以上獲得した者

B　①～④まで60％以上獲得した者
C　①～④まで50％以上獲得した者
D　①～④まで50％未満しか獲得できなかった者
〔科目ナンバリング〕
THE4231TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｃ（現代劇）(1)　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期
月曜 3限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業概要、進行の説明
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　前期シーンワークの作品発表、作品についての話し合い
第 3 回　本読み①
話し合い
第 4 回　本読み②
話し合い
第 5 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ①
第 6 回　読み合わせ②
第 7 回　立ち稽古①
空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
台詞の目的化
第 9 回　立ち稽古③
台詞の目的化
第 10 回　立ち稽古④
台詞を自分の言葉にする
第 11 回　立ち稽古⑤
台詞を自分の言葉にする
第 12 回　立ち稽古⑥
台詞を身体から離す
第 13 回　立ち稽古⑦
台詞を身体から離す
第 14 回　立ち稽古⑧
形にする
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE1232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｃ（現代劇）(2)　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
月曜 3限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。

〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　後期シーンワークの作品発表、ウォーミングアップ
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ
第 3 回　読み合わせ①
第 4 回　読み合わせ②
第 5 回　立ち稽古①
空間の把握
第 6 回　立ち稽古②
コミュニケーション
第 7 回　立ち稽古③
行動としての台詞
第 8 回　立ち稽古④
相手役を動かす
第 9 回　立ち稽古⑤
役にとって、より負荷の大きい状況を選択していくということ
第 10 回　立ち稽古⑥
形にしてゆく
ブロッキング
第 11 回　立ち稽古⑦
通し稽古
第 12 回　立ち稽古⑧
通し稽古
第 13 回　立ち稽古⑨
通し稽古
第 14 回　後期発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE2232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技研究Ｃ（現代劇）(1)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
月曜 4限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業概要、進行の説明
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　前期シーンワークの作品発表、作品についての話し合い
第 3 回　本読み①
話し合い
第 4 回　本読み②
話し合い

第 5 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ①
第 6 回　読み合わせ②
第 7 回　立ち稽古①
空間の把握
第 8 回　立ち稽古②
台詞の目的化
第 9 回　立ち稽古③
台詞の目的化
第 10 回　立ち稽古④
台詞を自分の言葉にする
第 11 回　立ち稽古⑤
台詞を自分の言葉にする
第 12 回　立ち稽古⑥
台詞を身体から離す
第 13 回　立ち稽古⑦
台詞を身体から離す
第 14 回　立ち稽古⑧
形にする
第 15 回　授業内発表

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE3232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｃ（現代劇）(2)　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期
月曜 4限
実務経験あり
演習（演技）

田中 壮太郎

〔履修条件〕
積極的に取り組むこと。
〔授業の概要〕
スタニスラフスキー・システムをベースに演技を習得してゆく。演技とはリアクションであり、行動、行為である。授業では登場人物の基本行動を洗い出し、それを更に小さな行動へと分解してゆく。その行動の一つ一つが更に小さな「適応」を生み出す。適応というのは相手とのコミュニケーションであり、毎瞬間生まれるものだから再現はできない。観客の前においても再現ではなく再構築をすることが重要であると理解する。役ではなく「自分」を通してそれらを行う感覚を培う。シーンワークを通してドラマを動かす演技を習得してゆく。
〔授業の到達目標〕
シーンワークを通して、実際の舞台や映像の現場で共通して求められる演技力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　後期シーンワークの作品発表、ウォーミングアップ
※授業内容はその進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　生徒自身による実習場面の選択および相手役の決定、読み合わせ
第 3 回　読み合わせ①
第 4 回　読み合わせ②
第 5 回　立ち稽古①
空間の把握
第 6 回　立ち稽古②
コミュニケーション
第 7 回　立ち稽古③
行動としての台詞
第 8 回　立ち稽古④
相手役を動かす
第 9 回　立ち稽古⑤
役にとって、より負荷の大きい状況を選択していくということ
第 10 回　立ち稽古⑥
形にしてゆく
ブロッキング
第 11 回　立ち稽古⑦
通し稽古
第 12 回　立ち稽古⑧
通し稽古
第 13 回　立ち稽古⑨

通し稽古
第 14 回　後期発表
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内のコミュニケーションによる。
〔授業時間外の学習〕
作品に対する理解のためのリサーチ。台詞が身体から離れる感覚を得られるまで入れる作業。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて授業内で配布する。
〔成績評価〕
①授業への取り組み10％②障壁や課題に対する姿勢10％③センス10％④授業期間中の成長および変化20％⑤課題に対する成果50％を総合的に評価する。
S　①～⑤で90％以上を獲得した者
A　①～⑤で80％以上を獲得した者
B　①～⑤で60％以上を獲得した者
C　①～⑤で50％以上を獲得した者
D　①～⑤で50％未満だった者
〔科目ナンバリング〕
THE4232TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｄ（フィジカルシアター）　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期
木曜 4限
実務経験あり
演習（演技）

大谷 賢治郎

〔履修条件〕
授業時間外での自習・自主稽古に積極的に取り組むこと。
アーティストとしての自立、アンサンブルとしての共同作業を両立させること。
稽古着を着用すること。
〔授業の概要〕
• 俳優としての身体性を習得することを目標とする。
• 身体表現の可能性を模索し、身体表現による語彙を増やしていく。
• 台詞だけに頼らない、観客の想像力に働きかける伝達方法を獲得する。
•「演技演習Ａ」で行った、俳優自身が作品創造を行うディバイジングを更に掘り下げていく。
• 身体表現による身体行動、テキストによる言語行動の両立を図る。
〔授業の到達目標〕
• ソロパフォーマンスの確立と発表ができる。
• グループワークによるパフォーマンスの確立と発表ができる。
• ディバイジングによる作品づくりと発表ができる。
• 創造過程における自分自身について、そして他者についての観察とフィードバックができる。
• 創造過程を記録し報告ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
授業内容の説明と目標設定
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　身体表現による演劇的自己紹介
第 3 回　テンポ
スローモーション等
第 4 回　身体記憶
第 5 回　模倣と観察
第 6 回　日常的ジェスチャー
第 7 回　表現的ジェスチャー
第 8 回　音楽的表現
第 9 回　キャラクターの創造①
基礎
第 10 回　キャラクターの創造②
応用
第 11 回　ディバイジング①
基礎
第 12 回　ディバイジング②
応用
第 13 回　作品創造①
１回目の発表
第 14 回　作品創造②
２回目の発表
第 15 回　総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の課題発表後に講評を行い、場合によっては個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題発表のための自習ならびに自主稽古。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：必要に応じて授業時に配布。
参考書：必要に応じて授業時に配布。
〔成績評価〕
授業への取組み80％、発表の内容20％の総合的評価。
Ｓ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が大変高く評価できる。
Ａ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
Ｂ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
Ｃ　各課題の発表まで達している。
Ｄ　各課題の発表が評価できない。

〔科目ナンバリング〕
THE2233TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技研究Ｄ（フィジカルシアター）　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期
木曜 5限
実務経験あり
演習（演技）

大谷 賢治郎

〔履修条件〕
授業時間外での自習・自主稽古に積極的に取り組むこと。
アーティストとしての自立、アンサンブルとしての共同作業を両立させること。
稽古着を着用すること。
「演技研究Ｄ（フィジカルシアター）１年次」を履修していること。
〔授業の概要〕
• 身体表現の可能性を模索し、身体表現による語彙を増やしていく。
• 台詞だけに頼らない、観客の想像力に働きかける伝達方法を獲得する。
•「演技研究Ｄ１年次」で行った、俳優自身が作品創造を行うディバイジングを更に掘り下げていく。
• 身体表現による身体行動、テキストによる言語行動の両立を図る。
• 最高学年として、専攻科１年生への稽古のアドバイスや、技術面でのアドバイスを率先して提供することにより、「演じる」だけでなく「創作」する力も養っていく。
〔授業の到達目標〕
• ソロパフォーマンスの確立と発表ができる。
• グループワークによるパフォーマンスの確立と発表ができる。
• ディバイジングによる作品づくりと発表ができる。
• 創造過程における自分自身について、そして他者についての観察とフィードバックができる。
• 創造過程を記録し報告ができる。
• フィジカルシアター上演において、必要な稽古への取り組みや、表現上のアドバイスを他人に言語として伝えられる力を獲得できる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業の導入
　　授業内容の説明と目標設定
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　身体表現による演劇的自己紹介
第 3 回　テンポ
　　スローモーション等
第 4 回　仮面①
第 5 回　仮面②
第 6 回　仮面③
　　日常的ジェスチャー
第 7 回　身体表現
　　感情
第 8 回　身体表現
　　年齢
第 9 回　身体表現
　　キャラクター形成①基礎
第 10 回　身体表現
　　キャラクター形成②応用
第 11 回　ディバイジング①
　　基礎
第 12 回　ディバイジング②
　　応用
第 13 回　作品創造①
　　１回目の発表
第 14 回　作品創造②
　　２回目の発表
第 15 回　総評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の課題発表時に講評を行い、場合によっては個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題発表のための自習ならびに自主稽古。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：必要に応じて授業時に配布。
参考書：必要に応じて授業時に配布。
〔成績評価〕
授業への取組み80％、発表の内容20％の総合的評価。
Ｓ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が大変高く評価できる。
Ａ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が高く評価できる。
Ｂ　授業への取組み、創造過程への関わり方、シーンワークの発表が評価できる。
Ｃ　各課題の発表まで達している。
Ｄ　各課題の発表が評価できない。
〔科目ナンバリング〕
THE4233TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演技研究Ｅ（ミュージカル）　１年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生
1単位　前期
木曜 4限
実務経験なし
演習（演技）

大塚 幸太

〔履修条件〕
授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。
稽古着・稽古靴着用。
〔授業の概要〕
ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」として表現したいこと、しなければならないことを明確にして演技プランを構築していく。
シーンワークでは群像、ペア、ソロパートでの演技・歌唱・振付からミュージカル特有の形だけの演技ではなく、心が動く演技表現と空間と空気を動かす身体表現を学ぶ。メインとアンサンブルの両方を経験し、双方で必要なモノを体感する。「役として生きる」ことを怠らず、俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。
〔授業の到達目標〕
歌やダンスの苦手意識を軽減し、今後の活動の場を広げられるように努力し、各自が新たな発見をすること。「プロフェッショナル」としての在り方の第一歩を修得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　課題の歌入れ・振付①
第 2 回　課題の歌入れ・振付①
第 3 回　課題作品の演出
第 4 回　課題作品の演出
第 5 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 6 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 7 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 8 回　課題の歌入れ・振付②
第 9 回　課題の歌入れ・振付②
第 10 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 11 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 12 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 13 回　課題作品①②演出
第 14 回　課題作品①②演出
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で個別にアドバイスを伝える。
〔授業時間外の学習〕
授業に向けての予習・復習。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で配布されるプリント。
〔成績評価〕
以下の項目につき１項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業態度②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢と実力④自らを研鎖する意欲⑤身体的・精神的健康の維持
S　総合点が90点以上の者（①～⑤を満たし、即戦力となりうる可能性のある実力がある）
A　総合点が80点以上の者（①～⑤を満たしている）
B　総合点が60点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足）
C　総合点が50点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足・授業態度や他の学生に及ぼす影響）
D　総合点が50点未満の者（①～⑤を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
THE1233TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演技研究Ｅ（ミュージカル）　２年次

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　前期
木曜 5限
実務経験なし
演習（演技）

大塚 幸太

〔履修条件〕
授業・課題に積極的に取り組み、芸の道を歩む者として自分としっかり向き合いチャレンジする気持ちを持つこと。
稽古着・稽古靴着用。
〔授業の概要〕
ミュージカルという枠組み関係なく「表現者」として表現したいこと、しなければならないことを明確にして演技プランを構築していく。
２年次のシーンワークは１年次よりも本格化した「作品ワーク」となる。１年次と同様に群像、ペア、ソロパートでの演技・歌唱・振付からミュージカル特有の形だけの演技ではなく、心が動く演技表現と空間と空気を動かす身体表現を学ぶ。作品ワーク中心の授業で、細部に渡る表現を研究し、心身共に「プロフェッショナル」としての在り方の第一歩を修得する。
また、生徒による「クリエイティブ・チーム」を編成し、振付または演出の立場を経験することで、創造力や創作意図を伝える指導力を身につける機会を設ける場合がある。
１年次と同様に俳優という職業として自分の「商品価値」を見出していくと共に、協調性やコミュニケーション能力の向上を授業目的の一環とする。そして、卒業後すぐに「現場」に適応できる人材育成を目指す。

〔授業の到達目標〕
歌やダンスの苦手意識を軽減し、今後の活動の場を広げられるように努力し、各自が新たな発見をすること。「プロフェッショナル」としての在り方の第一歩を修得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　課題の歌入れ・振付①
第 2 回　課題の歌入れ・振付①
第 3 回　課題作品の演出
第 4 回　課題作品の演出
第 5 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 6 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 7 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 8 回　課題の歌入れ・振付②
第 9 回　課題の歌入れ・振付②
第 10 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 11 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 12 回　ソロパート等入れ替えたシーンワーク
第 13 回　課題作品①②演出
第 14 回　課題作品①②演出
第 15 回　授業内発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で個別にアドバイスを伝える。
〔授業時間外の学習〕
授業に向けての予習・復習。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で配布されるプリント。
〔成績評価〕
以下の項目につき 1 項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業態度②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢と実力④自らを研鎖する意欲⑤身体的・精神的健康の維持
S　総合点が90点以上の者（①～⑤を満たし、即戦力となりうる可能性のある実力がある）
A　総合点が80点以上の者（①～⑤を満たしている）
B　総合点が60点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足）
C　総合点が50点以上の者（①～⑤を満たしていない。実力不足・出席日数不足・授業態度や他の学生に及ぼす影響）
D　総合点が50点未満の者（①～⑤を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
THE3233TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇特別研究(1)①②

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
土曜 1限 土曜 2限
実務経験あり
演習（演技）

**眞鍋 卓嗣**

〔履修条件〕
授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
稽古着・運動靴を必ず着用すること。
授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出すること。
〔授業の概要〕
演技基礎を他者との交流の視点から学ぶ。様々なトレーニングを施し、それがどのように実演技に結びついているかを、戯曲の一場面を使って検証する。
〔授業の到達目標〕
• 専門俳優・表現者に必要な他者との交流の本質を探求し、向上することができる。
• 他者との交流の重要性を知ることで、集団においての協働性を向上することができる。
• 戯曲の解釈と登場人物の役割を学んだ上で、他者との交流をどのように演技に生かすかを学び、実際に実演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　トレーニング
　　交流①
第 2 回　トレーニング
　　交流②
第 3 回　トレーニング
　　交流③
第 4 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分①
第 5 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分②
第 6 回　トレーニング
　　与えられた状況の中の自分③
第 7 回　戯曲読解
第 8 回　役へのアプローチの仕方、読み合わせ
第 9 回　読み合わせ
第 10 回　セリフの覚え方
第 11 回　実演①
第 12 回　実演②
第 13 回　実演③
第 14 回　実演④
第 15 回　前期の総括、ディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業内容をノートに書き、疑問点や理解したこと等をまとめること。
• 与えられた宿題をやってくること。
• 実演する場合の道具や衣装等を用意すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲の一場面）
〔成績評価〕
授業の取り組み50%、課題の成果30%、レポートの内容20%にて、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果が特によく見られ、授業への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果がよく見られ、授業への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が良好であった者、または取り組みが的確だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が不十分だった者、または取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、取り組みに問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
THE1234TA
〔学位授与方針との関係〕
①、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 演劇特別研究(2)①②

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
土曜 1限 土曜 2限
実務経験あり
演習（演技）

**眞鍋 卓嗣**

〔履修条件〕
授業時間外も課題の稽古に積極的に取り組むこと。
稽古着・運動靴を必ず着用すること。
授業時間内は必ず時計・アクセサリー等を外すこと。
遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出すること。
〔授業の概要〕
他者との交流の視点から演技基礎を学ぶ。それがどのように実演技に結びついているかを、戯曲の一場面を使って検証する。前期で学んだことを生かし、より実践的な内容とする。
〔授業の到達目標〕
• 専門俳優・表現者に必要な他者との交流の本質を探求し、向上することができる。
• 他者との交流の重要性を知ることで、集団においての協働性の向上をすることができる。
• 戯曲の解釈と登場人物の役割を学んだ上で、他者との交流をどのように演技に生かすかを学び、実際に実演することができる。
• プロの現場で行われているアプローチの仕方を学び、専門俳優・表現者として向上することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　戯曲読解・読み合せ①
第 2 回　戯曲読解・読み合せ②
第 3 回　戯曲読解・読み合せ③
第 4 回　戯曲読解・読み合せ④
第 5 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ①
第 6 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ②
第 7 回　立ち稽古の前準備・セリフ合わせ③
第 8 回　立ち稽古①
第 9 回　立ち稽古②
第 10 回　立ち稽古③
第 11 回　立ち稽古④
第 12 回　立ち稽古⑤
第 13 回　発表①
第 14 回　発表②
第 15 回　後期の総括、ディスカッション
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
・授業内容をノートに書き、疑問点や理解したこと等をまとめること。
・与えられた宿題をやってくること。
・実演する場合の道具や衣装等を用意すること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：授業時に配布（戯曲の一場面）
〔成績評価〕
授業の取り組み50%、課題の成果30%、レポートの内容20%にて、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果が特によく見られ、授業への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題の成果がよく見られ、授業への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が良好であった者、または取り組みが的確だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解や課題の成果が不十分だった者、または取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、取り組みに問題があった者）
〔科目ナンバリング〕
THE2234TA
〔学位授与方針との関係〕
①、④

〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ワークショップA(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
〔授業の概要〕
各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各 1 回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。
〔授業の到達目標〕
演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　ワークショップ担当者は各学期の開講時に授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　キャスト発表
第 5 回　立ち稽古①
第 6 回　立ち稽古②
第 7 回　立ち稽古③
第 8 回　立ち稽古④
第 9 回　立ち稽古⑤
第 10 回　立ち稽古⑥
第 11 回　立ち稽古⑦
第 12 回　立ち稽古⑧
第 13 回　立ち稽古⑨
第 14 回　課題発表
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1630TA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ワークショップB(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
2 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
〔授業の概要〕
各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各 1 回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。
〔授業の到達目標〕
•演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
• 修了年次であることを意識し、今後の演劇活動における社会貢献に直結する技術や思考を獲得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　ワークショップ担当者は各学期の開講時に授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　キャスト発表
第 5 回　立ち稽古①
第 6 回　立ち稽古②

第 7 回　立ち稽古③
第 8 回　立ち稽古④
第 9 回　立ち稽古⑤
第 10 回　立ち稽古⑥
第 11 回　立ち稽古⑦
第 12 回　立ち稽古⑧
第 13 回　立ち稽古⑨
第 14 回　課題発表
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE3630TA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ワークショップA(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
1単位　後期集中
実務経験あり
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
〔授業の概要〕
各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各 1 回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。
〔授業の到達目標〕
演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
ワークショップ担当者は各学期の開講時に授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　キャスト発表
第 5 回　立ち稽古①
第 6 回　立ち稽古②
第 7 回　立ち稽古③
第 8 回　立ち稽古④
第 9 回　立ち稽古⑤
第 10 回　立ち稽古⑥
第 11 回　立ち稽古⑦
第 12 回　立ち稽古⑧
第 13 回　立ち稽古⑨
第 14 回　課題発表
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2630TA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ワークショップB(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習（WS）

〔履修条件〕
ワークショップ全日程に参加すること。欠席・遅刻・早退は一切認めない。
〔授業の概要〕
各ジャンルの第一線で活躍されている演劇人・アーティストにご指導いただき、前期・後期に各１回ずつワークショップを行う。
授業計画の準備上、履修登録後の登録・取消は一切認めないので注意すること。また、事前に課題が提示されることもあるので、その場合は十分に準備してワークショップに挑むこと。
〔授業の到達目標〕
•演技・表現のメソッドを集中的に訓練し、演劇・舞台表現に関する理解を体験的に深めることができる。
• 修了年次であることを意識し、今後の演劇活動における社会貢献に直結する技術や思考を獲得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　ワークショップ担当者は各学期の開講時に授業計画を発表するが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　キャスト発表
第 5 回　立ち稽古①
第 6 回　立ち稽古②
第 7 回　立ち稽古③
第 8 回　立ち稽古④
第 9 回　立ち稽古⑤
第 10 回　立ち稽古⑥
第 11 回　立ち稽古⑦
第 12 回　立ち稽古⑧
第 13 回　立ち稽古⑨
第 14 回　課題発表
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4630TA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## ワークショップC/D（演大連）

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
1単位　集中
実務経験なし
実習（WS）

三浦 剛

〔履修条件〕
演劇専攻芸術科１・２年生、専攻科１・２年生を対象とする。しかし、履修希望者多数の場合は、５つの大学からの選抜メンバーによってワークショップが開催されるという授業の趣旨もあって、優先的に芸術科２年生、専攻科１・２年生の中から選抜をする。
また、５大学の総合での授業ということもあって、履修できる人数は少数になる。
〔授業の概要〕
演劇大学連盟（桐朋学園芸術短期大学・桜美林大学・日本大学・多摩美術大学・玉川大学）が主催する、共同のサマースクールとしてのワークショップである。
８月上旬の集中講義として行う予定である。
ワークショップの内容は、演技・身体系のワークショップと美術・衣装系のワークショップの２つを予定している。
〔授業の到達目標〕
自分と同世代の他大学の学生がどのようなレベルでどのような志向を持って学生生活もしくは演劇活動を行っているのか、ワークショップで切磋琢磨をして、今後の自身の社会生活もしくは卒業後の進路等、目標を持った活動ができるようにする。
〔授業計画〕
第 1 回　イントロダクション
　　※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　ワークショップのレクチャー（桐朋学園において）

第 3 回　ワークショップ　1日目午前
第 4 回　ワークショップ　1日目午後
第 5 回　ワークショップ　1日目午後
第 6 回　ワークショップ　1日目夕方
第 7 回　ワークショップ　2日目午前
第 8 回　ワークショップ　2日目午後
第 9 回　ワークショップ　2日目午後
第 10 回　ワークショップ　2日目夕方
第 11 回　ワークショップ　3日目午前
第 12 回　ワークショップ　3日目午後
第 13 回　ワークショップ　3日目午後
第 14 回　ワークショップ・発表　3日目夕方
第 15 回　まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 個々への演技指導時の言葉
• グループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
30時間以上の時間外学習をすること。

〔教科書・参考書等〕
追って指示する。

〔成績評価〕
最終発表50％、授業への貢献度50％で100点に換算。
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、発表においても十全にプレゼンスができた）
Ａ　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項をほぼ把握し、発表等の成果においてもプレゼンスを保てた）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、プレゼンスが曖昧になる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、プレゼンスがあまりできない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、プレゼンスが発揮できない）

〔科目ナンバリング〕
THE2631TA/THE4631TA

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 演劇研修

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習（WS）

Peter Goessner、高橋 宏幸、冨士川 正美

〔履修条件〕
良好な体調をもって研修に参加できること。
また、事前の説明会（授業として、行く場所についての準備）や、作品のツアー（地方公演としての旅公演の制作など）も全員で行うので参加すること。

〔授業の概要〕
研修旅行として、演劇作品の発表やワークショップを行ったり、演劇に関する文化的な場所をめぐったり、日本や海外の演劇教育機関におけるワークショップや講習を受けたり、それぞれの地域や文化を実際におとずれて学ぶ。また、それぞれの地域の、美術館・博物館を回り、演劇はもちろん、さまざまな文化を理解する。また、様々な人と実際に触れ合う機会があるので、臆することなく積極的に参加すること。
昨今では、イタリアのテアトロ・アルセナーレ、オーストラリアの国立演劇学校であるＮＩＤＡ、スイスのチューリッヒ芸術大学、カナダのカルガリーのルーズムーズシアター、台湾の国立台北芸術大学でのワークショップや視察、沖縄、東北、瀬戸内などでの研修、広島への旅公演を行っている。

〔授業の到達目標〕
研修旅行を通じて、国際的な知見を持って視野を広めることができる。また、様々な人と触れ合うことにより、たとえ日本においても、文化の多様性を知ることができる。そして、自分のいる国や民族、文化を翻って見つめ直す。
単なる旅行ではなく、あくまで研修として様々なものを学ぶ機会としてこの授業はある。そのためには事前の学習として、下調べなども必要である。

〔授業計画〕
第 1 回　説明会①
第 2 回　説明会②
第 3 回　準備①
第 4 回　準備
第 5 回　事前学習会①
第 6 回　事前学習会②
第 7 回　結団式
第 8 回　ワークショップ
第 9 回　ワークショップ
第 10 回　公演
第 11 回　公演
第 12 回　ワークショップ
第 13 回　ワークショップ
第 14 回　視察①
第 15 回　視察②

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
最終日にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
訪問する場所について調べておくこと。それぞれの地域を知り、ワークショップや公演などにスムーズに参加できるように準備しておくこと。
また、体験したことを踏まえて、さらに調べること。
時間外学習として30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
訪問先の様々な資料をその都度配布するので、読んでおくこと。
〔成績評価〕
①研修への参加の仕方として、準備や学習会への取組み②研修中の態度③終了後のレポートをそれぞれ同じ割合（およそ33％ずつ）にて総合的に評価する。
S　上記の①②③の総合点が90点以上の者（基本的なことを十分に理解し、さらに独自の見解を得ている）
A　上記の①②③の総合点が80点以上の者（基本的なことをほぼ理解し、さらに自身の見解を得ている）
B　上記の①②③の総合点が60点以上の者（基本的なことの理解に欠け、自身の見解に欠ける）
C　上記の①②③の総合点が50点以上の者（基本的なことを理解せず、自身の見解だけがある）
D　上記の①②③の総合点が50点未満の者（基本的なことを理解せず、自身の見解がない）
〔科目ナンバリング〕
THE2600TA/THE4600TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 舞踊Ａ（クラシックバレエ）Ⅰ

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　前期
木曜 3限
実務経験なし
実技

中農 美保

〔履修条件〕
特になし。
※他専攻学生が履修する場合は、芸術科演劇専攻科目「クラシックバレエⅠ」「クラシックバレエⅡ」の単位を履修していること。
〔授業の概要〕
クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、下記の事項等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。
• 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
• あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
• 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
• 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚
〔授業の到達目標〕
• それぞれが自分の体と向き合い、豊かな表現ができる体を作ることができる。
• バレエのアカデミックなムーヴメント、テクニックを学び、音楽的に踊れるように感性を磨くことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　姿勢とプレイスメント、足の５つのポジション、ポール・ド・ブラ
順序および内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　体の使い方①応用
２～５回は
バーレッスン： プリエ、バットマン・タンジュ、バットマンデガジェ、ロンドジャンプ・ア・テール、グラン・バットマン
センターレッスン： アダージョ、バットマン・タンジュ、小さいジャンプ、シソンヌ
第 3 回　体の使い方②発展
第 4 回　体の使い方③綺麗に魅せる
第 5 回　２～４回のまとめ
第 6 回　難易度を上げた体の使い方①基本
６～10回は
バーレッスン： 加えてバットマン・フラッペ、バットマン・フォンジュ、デヴロッペ
センターレッスン： 加えてグラン・バットマン、アッサンブレ、ピルエット、ピケアデダン
第 7 回　難易度を上げた体の使い方②応用
第 8 回　難易度を上げた体の使い方③発展
第 9 回　難易度を上げた体の使い方④綺麗に魅せる
第 10 回　６～９回のまとめ
第 11 回　ジャンプや回転のコンビネーション①基本
第 12 回　ジャンプや回転のコンビネーション②応用
第 13 回　ジャンプや回転のコンビネーション③発展
第 14 回　試験のアンシェヌマン①
第 15 回　試験のアンシェヌマン②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。
女性は髪をまとめるように。
〔成績評価〕
授業への取り組み･授業の状況40％、課題に対する成果30％、期末試験30％を総合的に100点満点で評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者

B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC1300TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
※ただし、芸術科演劇専攻科目「クラシックバレエⅠ」「クラシックバレエⅡ」の単位を修得していること。
〔キャップ対象外〕
―

## 舞踊Ａ（クラシックバレエ）Ⅱ

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
木曜 3限
実務経験なし
実技

中農 美保

〔履修条件〕
「舞踊A（クラシックバレエ）Ⅰ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
クラシックバレエのアカデミックなレッスンを通して、下記の事項等を身につけられるように、基本的なレッスンを行う。
• 舞台人としての体づくり、姿勢、柔軟性、プレイスメント
• あらゆる踊りの基礎となるバレエの体の使い方
• 西洋の作法でもあるバレエの様式美、エレガンス
• 音楽性、リズム感、ピアノの伴奏により生の音楽を体に通す感覚
〔授業の到達目標〕
• それぞれが自分の体と向き合い、豊かな表現ができる体を作ることができる。
• バレエのアカデミックなムーヴメント、テクニックを学び、音楽的に踊れるように感性を磨くことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　「. 舞踊AⅠ」の復習
　　順序および内容は、履修者の能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　アレグロ・グランワルツ①基本
第 3 回　アレグロ・グランワルツ②体の使い方
第 4 回　アレグロ・グランワルツ③応用
第 5 回　アレグロ・グランワルツ④綺麗に魅せる
第 6 回　体の使い方①基本
　　６回以降は「フルレッスン」「バリエーション」
第 7 回　体の使い方②応用
第 8 回　体の使い方③発展
第 9 回　体の使い方④綺麗に魅せる
第 10 回　体の使い方⑤音楽に合わせて
第 11 回　体の使い方①基本
　　11回以降は「フルレッスン」「簡単なパ・ド・ドゥ」
第 12 回　体の使い方②相手への気遣い
第 13 回　体の使い方③応用
第 14 回　試験のアンシェヌマン①
第 15 回　試験のアンシェヌマン②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に、振り返りとして総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業の最後に、次の授業までに習得する課題を出すので、練習に努めること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必ず稽古着（レオタード・タイツ）を着用し、バレエシューズを使用。
女性は髪をまとめるように。
〔成績評価〕
授業への取り組み･授業の状況40％、課題に対する成果30％、期末試験30％を総合的に100点満点で評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
DNC2300TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
※ただし、芸術科演劇専攻科目「クラシックバレエⅠ」「クラシックバレエⅡ」専攻科演劇専攻科目「舞踊Ａ（クラシックバレエ）Ⅰ」の単位を修得していること。
〔キャップ対象外〕
―

## 舞踊Ｂ（コンテンポラリー）

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
水曜 2限
実務経験あり
実技

勝倉 寧子

〔履修条件〕
専攻科１・２年に置かれる選択科目。
経験の有無に関わらずコンテンポラリー・ダンスに興味があり、身体表現の習得に意欲的であること。

〔授業の概要〕
同時代のダンスという意味のコンテンポラリー・ダンスは、バレエにはない動きで表現の幅を大きく広げたモダンダンスよりもさらに新しい、最先端を行くダンスである。スキルフルで洗練され、アクロバティックで重力を利用した美しい脱力が特徴的。舞台芸術の中でも心とからだの密接な関係を深く実感できる、実に魅力的な身体表現である
コンテンポラリー・ダンスの中でも、バレエ・モダン・ジャズ・シアター・舞踏等あらゆるダンスを理解した上に成り立つ技法は、演劇においても質の高い身体表現を可能にするために大いに有効である。
この授業では、まずコンテンポラリー・ダンスのテクニカルトレーニングを積むことでからだを意志通りにコントロールできる能力を養う。応用ではテーマごとの実践を通して確かな技能、実践に役立つ表現力を身につけていく。
更に、昨年度同様音楽学部との共同制作を実施する予定である。
〔授業の到達目標〕
• コンテンポラリー・ダンスの理解を深め、その技術を習得できる。
• プロの俳優として通用するからだをつくることができる。
• 演じる上で、身体を使った感情表現をスムーズに行うことができる。
• プロの演出家、振付家、音楽家の要求に対応し得る基礎技術、応用力を身につけることができる。
• 自作自演を可能にする創作力・演出力を身につけることができる。
• 全プログラムを修了することで、協調性・距離感・空間認知能力・プランニング力を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ストレッチ＆リリース
・スウィング＆リリーステクニック
・呼吸法
・筋力強化(インナー、アウター、体幹)
※授業内容に関しては、その進行具合により、多少の前後があることを承知しておくこと。
第 2 回　アライメント、重力のコントロール
・姿勢の矯正、正確なポジショニング
・フォール&リバウンド、リカバリー、サスペンション
第 3 回　基礎テクニック1、2の理解度と動きのチェック、動きを伴う重心移動
・動きのリーダー
・フロアーワーク
第 4 回　テクニック応用... ダイナミックな3次元的空間使いの実践
・ステップバリエーション
・フロアー＋ジャンプ&ターン
第 5 回　音楽学部との共同制作①
・音楽学部生との顔合わせ
・前年度コラボ授業映像試写、実技試験作品発表
第 6 回　フレーズを踊る①
舞踊身体表現の実践...まとまった長さの振付を覚える
第 7 回　フレーズを踊る②
・感情を伴う表現...音楽、シチュエーション設定による実践
第 8 回　フレーズを踊る③
・距離感(音楽と感情、空間認知)
・協調性(他者との関わり)
第 9 回　小道具を使ったダンス...プロップダンスの実践
・プロの作品視聴
・踊りのパートナーとしての小道具活用法
第 10 回　プロップダンスによるパフォーマンスの実践
・グループごとに発表
第 11 回　インプロビゼーション①
・即興力...新しい動きの生み出し方、手掛かりとなる手法
第 12 回　インプロビゼーション②
・デットスペース...他者の作り出す空間を利用したインプロ
第 13 回　音楽学部との共同制作②(インプロビゼーション③)
・音楽学部生提供楽曲によるインプロビゼーションの実践
第 14 回　作品創作の手引き
・ダンス・スコアの役割
・演出、構成
・グループ単位での実践
第 15 回　授業の振り返り、実技試験当日の説明
・創作進捗状況
・提出用紙配布
・抽選による順番決め等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
作品発表の後に全員を集め個々の作品ごとに講評、最後に総評を行う。
〔授業時間外の学習〕
毎回授業で学んだテクニックは、次回の授業までに必ず復習しておくこと。
予習課題には積極的に取り組み、次の授業までに準備しておくこと。
日頃から創作（実技試験）の素材となり得る音楽やテーマの情報収集に努めること。
舞踊動画等を積極的に観ること。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古着はシンプルで動きやすいものが望ましい。
基本的にシューズを履かずに行う。素足をカバーするための布製の履物や靴下等は着用可。
〔成績評価〕
授業の取り組み50％、課題に対する評価50％とし、総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に理解し、それらを的確に用い優れた身体表現を実現することができる）
A　総合点が80点以上の者（基本的な諸事項を十分に理解

し、それらを明確に表現し応用できる身体能力を持っている）
B　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項をほぼ理解し、それらを表現し応用できる身体能力を持っている）
C　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項をある程度理解し、身体表現能力に向上が見られる）
D　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項の理解に欠け、身体表現能力に向上が見られない）
〔科目ナンバリング〕
DNC1340TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 舞踊Ｃ（日舞）

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　後期
火曜4限
実務経験なし
実技

藤間 希穂

〔履修条件〕
1.「日舞Ⅰ・Ⅱ」を履修済み、同等のスキルがある、授業進行を遂行できるのいずれかに該当する方。
2.稽古着は浴衣を含む和服・足袋着用、舞踊扇子持参の上、参加すること。
3.授業時間外も課題の稽古に取り組むこと。
4.授業時間内は必ず時計・アクセサリーを外し、髪の長さが肩まで届く場合は、必ず結うこと。
5.授業内に座学と実技があるが、必ず両方参加のこと。
6.遅刻・欠席の場合は理由書を作成し、必ず直接提出しにくること。
※他専攻学生が履修する場合は、芸術科演劇専攻科目「日本舞踊Ⅰ」「日本舞踊Ⅱ」の単位を修得していること。
〔授業の概要〕
古典芸能日本舞踊（藤間流）の実技・知識の習得および創作の作成・発表。
本科で学んだ古典舞踊の基本を元に、歌舞伎所作舞踊として広く知られている「汐汲」「越後獅子」全段を学習する。難解な歌詞とハイレベルな振りに加え、三段傘や手桶、一本歯の下駄、晒、竹等の多彩な小道具を使いこなし情景描写・心理描写を描く。
一方、創作舞踊はテーマを決定し構想、音源作成、振付等を学生自ら行い発表する専攻科オリジナルメニュー。本科で古典の基礎を学び古典の実力のある方対象のチャレンジメニューでもある。
座学はより現場に則した舞台行儀や日本舞踊をより深耕する知識を学ぶ。
【曲目】
立方（たちかた）　：長唄「越後獅子」または他の演目
女形（おんながた）：長唄「汐汲」または他の演目
創作：テーマを決定し構想、音源作成、振付等学生自ら行い発表する。
〔授業の到達目標〕
• 座学を元にした筆記試験にて、８割以上得点できる。
• 実技では、課題曲を舞台で発表できるスキルを身につけることを目標とする。
• 授業態度では「成果を生む」ことを前提とした行動ができる。
• コミュニケーションシートでは全体課題の抽出、課題解決提案を示すことができ、それを実行および言語表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマ設定
※ハイブリッド型授業の場合
座学：オンラインまたはオンデマンド授業
実技：教室の人数制限に合わせて人数を分割して進行
第 2 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成①
第 3 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成②
第 4 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作テーマに基づく構成③
第 5 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作音源選定
第 6 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作音源編集
第 7 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付①
第 8 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付②
第 9 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付③
第 10 回　座学/長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付④
第 11 回　長唄「汐汲」「越後獅子」振り写し/創作振付⑤
第 12 回　長唄「汐汲」「越後獅子」フォーメーション/創作フォーメーション①
第 13 回　長唄「汐汲」「越後獅子」フォーメーション/創作フォーメーション②
第 14 回　座学プレテスト/長唄「汐汲」「越後獅子」リハーサル/創作リハーサル
第 15 回　座学テスト/長唄「汐汲」「越後獅子」本番/創作本番
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
1.授業内の実技指導時の言葉（個・全体）
2.Classroomへコメント（グループ）
3.学習到達度の確認後全体への総評
〔授業時間外の学習〕
1.座学内容の理解を深める復習
2.実技課題曲歌詞の理解

３. 実技課題曲振りの確認
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
どちらも授業時間内に配布。
〔成績評価〕
実技の学習到達度の確認・授業態度（取り組み）を総合して100点満点にて評価する。（点数配分：実技試験50％、授業態度50％）
S　総合評価90点以上の者（学習到達度・授業への取り組みが秀でている者）
A　総合評価80点以上の者（学習到達度・授業への取り組みが的確な者）
B　総合評価60点以上の者（学習到達度・授業への取り組みが良好な者）
C　総合評価50点以上の者（学習到達度・授業への取り組みが不十分な者）
D　総合評価50点未満の者（学習到達度・授業への取り組みに問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
DNC2330TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
○
※ただし、芸術科演劇専攻科目「日本舞踊Ⅰ」「日本舞踊Ⅱ」の単位を修得していること。
〔キャップ対象外〕
―

## ミュージカル唱法(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
1単位　前期
金曜 3限
実務経験なし
実技

藍澤 幸頼

〔履修条件〕
暗譜して授業に出席する。
課題の練習に積極的に取り組む。
最終段階において、衣装髪型等も含め、工夫を厭わない。
遅刻厳禁（芝居の稽古同様）。
＊聴講生は、全出席できるものだけを受け入れる。
〔授業の概要〕
• オーディションや人々の前で歌を披露することを前提に、ミュージカルナンバーを学ぶ。
• 台詞から歌への変化を考察する。
• 多数のミュージカルナンバーを聞いて、役で歌うことを意識し、解釈まで掘り下げる。
• 自分自身のキャラクター・音域を意識し、役別オーディションにおいて適切な役を選定する知識を身につける。
• 唄う基礎的な力（体の使い方・呼吸法・発声）を確認する。
• 1980年以降にブロードウェイ・ウェストエンドで上演されたミュージカルの楽曲を学習する。
• 期末に発表会を実施し、実技試験とする。
〔授業の到達目標〕
自分に合ったミュージカルのスタンダードナンバーを創り、いつでもオーディション等に対応することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　自分で用意した、短い台詞／歌をひとりずつ披露する
※講義内容に関しては、学生個々に応じた教材を与えるため、必ずしも授業計画に沿った学習速度とは限らず、また内容を変更する可能性もある。
第 2 回　台詞を言うことと唄うことの違いについて考え、批評する①
第 3 回　台詞を言うことと唄うことの違いについて考え、批評する②
第 4 回　体の使い方・呼吸法・発声を確認する
第 5 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する①
第 6 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する②
第 7 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する③
第 8 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する④
第 9 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する①
第 10 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する②
第 11 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する③
第 12 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する④
第 13 回　公開試験 G.P.
第 14 回　公開試験
ホール使用許可が降りた場合、場所を移してホールにて、ピンマイクを使用して行う。
第 15 回　講評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 課題の暗譜、練習
• 映画・舞台・CD・DVD等できるだけ音楽に触れる。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
• 譜面は自分で用意（応相談）
• Richard Wal ters「THE SINGER'S MUSICAL THEATRE ANTHOLOGY」(HAL・LEONARD)
〔成績評価〕
授業への取り組み・態度（積極性、事前準備等）50％、実技試験50％を元に総合的に評価する。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
VOM1310TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## ミュージカル唱法(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
金曜 3限
実務経験なし
実技

藍澤 幸頼

〔履修条件〕
暗譜して授業に出席する。
課題の練習に積極的に取り組む。
最終段階において、衣装髪型等も含め、工夫を厭わない。
遅刻厳禁（芝居の稽古同様）。
• 聴講生は、全出席できるもだけを受け入れる。
〔授業の概要〕
• オーディションや人々の前で歌を披露することを前提に、ミュージカルナンバーを学ぶ。
• 台詞から歌唱への変化を考察する。
• 多数のミュージカルナンバーを聞いて、役で歌うことを意識し、解釈まで掘り下げる。
• 自分自身のキャラクター・音域を意識し、役別オーディションにおいて適切な役を選定する知識を身につける。
• 唄う基礎的な力（体の使い方・呼吸法・発声）を確認する。
• 舞台上演されたミュージカルの楽曲や映画上演されたミュージカルの楽曲を学習する。
• デュエット歌唱についても学習する。
• 期末に発表会を実施し、実技試験とする。
（使用許可が下りれば、ワヤレスマイクを使用する。）
〔授業の到達目標〕
自分に合ったミュージカルのスタンダードナンバーを創り、いつでもオーディション等に対応することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　自分で用意した、短い台詞／歌をひとりずつ披露する
※講義内容に関しては、学生個々に応じた教材を与えるため、必ずしも授業計画に沿った学習速度とは限らず、また内容を変更する可能性もある。
第 2 回　台詞を言うことと唄うことの違いについて考え、批評する①
第 3 回　台詞を言うことと唄うことの違いについて考え、批評する②
第 4 回　体の使い方・呼吸法・発声を確認する
第 5 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する①
第 6 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する②
第 7 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する③
第 8 回　各自が選んだ新曲を歌い、考え、批評する④
第 9 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する①
第 10 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する②
第 11 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する③
第 12 回　各自が選んだ新曲を演技しながら唄い、考え、批評する④
第 13 回　公開試験 G.P.
第 14 回　公開試験
ホール使用許可が降りた場合、場所を移してホールにて、ピンマイクを使用して行う。
第 15 回　講評
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 課題の暗譜、練習
• 映画・舞台・CD・DVD等できるだけ音楽に触れる。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
• 譜面は自分で用意（応相談）
• Richard Wal ters「THE SINGER'S MUSICAL THEATRE ANTHOLOGY」(HAL・LEONARD)
〔成績評価〕
授業への取り組み・態度（積極性、事前準備等）50％、実技試験50％を元に総合的に評価する。
S　90点以上の者
A　80点以上の者
B　60点以上の者
C　50点以上の者
D　50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM2310TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 英語劇(1)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
演習（理論）

James Sutherland

〔履修条件〕

Welcome to the English Theatre course. Here we look at techniques and approaches to stage and screen preparation and making in contemporary Europe and America while increasing our English language ability.

Punctuality is important, please arrive before class starts, black loose-fitting clothing is recommended, we will also be working with no shoes and socks.

〔授業の概要〕

This works proposes a journey through major styles of European and American theatre and film and the discovery of their dynamic and richness. At the heart of the process is the pleasure of play and the freedom of the actor to discover his or her own beauty.

【ギリシャ悲劇 シェイクスピア】

Students will work both individually and in groups to explore movement analysis, the language of movement and an improvisation through the work of the Neutral mask, a tool that helps to serve as a point of departure into any character and helps to make actors authors of space. Actors will also be working with Tragic texts exploring how to unpack the and understand them and performing them in solo. We will take a brief look at comedy, through clowning. Every session starts working with the physical training, before moving onto text. There will be a moment every session for the participants to work on their own and there will be a presentation of the result of their work in the classroom.

〔授業の到達目標〕

1. Learning theatre and film vocabulary in English

2. Learning how to use the voice and body to increase expressivity.

3. Learning more about history and context of actor training in in theatre and film in both America and Europe in English.

〔授業計画〕

第 1 回　Games Intro exercises. Introduction to the course.

第 2 回　Games Neutral Mask, movement qualities. Actor and Text 1.

第 3 回　Games Neutral Mask, movement qualities. Actor and Text 2/Punctuation.

第 4 回　Games Neutral Mask, movement qualities. Actor and Text 3/Syllables.

第 5 回　Games Scene work, movement qualities. Actor and Text 4/Antithesis, Consonants, Alliteration.

第 6 回　Games Neutral Mask, movement qualities, Actor and Text 5/ Beats/Memorization.

第 7 回　Games Neutral Mask, movement qualities, Actor and Text 6.

第 8 回　PRESENTATION 10 MOVEMENTS OF JACQUES LECOQ

第 9 回　Clown exercises intro

第 10 回　Clown
words, rhythm and architecture/ Actor and Text 7

第 11 回　Clown
Time: literal time and sensual time/ Actor and Text 8

第 12 回　Clown

第 13 回　Clown
Understanding characters PRESENTATION THE JOURNEY.

第 14 回　Clown work
Seeming and being/Tension

第 15 回　Clown work
Tension Performance/presentation MONLOGUE DUE

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

Method of feedback to students will be in regular class verbal feedback both individually and in groups.

〔授業時間外の学習〕

Students practice in groups outside of class and memorize own work individually.

これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

The teacher provides all the material.

〔成績評価〕

S +90 A+80 B+65 C+50 D below 49

Participation 20%

Journey Presentation 25%

10 Movements Presentation 25%

Monologue 30%

〔科目ナンバリング〕

FLS1100TA

〔学位授与方針との関係〕

①、③

〔他専攻〕

―

〔キャップ対象外〕

―

## 英語劇(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　後期
水曜 2限
実務経験なし
演習（理論）

James Sutherland

〔履修条件〕
Welcome to the English Theatre course. Here we look at techniques and approaches to stage and screen preparation and making in contemporary Europe and America while increasing our English language ability.
Punctuality is important, please arrive before class starts, black loose-fitting clothing is recommended, we will also be working with no shoes and socks.
〔授業の概要〕
This works proposes a journey through major styles of European and American theatre and film and the discovery of their dynamic and richness. At the heart of the process is the pleasure of play and the freedom of the actor to discover his or her own beauty.
【戦闘シーンの撮影】
We will explore the Biomechanical work of Russian Theatre director Vsevolod Meyerhold alongside stage combat and fight scenes. We will look at modern film and theatre scenes studies and examples of various kinds of combat on the silver screen. We will also write and build a fight sequence in industry standard Hollywood script format and create a small film, learning about the elements involved in modern film making.
The course is designed to stimulate curiosity and pose questions. It aims to show how to achieve the progression from small improvisations, games, and exercises to tackling larger topics, and themes.
〔授業の到達目標〕
1. Learning theatre and film vocabulary in English
2. Learning how to use the voice and body to increase expressivity.
3. Learning more about history and context of actor training in in theatre and film in both America and Europe in English.
〔授業計画〕
第 1 回　Intro exercises
Introduction to the course.
第 2 回　SCENE WORK/ STAGE COMBAT BASICS. BIOMECHANICS.
第 3 回　SCENE WORK/ STAGE COMBAT BASICS. BIOMECHANICS.
第 4 回　Building a fight sequence. SCENE WORK/ STAGE COMBAT.BIOMECHANICS.
第 5 回　Choreographing a fight sequence. SCENE WORK/ STAGE COMBAT. BIOMECHANICS.
第 6 回　SCENE WORK Writing the fight scene. STAGE COMBAT. BIOMECHANICS.
第 7 回　SCENE WORK/ STAGE COMBAT. BIOMECHANICS.
第 8 回　Filming/Bomechanics
第 9 回　Filming/Biomechanics
第 10 回　Filming/Biomechanics
第 11 回　Filming/Biomechanics
第 12 回　Editing, first assembly. BIOMECHANICS PRESENTATION
第 13 回　Editing/Rough cut. Pick up shots
第 14 回　Editing/Final cut
第 15 回　Performance/Presentation.
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
Method of feedback to students will be in regular class verbal feedback both individually and in groups.
〔授業時間外の学習〕
Students practice in groups outside of class and memorize own work individually.
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
The teacher provides all the material.
〔成績評価〕
S +90 A+80 B+65 C+50 D below 49
Participation 10%
Stage Combat Writing and Choreography 25%
Stage Combat Filming and Editing 20%
Biomechanics Practice 25%
Biomechanics Presentation 20%
〔科目ナンバリング〕
FLS2100TA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 歌唱（個人レッスン）Ｉ～Ｌ

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期・後期
実技

〔履修条件〕
講師と 1 対 1 の個人レッスン。声や歌に対して興味のある者、成長したいという意欲のある者。
〔授業の概要〕
個人レッスンのためその担当の講師により細かい内容は異なるが、声や歌の向上に繋がるレッスンを重ねる。

〔授業の到達目標〕
• 音程や発音を正しく、身体を使って発声できる。
• 表現者として感動を与える表現を伴った歌を歌うことができる。
〔授業計画〕
各講師に委ねられるが、声や歌に関することを学ぶ。
身体の使い方から声の出し方、声のケアの仕方、歌の表現法等を学びながら最後の個人歌唱の試験を迎える。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 課題になっている曲への総評をする。
• 発声についてもアドバイスをする。
• 全体的な表現への総評。
〔授業時間外の学習〕
毎日の練習。曲への理解。他の音源を聴いて学ぶ。沢山の情報を得てその曲を深めていく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
担当学生に合うと思われる各講師の用意した曲、あるいは学生が用意した曲を講師と相談して使用。
〔成績評価〕
学期末に個人レッスン担当の講師が揃った中、一人で披露し、講師全員で得点をつけた後、その平均で評価する。
S　講師の平均が90点以上の者
A　講師の平均が80点以上の者
B　講師の平均が60点以上の者
C　講師の平均が50点以上の者
D　講師の平均が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM1410TA/VOM2410TA/VOM3410TA/VOM4410TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 歌唱（個人レッスン）Ｍ～Ｐ

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
1単位　前期・後期
実技

〔履修条件〕
講師と１対１の個人レッスン。声や歌に対して興味のある者、成長したいという意欲のある者。
〔授業の概要〕
個人レッスンのためその担当の講師により細かい内容は異なるが、声や歌の向上に繋がるレッスンを重ねる。
〔授業の到達目標〕
• 音程や発音を正しく、身体を使って発声できる。
• 表現者として感動を与える表現を伴った歌を歌うことができる。
〔授業計画〕
各講師に委ねられるが、声や歌に関することを学ぶ。
身体の使い方から声の出し方、声のケアの仕方、歌の表現法等を学びながら最後の個人歌唱の試験を迎える。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 課題になっている曲への総評をする。
• 発声についてもアドバイスをする。
• 全体的な表現への総評。
〔授業時間外の学習〕
毎日の練習。曲への理解。他の音源を聴いて学ぶ。沢山の情報を得てその曲を深めていく。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
担当学生に合うと思われる各講師の用意した曲、あるいは学生が用意した曲を講師と相談して使用。
〔成績評価〕
学期末に個人レッスン担当の講師が揃った中、一人で披露し、講師全員で得点をつけた後、その平均で評価する。
S　講師の平均が90点以上の者
A　講師の平均が80点以上の者
B　講師の平均が60点以上の者
C　講師の平均が50点以上の者
D　講師の平均が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
VOM1411TA/VOM2411TA/VOM3411TA/VOM4411TA
〔学位授与方針との関係〕
②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 劇上演実習Ａ①

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
4単位　前期集中
実務経験あり
実習（上演）
ただし、自主上演実習は２年生のみ履修可。

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。
欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
自主上演の場合、劇作・演出・キャスト・スタッフとして、１本の作品を完全上演し、演劇制作の能力を向上させてく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるの

で、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。
また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。
毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。
実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。
稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学習に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE1700TA/THE3700TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ａ②

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
4単位　前期集中
実務経験なし
実習（上演）
ただし、自主上演実習は２年生のみ履修可。

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。自主上演の場合、劇作・演出・キャスト・スタッフとして、１本の作品を完全上演し、演劇制作の能力を向上させてく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①

実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共 有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共 有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　舞台稽古④
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。

〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学習に120時間程度を要する。

〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
THE1700TA/THE3700TA

〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｂ①

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。

〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。

〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。

〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉。
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2700TA/THE4700TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｂ②

専攻科 ＞ 演劇専攻
1年生　2年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共 有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共 有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　舞台稽古④
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。

〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2700TA/THE4700TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｃ（専１最終公演）

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。また、この実習では、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
公開にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行する。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉。
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉。
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2701TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｄ（専２修了公演）

専攻科 ＞ 演劇専攻
２年生
4単位　後期集中
実務経験なし
実習（上演）

〔履修条件〕
40日間にわたる稽古･本番の全日程に参加すること。欠席･遅刻･早退は一切認めない。
スタッフワークを含め、集団のチームワークを重んじること。
専攻科修了に必要な単位数を確保した学生のみ受講することができる。
〔授業の概要〕
プロの演出家の指導のもと、１本の作品を完全上演し、演技者としての能力を向上させていく。
授業計画の準備上、履修登録の時期以前に出演するかどうか、学生の意思を確認することがある。学生・スタッフ・演出家を含む座組全体に重大な迷惑をかけることになるので、意思が確認された後で出演を取り下げることはできない。さらに、履修登録後の登録や取り消しは認められないので注意すること。また、この実習では、チケット販売等を通じて、観客を集めることの大切さも学んでいく。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
修了公演にふさわしい完成度の高い上演作品を上演することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
　　実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流
　　れに沿って進行する
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する
　　作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に望むことが求められる。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
稽古開始までに台本配布。必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE4701TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｅ/Ｆ（学外出演）

専攻科 ＞ 演劇専攻
１年生　２年生
4単位　集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕
履修登録時に企画書・印刷物（チラシ等）等、企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

〔授業の概要〕
プロの公演、映画等への主役・準主役での出演。ただし、学内の劇上演実習での40日間の稽古時間と同等の学習の意義の認められる上演内容であり、同等の稽古環境であり、同等の学習成果が認められる場合にのみ単位認定は可能。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組にも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任を持って管理すること。むしろ安易な参加は控えること。
学業を進めることが損なわれるような現場の日程、要求がされることがないか、事前に十分確認すること。学外出演する学生の単位認定や扱いを、他の学生と例外扱いしたり、特別優遇するようなことはないので、重々どのような条件の参加になるのか事前に確認して臨むこと。
〔授業の到達目標〕
プロの公演、映画等に通用する実践力を養う。様々な現場のスタッフ、共演者、関係者との共同作業を通して、協調し、協力する態度を可能にする表現力や日常的な心構え、表現者としての高い意識を獲得する。
座組の一員としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能、心構え、現場での対応力を獲得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
一流の演出家・俳優等との仕事を通じ、プロとしての意識を養い、現場に通用する演技力を身につける。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演・撮影のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み　あるいは撮影セット内でのリハーサル
第 11 回　舞台稽古①　あるいはリハーサル①
第 12 回　舞台稽古②　あるいはリハーサル②
第 13 回　舞台稽古③　あるいはリハーサル③
第 14 回　本番　あるいは撮影
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉。
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉。
※演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2702TA/THE2703TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 劇上演実習Ｇ/Ｈ（学内出演）

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
1単位　集中
実務経験なし
実習（上演）

三浦 剛

〔履修条件〕
履修登録時に企画書・印刷物（チラシ等）等、企画の内容が十分伝わる資料を提示すること。専攻会議の審議を経て履修を認める。

〔授業の概要〕
学内の実習（他専攻の実習・演習を含む）への出演者としての参加。ただし、出演依頼を授業担当教員から受けた場合に限る。
稽古日程が他の学校行事、授業や試験の準備と重なると負担が重くなる。要求にこたえることができなくなる場合は、どちらの集団、座組にも迷惑をかけてしまうことになるので、自己のスケジュールは責任を持って管理すること。むしろ安易な参加は控えること。
スタッフのみの参加でも例外的に単位を認定することがあるので、事前に専攻主任に確認すること。スタッフとして単位認定するにふさわしい時間と質を負担し、パフォーマンスの完成度を上げることに貢献した場合のみ、単位が認められる。
〔授業の到達目標〕
様々な実習・演習に出演者として参加し、様々な関係者・出演者・スタッフと協調し、協力する態度を可能にする表現力を養う。
本番の出演者としての強いプレッシャーに耐える中で、必要な技能・心構え・現場での対応力を獲得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　本読み①
学内の実習（他専攻の実習・演習を含む）に出演者として参加し、協調し、協力するプロセスを通じて表現力を養う。担当教員に研修状況を定期的に報告し、最終的な研修成果を提示する。
実習のプロセスは作品および演出家の方針によるが、おおむね以下の流れに沿って進行するであろう。
第 2 回　本読み②
第 3 回　本読み③
第 4 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有①
第 5 回　上演のために必要なスタッフワークの役割分担、芸術的方針の共有②
第 6 回　立ち稽古①
第 7 回　立ち稽古②
第 8 回　立ち稽古③
第 9 回　立ち稽古④
第 10 回　舞台の仮組み
第 11 回　舞台稽古①
第 12 回　舞台稽古②
第 13 回　舞台稽古③
第 14 回　本番
第 15 回　創作プロセスを振り返って、次の目標を獲得する作品の理解、演出意図の把握に努め、主体的な姿勢で稽古に臨むことが求められる。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 担当演出から個々への演技指導時の言葉
• 担当演出からグループへの演出指導の言葉
※ 演技指導・演出指導に関しては、各自で台本にメモすることが望ましい。
〔授業時間外の学習〕
様々なミーティングを行うたびに、次の準備の動きを指示し、あるいは話し合うので、毎回ミーティングで何が合意されたか記録を書き、内容を復習すること。また、ミーティングでは合意に達せず話し合いが継続される項目もあるので、その内容について自ら案を次回のミーティングで発表できるように事前準備をすること。毎回指示された内容について稽古や作業を行い、指導者にその成果を提示すること。実習中に出された批評、指導された具体的なダメ出しを毎回事後に検討し、意味を理解し、改善すること。稽古や準備の段階が進むにつれ着実に完成度を高めるように自覚的に臨むこと。
これらの学修に120時間程度を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
以下の項目につき1項目20点満点とし、総合的に評価する。
①授業の取組み②課題の成果③表現者としての真摯な姿勢④自らを研鑽する意欲⑤心身の健康管理
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
THE2704TA/THE2705TA
〔学位授与方針との関係〕
②、④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 修了論文(1)/(2)

専攻科 ＞ 演劇専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期・後期
実務経験なし
講義

高橋 宏幸

〔履修条件〕
修了論文を書く、もしくは書きたいと考えている者は、専攻科 1 年生の前期のうちに相談すること。
〔授業の概要〕
修了論文を提出するための授業となるので、毎週 1 度、話し合って自分の書きたいテーマを決めて、2 年間の指導を受けながら論文を書き、提出する。週に 1 度都合の良い時間を決めて、個別に相談をする。修了論文をもってして、学位申請を考えている学生は、提出締切・口頭試問の日程を確認すること。

〔授業の到達目標〕
• 4年間の成果として、1つの論文によって深く洞察された研究テーマを基とした論文を書くことができる。
• 今後の社会生活における内省や活動をする際の礎となるものとして、または演劇活動をするための試金石となるものを書くことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　テーマについて
第 2 回　テーマとは何か
第 3 回　批評的視点としてのテーマ
第 4 回　書き出してみる
第 5 回　第1章①
第 6 回　第1章②
第 7 回　第1章③
第 8 回　第2章①
第 9 回　第2章②
第 10 回　第2章③
第 11 回　第3章～
第 12 回　参考文献
第 13 回　注の付け方
第 14 回　まとめ①
第 15 回　まとめ②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
口頭試問がフィードバックとなる。
〔授業時間外の学習〕
毎週、必ず少しずつ書いてくることが求められる。前提としては、半年間で60時間以上の時間外学習は必要とされるが、むしろ、自身で書いていく中で、週に1度進捗状況を確認するので、時間外学習の比重は大きい。
〔教科書・参考書等〕
それぞれのテーマに合わせて、適時推薦する文献を読む。
〔成績評価〕
卒業論文の評価100％で100点に換算する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（基本的な諸事項を十分に把握し、明瞭に説明ができる）
Ａ　総合点が80点以上の者 （基本的な諸事項をほぼ把握し、説明ができる）
Ｂ　総合点が60点以上の者（基本的な諸事項の理解に欠け、説明が曖昧になる）
Ｃ　総合点が50点以上の者（基本的な諸事項を理解せず、説明をあまりしていない）
Ｄ　総合点が50点未満の者（基本的な諸事項を理解せず、説明ができない）
〔科目ナンバリング〕
THE1004TA/THE2003TA
〔学位授与方針との関係〕
①、②、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽理論［和声］Ⅴ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
水曜 3限
実務経験なし
講義

平井 正志

〔履修条件〕
「和声Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ･Ⅳ」の単位を修得し、教程内容に習熟した上で、さらに高度な内容を求めていること。

〔授業の概要〕
音楽における旋律的要素ー拍節、律動、非和声音とそれに伴う不協和音程が和声法にあって、どのように考慮されるべきかを詳察する。その上で、半音階的転調を伴う歌謡形式のソプラノ課題を実施し、実践的な和声法の能力を培う。また、上記の内容がロマン派の小品にあってどのように現れているかを観察・分析し、さらに以上の教程を通じて修得された素養をもとに、最後に自作の旋律による簡単な歌謡形式の和声的小品を試作する。

〔授業の到達目標〕
非和声音を含むソプラノ和声課題の実施を通して、和声法を実践する技術の習熟を図ることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　内部変換
ソプラノ課題についての概論と実習。
非和声音とリズム的変化を伴う和声課題の実施に先立ち、同一和音内での配置の変更の際の諸作法に通暁する。
・ソプラノ課題の概論と出題
・同一和音で配置を変換する際の各種形態
・和音交替と内部変換
・間接連続進行
※受講者の必要に応じ、初歩ソプラノ課題の補充課題を同時に実施する。

第 2 回　内部変換
限定進行音の置換
許容される連続進行
出題第1回

第 3 回　内部変換
実施課題確認第 1 回
拍点と拍点外
出題第 2 回

第 4 回　内部変換
実施課題確認第 2 回

第 5 回　構成音の転位
非和声音とその解決進行と、それを踏まえた和音設定法
• 非和声音を含む旋律の和声的状態を把握する際の音響的条件とその変化の可能性（和音進行、終止形の形成）を解析するための素地を養う。
• 非和声音を含むソプラノ課題を実施し、旋律が規定する状件下で同時に旋律自体が内在的に含有する和声感を直覚的に把握する能力を開発する。

第 6 回　構成音の転位
リズム相補の配慮
非和声音に対する他声部の和音配置法
出題第 1 回

第 7 回　構成音の転位
実施課題確認第 1 回と出題第 2 回

第 8 回　構成音の転位
実施課題確認第 2 回
反復進行について
出題第 3 回

第 9 回　構成音の転位
実施課題確認第 3 回
偶成和音について
出題第 4 回

第 10 回　構成音の転位
実施課題確認第 4 回

第 11 回　遠隔転調を含むソプラノ課題の実施
調関係について概説
準関係調と副次関係調
転調前後における和音機能の転換
出題第1回と和音設定の演習

第 12 回　遠隔転調を含むソプラノ課題の実施
実施課題確認第 1 回
出題第 2 回出題と解説

第 13 回　遠隔転調を含むソプラノ課題の実施
実施課題確認第 1 回
出題第 2 回出題と解説

第 14 回　遠隔転調を含むソプラノ課題の実施
実施課題確認第 3 回

第 15 回　遠隔転調を含むソプラノ課題の実施
最終課題の内容検討

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の添削指導に加え、必要に応じてメール送付かClassroomへの再提出によって、実施課題を添削指導する。

〔授業時間外の学習〕
後期の授業内容に備えて、ロマン派の和声様式によって作曲された小品に親しんでおくこと。

〔教科書・参考書等〕
教科書：資料と課題および参考曲のプリントを配布。
参考書： 執筆責任者・島岡　譲「和声『理論と実習』第三巻」（音楽之友社）

〔成績評価〕
前期末、最終実施課題をレポートとして提出。
単位認定の可否については、提出課題内容の優劣のみならず、課題実施を通じて総合音楽力を伸長できた度合いを重視して勘案しつつ、合否を決定する。
成績の評価基準はレポートの内容40%、課題の実施状況40%、授業への取り組み姿勢20%とする。
S　90点以上の者（前期の和声課題実施において独自の審美眼を反映でき、書法面の習熟度が高い）
A　80点以上の者（前期の和声課題において、原則に対する

理解、和声法に対する洞察が確かである）
B　60点以上の者（上記の条件において、まだ追求の余地が残されていた）
C　50点以上の者（和声法に対する習熟度が足りず、自作品の内容に関する追求が十分でない）
D　50点未満の者（和声法への理解が到らず、自作品を満足な状態で完成できない）
〔科目ナンバリング〕
MUS1010MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽理論［和声］VI

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
水曜 3限
実務経験なし
講義

平井 正志

〔履修条件〕
「和声Ⅰ·Ⅱ·Ⅲ·Ⅳ·Ⅴ」の単位を修得し、教程内容に習熟した上で、さらに高度な内容を求めていること。
〔授業の概要〕
音楽における旋律的要素ー拍節、律動、非和声音とそれに伴う不協和音程が和声法にあって、どのように考慮されるべきかを詳察する。
その上で、半音階的転調を伴う歌謡形式のソプラノ課題を実施し、実践的な和声法の能力を培う。 また、上記の内容がロマン派の小品にあってどのように現れているかを観察·分析し、さらに以上の教程を通じて修得された素養をもとに、最後に自作の旋律による簡単な歌謡形式の和声的小品を試作する。
〔授業の到達目標〕
実際の音楽作品総体における和声的側面を音楽的発想の一部として感得するための力を養うことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ロマン派作品の和声様式研究
ロマン派のピアノ小品において、前期に習得した和声様式の要件がいかに実践されているかを詳密に分析する。
第1回：楽式の概説
第 2 回　ロマン派作品の和声様式研究
ロマン派のピアノ小品において、前期に習得した和声様式の要件がいかに実践されているかを詳密に分析する。
第２回：和声分析と転調の考察
第 3 回　テーマ創作法実践
旋律構成法、和声法、伴奏法の相互関連に鑑みたテーマを発想する。
第 4 回　自作テーマの内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 5 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 6 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 7 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 8 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 9 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 10 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 11 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 12 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 13 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 14 回　自作曲の内容検討
作曲の進捗に合わせ、楽曲構成法、和声法、声部進行法、伴奏法、転調法の指導を順次構築。
第 15 回　完成曲の最終内容確認
演奏表現内容の記載等、記譜法上の問題を検討し、改良する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の添削指導に加え、必要に応じてメール送付かClassroomへの再提出によって、実施課題を添削指導する。
〔授業時間外の学習〕
後期の授業内容に備えて、ロマン派の和声様式によって作曲された小品に親しんでおくこと。
〔教科書・参考書等〕
教科書：資料と課題および参考曲のプリントを配布。
参考書： 執筆責任者・島岡　譲「和声『理論と実習』第三巻」（音楽之友社）
〔成績評価〕
後期末、自作の小品を完成し、譜面を提出する。
単位認定の可否については、提出課題内容の優劣のみならず、課題実施を通じて総合音楽力を伸長できた度合いを重視して勘案しつつ、合否を決定する。
成績の評価基準はレポートの内容40%、課題の実施状況40%、

授業への取り組み姿勢20%とする。
S　90点以上の者（後期の自作曲において美的感覚と発想に優れ、独創性の認められるレベルに到達している）
A　80点以上の者（後期の自作曲において、前期を通して身につけた和声的感覚を十分に発揮できている）
B　60点以上の者（上記の条件において、まだ追求の余地が残されていた）
C　50点以上の者（和声法に対する習熟度が足りず、自作品の内容に関する追求が十分でない）
D　50点未満の者（和声法への理解が到らず、自作品を満足な状態で完成できない）
〔科目ナンバリング〕
MUS2010MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 楽曲分析(古典派)

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
火曜 3限
実務経験なし
講義

池田 哲美

〔履修条件〕
基礎的な和声および楽式に関する知識を有する者。
後期を含めて通年履修が望ましい。
〔授業の概要〕
和声の歴史的変遷および楽式の変化・発展を考究する。
古典派の音楽を中心に楽曲分析を行う。和声の発展、ソナタ形式の拡大・複雑化とその完成の過程を、ハイドンからベートーヴェンの楽曲分析を通して学習する。そしてベートーヴェン後期の作品にも触れて、その独自性を検討する。
〔授業の到達目標〕
古典派のそれぞれの楽曲の和声・楽曲形式を、音楽史の歴史的観点に鑑みつつ、その特徴と位置を観取できるようにする。
〔授業計画〕
第 1 回　ソナタ形式の原型と発生史を検討。および古典派初期の形態を知る。
第 2 回　ソナタ形式
名称
第 3 回　ソナタ形式
構造
第 4 回　ソナタ形式
簡単な楽曲①
第 5 回　ソナタ形式
簡単な楽曲②
第 6 回　古典派中期のモーツァルトおよびベートーヴェン初期の作品を検討①
第 7 回　古典派中期のモーツァルトおよびベートーヴェン初期の作品を検討②
第 8 回　ベートーヴェン中期の作品①
第 9 回　ベートーヴェン中期の作品②
第 10 回　ベートーヴェンと初期ロマン派①
第 11 回　ベートーヴェンと初期ロマン派②
第 12 回　ベートーヴェン後期①
第 13 回　ベートーヴェン後期②
第 14 回　学生による作品分析の発表①
第 15 回　学生による作品分析の発表②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
特にベートーヴェンの作品において、自分の楽器専攻以外の楽曲に親しむことが望まれる。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
毎回の授業開始時等に、プリント類の配布を行う。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、学期末試験（発表）60％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験（発表）を行わなかった者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1011MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 楽曲分析(ロマン派以降)

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
火曜 3限
実務経験なし
講義

池田 哲美

〔履修条件〕
古典派までの楽式および和声の知識を有すること。また、後半では印象派の作品を取り扱うため、教会旋法の知識も必要となってくるので、あらかじめ学習しておくことが望まれる。
〔授業の概要〕
ロマン派初期の作品から、中期～後期に至る変遷を具体的な楽曲を分析しながら学習し、さらにドビュッシー・ラヴェルといった印象派の作品、そして近・現代に至る移り変わりを楽曲分析を通じて検討する。調性の複雑化と崩壊、楽曲創作における各作曲家の時代性を伴う意識の変化を追う、といった広い観点を含め考究したい。
〔授業の到達目標〕
特に、印象派以後の作品に親しみ、古典派・ロマン派の作品との関連性と差異性を具体的に知ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　初期ロマン派のソナタ形式①
　　形態
第 2 回　初期ロマン派のソナタ形式②
　　構造
第 3 回　初期ロマン派のソナタ形式③
　　楽曲分析①
第 4 回　初期ロマン派のソナタ形式④
　　楽曲分析②
第 5 回　中期ロマン派のソナタ形式①
　　形態
第 6 回　中期ロマン派のソナタ形式②
　　構造
第 7 回　中期ロマン派のソナタ形式③
　　楽曲分析①
第 8 回　中期ロマン派のソナタ形式④
　　楽曲分析②
第 9 回　中期ロマン派①
　　歌曲
第 10 回　中期ロマン派②
　　歌曲
第 11 回　近代の作品①
　　ドビュッシー　器楽
第 12 回　近代の作品②
　　ドビュッシー　歌曲
第 13 回　近代の作品③
　　ラヴェル
第 14 回　学生による作品分析の発表①
第 15 回　学生による作品分析の発表②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる小テストの添削を行い、今後の学習の目安とする。
〔授業時間外の学習〕
自分の専攻楽器以外の作品、特にオーケストラ作品等に日頃から親しんでおくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
毎回の授業開始時等に、プリント類の配布を行う。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、学期末試験（発表）60％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末試験（発表）を行わなかった者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2011MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## コード論 II

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　前期
木曜 3限
実務経験あり
講義

小林 真人

〔履修条件〕
「コード論 I 」の単位を修得していること。
コードの仕組みや活用に関心のある学生。

〔授業の概要〕
より多くのコードを覚え、ハーモニーについて考え、理解を深めることで、各々が演奏や作編曲をする際のアイデアを増やし、音楽表現を豊かにするための一助にする。
譜面通りに演奏することだけでなく、コードを元にその場に応じて、どのように演奏（作編曲も含め）したらよいか、自分自身で柔軟に創出できるようにする。

コードの説明、実践はピアノを使用して進め、読み方はドイツ音名ではなく英語読みとする。
〔授業の到達目標〕
• コードを覚え、その構成音を把握し、自由に転回できる。
• メロディに対してコード付けできる。
• コードの機能と連結を理解して、それを元にコードの発展、応用をできるようにする。
• それらをピアノ等で演奏、表現できる。
〔授業計画〕
第 1 回　コード論　基礎編①
　　コードの仕組み／３和音と４和音
第 2 回　コード論　基礎編②
　　ダイアトニックコード／TSDの機能
第 3 回　コード論　基礎編③
　　ドミナントモーション／Ⅱm7-Ⅴ7
第 4 回　コード論　基礎編④
　　セカンダリードミナントセブン
第 5 回　コード論　基礎編⑤
　　同じ機能内の代理／Ⅴ7とⅡb7
第 6 回　コード論　基礎編⑥
　　トニックとサブドミナントマイナーの代理コード
第 7 回　コードパターンとコード付け①
　　様々なコード進行（クリシェ等）
第 8 回　コードパターンとコード付け②
　　様々なコード進行（カノン進行等）
第 9 回　コード論　応用編①
　　代理コードの活用とリハモナイズ
第 10 回　コード論　応用編②
　　テンション
第 11 回　コード論　応用編③
　　コードとリズムの関係
第 12 回　コード論　応用編④
　　コードと旋律（旋法）の関係
第 13 回　コードパターンとコード付け③
　　ブルース
第 14 回　コードパターンとコード付け④
　　作編曲への活用
第 15 回　学習到達度の確認と総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート、課題発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
復習・予習をして授業に臨むこと。
ピアノ等の和音が出せる楽器を使い、コードのサウンド感を「感覚的」に捉えられるようにする。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時に、その都度プリントを渡す。
〔成績評価〕
授業態度（出席含む）50％、課題発表への取り組む姿勢・レポート等での総合評価50％。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS1012MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## Ｓ．Ｈ．Ｍ．Ⅴ・Ⅵ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　前期・後期
木曜 2限
演習（理論）
塩﨑 美幸、三瀬 俊吾、大家 百子、加藤 千春

〔履修条件〕
「S. H. M. Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の単位を修得し、更なる音楽能力の向上を望む者。
〔授業の概要〕
授業内容は「S.H.M.Ⅰ・Ⅱ･Ⅲ･Ⅳ」の延長上にある。
能力に応じて、基礎力の充実からより音楽的な応用まで、各自力をつけていく。
レベル別４クラスに分けて授業を行う。
〔授業の到達目標〕
より高度で実践的な音楽能力を習得することができる。
総合的な力を具体的な題材を用い、訓練する。
〔授業計画〕
初回授業にてクラス分け試験を行う。
通年の授業計画については、漠然とした内容を記すが、各クラスで異なる。
• 多様なリズムの習得
• 多様な拍子の理解
• ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号の理解
• 正しい読譜による初見視唱の練習
• 正確な音程を身につける
• より高度なメロディーの書き取り
• ２声、３声等同時に鳴る音への理解
• 種類の違う和音がもたらす響きの色彩を感じ取る
• 和音の機能の理解と聴き分け
• 四声体の書き取り、その重唱
• 多様な調への挑戦
• 転調を伴う課題における調の判定
• 移調奏
• 多様な音階による課題
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で行われる課題の添削を行い、今後の学習の目安とする。

〔授業時間外の学習〕
常に読譜力の向上を目指し、日頃から楽譜を読むことを習慣付ける。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
クラスの担当教員から指示される場合もある。
〔成績評価〕
授業への取り組み40％、学期末課題60％の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取組が的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取組が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取組が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業態度や課題への取組に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1130MA/MUS2130MA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽史研究

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
4単位　通年
月曜 2限
実務経験なし
講義

たかの 舞俐

〔履修条件〕
条件は特にないが、授業内容への関心は必須である。また、これまで学んできた音楽史の知識を総括しつつ、広く音楽文化や音楽史の諸問題について考察する受講姿勢を期待する。
〔授業の概要〕
西洋音楽において、代表的なジャンルであるオペラ(前期)と室内楽（後期）をテーマに選び、ゼミ形式で授業を行う予定である。1回の授業につき、各国、各時代から代表的な作品を1つ取り上げ、各受講者に作品について発表を担当してもらう。
授業イメージを知ってもらうため、各回で取り上げる予定の作曲者名と作品名を付したが、進捗状況、また受講生の人数に応じて変更される場合もある。
発表者にはそれぞれ準備の際に参考文献や着眼点についてアドバイスする。また、発表後は受講生同士の自由なディスカッションも取り入れていきたい。
具体的な進め方を事前に説明するので、受講予定者は初回のガイダンスに必ず出席すること。
〔授業の到達目標〕
以下３点を到達目標として掲げる。
• 個々の作品の音楽史上の意味を説明することができる。
• 音楽史の基礎概念と作品内容との関連について、説明することができる。
• 音楽史について自分なりの考えを語れるようになる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
授業の着目点と進め方についての説明、担当回についての話し合い、オペラ史、オペラの鑑賞
第 2 回　オペラ・ブッファ
モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》
第 3 回　ジングシュピール
モーツァルト《魔笛》
第 4 回　ドイツオペラの幕開け
ベートーヴェン《フィデリオ》
第 5 回　オペラ・ヒロインの代表
ヴェルディ《ラ・トラヴィアータ》
第 6 回　ヴェルディ晩年の集大成
ヴェルディ《オテロ》
第 7 回　ワーグナー唯一の喜劇
ワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》
第 8 回　オペラ・コミック？ グランド・オペラ？
ビゼー《カルメン》
第 9 回　ヴェリズモ・オペラ
ピエトロ・マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》
第 10 回　日本音楽の旋律
プッチーニ《マダム・バタフライ》
第 11 回　20世紀のオペラの金字塔
アルバン・ベルク《ヴォツェック》
第 12 回　ベルクの未完のオペラ
アルバン・ベルク《ルル》
第 13 回　現代のオペラ１
ジェルジ・リゲティ《ル・グラン・マカーブル》(講師による講義）
第 14 回　現代のオペラ２
オペラ制作　あらすじからリブレット、作曲まで
たかの舞俐《ゲルダ》(講師による講義）
第 15 回　前期の総括
前期の授業の振り返り　討論
第 16 回　ガイダンス
後期授業の着目点と進め方についての説明　バロックにおける室内楽
第 17 回　自由な創作としての室内楽１
ハイドンの弦楽四重奏曲、モーツアルトのクラリネット五重奏曲
第 18 回　自由な創作としての室内楽２
ベートーヴェンの弦楽四重奏曲　中期＆後期

第 19 回　ロマン派の室内楽 1
　　シューベルト《 弦楽五重奏曲ハ長調》
第 20 回　ロマン派の室内楽 2
　　ブラームス《クラリネット五重奏曲》
第 21 回　フランス近代の室内楽 1
　　フォーレ《ヴァイオリン・ソナタ第 1 番》
第 22 回　フランス近代の室内楽 2
　　ドビュッシー《フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ》
第 23 回　フランス近代の室内楽 3
　　ラベル《ピアノ三重奏曲》
第 24 回　チェコ国民楽派の室内楽 1
　　スメタナ《弦楽四重奏曲第 1 番》
第 25 回　チェコ国民楽派の室内楽 2
　　ドヴォルザーク《ピアノ三重奏曲第 4 番》
第 26 回　ロシア国民楽派の室内楽
　　チャイコフスキー《弦楽四重奏曲第 1 番》
第 27 回　北欧国民楽派の室内楽
　　グリーグ《ヴァイオリン・ソナタ第 3 番》
第 28 回　新ヴィーン楽派の室内楽
　　シェーンベルク　弦楽六重奏曲《浄められた夜》
第 29 回　民族主義的音楽
　　バルトーク《弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽》
第 30 回　邦楽器と西洋楽器のアンサンブル
　　たかの舞俐《無限の月、夢幻の星》(講師による講義）

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表のための指導は随時行う。各発表については、授業内で総評を行う 。
〔授業時間外の学習〕
授業時間内に鑑賞できるのは、音楽作品の一部に過ぎない。図書館等に所蔵された各種のメディアを使って積極的に作品に触れ、理解を深めてもらいたい。発表については、事前（授業時間外）の準備が必要とされる。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書は特に指定しない。随時プリントを配布する。
参考書については、参考文献表を配布する他、授業中に適宜紹介、指示する。
〔成績評価〕
受講姿勢40%(授業内容への関心、授業への貢献、学期内担当分の準備作業)、および担当回の発表内容60%による。(期末試験は行わない。発表で評価する。)
前期・後期の合算で総合評価100%中
90%以上かつ上位10%の者をS評価
80%以上をA評価、60%以上をB評価
50%以上をC評価
50％未満はD評価
とする。
なお、３分の２以上の出席をしていない場合、成績評価の対象としない。
〔科目ナンバリング〕
MUS2020MA
〔学位授与方針との関係〕
①、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 日本音楽史研究Ａ / Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
月曜 2限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

**野川 美穂子**

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。
今年度と来年度では、授業の内容が異なる。
〔授業の概要〕
日本音楽にはさまざまな種目があり、使われる楽器の種類、音楽的特徴等に違いがある。一方で、異なる種目でありながら、共通する特徴もある。また、舞踊や演劇と結びついているものが多い。
この授業では、近世に発展した種目を中心に、その歴史と特徴を理解しながら、音楽以外の分野とどのように結びついてきたのか、社会や文化の変遷の中で音楽がどのように伝えられてきたのかなどを考える。毎回、視聴覚教材を活用しながら、授業を進める。
〔授業の到達目標〕
日本音楽の歴史と特徴を多面的に理解し、その魅力を感じ取る。
〔授業計画〕
第 1 回　日本音楽の歴史と特徴、日本音楽の資料
第 2 回　三曲の歴史と特徴、絹糸弦の製作方法
第 3 回　三曲の楽器、地歌の歴史と代表曲（三味線組歌）
第 4 回　地歌の代表曲（長歌物、端歌物）
第 5 回　地歌の代表曲（手事物）
第 6 回　地歌の代表曲（浄瑠璃物、作物）
第 7 回　箏曲の歴史、箏の製作方法
第 8 回　箏曲の代表曲（箏組歌、段物）
第 9 回　箏曲の代表曲（幕末新箏曲、山田流箏曲）
第 10 回　尺八楽の歴史と代表曲
第 11 回　胡弓楽の歴史と代表曲
第 12 回　三曲の近代と現代
第 13 回　同じ題材による楽曲群（晒物）
第 14 回　歌舞伎や文楽に登場する三曲
第 15 回　前期のまとめ
第 16 回　文楽、歌舞伎に使われる楽器
第 17 回　文楽の歴史と特徴、代表曲（時代物）
第 18 回　文楽の代表曲（世話物）
第 19 回　歌舞伎の歴史と特徴、歌舞伎の舞台

第 20 回　歌舞伎の代表曲（丸本物）
第 21 回　歌舞伎の代表曲（純歌舞伎）
第 22 回　歌舞伎の代表曲（所作事）
第 23 回　語り物と劇－文楽と歌舞伎の比較－
第 24 回　舞と踊
第 25 回　同じ題材による楽曲群（石橋物）
第 26 回　芸能を裏で支える人々と技術
第 27 回　歌舞伎の伝承と発展（新しい歌舞伎）
第 28 回　文楽の伝承と発展（新しい文楽）
第 29 回　瞽女唄と津軽三味線
第 30 回　後期のまとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパー等に対するフィードバックを授業時に行う。

〔授業時間外の学習〕
• 授業で取り上げた種目の特徴を、図書館の文献やインターネット等も参照して整理する。
• 授業時に視聴した作品の特徴を整理し、感想をまとめる。
これらの学習に120時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
毎授業時にプリントを配布する。
参考書については、その都度指示する。

〔成績評価〕
授業への取り組み50％、前期末・後期末の筆記試験の成績50％の配分で評価する。
S　総合評価90点以上の者
A　総合評価80点以上の者
B　総合評価60点以上の者
C　総合評価50点以上の者
D　総合評価50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
MUS2021MA/MUS4020MA

〔学位授与方針との関係〕
①、③

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## 日本音楽理論Ｃ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
2単位　後期
月曜 1限
実務経験なし
講義
必修
日本音楽専修必修

森重 行敏

〔履修条件〕
日本音楽専修必修。
原則として専攻科在籍者とする。
日本音楽の演奏習熟度は問わないが、音楽理論についての基礎知識のある者とする。

〔授業の概要〕
この授業では日本音楽にとって理論とは何かという根本的な観点に立ち返って、日本音楽の音階論や楽曲構造について、主要な先行研究の確認を行うと共に、現代的視点での再評価や批判を行うものとする。

〔授業の到達目標〕
日本音楽理論についての先行研究についての知識を深めると共に、自主的な再評価ができるようになること。

〔授業計画〕
第 1 回　この授業の目的と注意事項
日本音楽における音楽理論、音階理論の理解と問題点を考察する。
第 2 回　日本音楽理論、特に音階理論の概観
日本音楽の理論、特に音階理論について、過去の諸説を概観する。
第 3 回　「俗楽旋律考」（上原六四郎著、明治28）について
明治以降、事実上最古の日本音階理論の業績について。
第 4 回　同　原文の精読
原文の精読を試みる。
第 5 回　同　著者による要約の精読
著者自身が執筆した要約の精読。
第 6 回　上原による音階理論の再評価
上原理論の特徴、評価。
第 7 回　「日本伝統音楽の研究1」（小泉文夫著、昭和33）について
戦後の日本音階理論の代表的な業績である小泉理論の概論。
第 8 回　同　原文の精読
原文の精読を試みる。
第 9 回　小泉による他の音階解説を読む
著者によるその他の音階についての言及を比較する。
第 10 回　小泉による音階理論の再評価
小泉理論の特徴や問題点について。
第 11 回　「糸竹初心集」（中村宗三著、1664）について
江戸時代最古の邦楽入門書の概論
第 12 回　同　「すががき」の研究、段物の成立について
同書における「すががき」の研究と段物との関連
第 13 回　同　「りんぜつ」の研究
同書における「りんぜつ」の研究と後世の変化について
第 14 回　その他の古文献における段物の成立について
段物の成立を広い観点で考察する。
第 15 回　まとめ
日本音楽における理論の発展と可能性を考察する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後、講評を行う。

〔授業時間外の学習〕
積極的に伝統芸能の鑑賞をすることを奨める。
詳細については随時紹介する。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要なプリントは随時配布する。
参考書としては「日本音楽大事典」（平凡社）の該当項目等。
〔成績評価〕
成績評価については、授業態度20％、毎回の課題30％、期末課題50％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末課題未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2012MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 音楽療法概説Ａ / Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
金曜 4限
実務経験なし
講義

鈴木 千恵子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
本講義では、音楽の様々な働きがどのように治療や援助に生かされるのかを理解し、さらに音楽が人間や社会に働きかける可能性を探っていく。
音楽という芸術を治療という科学の領域に入れること自体に難しさはあるが、この領域は20世紀に入り大きく発展してきた。音楽・患者（対象者）・治療者の三者から構築される治療技法の音楽療法は、医療・福祉・教育・保健領域で生かされ、また新しい学問としても現代社会において注目を浴びている。
前期では、理論を中心に基本的概念を学ぶ。後期では、音楽療法に必要な治療技法について学ぶ。理論は教科書に沿って進める。
対象者を理解する為に音楽療法視点の訪問コンサートへの参加を必修とするが、社会状況を見ながら現場との調整を図りガイダンスで説明する。
〔授業の到達目標〕
• 音楽療法の定義を理解し、音楽の治療的機能を把握できる。
• 基本的なプログラム作成ができる
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　授業内容と進め方
第 2 回　音楽療法概略①
　　歴史
第 3 回　音楽療法概略②
　　定義
第 4 回　音楽療法視点の訪問コンサートとは
　　対象と目的
第 5 回　音楽療法における楽曲①
第 6 回　音楽療法における楽曲②
第 7 回　音楽療法関連理論①発達論
第 8 回　音楽療法関連理論①のⅡ　発達論
第 9 回　音楽療法関連②ライフサイクル
第 10 回　音楽療法関連理論②のⅡライフサイクル
第 11 回　音楽療法関連理論③　人間の心と身体
第 12 回　音楽療法関連理論④障がいと疾病
第 13 回　実習
第 14 回　実習フィードバック
第 15 回　授業の総括
第 16 回　後期の授業内容について
　　授業の進め方
第 17 回　基本的プログラム作成①
第 18 回　基本的プログラム作成②
第 19 回　基本的プログラム作成③
第 20 回　音楽療法の技法
第 21 回　音楽療法の技法①　BED-MUSIC
第 22 回　音楽療法の技法②　BED-MUSIC
　　BED-MUSICの使い方
第 23 回　音楽療法事例①児童
第 24 回　音楽療法事例　②高齢者
第 25 回　他領域の臨床活動①
第 26 回　他領域の臨床活動②
第 27 回　実習
第 28 回　実習フィードバック
第 29 回　世界の音楽療法動向
第 30 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に個別に講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：松井紀和「音楽療法の手引き」（牧野出版）
　　松井紀和、鈴木千恵子他「音楽療法の実際」（牧野

出版）
参考書： 鈴木千恵子編著「松井紀和のスーパービジョン」（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業の取組みと態度50％、授業内試験50％
Ｓ　総合点90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習報告書未提出者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2000MA/MUS4000MA
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽療法演習Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　通年
金曜 3限
実務経験なし
演習（技術）

鈴木 千恵子

〔履修条件〕
「音楽療法概説」を履修していること。
〔授業の概要〕
この授業は音楽療法の実習を中心とし、実践に関する技術等も学ぶ。
実習現場は高齢者と児童を予定しているが、社会状況を見ながら現場との調整を図り、ガイダンスで説明する。
この授業での実習は、一般社会で行われている少人数対象の音楽療法セッションをイメージし、対象者とコミュニケーションを図りながら様々な音楽活動のアプローチを学んでいく。
〔授業の到達目標〕
• 音楽療法の実践に必要な臨床的音楽技術を身につけることができる。
• 基本的なプログラム作成ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　授業内容と実習について
第 2 回　音楽療法活動の紹介
　　高齢者及び児童
第 3 回　音楽療法活動と技術①
　　鑑賞・歌唱
第 4 回　音楽療法活動と技術②
　　身体表現・楽器
第 5 回　模擬セッション①
　　扱う曲
第 6 回　模擬セッション②
　　プログラム作成
第 7 回　実習準備①
　　受講生同士で実践
第 8 回　実習準備②
　　グループごとに発表
第 9 回　実習
　　様々な役割
第 10 回　フィードバック
　　現場とのフィードバック
第 11 回　音楽療法における臨床的な音楽技術①
　　アンサンブル
第 12 回　音楽療法における臨床的な音楽技術②
　　即興演奏
第 13 回　音楽療法における臨床的な音楽技術③
　　歌唱と伴奏
第 14 回　音楽療法における臨床的な音楽技術④
　　編曲
第 15 回　授業の総括
第 16 回　後期の実習について
　　臨床現場についての理解
第 17 回　音楽療法における楽曲①
　　様々なジャンル
第 18 回　音楽療法における楽曲②
　　和と洋
第 19 回　音楽療法における楽曲③
　　様々な表現
第 20 回　音楽療法の場の作り方①
第 21 回　音楽療法の場の作り方②
第 22 回　実習準備（高齢者または児童）
第 23 回　リハーサル①
　　受講生同士で実践
第 24 回　リハーサル②
　　ディスカッション
第 25 回　リハーサル③
　　グループごとに発表
第 26 回　実習
　　様々な役割
第 27 回　実習フィードバック
第 28 回　音楽とコミュニケーション①
　　集団活動
第 29 回　音楽とコミュニケーション②
　　個別活動
第 30 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
発表の後に振り返りとして総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：松井紀和「音楽療法の手引き」（牧野出版）
　　松井紀和、鈴木千恵子他「音楽療法の実際」（牧野出版）
参考書： 鈴木千恵子編著「松井紀和のスーパービジョン」（音楽之友社）
〔成績評価〕
授業の取組みと態度50％、授業内試験50％
Ｓ　総合点90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2200MA/MUS4200MA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 演奏現場論Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　前期
水曜 2限
実務経験なし
講義

合田 香

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
現在の日本では、クラシック音楽の専門用途を目的としたホールは都内ばかりでなく、全国各地に整ってきた。また、各地のオーケストラもホールとのフランチャイズ提携が増えてきて、本番と同じ場所で練習ができるオーケストラが増えてきている。これは、とりも直さず、日本の音楽界において「響き」（音響）の意識が向上して、それに呼応して周りの環境も整ってきたものであろう。
音楽の演奏という行為は、それぞれの楽器が出す「音」と、その音が響く「空間」によって成り立つ。
その意味で、演奏者も、教育者も、聴衆も、音楽をプロデュースする立場の者も、そしてホール関係者もホールでの音響、楽器同士の関係等に鈍感ではいられない。演奏者は（声楽を含んで）自分の楽器の特性、別の楽器の特性をよく理解し、違ったホールにおいても即座に色々な状況を感じ取って対応していかなければならない。プロデュースする者やスタッフも演目に合ったホールの選択が当然の時代になってきている。
この授業では個別の楽器の音響的個性の理解に始まり、ホールの響きとの関係、問題点の解消方法を学ぶ。また一方、「演奏」という進路の他に「音楽業界」を視野に入れたい人にはこの授業内で行う、色々なケーススタディーや会場（現場）での体験の機会が自分の進路選択に役立つと思う。
〔授業の到達目標〕
• 実技やアンサンブルの学習の段階において、また実際の演奏現場等で活用することのできる「響きや配置の『考え方』」を習得できる。
• クラシック音楽業界の理解と体験。
〔授業計画〕
第 1 回　個別の楽器の特性、音の指向性、伝搬特性①ピアノ
　　受講学生の専攻や将来展望によって、系統１、系統２を織り交ぜながら授業を構成する。
　　［系統１］楽器の特性、配置や楽器とホール等の音環境についての考察
第 2 回　個別の楽器の特性、音の指向性、伝搬特性②その他の楽器、受講者の専門楽器を中心に
第 3 回　楽器間の音の影響、特性と範囲①ピアノと他の楽器
第 4 回　楽器間の音の影響、特性と範囲②３人以上の奏者の場合
第 5 回　響きや音の干渉の判断とアドヴァイスの仕方、タイミング
第 6 回　楽曲演奏の中での具体的な検証①受講者の専門楽器による、Duo
第 7 回　楽曲演奏の中での具体的な検証②Trio
第 8 回　楽曲演奏の中での具体的な検証③様々な編成
第 9 回　ステージ上の位置による差異、客席の場所による差異について
第 10 回　ホールや会場の音特性と対処方法について
　　［系統２］コンサートビジネス、演奏会の運営について
第 11 回　コンサート業界について、働く人々とその業種
第 12 回　コンサートの運用に必要な考え方、知識
第 13 回　自分たちでコンサートを作るときの考え方
第 14 回　コンサートの企画立案（目的や条件の整理）
第 15 回　まとめと学習到達度の確認
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業での発表について、授業内で意見交換や振り返りを行い、考え方を共有する。
〔授業時間外の学習〕
この授業で理解した内容を、アンサンブル、オーケストラ、実技レッスン、他の授業等で試してみて、その経験をまた授業にフィードバックできることが望ましい。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
受講態度80％、期末レポート20％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS1000MA/MUS3000MA
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## アウトリーチ研究Ａ/Ｃ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
金曜 5限
実務経験なし
講義

永井 由比

〔履修条件〕
専攻科 1 年・2 年における選択授業。
アウトリーチ活動に関心のある学生。
〔授業の概要〕
アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉等の分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービス等の意味で対応される。
本講義では主に、小学校・学童・福祉施設等での現場実習を通して芸術分野のアウトリーチが具体的にどのような社会貢献ができるか、またその社会的ニーズを模索していく。また、福祉施設・学校等を 1 年間通して定期的に訪問し、アウトリーチによって利用者がどのように変わっていくかを考察していく。
〔授業の到達目標〕
学校・福祉施設等それぞれに適したアウトリーチコンサートの企画作りとワークショップを企画し、芸術アウトリーチの社会的意義を確認できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチ概論
第 2 回　ワークショップについて
第 3 回　ワークショップ企画作り①
　　小学校
第 4 回　ワークショップ企画作り②
　　福祉施設
第 5 回　ワークショップ発表①
　　小学校①
第 6 回　ワークショップ発表①
　　小学校②
第 7 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設①
第 8 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設②
第 9 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作①
第 10 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作②
第 11 回　学校訪問アウトリーチ　模擬発表
第 12 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）①
第 13 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）②
第 14 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）③
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔授業時間外の学習〕
演奏、ワークショップ発表に向けて、個々またはグループで練習をしっかりとしてくること。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習不参加の者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1001MA/MUS3001MA
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
－
〔キャップ対象外〕
―

## アウトリーチ研究Ｂ/Ｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
2単位　後期
実務経験なし
講義
選択

永井 由比

〔履修条件〕
専攻科１年・２年における選択授業。
アウトリーチ活動に関心のある学生。
〔授業の概要〕
アウトリーチとは、英語で手を伸ばすことを意味する言葉である。福祉等の分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービス等の意味で対応される。
本講義では主に、小学校・学童・福祉施設等での現場実習を通して芸術分野のアウトリーチが具体的にどのような社会貢献ができるか、またその社会的ニーズを模索していく。また、福祉施設・学校等を１年間通して定期的に訪問し、アウトリーチによって利用者がどのように変わっていくかを考察していく。
〔授業の到達目標〕
学校・福祉施設等それぞれに適したアウトリーチコンサートの企画作りとワークショップを企画し、芸術アウトリーチの社会的意義を確認できる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　アウトリーチ概論
第 2 回　ワークショップについて
第 3 回　ワークショップ企画作り①
　　小学校
第 4 回　ワークショップ企画作り②
　　福祉施設
第 5 回　ワークショップ発表①
　　小学校①
第 6 回　ワークショップ発表①
　　小学校②
第 7 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設①
第 8 回　ワークショップ発表③
　　福祉施設②
第 9 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作①
第 10 回　学校訪問アウトリーチについてプログラム制作②
第 11 回　学校訪問アウトリーチ　模擬発表
第 12 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）①
第 13 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）②
第 14 回　学校訪問アウトリーチ発表（実習）③
第 15 回　まとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
必要な資料（楽譜等）は授業時に配布する。
〔授業時間外の学習〕
演奏、ワークショップ発表に向けて、個々またはグループで練習をしっかりとしてくること。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習不参加の者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3001MA/MUS4001MA
〔学位授与方針との関係〕
③、④
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 第一実技Ⅲ・Ⅳ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
6単位　通年
実技
必修

永井 由比

〔履修条件〕
第一実技は全学生の専門実技として必修科目である。
〔授業の概要〕
全ての授業の中で、一番関心・意欲を持って取り組むべき授業であり、演奏技術・表現力を身につけることを目的とする。
第一実技は、全学生が各自の専修実技の担当講師のもとで、週１回60分のレッスンを受ける。内容については、個人レッスンになるため、個々のレベルに合わせた課題を与え指導を行っていく。
試験は前期・後期と２回行い、また、後期には学内演奏会に出演する。なお、２年次後期の成績優秀者は、修了演奏会に出演することができる。
〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。

テクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。

〔授業計画〕

第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。

第 2 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 3 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 4 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 5 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 6 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 7 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 8 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 9 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 10 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 11 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 12 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 13 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 14 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 15 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 16 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 17 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 18 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 19 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 20 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 21 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。

第 22 回　試験曲の検討

第 23 回　試験曲の決定

第 24 回　試験曲のレッスン

第 25 回　試験曲のレッスン

第 26 回　試験曲のレッスン

第 27 回　試験曲のレッスン

第 28 回　試験曲のレッスン

第 29 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等

第 30 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

学生の演奏に対して担当教員が随時フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕

レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に180時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。

〔成績評価〕

20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。

S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者

A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者

B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者

C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者

D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕

MUS2450MA/MUS4450MA

〔学位授与方針との関係〕

④、⑤

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

―

## 副科実技Ⅲ・Ⅳ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　通年
実技

永井 由比

〔履修条件〕
別途レッスン料が必要になるが、副科実技として専門以外の実技を履修することができる。
〔授業の概要〕
全ての授業の中で、一番関心・意欲を持って取り組むべき授業であり、演奏技術・表現力を身につけることを目的とする。。
副科実技は、週１回20分のレッスンを受けることができ、前期・後期に試験を行う。
〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。
テクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。
第 2 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 3 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 4 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 5 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 6 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 7 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 8 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 9 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 10 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 11 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 12 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 13 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 14 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 15 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 16 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 17 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 18 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 19 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 20 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 21 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 22 回　試験曲の検討
第 23 回　試験曲の決定
第 24 回　試験曲のレッスン
第 25 回　試験曲のレッスン
第 26 回　試験曲のレッスン
第 27 回　試験曲のレッスン
第 28 回　試験曲のレッスン
第 29 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して担当教員が随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。
〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。

S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者

〔科目ナンバリング〕
MUS2351MA/MUS4351MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 第二実技Ⅲ・Ⅳ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
4単位　通年
実技

永井 由比

〔履修条件〕
別途レッスン料が必要になるが、第二実技として専門以外の実技を履修することができる。
〔授業の概要〕
全ての授業の中で、一番関心・意欲を持って取り組むべき授業であり、演奏技術・表現力を身につけることを目的とする。。
副科実技は、週1回40分のレッスンを受けることができ、前期・後期に試験を行う。
〔授業の到達目標〕
担当講師との一対一の授業となるため、到達目標は各自異なる。
テクニックのレベルアップと表現力の向上という点が全学生に対して言える目標である。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
※個人レッスンのため、これは授業計画の例である。
第 2 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 3 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 4 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 5 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 6 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 7 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 8 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 9 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 10 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 11 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 12 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 13 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 14 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 15 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 16 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 17 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 18 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 19 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 20 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 21 回　与えられた課題のレッスンを数回受け、まとめあげ、次の課題へと進んでいくという形を繰り返していく。
第 22 回　試験曲の検討
第 23 回　試験曲の決定
第 24 回　試験曲のレッスン

第 25 回　試験曲のレッスン
第 26 回　試験曲のレッスン
第 27 回　試験曲のレッスン
第 28 回　試験曲のレッスン
第 29 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　試験曲のまとめ、伴奏合わせ等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して担当教員が随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
レッスンごとに与えられる課題に対し、しっかりと予習をして次のレッスンに臨むこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、エチュード、楽曲を指定する。
〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏試験を受けることができる。
成績評価は試験100％にて評価する。
S　演奏試験において、審査員の評価の平均点が90点以上の者
A　演奏試験において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏試験において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏試験において、審査員の評価の平均点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2350MA/MUS4350MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 学内演奏Ⅰ・Ⅱ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　通年
実務経験なし
実習（卒業試験など）

柏原 佳奈、布施 雅也

〔履修条件〕
全学生の専門実技、第一実技に伴う授業である。
〔授業の概要〕
第一実技のまとめは実技試験で行うが、実技を学ぶ本来の目的は聴衆の前で演奏することにある。
この授業では、コンサートの場を設け、たくさんの聴衆の前で演奏する機会をつくる。また、舞台衣装を着用することにより、舞台上のマナーも学ぶ。
〔授業の到達目標〕
たくさんの聴衆を前に、緊張しながらも実力を発揮できるようにすることを目標とする。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび課題の検討
　　第一実技の授業計画と共に進めていく。
第 2 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 3 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 4 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 5 回　与えられたエチュード、楽曲のレッスン
第 6 回　楽曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 7 回　試験曲の検討または新しい課題の検討
第 8 回　試験曲の決定
第 9 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは、与えられた課題のレッスン
第 10 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは、与えられた課題のレッスン
第 11 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは、与えられた課題のレッスン
第 12 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは、与えられた課題のレッスン
第 13 回　エチュードおよび試験曲研究あるいは、与えられた課題のレッスン
第 14 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
第 15 回　試験曲研究まとめ、伴奏合わせ等
第 16 回　新たな課題の検討
第 17 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 18 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 19 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 20 回　エチュード、楽曲のレッスン
第 21 回　楽曲のまとめ、伴奏合わせ等
第 22 回　試験曲・学内演奏会の演奏曲の検討
第 23 回　試験曲・学内演奏会の演奏曲の決定
第 24 回　エチュードおよび演奏曲研究
第 25 回　エチュードおよび演奏曲研究
第 26 回　エチュードおよび演奏曲研究
第 27 回　エチュードおよび演奏曲研究
第 28 回　エチュードおよび演奏曲研究
第 29 回　演奏曲研究のまとめ、伴奏合わせ等
第 30 回　演奏曲研究のまとめ、伴奏合わせ等
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、担当教員が随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
演奏会で演奏する楽曲についての解釈の研究、予習・復習を怠らないようにする。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
個々のレベルに応じて、楽曲を指定する。
〔成績評価〕
20回以上のレッスンを受けた者が演奏会に出演することができる。
成績評価は試験100％にて評価する。
S　演奏において、審査員の評価の平均点が90点以上の者

A　演奏において、審査員の評価の平均点が80点以上の者
B　演奏において、審査員の評価の平均点が60点以上の者
C　演奏において、審査員の評価の平均点が50点以上の者
D　演奏において、審査員の評価の平均点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2550MA/MUS4550MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## ピアノデュオ研究Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
4単位　通年
木曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
ピアノ専修必修

柏原 佳奈

〔履修条件〕
専1ピアノ専修必修。
他専修の学生も履修可能。
〔授業の概要〕
自由に組んだペアで曲を準備し、毎回の授業で数組が演奏し、レッスン形式で進めていく。
履修者全員で楽譜を共有し、積極的に意見を出し合いながら、アンサンブルの一員としてパートナーと協力して仕上げていくことを実践的に学ぶ。
〔授業の到達目標〕
自分の出している音、相手の音もよく聴きながら、呼吸を合わせて演奏できる。その上でお互いの音をよく鳴らし合わせ、曲の構成もしっかり理解しながら仕上げることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入・選曲および組み合わせ決定
第 2 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ①
第 3 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ②
第 4 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ③
第 5 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ④
第 6 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ⑤
第 7 回　共通の課題を用いてアンサンブルの基礎を学ぶ⑥
第 8 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備①
第 9 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備②
第 10 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備③
第 11 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備④
第 12 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備⑤
第 13 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備⑥
第 14 回　各ペア自由に選んだ曲による発表、研究、定期演奏会オーディションの準備⑦
第 15 回　前期成果発表・前期の反省、後期自由課題の選択への準備
第 16 回　自由選択曲による研究、発表①
第 17 回　自由選択曲による研究、発表②
第 18 回　自由選択曲による研究、発表③
第 19 回　自由選択曲による研究、発表④
第 20 回　自由選択曲による研究、発表⑤
第 21 回　自由選択曲による研究、発表⑥
第 22 回　自由選択曲による研究、発表⑦
第 23 回　自由選択曲による研究、発表⑧
第 24 回　自由選択曲による研究、発表⑨
第 25 回　自由選択曲による研究、発表⑩
第 26 回　自由選択曲による研究、発表⑪
第 27 回　自由選択曲による研究、発表⑫
第 28 回　自由選択曲による研究、発表⑬
第 29 回　自由選択曲による研究、発表⑭
第 30 回　授業の総括、成果発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
事前の予習、授業後の復習において、自らの練習はもちろん、パートナーとの合わせを十分にしておくこと。それぞれの曲の作曲家や時代背景についても十分に調べておくこと。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
その都度指示、配布。必要に応じて各自準備する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み40％、演奏能力20％、学期末課題の結果40％を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期末課題未提出者、授業への取り組み・演奏能力・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2240MA/MUS4240MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## 管楽アンサンブル研究Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
4単位　通年
火曜 5限
実務経験あり
演習（技術）
必修
管楽器専修（Sx専修以外）必修

津川 美佐子

〔履修条件〕
管楽器専修（Sx専修以外）必修。
〔授業の概要〕
木管五重奏を中心に、四重奏、ピアノ六重奏等も取り入れて学習していく。
芸術科１・２年で学んだことをさらに深め、事前に楽曲について勉強し、お互いによく聞き合い、楽器を通してコミュニケーションをとり、さらにはメンバーでディスカッションしならが音楽を作っていく。自身が演奏しない曲目についても各自楽譜を用意し、楽曲について調べ、共に合奏の基礎を学んでいく。
〔授業の到達目標〕
より一層細かく楽譜を読み込み、スコアを読んで勉強し、メンバー全員でお互いによく聞きあい、話し合いながら音楽を作り、楽器を通してコミュニケーションをとり、合奏の楽しみを見出していくことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　授業内容説明と曲目の選択（前期はバロック・古典中心の曲目）
第 2 回　演奏実習①
第 3 回　演奏実習②
第 4 回　演奏実習③
第 5 回　演奏実習④
第 6 回　演奏実習⑤
第 7 回　演奏実習⑥
第 8 回　演奏実習⑦
第 9 回　演奏実習⑧
第 10 回　演奏実習⑨
第 11 回　演奏実習⑩
第 12 回　演奏実習⑪
第 13 回　演奏実習⑫
第 14 回　演奏実習⑬
第 15 回　前期の曲の通し演奏
第 16 回　後期曲目説明と選択（後期は近代作曲家の曲目を中心とする）
第 17 回　演奏実習①
第 18 回　演奏実習②
第 19 回　演奏実習③
第 20 回　演奏実習④
第 21 回　演奏実習⑤
第 22 回　演奏実習⑥
第 23 回　演奏実習⑦
第 24 回　演奏実習⑧
第 25 回　演奏実習⑨
第 26 回　演奏実習⑩
第 27 回　演奏実習⑪
第 28 回　演奏実習⑫
第 29 回　演奏実習⑬
第 30 回　一組ずつの通し演奏で試験の代わりとする。
※専攻科の学生については、希望する曲目を取り入れていきたい。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
随時、その場で行う。
〔授業時間外の学習〕
事前に楽曲について調べて勉強し、パート譜の練習をしておくこと。スコアも読んで勉強しておくこと。可能であれば事前に分奏しておくことが望ましい。
これらの学修に120時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
授業への取り組み姿勢、授業中の態度を重視。実習に対する姿勢50％、実技試験50％にて総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者
A　総合点が80点以上の者
B　総合点が60点以上の者
C　総合点が50点以上の者
D　総合点が50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2241MA/MUS4241MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
―
〔キャップ対象外〕
―

## 金管アンサンブル研究Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
4単位　通年
土曜 2限
演習（技術）
必修
金管専修（Tp・Tb・Tub）必修

長谷川 潤

〔履修条件〕
金管専修（Tp、Tb、Tub）のみ必修。
〔授業の概要〕
管・打・ハープを含む中・大編成アンサンブル能力の育成を目指す。

〔授業の到達目標〕
様々な編成の合奏を体験し、基礎から徐々に難易度の高い曲へと進みながら、アンサンブル能力を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける①
第 3 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける②
第 4 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける③
第 5 回　吹奏楽のベーシックな曲を使い基礎力をつける④
第 6 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく①
第 7 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく②
第 8 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく③
第 9 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく④
第 10 回　吹奏楽の一般的な名曲を使い合奏の技術力を上げていく⑤
第 11 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす①
第 12 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす②
第 13 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす③
第 14 回　より難易度の高い曲を使い一層の技術力向上とより高い完成度 をめざす④
第 15 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始①
第 16 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始②
第 17 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始③
第 18 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始④
第 19 回　今年度の吹奏楽コンクール課題曲や定期演奏会の曲の譜読み開始⑤
第 20 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく①
第 21 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく②
第 22 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく③
第 23 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく④
第 24 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく⑤
第 25 回　定期演奏会の曲を細部にわたってアナリーゼ・練習を積んでいく⑥
第 26 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う①
第 27 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う②
第 28 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う③
第 29 回　定期演奏会に向けた徹底した集中練習を行う④
第 30 回　学外ホールにて演奏会を行う
2025年度は12月16日（火）杉並公会堂大ホールにて演奏会を行う。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習時に問題があれば、その都度その点をすぐに指摘し、対処法や練習の方法を指示する。
〔授業時間外の学習〕
自分の担当パートを正確に演奏できるよう練習しておくことはもちろん、演奏曲のアナリーゼ、作曲家や時代の背景を知っておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
出席状況・授業への取り組み50％、演奏会出演成果50％の結果を総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS22410MA/MUS42410MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## サクソフォン・アンサンブル研究Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
水曜 2限
演習（技術）
必修
Sx専修必修

野原 孝

〔履修条件〕
サクソフォン専修必修。
〔授業の概要〕
サクソフォンを用いて高度な演奏技術が必要な二重奏・三重奏・四重奏に取り組み、アンサンブル能力の向上を目指す。また、楽曲を作り上げるプロセスやアプローチの方法を学び、アンサンブルというものに対する理解を深める。。

〔授業の到達目標〕
・高度な演奏技術が必要な楽曲を演奏する中でも各楽器の特性を理解し、アンサンブルの中でもその奏法を反映する事ができる。
・アンサンブル内での価値観を共有し、奏法に反映する事ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　サクソフォン・アンサンブルについて
第 2 回　課題曲選定
第 3 回　奏法①
　　マウスピースとリードのセッティング
第 4 回　奏法②
　　アンブシュア
第 5 回　奏法③
　　タンギング
第 6 回　奏法④
　　呼吸
第 7 回　奏法⑤
　　音程の取り方
第 8 回　奏法⑥
　　ビブラート
第 9 回　奏法⑦
　　立奏、座奏の構え方
第 10 回　課題曲演習
第 11 回　課題曲確認
第 12 回　ソプラノサクソフォンの奏法について
第 13 回　ソプラノサクソフォン・アンサンブル演習
第 14 回　アルトサクソフォンの奏法について
第 15 回　アルトサクソフォン・アンサンブル演習
第 16 回　テナーサクソフォンの奏法について
第 17 回　テナーサクソフォン・アンサンブル演習
第 18 回　バリトンサクソフォンの奏法について
第 19 回　バリトンサクソフォン・アンサンブル演習
第 20 回　サクソフォン・四重奏実践①
　　ハーモニー・音色感
第 21 回　サクソフォン・四重奏実践②
　　音量バランスとコントロール
第 22 回　サクソフォン・四重奏実践③
　　担当パートの役割も把握
第 23 回　サクソフォン・四重奏実践④
　　楽曲の完成イメージの共有
第 24 回　サクソフォン・四重奏実践⑤
　　リハーサルの進め方
第 25 回　サクソフォン・四重奏実践⑥
　　並び方
第 26 回　サクソフォン・四重奏実践⑦
　　多様な表現方法の工夫と検討
第 27 回　アンサンブルレパートリー研究①
　　オリジナルの現代曲
第 28 回　アンサンブルレパートリー研究②
　　ピアノ作品から編曲された楽曲
第 29 回　アンサンブルレパートリー研究③
　　弦楽四重奏作品から編曲された楽曲
第 30 回　コンサートのプログラミング
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レッスン時、常に課題のフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で使用する楽譜を準備し、担当する各パートの楽器の練習を十分に行うこと。また、各楽器の特徴・音程の癖等も把握しておくこと。
授業で取り組む曲はもちろん、それ以外の室内楽作品もCD等を聴いて知識を広げておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
履修学生の希望も取り入れながら、高難易度の楽曲を選定する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、実習の成果50％で総合的に判断する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS22411MA/MUS42411MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 室内楽研究Ａ/Ｃａ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
火曜 2限
実務経験なし
演習（技術）

野口 千代光､荻野 千里

〔履修条件〕
積極的にアンサンブルに参加する意欲のある学生、また他のグループの演奏に興味を持って聴ける学生。
〔授業の概要〕
ピアノ三重奏曲・ピアノ四重奏曲・ピアノ五重奏曲を中心に取り上げ、弦楽器とピアノ、各々の楽器の特徴や奏法等も学びながらアンサンブル能力の向上を目指す。
授業はマスタークラス形式で進める。事前に曲目を発表するので、演奏する学生は勿論、聴講する学生も各自楽譜を

準備し、アンサンブルを作り上げるプロセスに立ち会って、楽曲への理解を深め、その作品の意図を実現するために必要な技術やアンサンブルの心構えを学んでいく。

〔授業の到達目標〕

• 様々な時代および編成の室内楽作品を知り、それぞれの楽曲の様式観とアンサンブル技術の基礎を確立できる。
• 楽器を通してのコミュニケーション力を身につけることができる。
• 古典から近現代までの様々な様式・形式を学ぶことができる。

〔授業計画〕

第 1 回　導入、学習曲目の検討
第 2 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等①
第 3 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等②
第 4 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等③
第 5 回　古典派の室内楽（ピアノ・弦楽器を中心に）モーツァルト・ハイドン・ベートーヴェン等④
第 6 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等①
第 7 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等②
第 8 回　ロマン派の室内楽（ピアノ・弦楽器・管楽器を中心に）メンデルスゾーン・ブラームス・シューマン等③
第 9 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）①
第 10 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）②
第 11 回　近現代の室内楽（様々な楽器を含む）③
第 12 回　声楽を含む室内楽①
第 13 回　声楽を含む室内楽②
第 14 回　７月に行われる定期演奏会オーディションに向けて①
第 15 回　７月に行われる定期演奏会オーディションに向けて②

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕

演習発表時に個別（グループ）に指導・フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕

授業に向けて各自十分に練習し、必ず複数回の合わせをしておくこと。また、お互いの楽器の特徴なども調べておくこと。
日頃から多くの室内楽作品のCD等を聴いて、知識を増やしておくように。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕

シューマン、ドヴォルザーク、ショスタコーヴィチ、ブラームスのピアノ五重奏曲。
ベートーヴェン、メンデルスゾーンのピアノ三重奏曲。
モーツァルトのピアノ四重奏曲等。

〔成績評価〕

成績評価については、演奏曲目の下調べ30％、各自の練習40％、授業態度30％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕

MUS1240MA/MUS3240MA

〔学位授与方針との関係〕

④、⑤

〔他専攻〕

ー

〔キャップ対象外〕

—

## 室内楽研究Ａ/Ｃｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
金曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

菊池 奏絵

〔履修条件〕

楽譜を見たまま正確に演奏するだけでなく、作品にふさわしい様式感、演奏習慣等に興味を持ち、様々な角度から視野を広げたい者。

〔授業の概要〕

本授業では、バロック時代から古典派の音楽を主な題材とし、実践を通して学んでいく。様式感、演奏習慣とは何か。音楽学的考察や現在の実践現場から見えてくる様々な方面からのアプローチを知り、アンサンブルを試みる。自分の専修以外の楽器や声楽との関わり、表現と演奏方法についても考える。
各回の内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えていく可能性がある。演奏の実践を中心に進めるが、講義も取り入れながら総合的に学んでいく。
アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。

〔授業の到達目標〕

これまでの時代の演奏習慣を知り、自分の演奏に活かしていく。どのように演奏したらその作品が生きるかを自分で考えることができる。過去の音楽の影響を受けているその

後の作曲家への理解が深まり、あらゆる時代の音楽と関連付けることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　歴史的知識に基づく演奏とは
第 2 回　楽譜について
第 3 回　アンサンブル組み
第 4 回　バロック時代周辺の楽器について
第 5 回　演奏習慣について
第 6 回　通奏低音①
　　数字の理解
第 7 回　通奏低音②
　　基本形
第 8 回　アンサンブル中間発表
第 9 回　装飾法①
　　フランス様式
第 10 回　装飾法②
　　イタリア様式
第 11 回　舞曲、組曲について
第 12 回　当時の文献を読む
第 13 回　音楽修辞学について
第 14 回　アンサンブル仕上げ
第 15 回　発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業演奏時に個別、グループにアドバイス、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
アンサンブル曲の情報収集を図書館等を利用して、自分なりにやってくること。
個人練習、グループでの練習を十分にしてくること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布。
授業内で参考書を紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、理解度25％、演奏の成果25％とし、総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（積極的に取り組み、知識を自分のものにし、演奏に成果が表れる）
A　総合点80点以上の者（積極的に取り組み、理解を深めようとし、演奏に変化が見られる）
B　総合点60点以上の者（積極的に取り組み、演奏に生かそうとする）
C　総合点50点以上の者（程よく取り組み、程よく演奏する）
D　総合点50点未満の者（取り組む姿勢に欠け、演奏の変化が見られない）
〔科目ナンバリング〕
MUS1240MA/MUS3240MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 室内楽研究Ｂ/Ｄａ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
火曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

阪本 奈津子

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
学生と室内楽要員によるアンサンブルを通して、基本的な合奏能力の向上、各作曲家のスタイルの理解を深める。
〔授業の到達目標〕
互いに尊重し、楽しみながら音楽作りをしていく中でアンサンブルの基本を習得することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入および曲目の検討
　　※専攻楽器の種類によって、変更あり。
第 2 回　古典派の室内楽作品　モーツァルト①
　　ピアノと弦楽器　二重奏
第 3 回　モーツァルト②
　　三重奏以上の編成
第 4 回　モーツァルト③
　　管楽器を含む室内楽作品
　　楽器の相違によるフレージングの注意点
第 5 回　ハイドンの室内楽作品①
　　モーツァルトとの関連性ー弦楽四重奏曲
第 6 回　音程について　純正律と平均律　ハイドン②
　　ピアノを含む室内楽作品
第 7 回　ベートーヴェン①
　　ベートーヴェンにおける強弱記号の捉え方
第 8 回　ベートーヴェン②
　　二重奏から五重奏
第 9 回　シューベルト①
　　シューベルトの音色の選び方
第 10 回　シューベルト②
　　ピアノとの室内楽
第 11 回　シューマン①
　　古典派、ロマン派によるヴィブラートの違い
　　弦楽器の室内楽作品
第 12 回　シューマン②
　　ピアノを含む室内楽作品
第 13 回　ドヴォルザーク①
　　国民楽派
　　関連する作曲家について
　　弦楽器の室内楽作品
第 14 回　ドヴォルザーク②
　　ピアノを含む室内楽作品
第 15 回　まとめと確認

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に個別（グループ）に指導、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
課題になった作品を、各自、各グループで事前に練習を行うこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度40%、課題に取り組む姿勢40%、演奏成果20%の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）。
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）。
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）。
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）。
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）。
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 室内楽研究Ｂ/Ｄｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　後期
金曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

蓼沼 恵美子

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生を対象とするが、ピアノを含む室内楽曲（ただし声楽曲を除く）を体得したい他の器楽専修の学生の履修も可。
〔授業の概要〕
ピアノを含む室内楽作品を取り上げ、アンサンブルにおける奏法や音楽作りを学んでいく。
アンサンブルにおいては、ソロ以上に音に対する意識や音楽の柔軟性が求められる場合がある。共演する楽器の特性を踏まえた上で、作曲家が意図する音楽表現のために必要なそれぞれのパートの役割や演奏技術を実践で学ぶ。
演奏員の協力も得て、マスタークラスの形式で授業を進める。
〔授業の到達目標〕
アンサンブルにおける奏法を修得し、共に音楽をつくり上げる室内楽の楽しさを実感できることを目標に、曲を仕上げる。
具体的には以下の点を到達目標とする。
• 相手の音をよく聴き、呼吸を合わせることができる。
• 各々の楽器との響きの融合を考えた音作りができる。
• 表現のためのそれぞれの楽器のアプローチの仕方を知ることによって、音楽的視野を広げることができる。
• 楽曲の様式や作曲家の意図を踏まえた、より幅広い表現ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーションおよび曲目とメンバーの決定
※授業の進行は履修者の人数によって変更することがある。
※試験期間中に発表演奏会を行う。
第 2 回　アンサンブル実習①
第 3 回　アンサンブル実習②
第 4 回　アンサンブル実習③
第 5 回　アンサンブル実習④
第 6 回　アンサンブル実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習⑬
第 15 回　アンサンブル実習⑭
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時に指導・フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
各自個人練習及び合わせ等、十分に準備して授業に臨むこと。準備不足では、アンサンブルを楽しむことはできない。事前に音源を聴いたり、スコアを見る等、他のパートにも目を向けておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で演奏するグループが、演奏曲の楽譜をその都度配布する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み・意欲70％、発表演奏の成果30％にて総合的に行う。
S 総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確かつ秀でた者）
A 総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、授業への取り組み・意欲、演奏能力が的確だった者）
B 総合点が60点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が良好だった者）
C 総合点が50点以上の者（授業内容の理解、授業への取り組み・意欲、演奏能力が不十分だった者）
D 総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業への取り組み・意欲、演奏能力等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 室内楽研究Ｂ/Ｄｃ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　後期
月曜 3限
実務経験あり
演習（技術）

吉岡 次郎

〔履修条件〕
管楽器専修を中心とするが、他専修の受講も可。
アンサンブル（管楽器＋弦楽器、ピアノ等）に興味と意欲のある学生。
〔授業の概要〕
フルートを中心とする二重奏～複数のアンサンブルを基盤に、レパートリー修得と室内楽での演奏法や基礎を学ぶ。並びに、授業当日指定で初見のアンサンブル実習も催し、そこで様々な対応力を学ぶ。
〔授業の到達目標〕
個々の技術の更なる向上と、室内楽における他者との合わせ方、リードの仕方、協調性等を習得する。
初見練習においてはリズムや調性を瞬時に感じる力や、難しいパッセージに対応する力等を習得する。
〔授業計画〕
第 1 回　受講生の習熟度の確認と初見演奏について
第 2 回　学習曲目の検討および組み合わせと初見演奏実習①
第 3 回　アンサンブル実習、初見実習②
第 4 回　アンサンブル実習、初見実習③
第 5 回　アンサンブル実習、初見実習④
第 6 回　アンサンブル実習、初見実習⑤
第 7 回　アンサンブル実習、初見実習⑥
第 8 回　アンサンブル実習、初見実習⑦
第 9 回　アンサンブル実習、初見実習⑧
第 10 回　アンサンブル実習、初見実習⑨
第 11 回　アンサンブル実習、初見実習⑩
第 12 回　アンサンブル実習、初見実習⑪
第 13 回　アンサンブル実習、初見実習⑫
第 14 回　アンサンブル実習、初見実習⑬
第 15 回　アンサンブル発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
各回の初見実習の発表後に総評を行い、必要な場合は個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
個々の練習と合わせを授業前に的確に行って準備しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて教員より指示する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み70%、課題発表（発表演奏会）30%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 室内楽研究Ｂ/Ｄｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　後期
月曜 2限
実務経験あり
演習（技術）

〔履修条件〕
楽譜を見たまま正確に演奏するだけでなく、作品にふさわしい様式感、演奏習慣等に興味を持ち、様々な角度から視野を広げたい者。
〔授業の概要〕
本授業では、バロック時代の音楽を題材とし、実践を通して学んでいく。時代の様式感とは何か。バロックの演奏習慣を音楽と結びつけて、音楽学的見知から、また現在の実践現場から見えてくる様々な方面からのアプローチを知り、アンサンブルを試みる。自分の専修以外の楽器や声楽との関わり、表現と演奏方法についても考える。
各回の内容は全てリンクしており、履修生の理解度、興味により授業内容の順序を変えていく可能性がある。演奏の実践を中心に進めるが、講義も取り入れながら総合的に学んでいく。

アンサンブルを組み、授業内でのレッスンを重ね、最後に発表を行う。
〔授業の到達目標〕
バロック時代の音楽の演奏法を理解、習得し、どのように演奏したらその作品が生きるかを自分で考えることができる。また、バロック時代の影響を受けているその後の作曲家への理解も深まり、あらゆる時代の音楽と関連付けることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　歴史的知識に基づく演奏とは
第 2 回　楽譜について
第 3 回　アンサンブル組み
第 4 回　バロック時代周辺の楽器について
第 5 回　演奏習慣について
第 6 回　通奏低音①
　　数字の理解
第 7 回　通奏低音②
　　基本形
第 8 回　アンサンブル中間発表
第 9 回　装飾法①
　　フランス様式
第 10 回　装飾法②
　　イタリア様式
第 11 回　舞曲、組曲について
第 12 回　当時の文献を読む
第 13 回　音楽修辞学について
第 14 回　アンサンブル仕上げ
第 15 回　発表
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業演奏時に個別、グループにアドバイス、フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
アンサンブル曲の情報収集を図書館等を利用して、自分なりにやってくること。
個人練習、グループでの練習を十分にしてくること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
プリントを配布。
授業内で参考書を紹介する。
〔成績評価〕
授業への取り組み50％、理解度25％、演奏の成果25％とし、総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（積極的に取り組み、知識を自分のものにし、演奏に成果が表れる）
A　総合点80点以上の者（積極的に取り組み、理解を深めようとし、演奏に変化が見られる）
B　総合点60点以上の者（積極的に取り組み、演奏に生かそうとする）
C　総合点50点以上の者（程よく取り組み、程よく演奏する）
D　総合点50点未満の者（取り組む姿勢に欠け、演奏の変化が見られない）
〔科目ナンバリング〕
MUS2242MA/MUS4242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 歌曲研究Ａ / Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
木曜 4限
実務経験なし
演習（技術）

松井 康司

〔履修条件〕
特になし。
〔授業の概要〕
詩人の思いが言葉を通して詩となり、さらに作曲家がその詩に共感して音にする。そしてその詩と音楽を演奏家が感じ、表現して、聴衆の心に訴える。歌曲が聴衆の耳に届くまでにはこれだけ様々な人の心を通っていくのである。歌曲の奥深さはここにある。
この授業ではドイツ歌曲・日本歌曲を題材に、歌曲をどのように解釈し、演奏したら良いかを研究する。楽譜に込められた詩人や作曲家の思いを正しく受け止め自分自身の表現に結びつけること、またアンサンブルをする上で大切なこと等、受講者自身による演奏を通じて実践的に研究を進めて技能、表現を高めていく。
また歌とピアノの組み合わせにとどまらず、本学の専修を生かし、他の弦・管楽器あるいは和楽器とのコラボレーションも随時取り上げる。
〔授業の到達目標〕
• 歌曲の歴史と変遷を学び、その時代の芸術・音楽文化と関連付けてより楽曲についての理解を深めることができる。
• 歌曲の解釈・分析を深め、楽曲に込められた詩人・作曲家の思いを正しく理解し、自身の表現に結びつけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入　日本歌曲について
　　履修者の専修楽器が決まらないと取り上げる曲を決めることはできない。曲を決定してからの授業の流れは下記の通りである。
第 2 回　日本歌曲の歴史と変遷①
第 3 回　日本歌曲の歴史と変遷②
第 4 回　日本歌曲課題曲検討
第 5 回　日本歌曲の分析および実習
第 6 回　日本歌曲の分析および実習
第 7 回　日本歌曲の分析および実習
第 8 回　日本歌曲の分析および実習
第 9 回　日本歌曲の分析および実習
第 10 回　日本歌曲の分析および実習

第 11 回　課題曲発表
第 12 回　課題曲発表
第 13 回　課題曲発表
第 14 回　課題曲発表
第 15 回　まとめ
第 16 回　ドイツ　ドイツ歌曲について
第 17 回　ドイツ歌曲の歴史と変遷①
第 18 回　ドイツ歌曲の歴史と変遷②
第 19 回　ドイツ歌曲課題曲検討
第 20 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 21 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 22 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 23 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 24 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 25 回　ドイツ歌曲の分析および実習
第 26 回　課題曲発表
第 27 回　課題曲発表
第 28 回　課題曲発表
第 29 回　課題曲発表
第 30 回　まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生の演奏に対して、随時フィードバックを行う。

〔授業時間外の学習〕
翌週取り上げる曲を各自必ず譜読みをし、曲の内容を理解してから授業に臨むこと。
これらの学修120時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
ヴィオーラ「ドイツ・リートの歴史と美学」（音楽之友社）
フィッシャー・ディースカウ「シューベルトの歌曲をたどって」（白水社）
塚田佳男選曲・構成「日本歌曲百選　詩の分析と解釈」（音楽之友社）

〔成績評価〕
成績評価については、授業態度40％、課題50％、テスト10％にて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、歌唱能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・歌唱能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、学期課題未提出者、歌唱能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2243MA/MUS4243MA

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## オペラ実習Ａ/Ｂ[演奏]

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
月曜 4限
実務経験なし
実習（卒業試験など）
単位は[演技]と併せて４

布施 雅也

〔履修条件〕
声楽を履修していることを条件とする。
コレペティトゥーアの養成としてピアノ専修の学生も受け入れる。
その他専修、他専攻の希望者は要相談。

〔授業の概要〕
・オペラは演劇・音楽・美術が融合した総合舞台芸術である。
・演劇の「台詞」はオペラにおいては「歌」になっている。オペラを歌うためには、台詞（言葉）を音楽に乗せて正しく伝える技術を身につけなくてはならない。
・本授業ではオペラの代表的歌唱様式の一つである、レチタティーヴォの基礎とアンサンブル（重唱）を学んでいく。
・オペラ作品から短いシーンを取り上げ、最終授業時に簡易な演技をつけたアンサンブル試演会を行う。

〔授業の到達目標〕
• 身体表現を伴った歌唱表現を身につけることができる。(動きながら歌うことの基礎を作る)
• 音楽（歌唱・演奏）を通してのコミュニケーションの取り方を学ぶ。
• 作品の内容を理解し（時代背景等も含む)、表現に生かすことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション・試聴会・演目決め
　視聴会を行い、演目を決める。
　※授業内容に関しては進行具合により、多少の前後がある旨の説明。
第 2 回　音楽稽古①
　個人稽古Ⅰ
第 3 回　音楽稽古②
　個人稽古Ⅱ
第 4 回　音楽稽古③
　レチタティーヴォ講義・実践
第 5 回　音楽稽古④
　個人稽古Ⅲ
第 6 回　音楽稽古⑤
　アンサンブル稽古Ⅰ
第 7 回　音楽稽古⑥
　アンサンブル稽古Ⅱ
第 8 回　音楽稽古⑦
　アンサンブル稽古Ⅲ←暗譜稽古
第 9 回　音楽稽古⑧
　アンサンブル稽古Ⅳ←音楽通し稽古
第 10 回　立ち稽古Ⅰ

舞台の設定、動線の確認
第 11 回　立ち稽古Ⅱ
内容を理解し、表現者として舞台に立つ
第 12 回　立ち稽古Ⅲ
内容を理解し、表現者として舞台に立つ
第 13 回　通し稽古Ⅰ
荒通し
第 14 回　通し稽古Ⅱ
ゲネプロ
第 15 回　試演会（試験）
授業の総括としての発表を行い、振り返りと総評を行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 毎回授業の際に個別・グループに対して指導、フィードバックを行う。
• 試演会後に総括を行う。

〔授業時間外の学習〕
• 課題となった作品について、作曲家・時代背景等を調べておく。（映像資料等で作品を必ず試聴しておくこと）
• 自分の課題以外の作品についても楽譜・資料を用意し、上記項目のように準備しておくこと。
• 授業を円滑に進めるために、各自十分に個人稽古・アンサンブル稽古をしておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50％、試演会（実技試験）50％の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90％以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80％以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60％以上の者（授業内容の理解、演奏・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50％以上の者（授業内容の理解、演奏・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50％未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏・課題への取り組み、受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS1540MA/MUS3540MA

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## オペラ実習Ａ/Ｂ[演技]

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期
金曜 2限
実務経験なし
実習（卒業試験など）
単位は[演奏]と合わせて４

柴田 千絵里

〔履修条件〕
声楽を履修していることを条件とする。
コレペティトーアの養成としてピアノ専攻の学生を若干名受け入れる。
その他の専修、他専攻の希望は要相談。

〔授業の概要〕
オペラの上演では、多くの人が関わり 1 つの作品を創り上げていく。 1 人 1 人の責任感、協調性が必要である。それは歌い、演じることと同じく大切なことである。
この授業では、作品を上演するにあたり、何が必要で、どのように創られてゆくのかを実体験を通して学ぶ。全授業に出席する覚悟を持って履修してもらいたい。

〔授業の到達目標〕
• 身体表現を伴う歌唱表現を身につけることができる。
• 課題を自分で研究し、指示された通りだけでなく、自ら考え動くことができる。
• 作品を深く理解し、歌唱に活かすことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　前に出て立つ（空間を把握する）
前期は、台詞のある課題や、舞台に立つための基本を学んでいく。
※授業内容に関しては、進行具合により多少前後することがある。
第 2 回　身体表現・課題（1）配布
課題（1）を読む
第 3 回　授業内で発表①
課題（1）の発表／前半
第 4 回　授業内で発表②
課題（1）の発表／後半
第 5 回　身体表現・課題（2）配布
課題（2）を読む
第 6 回　授業内で発表③
課題（2）の発表／前半
第 7 回　授業内で発表④
課題（2）の発表／後半
第 8 回　身体表現・課題（3）配布
課題（3）を読む
第 9 回　授業内で発表⑤
課題（3）の発表／前半
第 10 回　授業内で発表⑥
課題（3）の発表／後半
第 11 回　身体表現・最終課題の配布
課題を読む

第 12 回　授業内で稽古①
　　立ち位置の確認等
第 13 回　授業内で稽古②
　　全体の流れを把握して、自分の役割をしっかり理解する。
第 14 回　授業内で稽古③
　　通し稽古
第 15 回　振り返りと総括、ディスカッション
　　授業内で発表した後、今後の取り組みに活かすための振り返りとディスカッションを行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題発表の後に振り返りとして総評を行い、個々へ良い点・改善点を伝える。

〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題の研究。
• 必要と感じたら、自分の小道具や衣装は自ら準備すること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
授業時に台詞の課題を配布する。

〔成績評価〕
授業への取り組み30％、課題の成果40％、表現者としての真摯な姿勢30％にて総合評価する。
Ｓ　総合評価90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合評価80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合評価60点以上の者（授業内容を理解し、課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合評価50点以上の者（授業内容の理解・取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合評価50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、授業への取り組みが不十分だった者、授業態度に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS1541MA/MUS3541MA

〔学位授与方針との関係〕
②、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
―

## オペラ実習Ａ/Ｂ[上演]

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　後期
金曜 2限
実務経験なし
実習（卒業試験など）

柴田 千絵里、布施 雅也

〔履修条件〕
前期の「オペラ実習A ／ B［演奏］［演技］」の単位を取得していることを条件とする。
声楽以外の専修、コレペティトゥーアの養成としてピアノ専修の学生を含め、その他専修、他専攻の希望者は要相談。

〔授業の概要〕
オペラをはじめ舞台芸術作品は演者・奏者以外にも多くの人が関わり、ひとつの作品が創り上げられていく。そこでは一人一人の責任感・協調性が必要であり、それは歌い演じることと同じ位に大切なことである。
この授業では舞台作品がどのようにして創り上げられていくのか、何が必要であるのかを実体験を通して学んでいく。
全授業に出席する意志を持って履修することが望ましい。欠席が多い場合は途中で失格とすることもある。

〔授業の到達目標〕
• 演技・芝居をしながら自然に歌唱を行えるようにする。
• 演奏と実技・芝居の両側面において、どちらに偏ることなく表現できるようにする。
• 観客に自身のパフォーマンスを最も良い形で観せるために必要なものを学ぶ。
• 試演会という一つのプロダクション制作に関わることで、社会で必要な人間関係の構築を学ぶことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション ・音楽稽古①
　　前期の「オペラ実習A ／ B［演奏］［演技］」で学んだことを基本に、学生主体で舞台作品を創り上げていくことを学ぶ。
　　※ 後期の試演会に向けては、追加稽古を行う。授業の合計回数は15回を越える。
　　※授業内容に関しては進行具合により、変更する場合がある。
　　上記の説明。
第 2 回　音楽稽古②
　　アンサンブル稽古
　　作品解釈、舞台語発音等含む。
第 3 回　音楽稽古③
　　アンサンブル稽古
　　作品解釈、舞台語発音等含む。
第 4 回　音楽稽古④
　　アンサンブル稽古
　　暗譜確認稽古
　　翌週から立ち稽古の見通しをつける。
第 5 回　立ち稽古①

シーン稽古
芝居の台詞の読み合わせ、荒立ちをしながらの音楽稽古
第 6 回　立ち稽古②
シーン稽古
芝居の台詞の読み合わせ、荒立ちをしながらの音楽稽古
第 7 回　立ち稽古③
シーン稽古
芝居の台詞の定着、演技をしながらの音楽稽古
第 8 回　立ち稽古④
シーン稽古
芝居の台詞の定着、演技をしながらの音楽稽古
第 9 回　立ち稽古⑤
シーン稽古
演技をしながらの自然な歌唱を目指す。
第 10 回　立ち稽古⑥
部分通し稽古
音楽と芝居の自然な融合を目指す。
第 11 回　立ち稽古⑦
部分通し稽古
音楽と芝居の自然な融合を目指す。
第 12 回　立ち稽古⑧
部分通し稽古
音楽と芝居の自然な融合を目指す。
第 13 回　通し稽古①
荒通し稽古
全体を通し、流れ・問題等を洗い出す。
第 14 回　音楽稽古⑤・立ち稽古⑩
前週の問題点を含めシーンごとの確認。
第 15 回　通し稽古②
試演会に向けてホール、観客を意識しての通し。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 毎回授業後に個別・グループに対して指導、フィードバックを行う。
• 試演会後に総括を行う。

〔授業時間外の学習〕
• 課題となる作品について、作曲家・時代背景等を調べておく。（映像資料等で作品を必ず試聴しておくこと）
• 自分の出演以外のシーンについても、楽譜・資料を用意しておくこと。
• 授業を円滑に進めるために、十分に個人稽古・アンサンブル稽古をしておくこと。
• 試演会で使用する衣装・小道具・舞台装置等の準備をすること。
これらの学修に60時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必要な資料は授業時に配布する。

〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、試演会（実技試験）50%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90%以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80%以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60%以上の者（授業内容の理解、演奏・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50%以上の者（授業内容の理解、演奏・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50%未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏・課題への取り組み、受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2540MA/MUS4540MA

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
○

〔キャップ対象外〕
—

## 邦楽アンサンブル研究Ａ/Ｂ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
4単位　通年
火曜 5限
実務経験なし
演習（技術）
必修
日本音楽専修必修

花岡 操聖

〔履修条件〕
日本音楽専修は必修。

〔授業の概要〕
余韻が延びる楽器とそうでない楽器、発音が遅れがちな楽器など、邦楽器はそれぞれ様々な個性を持っている。各々の楽器の特性を認識して、その楽器の良い個性を伸ばしながら合奏する。合奏を積み重ねる中で、お互いのパートを聴き合い呼応し合うアンサンブル力を体得する。

〔授業の到達目標〕
楽譜を正しく読むことだけでなく、楽譜には書ききれていない風景などをイメージし、曲を構成する力を養う。

〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
学生との意見交換を行い、学生の希望も取り入れながら前期の選曲を行う。
第 2 回　古典曲
例「八千代獅子」
第 3 回　古典曲
例「八千代獅子」
第 4 回　古典曲
例「五段砧」
第 5 回　古典曲
例「五段砧」
第 6 回　明治時代の作品
作曲家例「宮城道雄」「中能島欣一」
第 7 回　明治時代の作品
作曲家例「宮城道雄」「中能島欣一」

第 8 回　1960年代の作品
作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」ほか
第 9 回　1960年代の作品
作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」ほか
第 10 回　1960年代の作品
作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」ほか
第 11 回　1960年代の作品
作曲家例「藤井凡大」「間宮芳生」「廣瀬量平」ほか
第 12 回　1970年代の作品
作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 13 回　1970年代の作品
作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 14 回　1970年代の作品
作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 15 回　1970年代の作品
作曲家例「長沢勝俊」「池辺晋一郎」「三木稔」「入野義郎」ほか
第 16 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 17 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 18 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 19 回　1980年代の作品
作曲家例「沢井忠夫」「唯是震一」「船川利夫」「大政直人」ほか
第 20 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 21 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 22 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 23 回　1990年代の作品
作曲家例「千秋次郎」「牧野由多可」「金光威和雄」「諸井誠」ほか
第 24 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 25 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 26 回　2000年代の作品
作曲家例「秋岸寛久」「福嶋頼秀」「神坂真理子」ほか
第 27 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 28 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 29 回　2010年代の作品
作曲家例「高橋久美子」「松尾祐孝」「川崎絵都夫」ほか
第 30 回　まとめ

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内で演奏する場合は、総評を行う。
演奏しない場合も、学生の曲解釈に対し、総評を行う。

〔授業時間外の学習〕
授業内で演奏する場合は譜読み・練習を必ず行う。
演奏に参加しない週は、スコア譜を予習しておくこと。
これらの学修に120時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
必要に応じて、教員より指示する。

〔成績評価〕
成績評価については、積極的な授業への取り組み（準備予習50％、成果50％）の結果を、総合的に評価する。
※遅刻厳禁。評価に含む。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容への理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2245MA/MUS4245MA

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
―

## オーケストラ・スタディC/D

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）
必修
弦楽器専修必修

野口 千代光

〔履修条件〕
弦楽器専修者必修。
〔授業の概要〕
後期「合奏」授業への準備段階とする。
• オーケストラプレイヤーとしての心がまえ、事前準備の重要性の認識。各自の練習、スコアの用意、音源等も聴き、作品を理解して臨む。
• 演奏するためのテクニックやアンサンブル能力を習得する。パートごと、時に一人ずつの演奏を課しながら、個人、セクションの責任を高める。それぞれのパートを把握し、ひとりひとりがオーケストラ全体を捉えら
れるようにする。
〔授業の到達目標〕
• オーケストラを通して、個人の、そしてアンサンブルの技術の向上。
• 全員で1つの作品を作り上げる喜びを知ることができる。
〔授業計画〕
曲目は4月に発表する。
11月定期演奏会（オーケストラ）の演奏曲目を課題とする。毎回の練習スケジュールを作り、進める。しかし、進行状況により、適宜スケジュールを調整するものとする。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内演奏時、アンサンブル全体への指導、必要に応じてパート指導、個別指導を丁寧に行う。
〔授業時間外の学習〕
課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。
可能であれば、コンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。
授業を受ける前に個々がしっかり個人練習をし、スコアを準備して楽曲の成り立ちを勉強することを必須とする。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
楽譜を配布する。
演奏曲目のスコア、音源を準備すること。
〔成績評価〕
成績評価については、曲の事前準備10％、受講態度50％、演奏成果40％の結果を総合的に判断する。
S　授業内容をよく理解して自らのパートのみならず、他のパートをしっかり把握してアンサンブル奏者としての力を発揮できる者
A　自らのパートは把握できているものの、他のパートを把握することにおいて一層の努力が求められ、その能力向上が見込まれる者
B　ところどころに技術向上、改善努力が必要に思われるが、後期「合奏」においてアンサンブル能力と技術向上が見込まれる者
C　後期「合奏」授業において何とかついていけるレベル、もしくは相当の個人的努力を求められる者
D　後期「合奏」授業についていける能力が見込まれない者

〔科目ナンバリング〕
MUS1242MA/MUS3242MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 合奏C/D

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）
必修
弦楽器専修必修

野口 千代光、永井 由比

〔履修条件〕
弦楽器専修者必修。
前期授業「オーケストラ・スタディ」の単位を修得した者。弦楽器専修者以外についてはオーディション等で選出された者。
〔授業の概要〕
清水醍輝氏を指揮者にお迎えして、11月の定期演奏会本番に向けて、約6日間の集中リハーサルが行われる。個々の役割、楽器セクションの一体感を認識しながら、オーケストラとしての大きな表現の可能性を体得する。授業内の演奏のみならず、オーケストラ授業、演奏会へ向けた準備を、協力体制を持って行うことも重要とする。
〔授業の到達目標〕
オーケストラのリハーサルを通して、全員で演奏会に向けて、それぞれの曲の完成度を高めることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オーケストラガイダンス／リハーサル①
　　オーケストラ授業に対する心がまえ、様々な準備等についての確認
第 2 回　リハーサル②
　　毎回のリハーサルスケジュールは、進行状況により、指揮者の判断で適宜調整するものとする。
第 3 回　リハーサル③
第 4 回　リハーサル④
第 5 回　リハーサル⑤
第 6 回　リハーサル⑥
第 7 回　ゲネプロ・本番

定期演奏会当日：ゲネプロ・本番
第 8 回　反省会
演奏会録画を鑑賞しながら演奏について振り返りをしながら演奏の検証、意見交換を行う。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内演奏時、アンサンブル全体への指導、必要に応じてパート指導、個別指導を丁寧に行う。

〔授業時間外の学習〕
課題曲の作曲者について調べ、そして他の作品も聴いてみる。可能であればコンサート会場に足を運び、生のオーケストラの演奏を聴いてみる。
授業を受ける前に個々がしっかり個人練習をし、スコアを準備して楽曲の成り立ちを勉強することを必須とする。
これらの学修に30時間以上を要する。

〔教科書・参考書等〕
楽譜を配布する。演奏曲目のスコア、音源を準備すること。

〔成績評価〕
成績評価については、受講態度、演奏成果の結果を総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）

〔科目ナンバリング〕
MUS2246MA/MUS4246MA

〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー

〔キャップ対象外〕
—

## ギター・アンサンブルC/D

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
2単位　通年
木曜 3限
実務経験あり
演習（技術）
必修
ギター専修必修

佐藤 紀雄

〔履修条件〕
ギター専修者必修。
ギター専修者のみ履修可とする。

〔授業の概要〕
古典から現代までのギターアンサンブル作品、編集作品に加え学生自身の作品、編曲による作品等を取り上げる。独奏楽器であるギターの修得課程でアンサンブルの経験や技術を磨く機会を得ることは特に重要であり、将来様々な楽器とのアンサンブルに役立ててもらいたい。その経験を活かし各自の音楽活動の幅を広げてもらいたい。

〔授業の到達目標〕
年２回の自主的発表会に向けて、課題曲の演奏を完成させる。その練習の課程で様々な時代の様式を同時に学ぶことができる。アンサンブルを行う上で何が必要な技術かを知ることができる。

〔授業計画〕
第 1 回　カルメン組曲①
必要な技術を確認し、習得へ向けた計画づくり
第 2 回　カルメン組曲②
各パート毎の達成状況を見る
第 3 回　カルメン組曲③
アンサンブルの難所を集中して練習する
第 4 回　カルメン組曲④
各曲がオペラのどのような場面で使われているかを調べる
第 5 回　カルメン組曲⑤
①～④を踏まえて表現方法を追究していく
第 6 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲①
いくつかの独特の奏法の演奏法を確認する
第 7 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲②
各パートずつ互いに聴き合い理解しておく
第 8 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲③
アンサンブルの中で各パートの役割を確かめ合う
第 9 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲④
オペラについて調べ、各エピソードが出てくる場面を理解する
第 10 回　ロッシーニ「泥棒かささぎ」序曲⑤
息の長いフレーズ起伏の激しさを表現する
第 11 回　バンドゥークイッカン①
各パートの難所の練習課題を見つける
第 12 回　バンドゥークイッカン②
各パート同士の役割を理解する
第 13 回　バンドゥークイッカン③
ラテンアメリカ独特のリズムについて調べ、リズムの練習をする
第 14 回　バンドゥークイッカン④
ラテンアメリカのリズムが作品の中でどのように応用されているかを試す
第 15 回　バンドゥークイッカン⑤
11 ～ 14を踏まえて表現を実現する
第 16 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」①
各パートを練習
第 17 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」②
二組みずつで合わせて他を聞く

第 18 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」③
現代の作曲様式の影響を理解する
第 19 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」④
特殊なアンサンブルを理解する
第 20 回　レオ・ブローウェル「雨のあるキューバの風景」⑤
様々な演奏形態を試す
第 21 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」①
多くあるパートの難所を練習する
第 22 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」②
複雑に絡み合った所を理解する
第 23 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」③
全体を通して流れをつかむ
第 24 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」④
この作品の成立の課程を調べ、このワルツの特性を理解する
第 25 回　ラヴェル「ラ・ヴァルス」⑤
めまぐるしく変化するテンポを表現できるようにする
第 26 回　ヴィヴァルディー四季より「春」①
この曲に必要な技術を準備する
第 27 回　ヴィヴァルディー四季より「春」②
各パート毎に弾いて役割を理解する
第 28 回　ヴィヴァルディー四季より「春」③
テンポの激しい変化を皆で理解し練習する
第 29 回　ヴィヴァルディー四季より「春」④
バロック音楽の特徴を調べ、合わせた表現
第 30 回　ヴィヴァルディー四季より「春」⑤
作品の中での自然の描写を豊かに再現する

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演奏上、またはモチベーションの上で問題を抱えている学生には、個々に面談し解決する方法を探してゆく。一方でアンサンブルの上での問題を発見した場合は、皆で話し合う。
〔授業時間外の学習〕
あらかじめ課題についての知識を得、また技術的に足りない箇所を準備しておく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
課題曲の楽譜と参考資料
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み30％、課題への取り組み30％、期末試験40％にて総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2247MA/MUS4247MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 室内楽特設クラスＡ/Ｃ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
室内楽作品を深く掘り下げて研究したい、アンサンブルに意欲的な学生。
※芸術科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを修得、もしくは専攻科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを履修していることを条件とする。
〔授業の概要〕
弦楽器・管楽器・ピアノを含む室内楽曲（デュオ・ピアノトリオ・ピアノカルテット等）を中心に取り上げ、演奏助手の協力のもと、アンサンブル能力の向上を目指す。非常に柔軟性のある形態を持ち、半期につき、５回程度個人レッスンの形で授業を行う。他の室内楽クラスを履修しつつ受講することも可能で、同じ曲目を別の観点から学ぶことも、良い勉強になるだろう。経験の有無や量を問わずに履修できるという利点があり、半期の間は同じメンバーで、お互いを理解し共演者と共に音楽を作り上げていく。
主として担当教員が指導に当たるが、必要に応じてアンサンブル指導員（弦楽器・管楽器等）のレッスンを受講することもある。
受講希望者は、メンバー確定後履修登録をし、受講曲が決まり次第早目に担当教員に申し出ること。具体的な日程等については、演奏員とも相談の上、後日掲示する。前期受講希望者多数の場合は、後期に履修変更となることもあり得る。
〔授業の到達目標〕
共演者としてお互いを信頼し合い、ひとりひとりが積極的に音楽作りに参加できる。
〔授業計画〕
基本的には、各グループの希望曲（複数も可）を取り上げる。レッスンの進め方については、臨機応変に対応したい。たとえば、経験の少ないグループの場合は各楽器の特徴の理解や、基本的な合わせ方等から入り、選曲のアドバイス等も行う。定期演奏会のオーディション参加を希望するグル

ープは、より深く音楽を掘り下げ、説得力のある演奏を目指す。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
レッスンに向けて、お互い迷惑にならないように、各自十分に練習を積んでおくこと。受講曲目についても、深く調べておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
各自事前準備60％、受講態度40％にて総合的に判断する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（事前準備が十分で学習意欲が強く認められ、各種コンサートに出演した者）
Ａ　総合点が80点以上の者（事前準備が十分で学習意欲が強く認められた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（事前準備、学習意欲が中程度の者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（事前準備、学習意欲が不十分と思われる者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業（レッスン）への取り組み、受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1241MA/MUS3241MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
○
※芸術科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを修得、もしくは専攻科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを履修していることを条件とする。
〔キャップ対象外〕
―

## 室内楽特設クラスB/Ｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
室内楽作品を深く掘り下げて研究したい、アンサンブルに意欲的な学生。
※ 芸術科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを修得、もしくは専攻科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを履修していることを条件とする。
〔授業の概要〕
弦楽器・管楽器・ピアノを含む室内楽曲（デュオ・ピアノトリオ・ピアノカルテット等）を中心に取り上げ、演奏助手の協力のもと、アンサンブル能力の向上を目指す。非常に柔軟性のある形態を持ち、半期につき、５回程度個人レッスンの形で授業を行う。他の室内楽クラスを履修しつつ受講することも可能で、同じ曲目を別の観点から学ぶことも、良い勉強になるだろう。経験の有無や量を問わずに履修できるという利点があり、半期の間は同じメンバーで、お互いを理解し共演者と共に音楽を作り上げていく。
主として担当教員が指導に当たるが、必要に応じてアンサンブル指導員（弦楽器・管楽器等）のレッスンを受講することもある。
受講希望者は、メンバー確定後履修登録をし、受講曲が決まり次第早目に担当教員に申し出ること。具体的な日程等については、演奏員とも相談の上、後日掲示する。前期受講希望者多数の場合は、後期に履修変更となることもあり得る。
〔授業の到達目標〕
共演者としてお互いを信頼し合い、ひとりひとりが積極的に音楽作りに参加できる。
〔授業計画〕
基本的には、各グループの希望曲（複数も可）を取り上げる。レッスンの進め方については、臨機応変に対応したい。たとえば、経験の少ないグループの場合は各楽器の特徴の理解や、基本的な合わせ方等から入り、選曲のアドバイス等も行う。定期演奏会のオーディション参加を希望するグループは、より深く音楽を掘り下げ、説得力のある演奏を目指す。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
レッスンに向けて、お互い迷惑にならないように、各自十分に練習を積んでおくこと。受講曲目についても、深く調べておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
各自事前準備60％、受講態度40％にて総合的に判断する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（事前準備が十分で学習意欲が強く認められ、各種コンサートに出演した者）
Ａ　総合点が80点以上の者（事前準備が十分で学習意欲が強く認められた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（事前準備、学習意欲が中程度の者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（事前準備、学習意欲が不十分と思われる者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業（レッスン）への取り組み、受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2244MA/MUS4244MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
○
※芸術科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらか

を修得、もしくは専攻科音楽専攻科目「第二実技」「副科実技」のどちらかを履修していることを条件とする。
〔キャップ対象外〕
―

## 伴奏C（1）/D（1）

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生のみ履修可。
〔授業の概要〕
前期・後期とも同一学生との５回以上の第一実技レッスン時の伴奏および演奏発表（実技試験・学内演奏会・修了演奏会）を以って各々単位認定を行う。
“伴奏受講票”を使用のこと。
〔授業の到達目標〕
様々な楽器に関心を持ち、「伴奏」という立場に責任を持ち、意欲的にアンサンブルを作り上げることができる。そこで得た経験を試験、演奏会という場につなげることができる。
〔授業計画〕
各々の実技担当教員のレッスン計画による。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2248MA/MUS4248MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 伴奏C（2）/D（2）

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
ピアノ専修の学生のみ履修可。
〔授業の概要〕
前期・後期とも同一学生との５回以上の第一実技レッスン時の伴奏および演奏発表（実技試験・学内演奏会・修了演奏会）を以って各々単位認定を行う。
“伴奏受講票”を使用のこと。
〔授業の到達目標〕
様々な楽器に関心を持ち、「伴奏」という立場に責任を持ち、意欲的にアンサンブルを作り上げることができる。そこで得た経験を試験、演奏会という場につなげることができる。
〔授業計画〕
各々の実技担当教員のレッスン計画による。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
「伴奏」はパートナーとしての重要な役割を持つので、初回のレッスンまでに十分な練習を積んでおくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2248MA/MUS4248MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤

〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 伴奏研究Ａ/Ｃ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
学内試験、学内演奏会等でピアノ（伴奏）を担当する学生。
〔授業の概要〕
主としてピアノと弦楽器または管楽器のデュオ作品を扱う。学内試験の伴奏を担当するピアノの学生が、パートナーの実技担当教員のレッスンだけでなく、ピアノ専任教員からもレッスンを受け、助言を得ることで、伴奏にとどまらない「共演ピアニスト」としての自覚を持って、より積極的にふたりで音楽を創り上げていけるようなデュオを目指す。授業はレッスン形式で行い、５回程度のレッスン受講とパートナーの学内試験や学内演奏会での演奏を以って単位を認定する。受講希望者は、予め履修登録をした後、パートナーと受講曲が決まり次第届け出ること。
具体的な日程については、後日掲示発表する。
〔授業の到達目標〕
共演者としての役割をしっかり認識し、責任を持ってパートナーと共に学び、音楽を作り上げることができる。
〔授業計画〕
前期は、５月中旬を目途にパートナー・受講曲を決定し、５月末～７月にレッスンを受ける。
授業時間は、他の授業と重ならないよう、６限目（17:30以降）や土曜日等に設定する。
必要に応じて、ピアノパートのみのレッスンも行うが、原則として、パートナーと一緒に出席すること。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
大事な試験や学内演奏会に向けての科目となるので、個人練習を十分に行なっておくこと。また、演奏曲目の内容についても深く理解しておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
各自用意。教員用の楽譜（コピー可）も準備すること。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み、本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み、本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1243MA/MUS3243MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
ー

## 伴奏研究Ｂ/Ｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
１年生　２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
学内試験、学内演奏会等でピアノ（伴奏）を担当する学生。
〔授業の概要〕
主としてピアノと弦楽器または管楽器のデュオ作品を扱う。学内試験の伴奏を担当するピアノの学生が、パートナーの実技担当教員のレッスンだけでなく、ピアノ専任教員からもレッスンを受け、助言を得ることで、伴奏にとどまらない「共演ピアニスト」としての自覚を持って、より積極的にふたりで音楽を創り上げていけるようなデュオを目指す。授業はレッスン形式で行い、５回程度のレッスン受講とパートナーの学内試験や学内演奏会での演奏を以って単位を認定する。受講希望者は、予め履修登録をした後、パートナーと受講曲が決まり次第届け出ること。
具体的な日程については、後日掲示発表する。
〔授業の到達目標〕
共演者としての役割をしっかり認識し、責任を持ってパートナーと共に学び、音楽を作り上げることができる。
〔授業計画〕
後期は、11月中旬を目途にパートナー・受講曲を決定し、11月末～２月にレッスンを受ける。
授業時間は、他の授業と重ならないよう、６限目（17:30以降）や土曜日等に設定する。
必要に応じて、ピアノパートのみのレッスンも行うが、原則として、パートナーと一緒に出席すること。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
演習発表時にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
大事な試験や学内演奏会に向けての科目となるので、個人練習を十分に行なっておくこと。また、演奏曲目の内容に

ついても深く理解しておくように。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
各自用意。教員用の楽譜（コピー可）も準備すること。
〔成績評価〕
事前準備60％、本番演奏40％にて総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で本番での演奏が公演および実技試験の質を高めた者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（本番までの取り組み、本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（本番までの取り組み、本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2249MA/MUS4249MA
〔学位授与方針との関係〕
④、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 海外特別演習Ｃ / Ｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
2単位　前期集中
実務経験なし
演習（技術）

柏原 佳奈、井上 由紀

〔履修条件〕
研修旅行に参加して学ぶ意欲の高い者。
〔授業の概要〕
ハンガリー・ブダペストのリスト音楽院にて、1 週間のレッスン研修を行う。
後半は、作曲家ゆかりの地を訪れ音楽家の業績を辿ることにより、現実全般の知識・教養を深める。
〔授業の到達目標〕
内容の濃い充実した旅行とする。そのためには早くから個人の実技練習を十分に積んでおく。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　旅行会社による説明会①
第 3 回　訪問都市についての勉強会①
第 4 回　訪問都市についての勉強会②
第 5 回　旅行会社による説明会②
第 6 回　訪問都市についての勉強会③
第 7 回　受講曲による試演会
第 8 回　研修旅行
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
訪れる街の歴史や関係する作曲家について、深く学んでおく。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
必要に応じて指示する。
〔成績評価〕
事前授業への取り組み30％、研修中の取り組み50％、レポート20％で総合的に判断する。
S　総合点90点以上の者（事前授業の内容を深く理解し、研修旅行に積極的に参加し、レッスンへの取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点80点以上の者（事前授業の内容を理解し、研修旅行に積極的に参加し、レッスンへの取り組みが的確だった者）
B　総合点60点以上の者（事前授業の理解、レッスンへの取り組みが良好だった者）
C　総合点50点以上の者（事前授業の理解、レッスンへの取り組みが不十分だった者）
D　総合点50点未満の者（事前授業の内容を理解しなかった者、レポート未提出者、レッスンへの取り組み・受講態度に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS1244MA/MUS3244MA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 特別講義（音楽）

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生
1単位　集中
実務経験なし
講義
必修

布施 雅也

〔履修条件〕
専音 1 必修。（専音 2 も選択授業として履修可能）
〔授業の概要〕
音楽を通しての仕事という観点から、コンサートホールの舞台機構、ホールスタッフの仕事について、前期・後期にゲストをお招きし 4 コマずつ講義を頂く。
この授業を通して自らの教養と音楽経験を深め、時代に即した音楽活動を展開し、いかにして現代社会に還元していけるかを考察していく。
〔授業の到達目標〕
コンサート制作に必要な知識や舞台機構、ホールスタッフの仕事についての知識を得て、自分の専門と結びつけていけるような思考を身につけることができる。

演奏家として舞台に立つために必要な知識を得ることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　コンサートホールの舞台機構とホールスタッフの仕事について
前期集中講義期間
第 2 回　コンサートホールの舞台機構とホールスタッフの仕事について
前期集中講義期間
第 3 回　コンサートホールの舞台機構とホールスタッフの仕事について
前期集中講義期間
第 4 回　コンサートホールの舞台機構とホールスタッフの仕事について
前期集中講義期間
第 5 回　演奏会制作の仕事について
後期集中講義期間
第 6 回　演奏会制作の仕事について
後期集中講義期間
第 7 回　音楽マネージメントの仕事について
後期集中講義期間
第 8 回　演奏会制作の仕事について
後期集中講義期間
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポート提出後に、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
授業中に学んだことを図書館、インターネット等を使い実際にチェックすること。
これらの学修には30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
その都度配付。
〔成績評価〕
授業態度50％、課題50％にて総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者
A　総合点80点以上の者
B　総合点60点以上の者
C　総合点50点以上の者
D　総合点50点未満の者
〔科目ナンバリング〕
MUS2002MA
〔学位授与方針との関係〕
①、②
〔他専攻〕
○
〔キャップ対象外〕
―

## 特別演習Ｃ / Ｄ

専攻科 ＞ 音楽専攻
1 年生　2 年生
1単位　通年
実務経験なし
演習（技術）
必修
Ｃは必修

柏原 佳奈

〔履修条件〕
Ｃは全専修必修。
〔授業の概要〕
特別公開講座・公開講座・学内演奏会・定期演奏会・卒業演奏会の5つが特別演習の内容である。
特別公開講座は国内外で活躍している著名な演奏家などによる演奏を聞き、それについてのレポートを提出する。公開講座は卒業生を含むさまざまな演奏家による演奏会や講義を中心とする。定期演奏会は２夜で構成され、オーディションにより出演者を決める。学内演奏会は本科生は成績優秀者の出演、専攻科生は必須で全員出演する。卒業演奏会も成績優秀者による演奏会である。
これらの演奏会を聴講することで単位認定を行う。
〔授業の到達目標〕
音楽の勉強は自分自身の毎日の練習、訓練の積み重ねが大切なのはもちろんのことだが、現役で活動している音楽家や、一緒に学んでいる学生の演奏を聴くことから得るものの大きさもぜひ認識してほしい。様々な演奏、楽曲を聴くことにより、音楽の理解力を
さらに深めることができる。
〔授業計画〕
特別公開講座・公開講座・学外演奏会・学内演奏会などの日程・演目の詳細は、オリエンテーション時に発表するが、日程は変更となる場合や追加となる場合もあるので、常に掲示板やClassroomを確認すること。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
特別公開講座のみについては、レポートを提出後、個別にフィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
ゲストの音楽家や演奏される楽曲について調べ、理解を深める。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
特になし。
〔成績評価〕
全ての演目に出席することを前提とし、授業への取り組みとレポートにより評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（公演の内容を深く理解し、取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（公演の内容を理解し、取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（公演の内容を理解し、取り組みが良好だった者）

C　総合点が50点以上の者（公演の内容を理解し、取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（公演の内容を理解しなかった者、レポート未提出者、取り組み・受講態度等に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2201MA/MUS4201MA
〔学位授与方針との関係〕
②、④
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## コラボレイト実習C（1）/D（1）

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　前期集中
実務経験なし
実習（卒業試験など）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
専攻主任からの指名により履修できる。
〔授業の概要〕
専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会・卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、５回以上の稽古への参加と発表を以って単位認定を行う。
“コラボレイト実習受講票”を使用のこと。
なお、単位認定は、前期・後期１回ずつを限度とする。自らが与えられた場に対して関心を持ち、存在意義を考察し演奏表現に結びつけていくことが求められる。
〔授業の到達目標〕
• 演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶことができる。
• 音楽専攻の催しの場合には、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶことができる。
〔授業計画〕
第 1 回　打合せ
第 2 回　音楽のみの練習①
第 3 回　音楽のみの練習①
第 4 回　稽古への参加
　　１回が２コマ分
第 5 回　稽古への参加
　　１回が２コマ分
第 6 回　稽古への参加
　　１回が２コマ分
第 7 回　稽古への参加
　　１回が２コマ分
第 8 回　稽古への参加
　　１回が２コマ分
第 9 回　通し稽古
第 10 回　本番
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
音楽専攻・演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかなくてはならない。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
公演台本等、各公演により異なる。
〔成績評価〕
授業態度50％、課題50％にて総合的に評価する。
S　90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
A　80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
B　60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
C　50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
D　50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2551MA/MUS4551MA
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## コラボレイト実習C（2）/D（2）

専攻科 ＞ 音楽専攻
1年生　2年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習（卒業試験など）

柏原 佳奈

〔履修条件〕
専攻主任からの指名により履修できる。
〔授業の概要〕
専攻主任からの依頼により、演劇専攻の試演会・卒業公演あるいは、音楽専攻の催し等に演奏者として参加する場合、５回以上の稽古への参加と発表を以って単位認定を行う。
“コラボレイト実習受講票”を使用のこと。
なお、単位認定は、前期・後期１回ずつを限度とする。自らが与えられた場に対して関心を持ち、存在意義を考察し演奏表現に結びつけていくことが求められる。
〔授業の到達目標〕
• 演劇公演等に演奏者として参加する場合は、演劇における音楽の在り方を考え、学ぶことができる。
• 音楽専攻の催しの場合には、与えられた場で、自分の専門をどう活かすかを考え、学ぶことができる。

〔授業計画〕
第 1 回　打合せ
第 2 回　音楽のみの練習①
第 3 回　音楽のみの練習①
第 4 回　稽古への参加
　　1 回が 2 コマ分
第 5 回　稽古への参加
　　1 回が 2 コマ分
第 6 回　稽古への参加
　　1 回が 2 コマ分
第 7 回　稽古への参加
　　1 回が 2 コマ分
第 8 回　稽古への参加
　　1 回が 2 コマ分
第 9 回　通し稽古
第 10 回　本番
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
授業内の演奏に対して随時フィードバックを行う。
〔授業時間外の学習〕
音楽専攻・演劇専攻の公演に参加する重要な役割であるため、自ずと演出家や音楽監督の要望に応えるよう練習をしていかなくてはならない。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
公演台本等、各公演により異なる。
〔成績評価〕
授業態度50％、課題50％にて総合的に評価する。
Ｓ　90点以上の者（本番までの取り組みが的確かつ秀でた者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ａ　80点以上の者（本番までの取り組みが的確な者で、本番での演奏が公演の質を高めた者）
Ｂ　60点以上の者（本番までの取り組みが良好で、本番での演奏が良好だった者）
Ｃ　50点以上の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分だった者）
Ｄ　50点未満の者（本番までの取り組み・本番での演奏が不十分かつ受講態度に問題のある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS2551MA/MUS4551MA
〔学位授与方針との関係〕
②、③
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 楽曲分析［編曲］

専攻科 ＞ 音楽専攻
2 年生
2単位　前期
火曜 3限
実務経験なし
講義

たかの 舞俐

〔履修条件〕
特にないが、卒業後にも役立つ「編曲」を実習を通して習得したいという、興味や意欲があること。前期に学んだことで、さらに後期も知識を深めていくことができるため、できれば、前期、後期とも履修することが望ましいです。
〔授業の概要〕
この授業では、様々なジャンルの音楽を参考にしながら、編曲を学んでいきます。今まで学んできたことの復習や確認をしながら、まずメロディーに合うコードを付け、伴奏付けをしていくことを学びます。その後、ピアノ以外の楽器を含む編曲にもトライしてみます。編曲した作品は可能な限り、授業で実際に音出しをして体験的に学習してい来ます。
初心者から、さらに知識を広げていきたい方まで受講可能です。また、最初にアンケートをとり、可能な限り受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えています。
〔授業の到達目標〕
和声法やソルフェージュの基礎を必要に応じてもう一度確認しながら、卒業後の音楽活動に直接役立つような伴奏付けや編曲等を学んで実践的な力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション、ポップスとクラシックのコード進行の違い
　　※順序および内容は、履修者の希望や能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　様々な曲のメロディーにコード付けを試みる
　　実習例：ポップス作品や童謡や歌曲等
第 3 回　様々な曲のメロディーに対旋律を書くことを試みる
　　実習例：ポップス作品や童謡や歌曲等
第 4 回　様々な伴奏パターン①
　　実習 1 回目
第 5 回　様々な伴奏パターン②
　　実習 2 回目
第 6 回　簡単なピアノ曲を弦楽四重奏に編曲①
　　実習 1 回目
第 7 回　簡単なピアノ曲を弦楽四重奏に編曲②
　　実習 2 回目
第 8 回　簡単なピアノ曲を弦楽四重奏に編曲③
　　実習 3 回目
第 9 回　簡単なピアノ曲を木管五重奏に編曲①
　　実習 1 回目
第 10 回　簡単なピアノ曲を木管五重奏に編曲②
　　実習 2 回目

第 11 回　ジャズのコード進行／ジャズコードを用いた編曲
第 12 回　編曲実習①
　　各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する
第 13 回　編曲実習②
　　各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する
第 14 回　編曲実習③
　　各自、選んだ楽曲を自分の望む編成に編曲する
第 15 回　編曲作品発表、演奏（コンサート形式）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
編曲作品発表後、講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもある。
次の授業で見るので、各自学習しておくこと。
これらの学習に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で毎回プリントを配布。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度30％、学期内作品提出30％、作品発表40％の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、作品未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS3010MA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
—

## 楽曲分析［創作］

専攻科 ＞ 音楽専攻
2 年生
2単位　後期
火曜 3限
実務経験なし
講義

たかの 舞俐

〔履修条件〕
特にないが、何か自分の曲を作ってみたいという気持ちを持っている方はどなたでも履修できます。前期、後期とも履修することが望ましいですが、後期のみ履修も歓迎します。
〔授業の概要〕
この授業では、まずメロディーを書いてみることから始めて、作曲のノウハウを学んでいきます。作曲と聞くと、難しいものに思えるかもしれませんが、最初はふっと思いついた鼻歌のようなものでも立派に作曲の始まりです。それぞれの学生の個性を大事にしながら、まずは歌詞に合わせて歌を書いて行きます。作曲家の視点でアドバイスし、1曲仕上げて行きます。
和声が苦手でも、メロディーからステップアップして、徐々に曲を組み立て、作っていけるように学習していきます。クラッシックだけではなく、J-Popの音楽作品のメロディーなども参考にして理解を深めていきたいと思っています。
作曲した作品は可能な限り、授業で実際に音出しをして体験的に学習していきます。
初心者から、さらに知識を広げていきたい方まで受講可能。また、最初にアンケートをとり、可能な限り受講者の希望するテーマも取り上げていきたいと考えています。
〔授業の到達目標〕
メロディーからはじめて、自作品の完成を目指します。作曲という体験をすることによって、卒業後の音楽活動にも幅が広がっていくことを目指します。
〔授業計画〕
第 1 回　歌曲、ないし童謡の作曲①
　　メロディーの作曲
　　※順序および内容は、履修者の希望や能力に合わせて変更する可能性がある。
第 2 回　歌曲、ないし童謡の作曲②
　　ハーモニーをつける
第 3 回　歌曲、ないし童謡の作曲③
　　伴奏付けをする
第 4 回　歌曲、ないし童謡の作曲④
　　伴奏付けの形をさらに発展させる
第 5 回　歌曲、ないし童謡の作品発表
第 6 回　自分の好きな楽器を使った作曲①
第 7 回　自分の好きな楽器を使った作曲②
第 8 回　自分の好きな楽器を使った作品の発表
第 9 回　ジャズ的な雰囲気の作品を作るポイント
第 10 回　12音技法について体験講義①
第 11 回　12音技法について体験講義②
第 12 回　自由創作実習①
第 13 回　自由創作実習②
第 14 回　自由創作実習③
第 15 回　作品発表、演奏（コンサート形式）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
創作作品発表後、講評を行ないます。
〔授業時間外の学習〕
授業内で課題が終わらなかった場合、宿題にすることもある。
次の授業で見るので、各自学習しておくこと。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業で毎回プリントを配布。
〔成績評価〕
成績評価については、受講態度30％、学期内作品提出30％、作品発表40％の結果を総合的に判断して行う。

S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、作品未提出者、授業への取り組み、受講態度などに問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4011MA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽療法実習

専攻科 ＞ 音楽専攻
２年生
1単位　後期集中
実務経験なし
実習（卒業試験など）

鈴木 千恵子

〔履修条件〕
「音楽療法演習Ａ／Ｂ」を履修していることが望ましい。
〔授業の概要〕
対象者とコミュニケーションを図りながら、様々な音楽活動のアプローチを学んでいく。
実習現場は高齢者や児童領域を考えているが、その時の社会的状況にもよるので、様々なことを考慮して判断する。
〔授業の到達目標〕
「音楽療法概説」「音楽療法演習」で学んだ音楽療法の現場で必要な臨床的技術（伴奏・楽器・身体・編曲・即興）を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
　　授業の進め方と実習について
第 2 回　臨床現場についての理解
　　対象者に向けてのセッション計画
第 3 回　実習に向けてのオリエンテーション
　　プログラム作成
第 4 回　実習リハーサル①
　　流れの確認
第 5 回　実習リハーサル②
　　MCを入れて全体の確認
第 6 回　実習リハーサル③
　　修正と調整
第 7 回　現場実習④
　　役割確認
第 8 回　現場実習⑤
　　実習現場とのフィードバック
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習報告書を提出後、講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
授業中に次の授業までに行う予習・復習を指示するので、それを行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
松井紀和「音楽療法の手引き」（牧野出版）
松井紀和、鈴木千恵子他「音楽療法の実際」（牧野出版）
〔成績評価〕
授業の取り組みと態度50％、実習報告書の提出と内容50％
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、演奏能力・課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・演奏能力・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習報告書未提出者、演奏能力・授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
MUS4500MA
〔学位授与方針との関係〕
③、⑤
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
―

## 音楽科教育法

教職
1年生
2単位　後期
月曜4限
実務経験なし
講義
必修

伊藤 誠

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
•教材研究を通して、音楽科教師になるための指導力・実践力を養うと共に、「表現」と「鑑賞」の両領域の関連性、および指導に生かす評価を充実させることの重要性について、学習指導案の書式（作成の仕方）と合わせて色々な角度から学ぶ。
• 音楽系部活動にとって、文化的・体育的・儀式的行事で発表する機会は多い。生徒同士が協力して活動に取り組むための環境づくりと、目標に向かって努力するプロセスの大切さについて学ぶ。
〔授業の到達目標〕
• 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業のあり方について理解できる。
• 音楽科における「音楽的な見方・考え方」について、自分自身の考えを持つことができる。
• 自らの音楽的知識・経験をベースに、教育者にとって必要な実践力やコミュニケーション力を身に付けることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　中等教育における音楽科が担うべき役割
　　学習内容の改善・充実をめざす指導の明確化
第 2 回　学校教育における部活動の意義
　　自己を見つめ、豊かな人間性や社会性をめざして
第 3 回　学習指導計画①
　　中学校教科書と学修趣意書の分析を通して
第 4 回　学習指導計画②
　　学習指導案の作成／教育評価（観点と方法）
第 5 回　歌唱指導における教材研究
　　〔共通事項〕を活用した実践例を手がかりに
第 6 回　器楽教育の実践と指導
　　リコーダーの歴史とその教育的特性を中心に
第 7 回　鑑賞指導の留意点
　　楽曲構成の理解に焦点をあてた聴取のあり方
第 8 回　創作指導の実際
　　ハーモニーの流れを意識したメロディー創作
第 9 回　弦楽器を体験しよう①
　　音の出る仕組み、左手フォーメーション
第 10 回　弦楽器を体験しよう②
　　わらべうた教材によるアンサンブルの楽しみ
第 11 回　模擬授業①
　　各自の「専攻」を生かした授業づくり
第 12 回　模擬授業②
　　学習指導案の検討と教育実習への準備
第 13 回　わが国の音楽教育史
　　学習指導要領の歴史的変遷を中心に辿る
第 14 回　日本の伝統音楽の特徴
　　日本の伝統や文化から西洋音楽との違いを探る
第 15 回　まとめと振り返り
　　自己評価により学習到達度を確認する
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
受講者には必ず「模擬授業」を体験してもらう。その授業実践を通して得た反省点（自己評価や相対評価）を踏まえて、より完成度の高い学習指導案の作成をめざす。なお毎回、前時の振り返りのために「小テスト」を課す。
〔授業時間外の学習〕
• 与えられた課題（教材研究や学習指導案の作成等）の予習を行うこと。
•「小テスト」の成績も総合評価の対象とするため、学習内容の積み上げを心がけること。
上記２項目の学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
以下の７冊を必ず購入すること。
• 中等科音楽教育研究会編「改訂版 最新中等科音楽教育法」（音楽之友社）
• 中学校音楽の教科書（以下３冊ずつ＝計６冊）
「中学生の音楽」１／２・３上／２・３下（教育芸術社）
「音楽のおくりもの」１／２・３上／２・３下（教育出版）
〔成績評価〕
授業への積極的姿勢（小テストの成績を含む）40％、模擬授業30％、レポート30％、それぞれの配分から評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分理解し、課題への取り組みも的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を理解し、課題への取り組みも的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解および課題の取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解および課題の取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（受講態度に問題がある者、かつレポートが未提出だった者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育史概説

教職
２年生
2単位　前期
火曜1限
実務経験なし
講義
必修

宮城 哲

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
広義には、人類の歴史と共に古いとも言える「教育」という営為について、その理念や制度等の歴史的な変化を概観し、教育について歴史的に考える上で必要な基礎的知識を得ることを目指す。
具体的には、西洋と日本の近代以降の教育の流れを中心に（近代以前の教育も簡単に確認する【授業計画】２）、それらの理念や制度の変化を歴史的に概観し（【授業計画】３～９）、また、現代的な課題についても、その歴史的な経緯を踏まえながら考えてもらう（【授業計画】10 ～ 14）。
視聴覚資料をはじめ様々な史・資料等に触れ、教育を具体的に考える基礎的な知識を身につける。
〔授業の到達目標〕
授業で扱った史・資料等を理解し、教育史についての基礎的知識・教育の基本的概念を習得し、その知識を活かして現代の教育の課題を考える上で役立てることができるようになること。
〔授業計画〕
第 1 回　はじめに
　　教師（教職）の社会史から
第 2 回　近代以前の教育
　　西洋と日本
第 3 回　近代の教育の理念
　　子どもの発見（ルソー「エミール」等）
第 4 回　近代学校の成立と義務教育の普及・拡大へ①
　　西洋（産業革命から子どもの世紀へ）
第 5 回　近代学校の成立と義務教育の普及・拡大へ②
　　日本①（福澤諭吉「学問のすゝめ」と学制）
第 6 回　近代学校の成立と義務教育の普及・拡大へ③
　　日本②（教育勅語体制の成立と展開）
第 7 回　近代学校の成立と義務教育の普及・拡大へ④
　　日本③（大正デモクラシー～戦時下の学校・教育）
第 8 回　戦後の教育改革の理念と制度
第 9 回　経済成長と教育～現代の教育へ
第 10 回　現代の教育とその課題①
　　不登校
第 11 回　現代の教育とその課題②
　　学力
第 12 回　現代の教育とその課題③
　　いじめ
第 13 回　現代の教育とその課題④
　　体罰
第 14 回　現代の教育とその課題⑤
　　共生（シティズンシップ教育）
第 15 回　まとめ
　　卒業式ソングの今・昔から
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
毎回の授業の最後に提出してもらうリアクションペーパーに対するフィードバックを、次の授業の冒頭（振り返り）で行う。
〔授業時間外の学習〕
授業で資料等を配布し、合わせて参考文献等も提示するので、それらを参考にそれぞれのテーマに関する文献を授業後に読むことを期待する。
私たちは過去のことを知るためだけでなく、現代の教育の課題について深く考えるためにも教育史を学ぶ。そのため授業外の時間にも、常に教育に関わることに関心を持ってもらいたい。ニュースや新聞等時事的な話題や映画や文学作品等の中にあらわれる「教育」にも普段から関心を向けること。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：特になし（授業でレジュメ、資料等を配布する）。
参考書：
森川輝紀・小玉重夫編「教育史入門」（放送大学教育振興会）2012年
斉藤利彦・佐藤学編「新版 近現代教育史」（学文社）2016年
片桐芳雄・木村元編「教育から見る日本の社会と歴史（第２版）」（八千代出版）2017年
岩下誠他「問いからはじめる教育史」（有斐閣）2020年
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み30%、学期末課題70%の結果を総合的に判断して行う。
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みがほぼ良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解、課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、学期末課題未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教師論

教職
1 年生
2単位　後期
金曜 1限
実務経験なし
必修

風見 幸子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
• 学校で日常的に行われている具体的な職務活動を、教育関連法規の視点で見ることを通して、どのような課題があるのか等について深く考えられるような内容とする。
• 学校現場における今日的な課題への対応については、グループワークにおける協働的な学びを行う。また、そこから得られた対話的な学びを通して学習効果の伸長を図る。
• 教育者としての資質をどのように高めるか職務内容を学び、理想とする教師像に迫るために、教えることの意味と実務について事例を元に学習する。
〔授業の到達目標〕
• 教師の意義：我が国における現在の学校教育や教師の社会的意義を理解することができる。
• 教師の役割：教育の動向を踏まえ、今日の教員に求められる役割や資質能力を理解することができる。
• 教員の職務内容：教員の職務内容の全体像や教員に課せられる服務上・身分上の義務を理解することができる。
• チーム学校への対応：学校が担う役割が拡大・多様化する中で、学校が内外の専門家や関係機関と連携・役割分担を行う必要性について理解することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
本講座の進め方、評価についての説明、学習到達目標、テキスト、教材、評価方法等について理解する。
第 2 回　公教育の目標と教員の存在意義（教育に対する使命感と豊かな人間性）
公教育の歴史から現在の公教育の目標を理解する。
教員のあり方についての理解を深める。
第 3 回　教師の資格と教員養成について理解する。
学校における教育活動を行う教師の資格について理解する。
教師に課せられている研修制度を学び、教師養成システムについて理解する。
第 4 回　学校と教職の歴史
海外や日本の学校教育と教職の歴史を理解する。
第 5 回　教員に求められる資質能力について①
今日の教員に求められる基礎的な資質能力について理解する。
第 6 回　教師の教育活動①
法的な授業のあり方について理解する。
教育課程と学習指導・生徒指導についての理解。
第 7 回　教師の教育活動②
学級担任として。
学級担任と学級経営。
学級集団作りについての理解。
第 8 回　学校組織と教師の種類
学校に必要な教員の役職と職務についての理解。
学校運営と校務分掌。
第 9 回　教師に求められる資質能力について②
教師としての資質向上と研修。
教員研修の意義と研修体制。
第 10 回　教師に求められる資質能力について③
近代学校の誕生と教員養成制度の変遷とその特徴を理解する。
第 11 回　教師の服務義務について①
公立学校教員の服務義務を理解する。
第 12 回　教師の服務義務について②
地方公務員法等に定められる「服務上の義務」を理解する。
第 13 回　教師の服務義務について③
地方公務員法等に定められる「身分上の義務」を理解する。
第 14 回　チーム学校への対応、教育実習までに身につけておくべきこと
「開かれた学校」のあり方を通して、地域との連携について理解する。
教育実習における必要な知識を学ぶ。
第 15 回　教師への進路について
教員採用制度の理解。
講座のまとめと振り返り。
学習到達度の確認。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
次の授業で、レポートの振り返りや講評を行う。
〔授業時間外の学習〕
各回の授業内容・課題を復習し、授業内容の理解を深めると共に、次回授業の課題も確認し事前学習を行う。
なお、これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業資料： 各回の授業で授業概要説明資料、ならびにまとめ課題レポートを適宜を配布する。
〔成績評価〕
レポート70%、授業中の発表20%、授業後のリフレクションペーパー10%の配分で総合的に評価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、

レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育原理

教職
1 年生
2単位　後期
月曜 5限
実務経験なし
講義
必修

木村 康彦

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
本授業は、公教育の理念、原理、歴史および現行制度の枠組みを軸として踏まえながら、現代社会で教育が果たしている役割を考察するために必要な基盤的な理解を得ることを目的とするものである。
「公教育や学校とは何か」という根源的な問いに始まり、現在も進められている様々な教育改革、不登校やいじめ等の深刻な教育課題、学校教育以外の幅広い教育機会の方向性、地域社会等との連携・協働や学校安全対応について、社会的・制度的側面から取り上げながら、考察を深めていく。特に、現代の社会変動がもたらしている複雑な教育課題については、具体的な政策や取り組み事例を参照しながら検討する。
なお、授業は基本的に講義形式で進めていくが、コメントシートを毎回配付して小レポートを課し、授業の理解度を確認すると共に、受講者と担当教員との間で双方向的にやり取りをしながら、授業を作り上げていく。また、授業中に数回程度、映像資料を活用する。
〔授業の到達目標〕
学校教育の専門家として必要な知識と教養を総合的に身につけ、教育と関わる事象を客観的に自らの力で判断することができるようになること。また、地域社会との連携や学校安全対応を含めた公教育を巡る様々な教育課題を理解して、社会的・制度的側面から自分なりの答えを理論的に導き出せること。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　公教育の原理と思想背景
第 2 回　学校の歴史①
　　前近代の学校とその理念
第 3 回　学校の歴史②
　　近代公教育制度の成立と意義
第 4 回　学校の歴史③
　　学校教育制度の確立と戦後教育改革
第 5 回　教育法規と教育行財政
　　教育法体系と中央・地方教育行政の仕組み
第 6 回　教育課程と教育評価
　　学習指導要領の変遷／成績評価と学校評価
第 7 回　諸外国の教育制度と教育改革
　　各国の教育制度と国際学力試験
第 8 回　現代社会の教育課題
　　不登校／いじめ／校内暴力など
第 9 回　社会変動と教育
　　選抜と競争／子どもたちの貧困など
第 10 回　生徒理解と教育支援
　　特別支援教育／発達障害／性的マイノリティーへの対応など
第 11 回　学校外の教育活動
　　フリースクール／生涯学習／社会教育／家庭学習など
第 12 回　教育ガバナンスの動態
　　地域社会やNPO法人等との連携・協働と開かれた学校づくり
第 13 回　学校運営と学級経営
　　校務分掌と校則／懲戒／体罰
第 14 回　学校安全と危機管理
　　学校事故と災害対策に向けた安全教育
第 15 回　これからの教育
　　半期のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
課題への個別のフィードバックを、教職課程履修カルテにコメントする形で行う。
〔授業時間外の学習〕
普段から、「教育」や「学校」に関する新聞記事やニュースに触れておくこと。授業内に、関心のある最新の教育動向を話題として取り上げてもらう場合もある。また、参考書や授業内で配布したプリントを見返して、復習に努めること。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書：
特に指定しない。必要に応じて、資料をプリントで配付する。
参考書：
阿内春生編著『基礎から学ぶ教育行政学・教育制度論』（昭和堂　2024年）
汐見稔幸・伊東毅・高田文子・東宏行・増田修治編著『よくわかる教育原理』（ミネルヴァ書房　2011年）
島田和幸・高宮正貴編著『教育原理』（ミネルヴァ書房　2018年）
〔成績評価〕
授業中の取り組み20点、小レポート30点、期末レポート50点で点数化し、S（90点以上）、A（80 ～ 89点）、B（60 ～ 79点）、C（50 ～ 59点）、D（50点未満）の５段階で評価する。ただし、正当な理由なく出席日数が授業時数の３分の２に満たない場合は、評価の対象としない。
〔科目ナンバリング〕
ー

〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育心理学

教職
2 年生
2単位　前期
土曜 1限
実務経験なし
講義
必修

鈴木 敦子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
子ども、生徒に何かを教える際、教える側は「教えた」のだからそれが正しく相手に伝わっているはずだと思いがちになる。相手が教えたことをできないのは相手がちゃんと聞いていなかったか、理解する努力が足りなかったためだと主張したくなる。しかし、実は教える側と教えられる側の間にはそれぞれの常識では考えられないような理解がなされている。「教える」ことは教える内容が充実してさえすればいいわけではなく、相手の理解プロセスも考慮する必要がある。
本授業ではこの点を踏まえ、心理学的に探究する。
なお時期的に教育実習期間と重なるので授業項目の順番に変更が生じる可能性がある。
〔授業の到達目標〕
中等教育まで受けてきた授業で、自分が理解しやすかったもの、あるいは理解しにくかったもの、それがなぜなのか解明する手がかりをつかむことができる。いくらかでもその「謎」がわかれば、教える立場に立つ時に自信が持てると考える。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
　　乳幼児に関するプリントの記入と説明
第 2 回　発達①
　　生得性と学習　赤ちゃんDVD
第 3 回　発達②
　　生得性と学習
第 4 回　発達③
　　ピアジェの発達課題
第 5 回　発達④
　　誤信念課題
第 6 回　教授①
　　何が学習か
第 7 回　教授②
　　計算のバグ
第 8 回　教授③
　　文章問題のバグ
第 9 回　教授④
　　見ればわかるか
第 10 回　教授⑤
　　見ればできるか
第 11 回　教授⑥
　　情報処理アプローチ　地球は丸い？
第 12 回　発達障害①
　　読字障害
第 13 回　発達障害②
　　自閉症スペクトラム児の学習
第 14 回　発達障害③
　　自閉症スペクトラムの世界
第 15 回　授業の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
リアクションペーパーのフィードバックを、次の授業中に行う。
〔授業時間外の学習〕
新聞等で「授業」「学習」「心理」等の項目を注意深く読むこと。これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
授業時にその都度プリント等を配布する。
〔成績評価〕
授業への取り組み・受講態度50%、試験・レポート50％
S　総合点が90点以上の者（講義内容を十分理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（講義内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（講義内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（講義内容を理解しなかった者、試験未受験者、レポート未提出者、授業への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 特別支援教育入門

教職
1 年生
1単位　後期
土曜 1限
実務経験なし
講義
必修

桑山 一也

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。

〔授業の概要〕
本授業では、特別支援教育の基礎を習得し、教育現場において特別なニーズを有する生徒に遭遇した時に、適切に対応できるようになることを目標とし、講義を実施する。
具体的には、特別支援教育の意義と歴史等（第１・２回）、対象者別の教育の理解と支援（第３～13回）、通常の教育場面での配慮と支援（第14・15回）について学んでいく。
〔授業の到達目標〕
• 障害等の理由により特別の支援を必要とする生徒の学習上または生活上の困難を理解できる。
• 個別の教育的ニーズに応じて、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に支援する方法が理解できる。
• 上記の理解を踏まえ、教育者として自らの在り方を考察できる。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス
　　特別支援教育の歴史
第 2 回　特別支援教育の意義・現状
　　インクルーシブ教育システムの構築
第 3 回　視覚障害教育の理解と支援
第 4 回　社会との接点（全国盲学校弁論大会）
第 5 回　聴覚障害教育の理解と支援
第 6 回　知的障害教育の理解と支援
第 7 回　肢体不自由教育の理解と支援
第 8 回　病弱教育の理解と支援
　　オンライン授業を予定
第 9 回　重複障害教育の理解と支援
第 10 回　言語障害教育の理解と支援
第 11 回　自閉症・情緒障害教育の理解と支援
第 12 回　学習障害・注意欠陥多動性障害の理解と支援
第 13 回　発達障害教育のまとめ
第 14 回　通常の学級における特別支援教育
　　オンライン授業を予定
第 15 回　障害はないが､配慮が必要な教育
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
学生からの提出課題のフィードバックを、次の授業中に行う。
〔授業時間外の学習〕
教科書および参考図書等の該当箇所について、予習・復習をしておくこと。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書： 宮崎英憲監修・全国特別支援学校長会編著「特別支援学校のすべてがわかる『教員をめざすあなたへ』」（ジアース教育新社）
参考書： 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課著「障害のある子供の教育支援の手引き～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～」（ジアース教育新社、文部科学省特別支援教育課ホームページ）
〔成績評価〕
受講態度40％と試験等の結果60％を合わせて総合的に判断して行う。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分理解し、教育者としての自らの在り方を的確に考察できている者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、教育者としての自らの在り方を検討できている者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容を一定以上理解し、教育者としての自らの在り方を検討できている者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・考察が不十分である者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容の理解・考察が著しく不十分である者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育課程論及び教育方法論

教職
1 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
講義
必修

風見 章

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
• 学校教育の目的・目標・指導方法等について総合的に編成した教育計画、「教育課程」の
　役割・機能・意義について学ぶ。
• 学校におけるカリキュラム・マネジメントの意義や受容性について学ぶ。
• 学習指導要領に示された内容について理解を深め、実践的指導能力を身につけることを主題と
　する。
〔授業の到達目標〕
• 教育課程の基本概念・意義や教育課程編成に関する法制度等についての説明ができる。
• 戦後の学習指導要領の改訂を、時代の変化と照らし合わせて説明ができる。
• 教育課程の基本的な編成方法を、教育関係法規や国の教育施策と関連させながら説明すること
　ができる。
• 求められる資質・能力を育むための教育の方法・技術・情報メディアと教材の活用ができる。
• 教育の目的・目標、学力観の形成等、教育の根源的な課題を通して教育課程の全体像を理解で
　きる。
〔授業計画〕
第 1 回　シラバスを用いたガイダンス
　　本講座の進め方・評価についての説明・到達目標等について理解する

第 2 回　教育課程に関する法律について
教育基本法、学校教育法、学校教育施行規則などの法令や、学習指導要領の基本的知識を理解する。
第 3 回　学習指導要領を理解する①
学習指導要領の変遷と教育課程編成について理解する。
第 4 回　学習指導要領を理解する②
改訂の基本方針と教育課程編成上の一般方針について理解する。
第 5 回　学習指導要領を理解する③
内容の取扱いと指導計画作成上の配慮事項について理解する。
第 6 回　教育課程の編成 教育委員会と教育課程編成との関わりについて
教育課程編成にあたり、教育委員会との関係を理解し、公教育としての使命を理解する。また、特色ある教育活動実施の工夫を考える。
第 7 回　教育方法とICT 学校教育とＩＣＴの効果的活用①
ICTを活用した教育活動のあり方を理解し、「主体的・対話的な深い学び」のための学習姿勢がもてる生徒の育成方法を考える。
第 8 回　最終のまとめ、課題レポート
8回の内容を振り返り、学びを深めるための課題レポートを作成する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポートの振り返りや講評を次の授業で行う。
〔授業時間外の学習〕
毎時の授業の復習・予習を行い授業内容の理解を深め、次回授業の課題確認により事前学習を行う。
なお、これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
テキスト：「中学校学習指導要領解説　総則編」（平成30年文部科学省）
参考書：適宜資料を配布する。
〔成績評価〕
レポート70％、授業中の発表20％、授業後のリフレクションペーパー10％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（観点全てにおいて際だった成果を見せる）
A　総合点80点以上の者（講義内容に対する自己の考えを積極的かつ意欲的に表現できる姿勢が見られる。各回の講義への取り組みが
充実し、その内容を正確に理解している）
B　総合点60点以上の者（授業への理解を示す姿勢が見られると共に、講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
C　総合点50点以上の者（各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
D　総合点50点未満の者（上記の条件を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 道徳教育の理論と方法

教職
1 年生
2単位　後期集中
実務経験なし
講義
必修

風見 章

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
現代社会における道徳教育の必要性の認識や課題（いじめ・情報モラル）解決に向けて、講義形式の理論的な授業のみならず、グループワークや指導資料の作成という演習的等具体的な活動を取り入れた実践的な授業を実施する。また、「特別の教科道徳」の授業力育成を目指し、学習指導案の作成・模擬授業を行う。
〔授業の到達目標〕
• 「中学校学習指導要領」に示された道徳教育の目標・内容・方法および学校における道徳教育指導の必要性、道徳科の基本的な指導方法について説明ができる。
• 生徒の心の成長や道徳性の発達について説明ができる。
• 道徳科の特性を踏まえた学習指導案を作成し、それに基づいた効果的な授業が実施できる。
〔授業計画〕
第 1 回　シラバスを用いたガイダンス
教育関連法規（教育基本法、学校教育法、学習指導要領等）と道徳の関連について理解する。
第 2 回　学習指導要領「特別の教科道徳編」による道徳教育の意義と重要性
学校教育における「道徳科」の歴史を理解し、現在求められている道徳教育のあり方について理解する。
第 3 回　現在の道徳教育の現状と課題を考える（公立中学校の実態と課題）
現代社会における、具体的場面による道徳的モラルを考え、学校教育における「道徳科」の課題を理解し、より効果的な授業展開の工夫を考える。
第 4 回　「特別の教科道徳」の役割と年間指導計画および指導の基本方針と学習指導過程について
「特別の教科道徳」の果たすべき役割と課題を考え、課題解決のための指導警戒をグループで協議検討し、学びを深める。
第 5 回　「特別の教科道徳」における効果的な教材の活用と役割について、学習指導案の内容と多様な指導法について（主体的対話的で深い学びの視点）

「特別の教科道徳」の教科書から、教材のもつ内容項目を理解し、道徳的価値を踏まえた、効果的な活用方法を理解する。

第 6 回　「特別の教科道徳」の学習指導案（生徒の実態と指導の方向性および学習指導過程）の作成
統一の教材を基に、実際の授業を想定した学習指導案や板書計画を作成し、グループで検討し学びを深める。

第 7 回　模擬授業実践における視点と授業評価について
学習指導案を作成し、その指導案にそった模擬授業が展開できるようにする。

第 8 回　「特別の教科道徳」とこれからの道徳教育について、講座のまとめ
学校教育における「特別の教科道徳」の課題を考え改善方法を探る。講座のまとめをレポート形式で実施する。

〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
レポートの振り返りや講評を次の授業で行う。

〔授業時間外の学習〕
「道徳性」は日常生活におけるすべての場面で心がけていなくてはならない。そこで社会で発生する事象や事態に対する「道徳性」を意識した視野・視点をもち、常に「道徳的な考え」を保持する。また、それらの発生した事象や事態は「道徳教材として活用できるか」という視点をもって身のまわりの情報を意欲的積極的に見るようにする。
なお、これらの学修に60時間以上を要す。

〔教科書・参考書等〕
「中学校学習指導要領解説―特別の教科道徳編―」（文部科学省平成29年告示）
その他の資料は授業で配布するものを使用する。

〔成績評価〕
レポート70％、授業中の発表20％、授業後のリフレクションペーパー10％の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（観点全てにおいて際だった成果を見せる）
A　総合点80点以上の者（講義内容に対する自己の考えを積極的かつ意欲的に表現できる姿勢が見られる。各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
B　総合点60点以上の者（授業への理解を示す姿勢が見られると共に、講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
C　総合点50点以上の者（各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
D　総合点が50点未満の者（上記の条件を満たしていない）

〔科目ナンバリング〕
―

〔学位授与方針との関係〕

〔他専攻〕
―

〔キャップ対象外〕
○

## 総合的な学習の時間の指導法

教職
1 年生
1単位　前期集中
実務経験なし
講義
必修

風見 幸子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。

〔授業の概要〕
• 総合的な学習の時間の目標や年間指導計画作成の考え方、単元計画の作成等について、グループで検討しながら理解を深めていく。
• グループごとに単元計画を作成し、主体的・対話的で深い学びが実現できる探求的な学習の指導と評価の在り方を身につけるようにする。

〔授業の到達目標〕
１. 当該科目の目標および内容
⑴ 総合的な学習の時間の意義や各学校において目標を定める際の考え方を理解することができる。
⑵ 総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身につけることができる。
⑶ 総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解することができる。
２. 当該科目の指導方法と授業設計
⑴ 総合的な学習の時間の意義と教育課程における役割、育成する資質能力等をテキストや具体的事例をもとにして理解できるようにする。
⑵ 他教科等との関連を図った年間指導計画作成の考え方や主体的・対話的で深い学びの実現を図る。探究的な学習の進め方について、具体的な事例を通して検討し、理解できるようにする。
⑶ グループごとの単元計画の作成・考察を通して、指導と評価の考え方を身につけるようにする。

〔授業計画〕
第 1 回　総合的な学習の時間の創設と目標について
総合的な学習の時間創設と目標

第 2 回　総合的な学習の時間の学習指導
探究的な見方・考え方について

第 3 回　総合的な学習の時間の具体的な指導１
単元計画の基本的な考え方

第 4 回　総合的な学習の時間の具体的な指導２
単元計画としての学習指導案

第 5 回　総合的な学習の時間の具体的な指導３
グループによる学習指導案の作成と検討

第 6 回　総合的な学習の具体的な指導４
グループによる模擬授業と振り返り①

第 7 回　総合的な学習の具体的な指導５
グループによる模擬授業と振り返り②

第 8 回　学習のまとめ

講座の総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
模擬授業（グループ）時にフィートバックを行う
また次の授業で、レポートの振り返りを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 毎時の授業内容を復習・予習することによって、内容の理解を深める。
• グループで作成する単元指導計画について主体的・対話的に協議し、内容の理解を深め、深い学びができるようにする。
なお、これらの学修に30時間以上を要す。
〔教科書・参考書等〕
テキスト:「 中学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編」（平成30年文部科学省）
参考書：適宜資料を配布する。
〔成績評価〕
レポート70%、授業中の発表20%、授業後のリフレクションペーパー10%の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（以下のAの観点全てにおいて際だった成果を見せる）
A　総合点80点以上の者（講義内容に対する自己の考えを積極的かつ意欲的に表現できる姿勢が見られる。各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
B　総合点60点以上の者（授業への理解を示す姿勢が見られると共に、講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
C　総合点50点以上の者（各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
D　総合点50点未満の者（上記の条件を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 特別活動の指導法

教職
1年生
1単位　後期集中
実務経験なし
講義
必修

風見 幸子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
• 特別活動の目標や年間指導計画作成の考え方、単元計画の作成等について、学習指導要領の内容を理解し、実践的な指導につなげていく。
• 授業計画に沿って、講義形式の理論や指導方法を学ぶ授業と演習やグループワークを取り入れた実践的な授業を組み合わせて、指導案や指導計画を作成できる能力を身につける。
〔授業の到達目標〕
1.当該科目の目標および内容
⑴ 特別活動は教師の指導の下、集団としての体験的な活動を通して、課題に発見や解決を行い、より良い集団や学校生活を目指して様々行われる活動内容が理解できる。
⑵ 特別活動の内容である学級活動、生徒会活動、学校行事における話し合い活動を含んだ学級指導の指導案が作成できるようになる。
⑶ 総合的な学習の時間の指導法との違いを明確に理解し、その二つを有機的に作用させ、「生きる力」の育成を効果的に指導できるようになる。
2.当該科目の指導方法と授業設計
⑴ 特別活動の意義と教育課程における役割、育成する資質能力等をテキストや具体的事例をもとにして理解できるようにする。
⑵ 総合的な学習の時間との関連を図った年間指導計画作成の考え方を通して、「主体的・対話的で深い学び」や「生きる力」の実現を図る。
⑶ グループごとの単元計画の作成・考察を通して、指導と評価の考え方を身につけるようにする。
〔授業計画〕
第 1 回　特別活動の目標及び基本的な性質
　　特別活動の位置付け
第 2 回　特別活動の内容と指導計画
　　学級活動・生徒会活動・行事行事と指導計画
第 3 回　学級活動の具体的な指導
　　学級経営の実際とグループによる指導案の作成
第 4 回　生徒会活動・学校行事の具体的な指導
　　グループテーマによる単元計画の検討
第 5 回　特別活動と生徒指導との関連
　　特別活動のまとめ
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
グループディスカッション時でのフィードバック
次の授業で、レポートの振り返りを行う。
〔授業時間外の学習〕
• 毎時の授業内容を復習・予習することによって、内容の理解を深める。
• グループで作成する単元指導計画について主体的・対話的に協議し、内容の理解を深め、深い学びができるようにする。
なお、これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書:「 中学校学習指導要領解説　特別活動編」 (平成29年告示　文部科学省）
参考書：適宜資料を配布する。
〔成績評価〕
レポート70%、授業中の発表20%、授業後のリフレクションペーパー10%の配分で総合的に評価する。
S　総合点90点以上の者（以下のAの観点全てにおいて際だった成果を見せる）
A　総合点80点以上の者（講義内容に対する自己の考えを積極的かつ意欲的に表現できる姿勢が見られる。各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）

B　総合点60点以上の者（授業への理解を示す姿勢が見られると共に、講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
C　総合点50点以上の者（各回の講義への取り組みが充実し、その内容を正確に理解している）
D　総合点50点未満の者（上記の条件を満たしていない）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 生徒指導（進路指導含む）

教職
1 年生
2単位　後期
火曜 1限
実務経験なし
講義
必修

安富 由美子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
生徒指導に必要となる、発達過程、適性、偏差値といった基礎知識をもとに、教師としての取り組み姿勢を検討する。また、学級運営や生活指導、保護者との関わりについても検討する。
〔授業の到達目標〕
指導のあり方について、教職課程で学んだことを基礎として、自分なりの取り組み姿勢を構築する意志を持つこと。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
授業計画・受講で求められる姿勢について説明する。
第 2 回　人間関係と問題解決①交流分析によるコミュニケーション・スタイル
教師・生徒それぞれの人間関係のあり方について考える視点を養う。
第 3 回　人間関係と問題解決②円滑なコミュニケーション
意志のすれ違いが発生した際の取り組みについて考える。
第 4 回　人間関係と問題解決③応用
発達に応じた指導と学級運営について、心理学の知識を参考に検討する。
第 5 回　進学指導と偏差値
偏差値の意味を理解し、生徒の志望を尊重した指導について考える。
第 6 回　職業選択と適性①
適性検査として利用される内田クレペリン検査を体験し、進路適性や行動特性をいかに進路選択に生かすか、検討する基礎力を養う。
第 7 回　職業選択と適性②
就職希望・進学希望の双方に重要な、適性と本人の希望をいかに捉え、指導するかについて考える。
第 8 回　アサーション・トレーニング①アサーション権と非合理的思い込み
精神衛生の観点から教師自身、また生徒のアサーションについて考える。
第 9 回　アサーション・トレーニング②ＤＥＳＣ法
アサーティブな態度について理解を深め、生徒指導に生かすことを検討する。
第 10 回　集団の意志決定
個々の価値観による判断の食い違いを、いかに集団の決定として統合するか、演習体験を通して検討する。
第 11 回　体罰問題と部活
①生活指導や部活でしばしば問題視される体罰と暴力について考察する。
②部活の顧問や指導について考察する。
第 12 回　心因による障害
心理・社会的な原因による適応問題の構造・指導の見通しのつけ方について理解する。
第 13 回　器質因、内因による障害
専門性の高い適応上の問題について理解し、指導上の適切な判断の仕方について理解する。
第 14 回　情緒障害の子供と教師
障害が原因と考えられる行動であっても、見た目の個人差もあるため、事例も参照しながら、情緒障害の基本的な行動特徴の個人差の幅を理解し、対応の対応力の基礎を得る。
第 15 回　安全管理
学習環境における生徒の安全確保について、器質因による問題のある行動への対応も絡めて考察する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
Googleclassroomを使って、メールやストリームから行う。
〔授業時間外の学習〕
自分の目標とする教師像や人間像を実現することを念頭に、授業で扱ったテーマについて、自分の考えを可能な限り具体的にノート等に記してみよう。実践には多少の補習が必要になるかもしれない。ただ頭の中で考えるだけでなく、文章に表わすことにより、追究の曖昧な部分が明らかになるので、更に具体的に考える習慣を身につける助けとなるであろう。
（これらの学修に60時間以上を要する。）
〔教科書・参考書等〕
江川玟成編著、「教育相談―その理論と方法―」（学芸図書）
平木典子「アサーション・トレーニング」（日本・精神技術研究所）
※教科書は特に定めない。参考書は上記以外にも適宜紹介する。

〔成績評価〕
期末の論述試験と受講態度による。
論述試験の評価を　S：100点　A：90点　B：80点以上　C：70点以上　D：50点　として、出席率をパーセンテージ換算した数値との平均を総合評価とする。試験の評価基準は以下の通り。
S　授業で扱ったテーマについて十分に理解し、課題意識を持って実践的に考察できる。
A　授業で扱ったテーマについて十分に理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。
B　授業で扱ったテーマについて十分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。
C　授業で扱ったテーマについて概ね理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。
D　授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育相談

教職
2年生
2単位　前期
木曜1限
実務経験なし
講義
必修

安富 由美子

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
生徒と関わる上で重要な要件である教育相談の役割を理解する。事例を通して教育相談に必要な知識と技術を身につける。講義と共に演習が加わるため、積極的に参加する意志が求められる。
〔授業の到達目標〕
自身の人間観を深めると共に、教育相談の実践力につながる基礎力を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　オリエンテーション
授業計画及び求められる学習姿勢について説明する。
第 2 回　聴く
来談者中心療法を理解し、教育相談にとって重要な聴く技術を養う。
第 3 回　発達過程と諸問題
発達過程と適応問題の関係について考察し、自分なりの教師像の一端を構築してみる。
第 4 回　ロールプレイ
教師役、生徒役を演じて教育相談での即応性を養う。
第 5 回　ノンバーバル・コミュニケーション①
NVCのコミュニケーションにおける役割について把握する。ノンバーバル行動の影響力について理解し、コミュニケーションへの生かし方について考える。
第 6 回　ノンバーバル・コミュニケーション②演習
事例における問題点と解決策の検討を通して、実践力の基礎を獲得する。
第 7 回　保護者との関係①
事例から保護者との信頼関係の構築をはじめとした教師の課題について考える。
第 8 回　保護者との関係②ロールプレイ
教師役、保護者役を演じながら、相手の心情に配慮しながら受け止め支えるという、現場での対応の基礎力を養う。
第 9 回　イギリスの学校改革に学ぶ
ビデオ利用：劣悪とも言える学校環境が改革された過程について視聴し、自分の現場でどのように応用できるかについて考える。
第 10 回　教師の精神衛生
自身の精神衛生管理と同僚への配慮について考察する。
第 11 回　インターネットの影響およびいじめ
グループに分かれて意見交換をする。一例一例が異なる現場での対応力を養うために、まずは事例を挙げながら生徒支援について検討する。
第 12 回　ネット環境と教育
インターネットをツールとして生かしながら、人間関係を構築するための学びを模索する。
第 13 回　実習での課題
実習を済ませた受講生の報告から、更に改善するためにできることについて検討し合う。
第 14 回　課外活動の意義と留意点
普段と異なる環境で学習する際の特徴を多角的に捉え、環境を生かした安全な学習計画が立てられる検討力を養う。
第 15 回　補足と自由討論
授業中に取り上げられなかったトピックスを選び、フリートークも交えながら補足する。
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
Googleclassroomを使って、メールやストリームから行う。
〔授業時間外の学習〕
心理学概論や精神医学も理解の助けになる。また、普段から学校関連のニュースに注目し、自分が当事者や関係者だったら、どんな対応ができるか考察する習慣をつけると、実践力を鍛えることになろう。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
江川玟成編著「教育相談―その理論と方法―」（学芸図書）
春木豊編著「心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション」（川島書店）

山下格「精神医学ハンドブック」（日本評論社）
レニエ他「インタープリテーション入門」（小学館）
※教科書は特に定めない。参考書は上記の他にも適宜紹介する。
〔成績評価〕
期末の論述試験と受講態度による。
論述試験の評価をS：100点A：90点B：80点C：70点D：50点として、出席率をパーセンテージ換算した数値との平均を総合評価とする。試験の評価基準は以下の通り。
S　授業で扱ったテーマについて十分に理解し、課題意識を持って実践的に考察できる。
A　授業で扱ったテーマについて十分に理解し、自分の考えを明確に伝えることができる。
B　授業で扱ったテーマについて十分理解しているか、または自分の考えを明確に伝えることができる。
C　授業で扱ったテーマについて概ね理解しており、自分の考えを伝える努力が認められる。
D　授業で扱ったテーマについて理解が不十分であるか、または自分の考えを示していない。
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## ＩＣＴ活用による教育の方法・技術

教職
1年生
1単位　後期
水曜1限
実務経験なし
講義
必修

狩野 浩二

〔履修条件〕
中等教育教員養成課程、教職課程受講者必修科目である。
〔授業の概要〕
• 教育に関する方法や技術について、実際の授業を想定しながら考察する。特に、ICTの活用を通して、ひとりひとりの生徒にとって最も必要となる学習活動の成立と共に、協働的に学び合う学習形態の工夫に関する指導場面を具体的に考察する。
• 教育は、社会全体形成に関わる領域である。この講義では、情報通信技術の開発と向上を含んだ社会の変化を幅広く捉えつつ、学校教育における教育活動の成立に迫る。
• 将来教師として、学校に勤務することを想定しながら、実際的な生徒との関係を考察する。特にこれからの時代において必要となる情報モラルの指導と共に教師としてICTを活用した教育活動および、校務分掌の実務が展開できる力を養う。
• 教員として最小限必要となる資質能力の育成として、グループ（チーム）によるテキスト（大学教科書）のクリティーク（批評）と、問題提起、討論等、ゼミナール形式の授業展開を組織する力を養う。
〔授業の到達目標〕
• 教師として、生徒たちの学習を組織することについての理解を深める。その際、生徒が個として最も適切な学習をすることと同時に、仲間と共に協力し合いながら集団として学ぶことの意義を理解する。
• 学校教育における授業において、生徒の思考活動をつくることについて理解する。考えるためには、認識と表現の円環的な関係づくりが必要であることを理解し、ICTの活用を通して児童生徒の学習活動を成立させる手法を理解する。
• 教師として教材を解釈したり、教科を横断的に学習指導する力が必要である。デジタル教材の活用、ICT機器・システムの活用を含めて、教材と教師、生徒の関係を理解する。
〔授業計画〕
第 1 回　ガイダンス、教育方法論の課題
　　ＤＸと教育改革（ＩＣＴによる校務分掌の工夫と改善）
第 2 回　授業づくりとは
　　ＧＩＧＡスクールとこれからの授業づくり
第 3 回　教育の方法・技術とは
　　チーム学校とＤＸ
第 4 回　子どもに求められる資質・能力
　　情報活用能力の形成
第 5 回　子どもの学びと授業
　　ＩＣＴの活用による個別最適化の実現
第 6 回　授業の構想・計画と教材研究
　　教科・領域の架け橋
第 7 回　授業の展開と探究型学習
　　協働的学習の成立
第 8 回　学習評価の意味と方法
　　パフォーマンス課題の創造とルーブリックの活用
第 9 回　授業研究と授業づくり
　　授業カンファレンスにおけるデジタル機器の活用
第 10 回　教材づくり・教材研究と授業づくり
　　ＩＣＴの活用
第 11 回　学習指導案と授業実践
　　デジタル教材の活用と指導過程の創造
第 12 回　ＩＣＴを活用した授業づくり
　　ユニバーサルデザインとＩＣＴ、特別な教育ニーズに応じた授業の創造
第 13 回　授業づくりを通じた教師教育の可能性
　　双方向通信の特性を活かす
第 14 回　これからの時代の授業づくり
　　デジタルポートフォリオによる指導と評価の一体化
第 15 回　まとめおよび、学修達成度の確認
　　講義全体を省察し、学修内容を整理する―教師の働き方改革とＤＸ（校務分掌におけるＩＣＴの活用）
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
• 受講者によるプレゼンテーションの方法や内容について、各回の講義ごとに時間を設け、口頭で講評を行う。

• 口頭試問として、受講者全員から講義への省察を口頭にて報告してもらい、講評を行う。
• 学修達成度の確認を行い、それに対する講評を口頭等で行う。
これらの学修に30時間以上を要する。
〔授業時間外の学習〕
授業前学修： テキスト（大学教科書）の該当箇所（講義回数とテキストの章が対応している）を読み、疑問点を整理し、ノートづくりを行う（90分）。グループ発表は、対面での場合はもちろんのこと、ライブ配信、リモート形式等を活用し、双方向通信による発表に対応するよう準備すること。
授業後学修： 講義内容を振り返り、予めたてた疑問点をさらに追究し、自己の仮説や予想をもとに考察し、学修内容を深める（90分）。
これらの学修に60時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
教科書： 狩野浩二「教育の方法・技術　新しい時代の授業づくりに向けて」（ジダイ社）
その他プリント等は教室で配付（もしくはGoogle Classroomへ配信）する。
参考書：斎藤喜博「授業」（国土社）、横須賀薫「授業研究用語辞典」（教育出版）
〔成績評価〕
成績評価については、提出課題・口頭発表等80％、受講姿勢20％の配分で総合的に評
価する。
S　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
A　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
B　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
C　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
D　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、課題未提出・未発表、受講姿勢に課題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育実習Ⅰ

教職
1年生
5単位　通年
実務経験なし
講義
必修
「教育実習Ⅱ」と合わせて5単位

永井 由比、柏原 佳奈、布施 雅也

〔履修条件〕
将来、音楽教員を目指す強い希望と意志を持つ者。
「教育実習Ⅱ」必修。
〔授業の概要〕
「教育実習」とは、文字通り、指導教員の指導のもと中学校で行う実習（３週間から４週間）そのものを指し、この授業はその実習をより有意義に行うための事前指導が中心となる。教職課程履修にあたっての心構え、実習までに身につけておくべきこと、実習までに必要な諸手続き等、より具体的な内容および課題を取り上げる。
〔授業の到達目標〕
• 教育実習の意義を理解できる。
• 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備することができる。
〔授業計画〕
第 1 回　教職課程履修の心構え
第 2 回　実習校について①
第 3 回　実習校について②
第 4 回　介護等体験オリエンテーション
第 5 回　教育実習の実際①
第 6 回　教育実習の実際②
第 7 回　教育実習の実際③
第 8 回　教育実習の実際④
第 9 回　教育実習の実際⑤
第 10 回　教育実習報告①
第 11 回　教育実習報告②
第 12 回　介護等体験の実際①
第 13 回　介護等体験の実際②
第 14 回　介護等体験①
第 15 回　介護等体験②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習後に振り返り（フィードバック）の時間を設ける。
〔授業時間外の学習〕
授業時に適宜指示する。
〔教科書・参考書等〕
資料配付。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習校評価50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、実習への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、実習への取り組みが的確だった者）

Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・実習への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・実習への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教育実習 II

教職
２年生
5単位　通年
実務経験なし
講義
必修
「教育実習Ｉ」と合わせて5単位

永井 由比、柏原 佳奈、布施 雅也

〔履修条件〕
将来、音楽教員を目指す強い希望と意志を持つ者。
「教育実習Ｉ」必修。
〔授業の概要〕
「教育実習」とは、文字通り、指導教員の指導のもと中学校で行う実習（３週間から４週間）そのものを指し、この授業は実習直前の具体的な準備と、さらに実習後、卒業までの具体的な課題を意識し、将来に備えるための事前および事後指導が中心となる。
〔授業の到達目標〕
• 教育実習の意義を理解できる。
• 教育実習に必要なそれぞれの課題を意識し、十分に準備できる。
• 教育実習後の課題を認識し、必要な知識および技術を身につけることができる。
〔授業計画〕
第 1 回　諸手続きについて①
第 2 回　教育実習の実際①
第 3 回　教育実習の実際②
第 4 回　教育実習の実際③
第 5 回　教育実習の実際④
第 6 回　教育実習の実際⑤
第 7 回　教育実習の実際⑥
第 8 回　教育実習の実際⑦
第 9 回　教育実習の実際⑧
第 10 回　教育実習の実際⑨
第 11 回　教育実習の実際⑩
第 12 回　教育実習報告①
第 13 回　教育実習報告②
第 14 回　教育実習報告③
第 15 回　諸手続きについて②
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
実習後に振り返り（フィードバック）の時間を設ける。
〔授業時間外の学習〕
授業時に適宜指示する。
〔教科書・参考書等〕
資料配付。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、実習校評価50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、実習への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、実習への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・実習への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・実習への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、実習への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○

## 教職実践演習（中学校）

教職
２年生
2単位　後期
月曜 5限
実務経験なし
実習
必修

永井 由比、柏原 佳奈、布施 雅也

〔履修条件〕
教職課程受講者必修。
〔授業の概要〕
２年間で学んだ学問としての教育に関する知識と、教育実習や介護等体験において学んだ実践力のさらなる統合を目指し、これまでの学習成果をもとに、教員としての資質の構築をより深く具体化するための授業である。
授業の形態としては、講義や事例研究、ロールプレイング、現職教員をゲストスピーカーとしたフィールドワーク等を行うものとする。
〔授業の到達目標〕
教員として求められる基本的な資質として、以下の４つのテーマを定め、到達目標とする。
• 教育に対しての使命感や責任感および児童・生徒への教育的愛情を持つことができる。
• 社会性および人とのコミュニケーション能力を身につける

ことができる。
• 児童・生徒との間に信頼関係を築き、規律ある学級経営を行うことができる。
• 教科内容を理解し、児童・生徒の反応や学習状況に応じた指導ができる。
〔授業計画〕
第 1 回　導入
本演習の目的と概要の説明、授業担当者紹介
第 2 回　教育実習における実体験をもとに、事例研究・集団討議
第 3 回　講義「教職の意義・教師の職務や役割について」
第 4 回　他教職員・生徒・保護者・社会と教師とのつながりについて事例研究・ロールプレイング
第 5 回　自校教育について
第 6 回　言語技術教育について
第 7 回　高大接続について
第 8 回　校外活動・学習について
第 9 回　教育現場で起こりうる様々な問題（家庭内の問題・学級内いじめ・不登校等）への対応について事例研究・ロールプレイング
第 10 回　連携先の学校の授業見学、模擬授業、現職教員と意見交換等
第 11 回　多文化社会における学校教育
第 12 回　クラブ活動の指導体験
第 13 回　ティーチングとコーチングについて
第 14 回　特別支援学級の運営や課題について事例研究・集団討議
第 15 回　総括
〔学生に対する教員からのフィードバック方法〕
単元ごとに振り返り（フィードバック）の時間を設ける。
〔授業時間外の学習〕
授業で取り上げる課題･事例について理解を深めておくこと。これらの学修に30時間以上を要する。
〔教科書・参考書等〕
テキスト：各回で必要なプリント等を配布する。
参考書：必要に応じて紹介する。
〔成績評価〕
成績評価については、授業への取り組み50%、レポート50%の配分で総合的に評価する。
Ｓ　総合点が90点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確かつ秀でた者）
Ａ　総合点が80点以上の者（授業内容を十分に理解し、課題への取り組みが的確だった者）
Ｂ　総合点が60点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが良好だった者）
Ｃ　総合点が50点以上の者（授業内容の理解・課題への取り組みが不十分だった者）
Ｄ　総合点が50点未満の者（授業内容を理解しなかった者、課題への取り組み・受講態度等に問題がある者）
〔科目ナンバリング〕
ー
〔学位授与方針との関係〕
〔他専攻〕
ー
〔キャップ対象外〕
○